

長崎県文化財調査報告書 第127集

黒丸遺跡 I

都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書

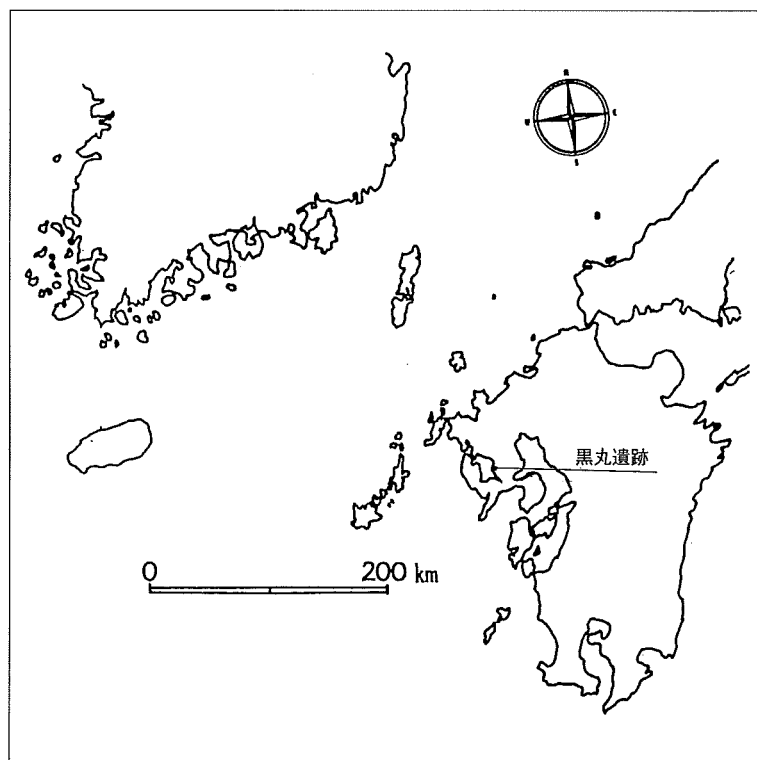
1996

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書 第127集

黒丸遺跡 I

都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書



1996

長崎県教育委員会

序

文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することは、文化財保護法の謳うとおりであります。

県教育委員会は、これまで、各種開発事業にあたって必要な場合、関係機関と協議・調整を重ね文化財の保護・活用に努めてまいりました。

都市計画道路杭出津・松原線改良事業につきましても、道路計画当初から文化財の保存について関係機関と協議を重ねてまいりましたが、計画変更が不可能な区域について、平成5年度から3年間緊急発掘調査を実施しました。

これまでの調査で、平成5年度に中世の柱穴、土壙、溝等の生活遺構を確認し、平成6年度は弥生時代のカメ棺墓9基、石棺墓1基、土壙墓1基を検出し、墓地の実態解明の貴重な資料を得ました。また、平成7年度は縄文時代晩期のドングリ貯蔵穴62基を検出し、全国的にも注目を集める遺跡となっております。

今回の黒丸遺跡調査報告書は、平成2年度の範囲確認・平成5年度・平成6年度の本調査を収録したものであります。

本書が文化財保護や地域の歴史を知る資料として、活用いただければ幸いに存じます。

平成8年3月31日

長崎県教育委員会教育長

中 川 忠

例 言

1. 本書は、長崎県大村市黒丸町587番地1外に所在する黒丸遺跡に関する緊急発掘調査報告である。
2. 調査は、都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴って長崎県教育庁文化課が平成2年度に範囲確認調査、平成5年度～平成7年度に本調査を実施した。なお、平成7年度調査分については、平成8年度に報告を予定している。
3. 平成2年度・平成5年度・平成6年度の発掘調査担当
平成2年度（平成2年12月3日～12月14日）
主任文化財保護主事 宮崎 貴夫
文化財保護主事 町田 利幸
平成5年度（平成5年10月25日～平成6年2月15日）
文化財保護主事 町田 利幸
〃 岡 大博
平成6年度（平成6年11月15日～平成7年2月3日）
課長補佐 田川 肇
文化財保護主事 村川 逸朗
〃 古門 雅高
〃 岡 大博
文化財調査員 松尾 昭子
〃 高原 愛
4. 本書の執筆は第1部を町田が第2部のI—1～3を高原がI—4を古門で担当し、3部の自然分析は、古環境研究所に委託し結果報告を記載した。
5. 写真撮影は、第1部の遺構・遺物を町田が第2部は村川が第3部は古環境研究所で行っている。
6. 本書の編集は、町田が担当した。
7. 本書の作成にあたっては、文化課内業整理員による遺物洗浄、注記、実測、トレース等と現地の作業員、内業整理員の方々による協力によって作成することができた。ここに深く感謝いたします。

本文目次

序

第1部 平成2年度・平成5年度調査

I 地理的歴史的環境	1
1. 地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	1
II 本調査に至る経過	2
1. 調査の経緯	2
2. 範囲確認調査	3
III 一次調査	5
1. 調査の概要	5
2. 土層	5
3. 遺構	5
4. 遺物	19
5. 小結	37

第2部 平成6年度調査

I 二次調査	53
1. 調査の概要	53
2. 土層	54
3. 遺構と遺物	58
4. V区出土の遺物	96

第3部 自然科学分析

I 黒丸遺跡の植物珪酸体分析	103
1. はじめに	103
2. 試料	103
3. 分析法	103
4. 分析結果	104
5. 考察	104
6. まとめ	105
II 黒丸遺跡における花粉分析	108
1. はじめに	108

2. 試料	108
3. 方法	108
4. 結果	108
5. 花粉分析から見た植生・環境	109
III 黒丸遺跡出土材の樹種同定	113
1. 試料	113
2. 方法	113
3. 結果	113

挿 図 目 次

第 1 部

第 1 図 大村市の位置図	1	第17図 I—2 区遺構出土	20
第 2 図 黒丸遺跡及び周辺の遺跡	1	第18図 I—2 区遺構出土	21
第 3 図 黒丸遺跡調査会報告甕棺・打製石斧	2	第19図 I—3 区遺構出土	22
第 4 図 黒丸遺跡範囲確認調査	4	第20図 I—4 区遺構出土	23
第 5 図 調査区	5	第21図 I—5 区遺構出土	24
第 6 図 I—4～6 区・II—4 区東壁土層	6	第22図 I—6～8 区遺構出土	26
第 7 図 I・II 区遺構	7	第23図 I—5 区遺構出土	27
第 8 図 I—1 区遺構	9	第24図 I—10～13 区遺構出土	28
第 9 図 I—2 区遺構	10	第25図 II—1・2 区出土	29
第10図 I—3 区遺構	11	第26図 II—3 区出土	30
第11図 I—4・5 区遺構	12	第27図 II—4 区出土	31
第12図 I—6 区遺構	13	第28図 II—5 区出土	33
第13図 I—7・8 区遺構	15	第29図 II—5 区出土	34
第14図 I—8 区遺構	16	第30図 II—5 区出土	35
第15図 I—9 区遺構	17	第31図 II—6～9 区出土	36
第16図 I—1 区遺構出土	19		

第 2 部

第 1 図 調査区周辺	53	第 6 図 III—1 区の土器	58
第 2 図 調査区	53	第 7 図 III—1 区の石器	59
第 3 図 ビニールハウス内出土の甕胴部片	54	第 8 図 III—2 区の土器	60
第 4 図 III・IV 区遺構	55	第 9 図 III—2 区の石器	61
第 5 図 土層	57	第10図 III—3 区の土器	61

第11図	III—4区の土器	62	第29図	III—8区の石器①	81
第12図	III—4区の土器	63	第30図	III—8区の石器②	83
第13図	III—5区の土器	64	第31図	III—9区の土器	84
第14図	III—5区の土器	65	第32図	III—9区の石器	85
第15図	III—6区の土器	66	第33図	III—9区の壺棺群	86
第16図	III—6区の石器	68	第34図	壺棺1～9号検出実測図	87
第17図	III—7区の土器	70	第35図	壺棺実測図①	88
第18図	III—7区の石器①	71	第36図	壺棺実測図②	89
第19図	III—7区の石器②	72	第37図	III—9区壺棺群の副葬品	90
第20図	III—7区3層土壌配置図	74	第38図	III—10区の土器	91
第21図	土壌1の石器	75	第39図	III—10区の石器	92
第22図	土壌1の土器	76	第40図	III—11区の土器	93
第23図	土壌2の土器	76	第41図	III—11区の石器	94
第24図	土壌2の石器	77	第42図	IV—1・2区の石器	95
第25図	土壌4～6の土器	77	第43図	IV—12区の石器	95
第26図	土壌4の石器	78	第44図	V区の土器実測図	97
第27図	土壌6の石器	78	第45図	V区の石器実測図	98
第28図	III—8区の土器外	81			

第3部

第1図	黒丸遺跡II—4区東壁の植物珪酸体分析結果	107
第2図	黒丸遺跡における主要花粉組成図	112

表 目 次

第1部

表1	遺構出土遺物一覧①	9	表10	挿図遺物の特色一覧④	24
表2	遺構出土遺物一覧②	10	表11	挿図遺物の特色一覧⑤	25
表3	遺構出土遺物一覧③	11	表12	挿図遺物の特色一覧⑥	25
表4	遺構出土遺物一覧④	13	表13	挿図遺物の特色一覧⑦	26
表5	遺構出土遺物一覧⑤	16	表14	挿図遺物の特色一覧⑧	26
表6	遺構出土遺物一覧⑥	16	表15	挿図遺物の特色一覧⑨	27
表7	挿図遺物の特色一覧①	23	表16	挿図遺物の特色一覧⑩	27
表8	挿図遺物の特色一覧②	23	表17	挿図遺物の特色一覧⑪	28
表9	挿図遺物の特色一覧③	24	表18	挿図遺物の特色一覧⑫	28

表19 挿図遺物の特色一覧⑬	31	表23 挿図遺物の特色一覧⑰	36
表20 挿図遺物の特色一覧⑭	31	表24 挿図遺物の特色一覧⑱	36
表21 挿図遺物の特色一覧⑮	32	表25 挿図遺物の特色一覧⑲	37
表22 挿図遺物の特色一覧⑯	32	表26 挿図遺物の特色一覧⑳	37

第2部

表1 III—1区石器組成表	59	表8 土壙1・2の石器組成②	80
表2 III—2区石器組成表	61	表9 III—8区石器組成	82
表3 III—4区石器組成表	63	表10 III—9区石器組成	84
表4 III—5区石器組成表	64	表11 III—10区石器組成	92
表5 III—6区石器組成	69	表12 III—11区石器組成	94
表6 III—7区石器組成	73	表13 IV—12区石器組成	95
表7 土壙1の石器組成①	79		

第3部

表1 長崎県, 黒丸遺跡II—4区東壁の植物珪酸体分析結果	106
表2 黒丸遺跡における花粉分析結果	111

図版目次

第1部

図版1 I—1・2区遺構	39	図版7 I—3～5区遺構出土	45
図版2 I—3～5区遺構	40	図版8 I—6～13区遺構出土	46
図版3 I—5区3・4号溝	41	図版9 II—1～3区出土	47
図版4 I—5・7・8区遺構	42	図版10 II—4・5区出土	48
図版5 I—2・8区柱穴内遺物	43	図版11 II—5区出土	49
図版6 I—1・2区遺構出土	44	図版12 II—6～9区出土	50

第2部

図版1 III区の調査	99	図版2 III区の遺構	100
-------------	----	-------------	-----

第3部

図版1 黒丸遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真1	115	図版4 黒丸遺跡の花粉・孢子I	118
図版2 黒丸遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真2	116	図版5 黒丸遺跡の花粉・孢子II	119
図版3 黒丸遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真3	117	図版6 黒丸遺跡出土材の顕微鏡写真	120



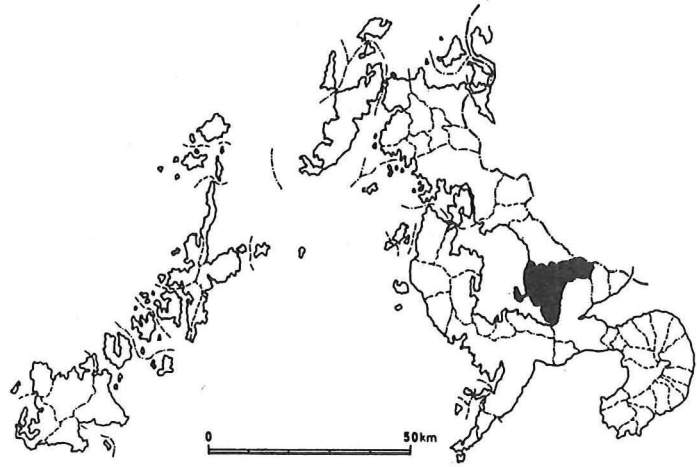
第 1 部

平成 2 年度・平成 5 年度調査

I 地理的歴史的環境

1 地理的環境 (第1図)

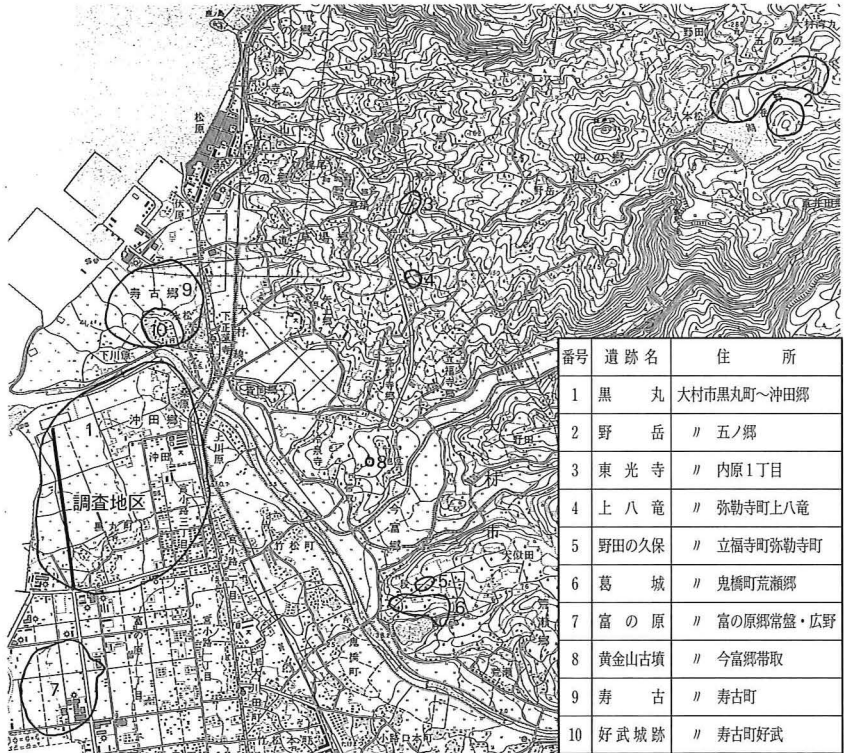
遺跡の所在する大村市は、長崎県の中央部に位置する。市の東側を経ヶ岳・多良岳・五家原岳などの多良山系で佐賀県とを遮蔽している。西側は大村湾によって囲まれ、現在湾南西側に箕島を削平して長崎空港^{註1}を開設している。地質は、第三紀堆積岩を基盤に安山岩・玄武岩質の火山性岩石が覆う。河川は、郡川・鈴田川があり、市内最大の郡川は肥沃な扇状地を形成し、稲作と人参を主体にした農業経営の基盤をなしている。



第1図 大村市の位置図

2 周辺の遺跡 (第2図)

埋蔵文化財に関する遺跡は205遺跡を周知しており、周辺の遺跡としては、旧石器時代の野岳遺跡をはじめ20箇所^{註2}があげられる。縄文時代の遺跡は、九州横断自動車道路建設^{註2}に伴う調査で後期から晩期の葛城・野田の久保・上八竜・東光寺遺跡が明らかとなっている。弥生時代は、昭和55年から61年に発掘調査を実施した富の原遺跡^{註3}がある。遺跡の内容は、甕棺墓、住居跡等の遺構に伴って弥生時代中期から後期前半にかけての鉄弋3本が甕棺内より出土している。古墳時代は5世紀頃の黄金山古墳^{註4}や7世紀頃の寿古遺跡^{註5}等の調査が行われている。中世は、郡川北岸に好武城跡^{註6}があり周辺の寿古遺跡調査で玉縁口縁の白磁の外に石鍋・土師器等が出土している。また、遺跡の南端には、五輪塔^{註7}を寄せ集め



第2図 黒丸遺跡及び周辺の遺跡

黒丸遺跡 I

た箇所がありキリシタン大名の大村純忠（第18代大村領主1533～1587年）以前における仏事・仏閣等に関連した場所を示唆すると思われる資料がある。

註1 長崎県企画部企画課1974 土地分類，基本調査「大村」

註2 長崎県教育委員会1989「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI」

註3 大村市教育委員会1987「富の原」

註4 小田富士雄1970「九州考古学 39・40長崎県大村市，黄金山古墳調査報告」

註5 大村市教育委員会1990「寿古遺跡」

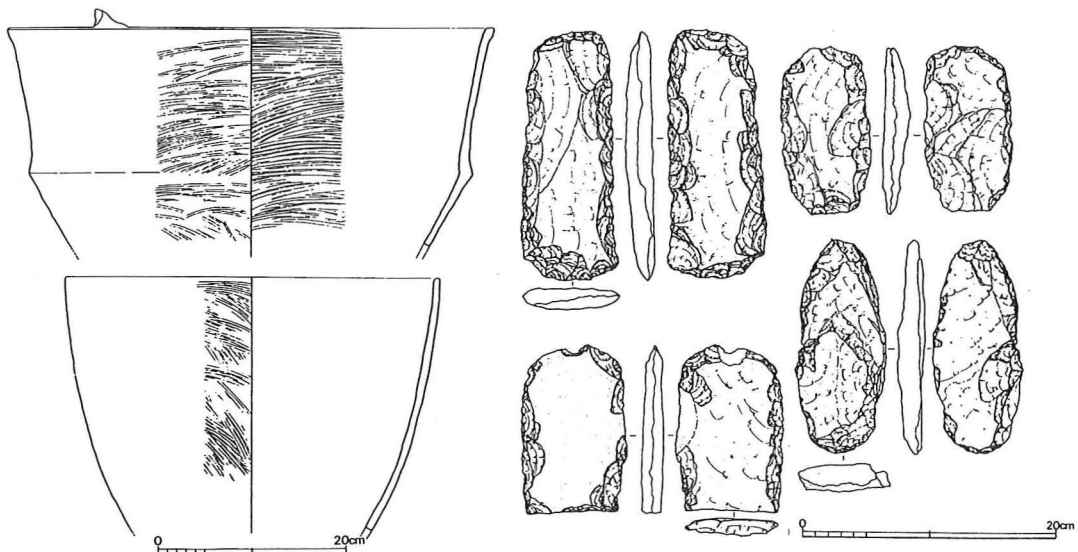


黒丸遺跡内の五輪塔群

II 本調査に至る経過

1 調査の経緯（第3図）

黒丸遺跡の調査は、黒丸遺跡調査会^{註8}によって昭和52年7月4日～13日の第1次試掘調査に始まり、昭和53年2月14日～3月11日に第2次試掘調査を行っている。この結果、黒丸都市下水路工事に伴う本調査を昭和53年11月21日～昭和54年5月31日の間に黒丸遺跡調査会が3,600m²を実施している。本調査において、縄文時代晩期の甕棺，打製石斧や弥生時代中期の土器及び古墳時代の古式土師器，木製品等と中世の白磁・青磁・石鍋等を出土していて，縄文時代～中世の長期にわたって扇状地を利用した生活が営まれていたことが明らかになった。



第3図 黒丸遺跡調査会報告カメ棺・打製石斧 ※註1より転載

このような黒丸遺跡の歴史経過が確認されつつある状況において、県都市計画課から杭出津・松原線改良工事計画の報告を受け平成2年12月3日～平成2年12月14日に試掘墳30箇所の120m²を調査した。

2 範囲確認調査 (第4図)

長崎県教育委員会が主体となり、調査を実施した。調査の結果、北半部の試掘墳(TP1～11)は、郡川の氾濫によって堆積した土砂や礫に覆われていた。

南半部は、縄文時代晩期～中世にわたる遺物・遺構を確認した。

TP12～14は、2層～4層に縄文時代晩期の土器・石器の包含状況を確認し、TP16～21は、弥生時代～古墳時代の土器がまとまりをもって出土し、柱穴や溝状の遺構を確認した。TP25～28は、中



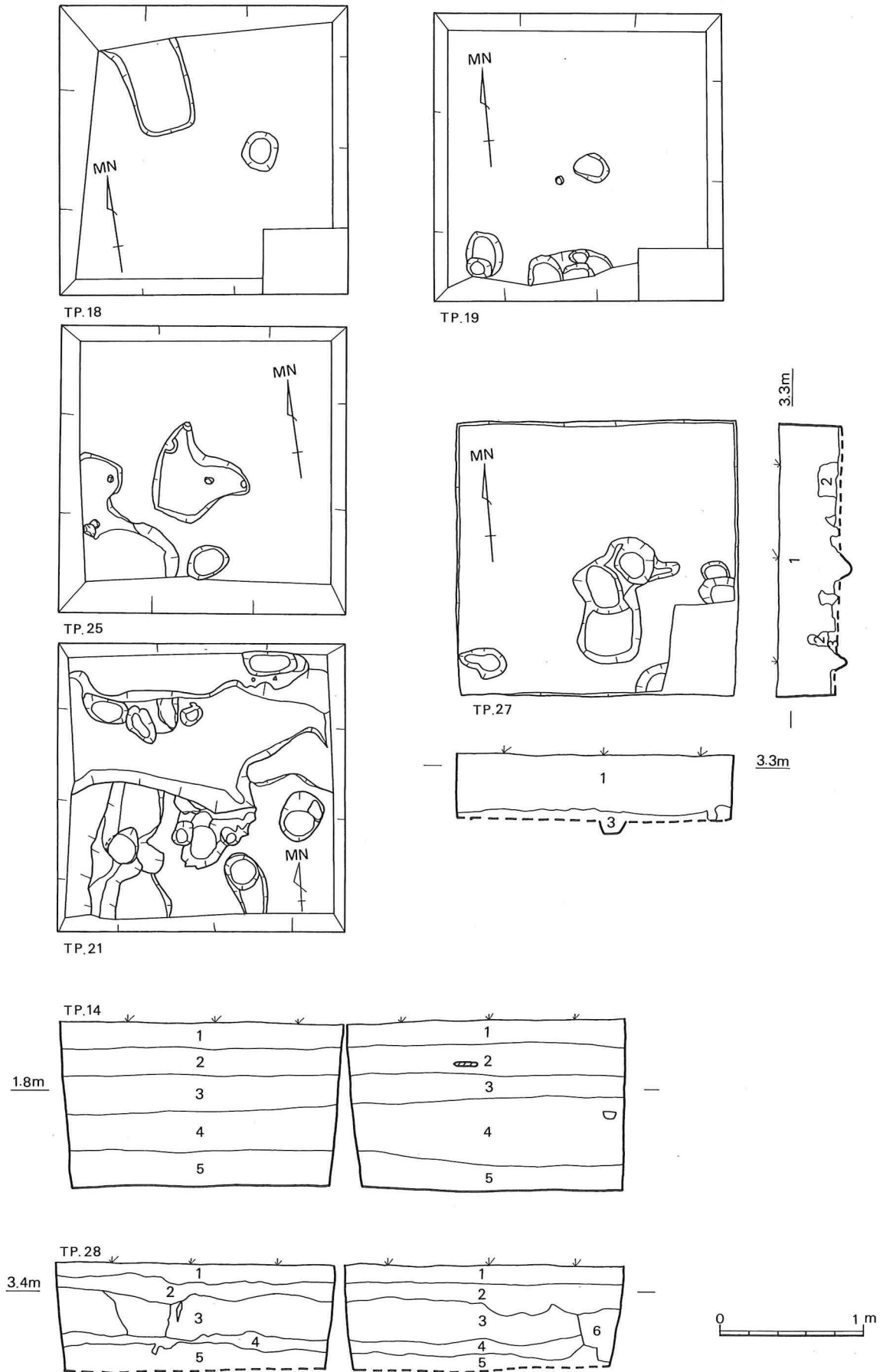
調査風景



TP21
遺構検出

平成2年度範囲確認調査

黒丸遺跡 I



第4図 黒丸遺跡範囲確認調査

世建物跡の柱穴を検出した。以上の状況から南半部の3区間(T P12~14, T P16~21, T P25~28)と条里遺構に係る部分の7,200㎡の地域について、事業の計画変更協議を行った。

III 一次調査

(所在地：大村市黒丸町587番地1~352)

1 調査の概要 (第5図)

調査期間は、平成5年10月25日~平成6年2月15日の間に実施した。

平成2年度の範囲確認調査を踏まえ、道路建設計画の年次事業に先行する形で3カ年計画の発掘調査の実施にあたることになった。

調査方法は、南北300m×東西16mの建設予定区域をI区・II区と設定した。また、区内を10m間隔で区切りI区を13ブロック、II区を9ブロックに分けた。

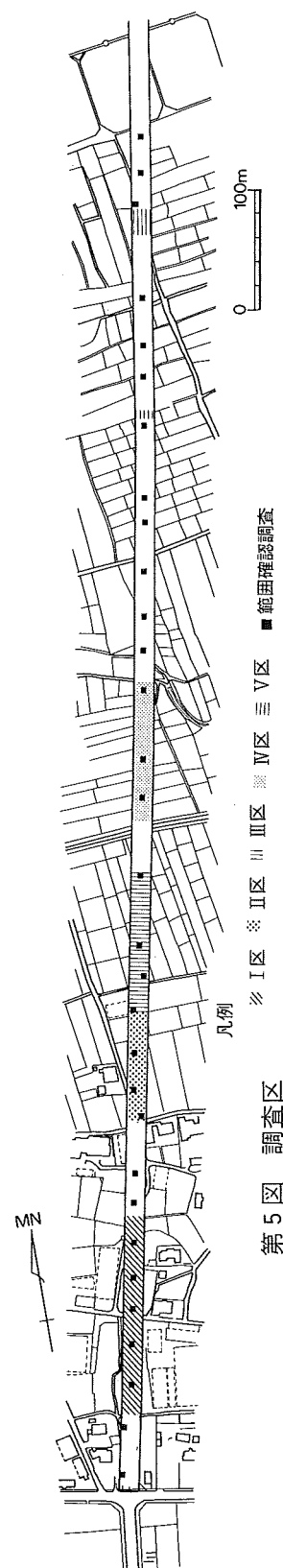
調査は、このブロックごとに堆積層を精査し、ブロック間に畔を残し東壁と併せて土層の確認を行い層ごとに遺物・遺構の取り上げ検出を行った。

2 土 層 (第6図)

I・II区の層序は、1層に耕作土が10~20cm堆積している。2層は、黄灰色を呈し、I区では畑地が多いためか1層と2層が混じりあった状況を示すが、II区は40cm前後の堆積が認められた。3層は基本的に黒色を呈しているものの、色調に変化がみられるとともに出土する遺物に時期的な差が認められ、3層・3a層・3b層の名称をつけている。3層は中世の遺物が主体に出土し、3a層の色調は暗灰黒色土で古墳から弥生時代の遺物が出土する。3b層は、黒色の小礫混じり層となり弥生から縄文時代の遺物が出土している。4層は、基盤層の黄色土となっているが、この上面に4a層とした灰黄色の粘質土が堆積しており縄文時代晩期の土器が出土している。

3 遺 構 (第7図)

I区は、1~13ブロックで白磁椀、青磁、石鍋等の遺物が柱穴内より出土している。また、4・5・6ブロックは、古代の溝が調査区内で南北に長さ28.5m、幅0.5m構築され、4・5ブロックは鎌倉時代から室町時代にかけて土師器皿、青磁、東播系鉢等が溝3号から出土している。7・8・9・10ブロックにかけては、朝鮮系陶磁器、染付の椀・皿類、土師器皿類が柱穴、土壌等から出土している。



第5図 調査区

黒丸遺跡 I

II区は、1ブロックに中世の柱穴を検出した外は木の根による倒木痕と部分的に円礫の集中箇所を認める程度である。

次にI区の1ブロックから順次遺構の性格及び時期について触れて行くことにする。

I-1 (第8図, 表1)

この地区は、柱穴23基、土壇8基、集石4基、溝1基、焼土1基から遺物の出土があった。

柱穴は、P i t 23号以外は中世に所属する時期と考えられ、柱穴内の充填土の色調は黒色土であった。

土壇は、1・3・6・8号が中世に属し、2・4・5・7号については遺物に陶磁器、ガラス、プラスチック、瓦等が混入しており現代のものである。

集石は、3号が中世の遺物を含んだ黒灰色土が充填し、1・2号は現代の遺物に中世の遺物が混入し、充填土は灰茶色を呈している。

溝1号は、近世陶磁器と瓦片が混入しており所属時期は近世から現代にかけてと考えられるが黒曜石剥片、須恵器、石鍋、黒色土器^{註9}Bが出土している。

焼土1号は、石鍋片、近世陶磁器等が出土するが、ガラス・プラスチック等が混入しており、近年に土壇を掘られたものであろう。

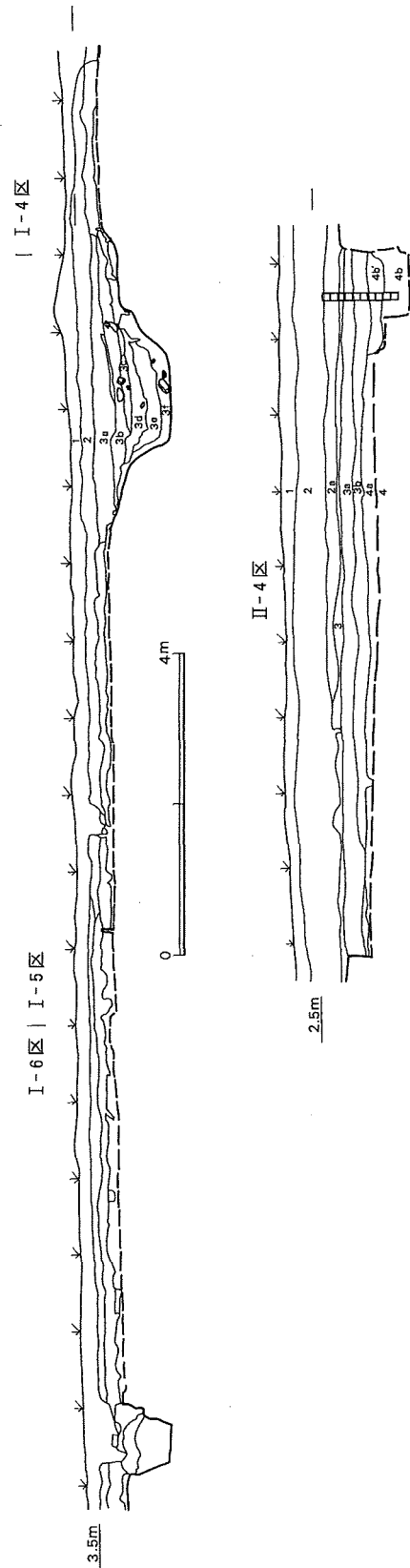
I-2 (第9図, 表2)

柱穴36基、土壇1基、井戸1基、溝1基に遺物の出土がある。

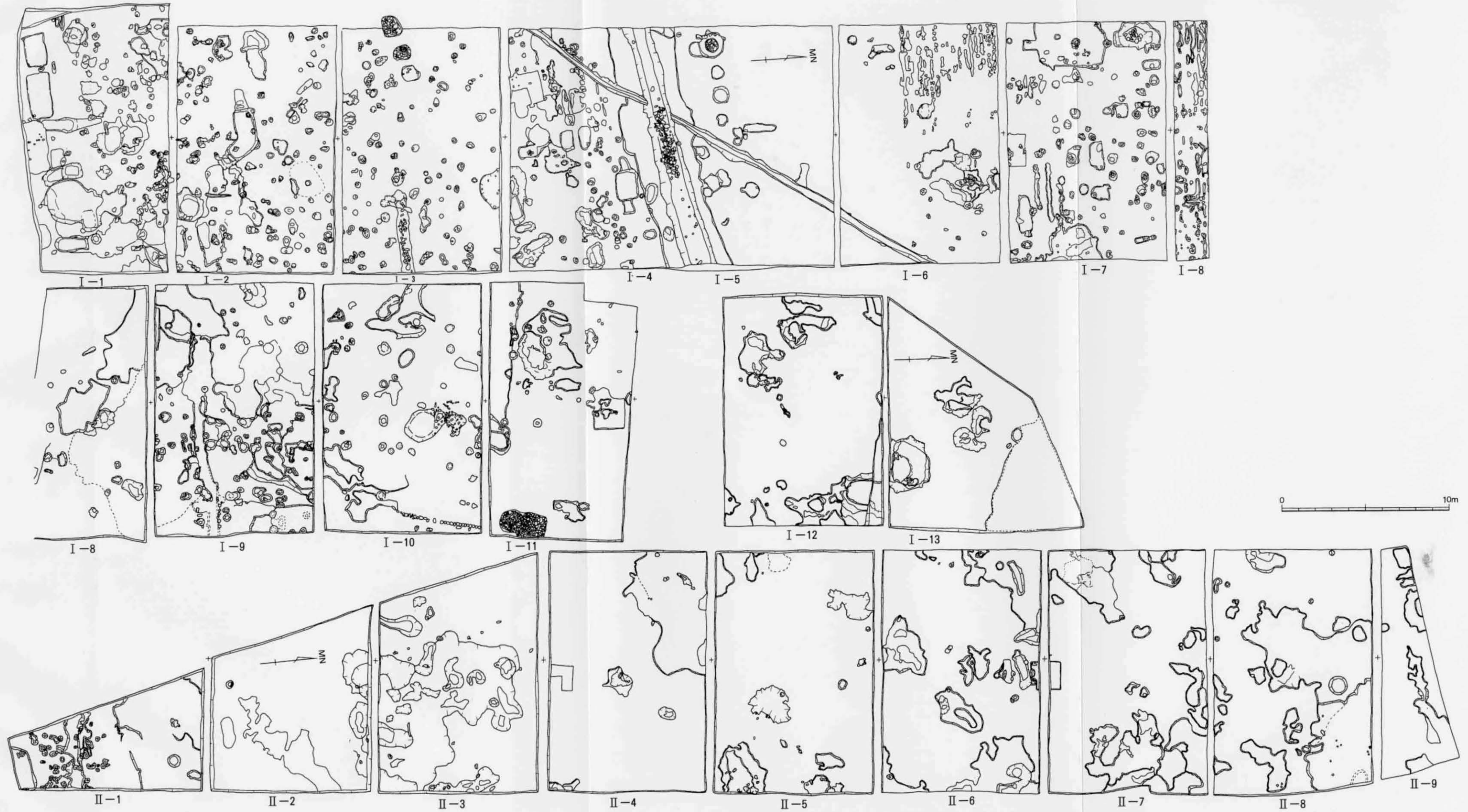
柱穴は、サヌカイト剥片の出土が pit11, 須恵器出土の pit 9, 土師器、青磁、石鍋片等の出土が pit 2~6・10・16・17・19~22・25・27~36, 近世陶磁器片が pit 1・24からそれぞれ遺物の出土があった。

土壇1号は、第二次世界大戦中に防空壕として利用していたもので陶磁器片、ガラス瓶、昭和17年銘一銭の出土があった。

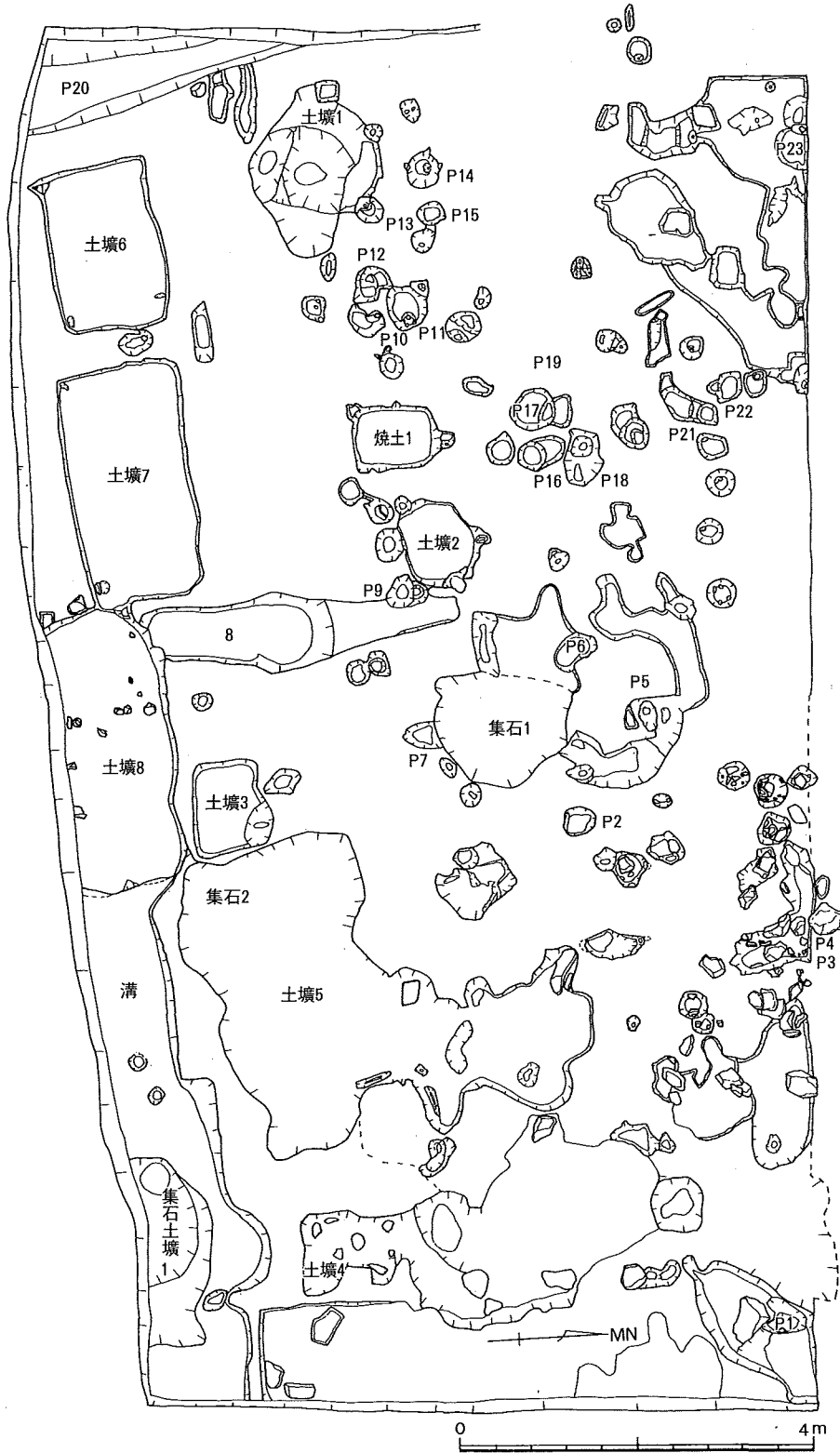
井戸1号は、戦後も使用されていたものであるが周



第6図 I-4・5・6区・II-4区東壁土層図



第7图 I·II区遺構図



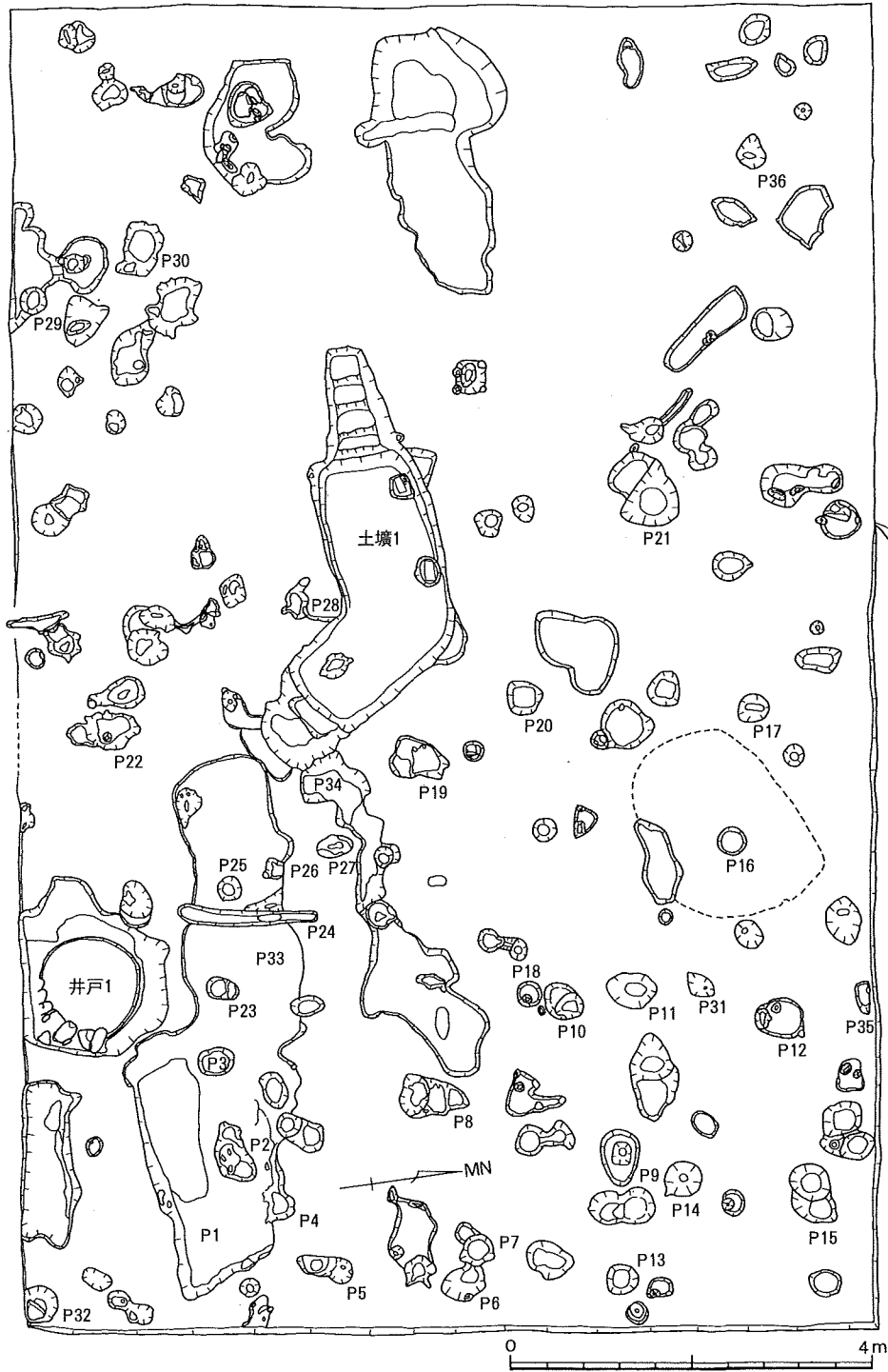
第8図 I-1区遺構図

辺からは18世紀の近世陶磁器の出土がある。

溝1号は、井戸南側に浅く残っていたものである。井戸と同時期に作られたものであろう。

表1 遺構出土遺物一覧①

遺構名 I-1	遺物名と点数	遺構 深度(cm)	時代
柱穴1	土3	5	古代
2	白1土1	16	中世
3	石1土1	16	中世
4	/	6	/
5	青1	27	中世
6	土2	19	中世
7	/	12	/
8	青1土1	22.5	中世
9	青1	25	中世
10	土1	41.5	中世
11	土12石1青1	17	古代~ 中世
12	/	14	/
13	青1	38	中世
14	土1	7	中世
15	/	21	/
柱穴16	土5石1	34.5	中世
17	土42青1石1	11	中世
18	土2	1	中世
19	土1	7	中世
20	土7石1	13.4	中世
21	土1	23	中世
22	青1	22	中世
23	土4陶1	22.5	中・近
土壇1	青1石2染1	38	中世
2	瓦・鉄	27.5	現代
3	/	22	/
4	陶磁5瓦2土1	49.5	現代
5	陶磁2ガ1土1	38	現代
6	/	29	/
7	陶磁2	31	現代
土壇8	土21質5須2	35.5	中世
焼土1	ア1ガ3	40	現代
集石1	陶磁1土1	23	現代
集石2	陶磁・土13	59	現代
集石3	陶8陶磁13	38	近世
溝1	須恵器3外34	26	現代



第9図 I-2区遺構図

I-3 (第10図, 表3)

柱穴41基, 集石3基, 石列1基を検出し, それぞれから遺物の出土がある。

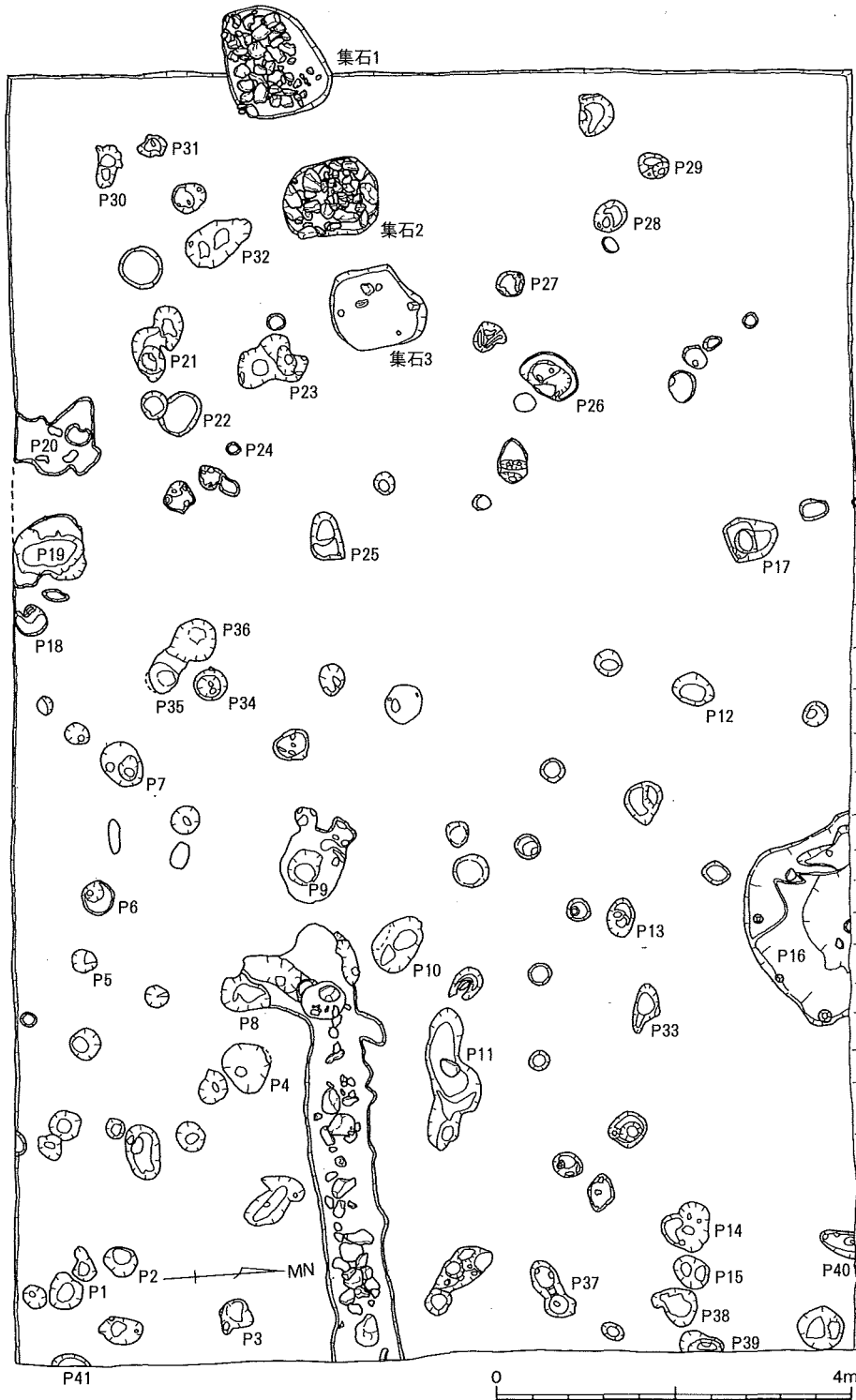
柱穴は, 中世に所属する時期が pit 2~5・7~16・19~31・33~36・38・40・41である。pit37は縄文時代の土器片が出土している。pit18は近世陶磁器が出土

表2 遺構出土遺物一覧②

遺構名 I-2	遺物名と点数	遺構 深度(cm)	時代
柱穴1	近陶1土1	34.5	近世
2	石1土1	22.5	中世
3	白2	42	中世
4	土1	11.5	中世
5	青2土6	69.1	中世
6	青2質1	37	中世
7	/	46	/
8	/	35	/
9	須恵器2	31	古代
10	青2	29	中世
11	石器	38	縄文
12	土1	24	中世
13	焼土塊1	42	/
14	須恵器1土1	50.3	/
15	石鍋1	39	中世
柱穴16	白磁1	43	中世
17	土1	65.5	中世
18	/	18	/
19	石1	18.5	中世
20	青1	27.5	中世
21	青1土6	4	中世
22	土1	22.5	中世
23	/	16	/
24	陶磁器1陶器1	28	現代
25	青1	14.7	中世
26	土師器(糸切)	28.5	中世
27	石鍋1	39.5	中世
28	青磁1	16	中世
29	土師器7	34	中世
30	土師器(糸切)	29	中世
柱穴31	土師器(糸切)	16.9	中世
32	土師器1	33	中世
33	朝鮮系青磁1	20.5	中世
34	土師器1	22.5	中世
35	土1質1	36.2	中世
36	土師器1	24	中世
土壇1	陶磁59ガ3	77	昭和17
井戸1	陶磁10瓦1	44.5	近・現
溝1	陶磁2土1鉄1	23	近・現

表 3 遺構出土遺物一覧③

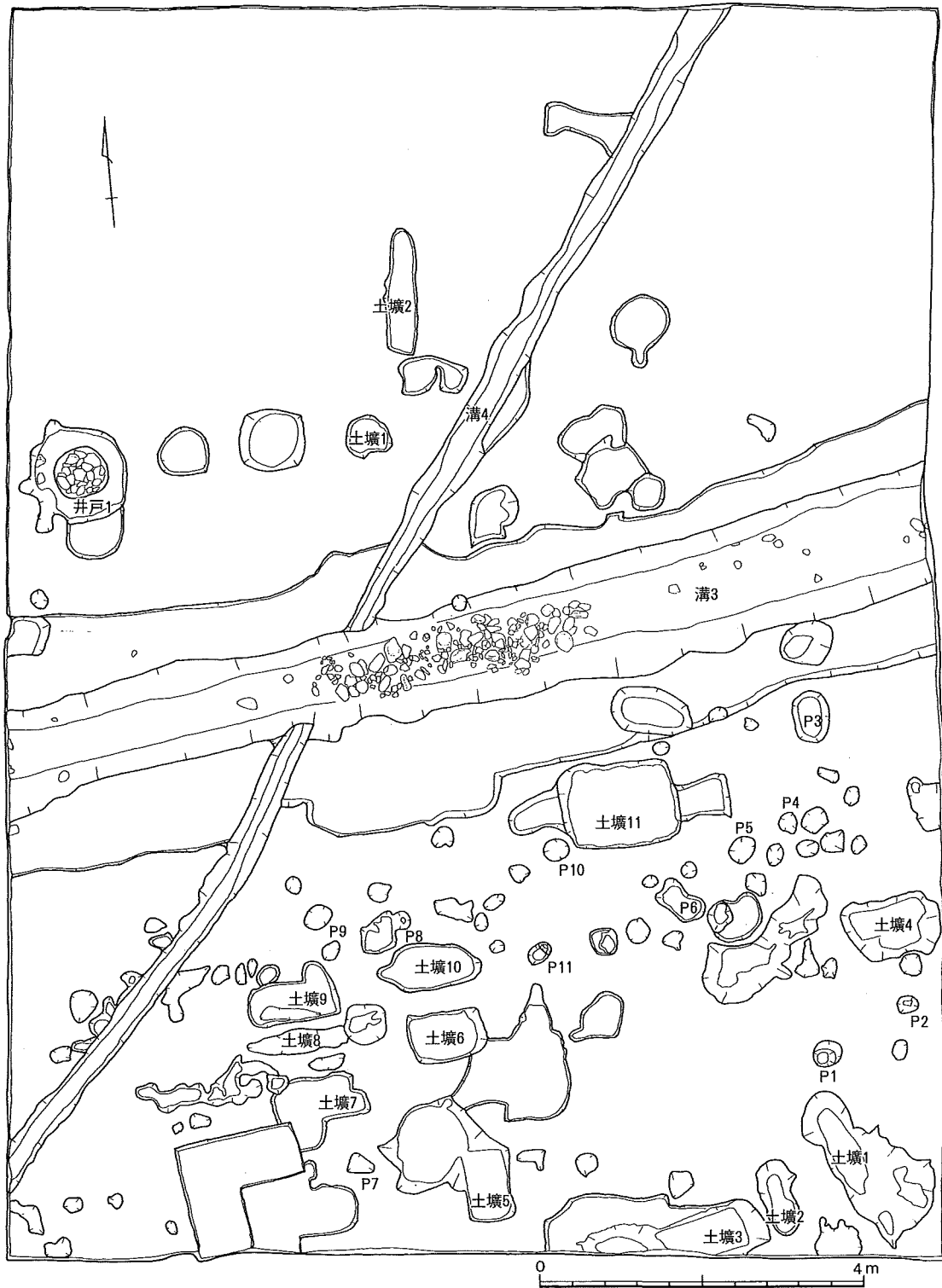
遺構名	遺物名と点数	遺構深度(cm)	時代
柱穴 1	白 1	40	古~中世
2	土師器 2	25	中世
3	土師器 1	18.5	中世
4	白 1 青 1 土 3	32	中世
5	土師器 1	26	中世
6	/	41.5	/
7	青 1 土 2	35	中世
8	土師器 5	29	中世
9	石鍋 1 土師器	34.5	中世
10	白 1 青 1 土 6	14	中世
11	土師器 1	53	中世
12	土師器 2 瓦質 1	42	中世
13	石鍋 1	37	中世
14	土師器 1	33	中世
15	白 3 青 1 石鍋 6	33	中世
柱穴 16	須 1 土 1 質 1 青 1	39.5	中世
17	陶磁器 1	30	近世
18	土師器 6	31	中世
19	/	31.5	/
20	土師器 2	23	中世
21	白 1 土 6 石鍋 1	2	中世
22	土師器 6	10	中世
23	白 1 土 1 石鍋 1	48	中世
24	/	15	/
25	土師器 8	48	中世
26	土師器 1	48	中世
27	土師器 1	29.5	中世
28	白 1 土 6 石鍋 3	35	中世
29	土師器 1	26	中世
30	土師器 1 瓦質 1	28.5	中世
柱穴 31	土師器 2	28	中世
32	土師器 1	38.5	中世
33	土師器 1	27.5	中世
34	土師器 2	28.5	中世
35	土師器 9	38	中世
36	土師器 2	43.5	中世
37	土器 2 青 1	34	縄文世
38	土師器 1	28	中世
39	/	7.5	/
40	青 1 土 2 石鍋 1	14.7	中世
41	/	32	/
集石 1	磁器 4 土 1 瓦 3	76.7	現代
集石 2	ガ 2 陶磁器 9	33.5	現代
集石 3	瓦質 1 石鍋 1	33	中世
列石 1	火鉢, 土 3 白 2	34	中世



第10図 I-3区遺構図

している。

集石は、3基の内3号が瓦質土器を出土し、1・2号は近世陶磁器、瓦、ガラス瓶が出土している。

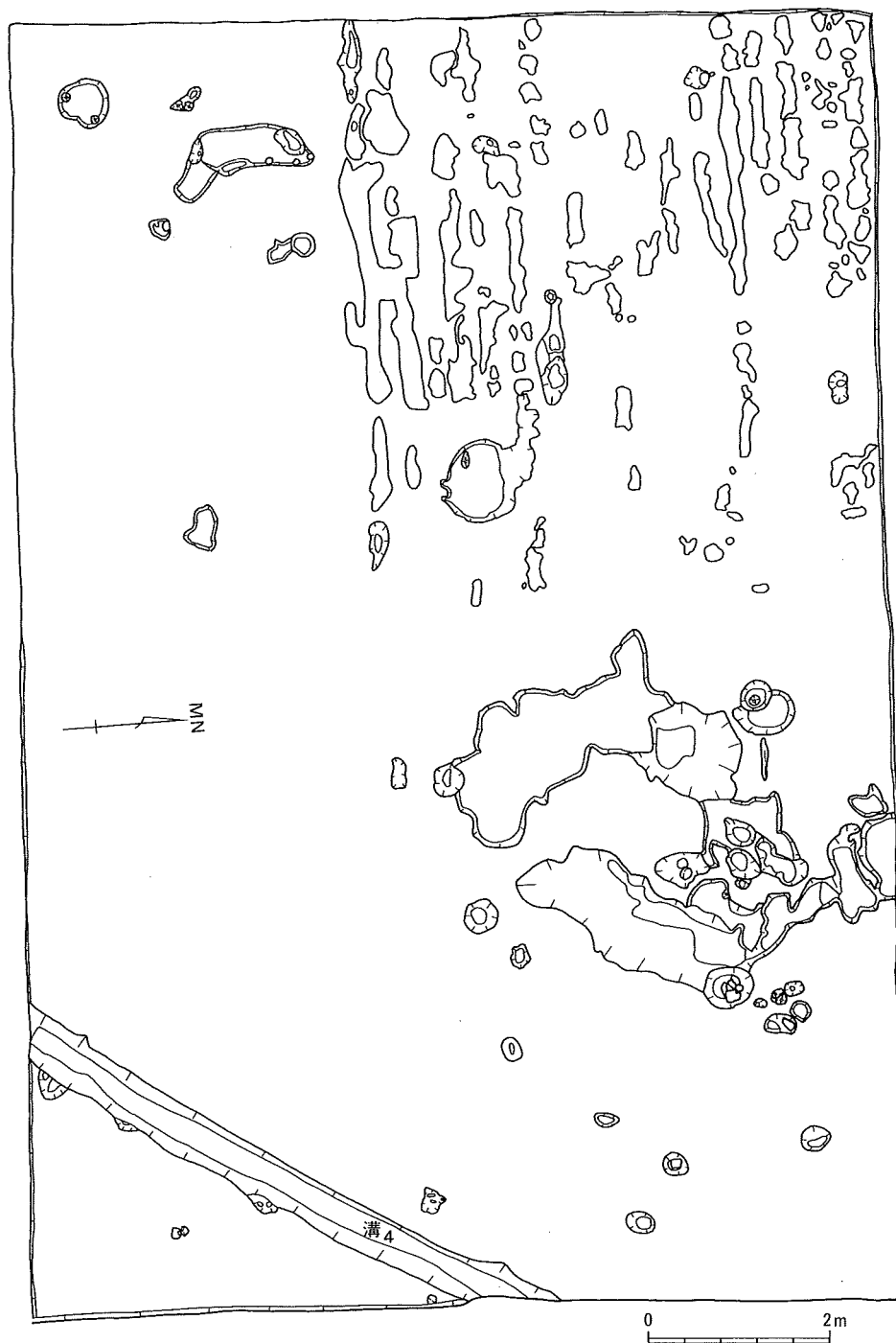


第11図 I-4・5区遺構図

石列1号は、火鉢と石鍋片が出土する。

I-4 (第11図, 表4)

柱穴11基と、土壇11基、溝4基から遺物の出土があった。



第12図 I-6区遺構図

柱穴は、pit10からスリ石、pit 5から弥生時代の土器が出土し、pit 3・4・6・8・9・11に白磁、青磁、土師器の出土があった。また、pit 1・7は近世陶磁器を出土。

土壇1～5・8号は白磁、青磁、土師器の出土があった。土壇6号は陶磁器、7号は爆弾の信管、11号は防空壕に利用していたもので一升瓶、陶磁器

表4 遺構出土遺物一覧④

遺構名 I-4	遺物名と点数	遺構 深度(cm)	時 代
柱穴1	陶磁器 1	32	近 世
2	/	40	/
3	白磁1 陶器 1	26	中 世
4	青磁 1	25.5	中 世
5	土器 1	30	弥 生
6	陶磁器 1	25	近 代
7	土師器 2	19	中 世
8	土師器 3	15.5	中 世
9	スリ石 1	30	縄・弥
10	白磁 1	23.5	中 世
11	/	34.5	/
土壇1	陶磁器 1	37	中 世
2	青磁 1 土師器 1	31.5	中 世
3	青 1 土 1 石 1	45.5	中 世
4	青 2 土 10 石 1	54.5	中 世
土壇5	土 1 石 鍋 1 鉄 1	21.5	中 世
6	陶器 1 陶磁器 5	18	現 代
7	青磁 1 爆弾 1	33.5	中・現
8	白磁 1	39	中 世
9	鉄	66	/
10	結晶片岩 1	29	/
11	ビン 1 摺鉢 1	65.5	昭和17
溝 1	陶磁器 2 石鍋 1	24	近 世
溝 2	瓦 2	18.5	現 代
溝 3	須質 4 外43	92.5	中 世
溝 4	/	59.5	古 代

黒丸遺跡 I

等が出土した。

溝の1号・2号は、陶磁器、瓦片の出土があり現代の溝であろう。溝3号は、須恵器、白磁、石鍋等の遺物が出土し、構造は調査区内の東西方向に伸びて現状で東西の長さ16m、南北の幅が約3.5mを測る。断面はU字形をなしている。溝4号は、I—4区～I—6区内に長さが南北30m、幅が0.5～0.6mとなっている。充填土は黒色を呈し、I—6区の溝から土師器の口縁部が出土している。

I—5 (第11図, 表5)

遺構は、土壇2基、井戸1基、溝2基を検出している。

土壇1号は、陶器、陶磁器、青磁が出土しているがいずれも現代の資料である。土壇2号は龍泉窯系青磁片と土師器が出土する。13世紀中葉頃と思われる。

溝3号は、I—4区の北側部分にあたり糸切底の土師器、白磁、石鍋等が出土している。I—5区の溝4号からは、出土遺物を確認していない。

I—6 (第12図, 表5)

この地区は、溝1基、倒木跡を検出している。また、西側はゴボウ耕作で攪乱を受けている。

溝4号からは土師器の甕片が出土する。

I—7 (第13図, 表5)

柱穴14基、土壇5基に遺物の出土があった。

柱穴は pit 2・5・6・7・9～14から白磁、青磁、染付碗、朝鮮系青磁等の出土があった。

土壇は、1号に青磁、石鍋、土師器の出土があるが小片のため図化していない。2号は土師器の甕形土器片出土。3号は、糸切り底の土師器、青磁皿の出土。4号は器種不明の鉄製品、5号は、滑石製品の出土がある。

I—8 (第13・14図, 表6)

柱穴6基から遺物の出土があった。

pit は、朝鮮系陶磁器出土。pit 2は土師器片2点、pit 3は黒曜石片、pit 4・5は陶磁器、陶器、白磁等の近世遺物が出土している。pit 6は土師器の皿が出土している。

I—9 (第15図, 表6)

柱穴2基、土壇2基、溝3基から遺物の出土がある。pit 1は土師器、白磁、弥生時代の土器が出土。pit 2は糸切り底の土師器の出土がある。

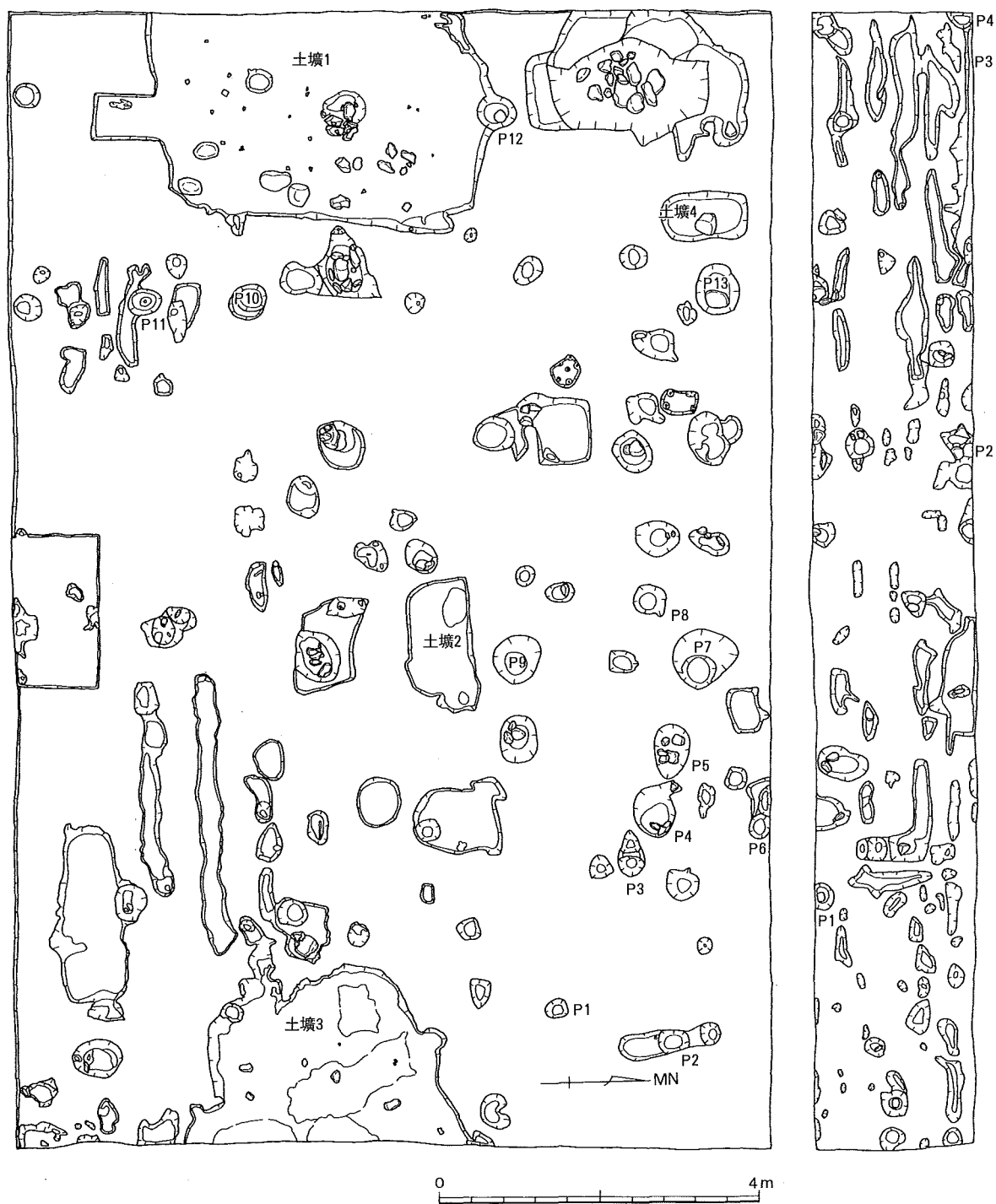
土壇は1号が土師器、白磁小片の出土。2号は、石鍋・青磁片が出土している。

溝は、1号が龍泉窯青磁15世紀代の資料の外に石鍋・土師器・白磁・弥生時代の土器が出土している。2号は、弥生時代中期から後期前半にかけての甕形土器と中世の瓦質土器・糸切り底の土師器・瓦質の茶釜・土錘の出土がある。溝3号は、土師器、石鍋・瓦質土器の出土があった。

I—10 (第7図, 表6)

柱穴9基に遺物の出土がある。

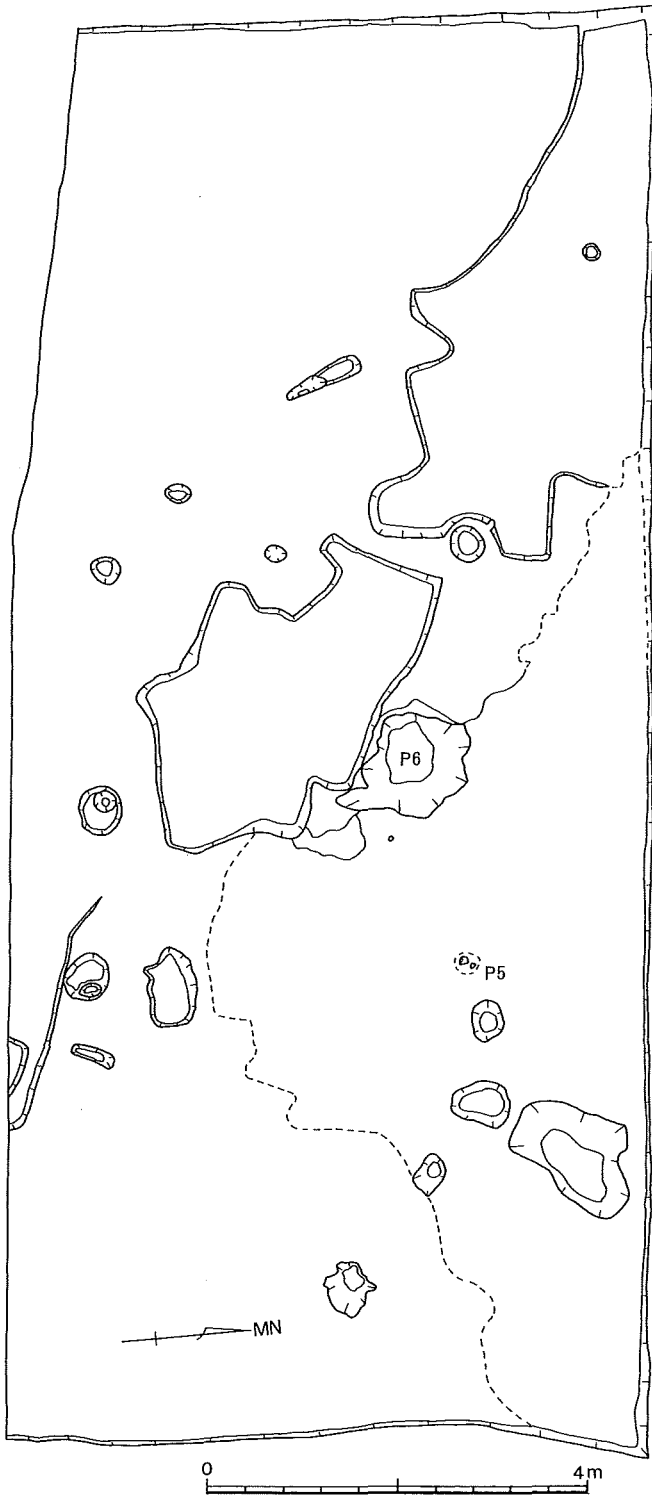
pit 1・2は、土師器の出土があり、pit 3は陶器の皿が出土。pit 5は、瓦質土器・土師器・陶器の出土がある。pit 6は染付皿が出土している。pit 7は、土師器の出土がある。pit 8は白磁が出土している。pit 9は土師器小片が出土している。



第13図 I-7・8区遺構図

I-11 (第7図)

2層より、瓦質土器・滑石製石錘・土錘の出土があったが、柱穴3基と集石1基から遺物の出土は認められなかった。



第14図 I-8区遺構図

表5 遺構出土遺物一覧⑤

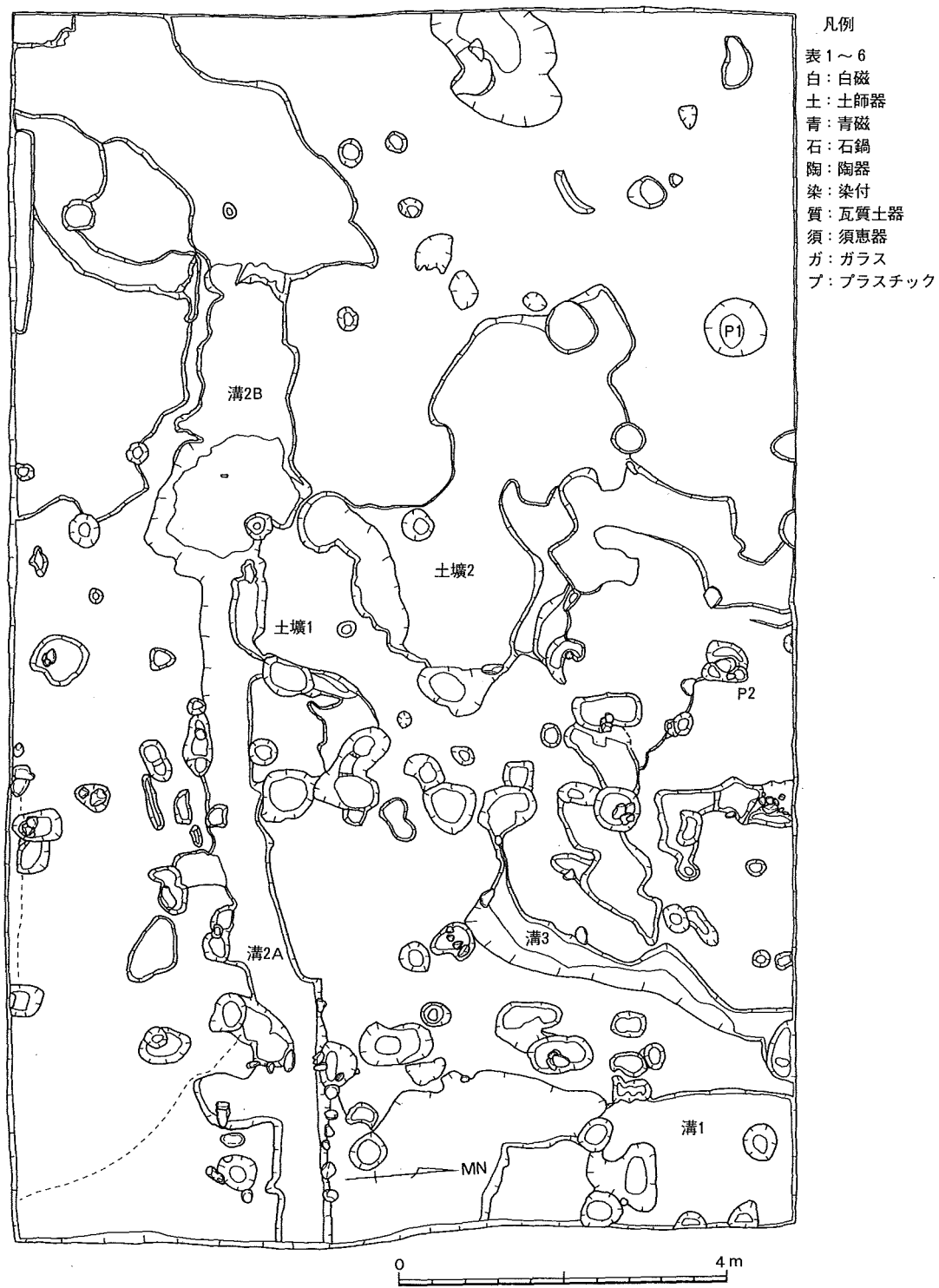
遺構名	遺物名と点数	遺構深度(cm)	時期
I-5			
土壌1	青3・陶器1・磁器	19	近・現
2	土師器2・青磁1	8	中世
井戸1	ガ1・陶器1・磁器	(46)	現代
溝3	/	92.5	中世
4	/	60	古代
I-6			
柱穴1	/	33	/
溝4	土師器の甕2	59	古代
I-7			
柱穴1	/	33	/
2	土師器1	55	中世
3	砥石1	58.5	/
4	/	49	/
5	/	63	/
6	朝鮮系青磁1	44	中世
7	白1・青1・土1	56	中世
8	青磁1	30	中世
9	陶磁器1・朝鮮系青磁1	62	中近世
10	青磁1	41.5	中世
11	陶磁器皿	46	中世
12	染付碗	40	中世
13	青磁1	65	中世
14	朝鮮系青磁1	56	中世
土壌1	青磁12・土15	30	中世
2	土師器1	21.5	古代
3	青白磁3・土1	52.5	中世
4	不明鉄製品1	54	/
5	滑石製品1	84	中世

表6 遺構出土遺物一覧⑥

遺構名	遺物名と点数	遺構深度(cm)	時期
I-8			
柱穴1	朝鮮系陶器	30	中世
2	土師器2	15	中世
3	黒曜石剥片1	10	縄・弥
4	陶器1・陶磁器2	30	近世
5	近世白磁1	6	近世
6	土師器皿1	20.2	中世
I-9			
柱穴1	白1・土7・弥生1	42.5	中世
2	土師器2	32	中世
土壌1	白磁1・土師器3	4	中世
2	青磁1・石鍋1	16.5	中世
溝1	白3・土2・石鍋1	18.5	中世
2	須1・青6・土19	21.7	中世
3	土2・質2・石鍋1	25	中世
I-10			
柱穴1	土師器2	42	中世
2	土師器1	38.5	中世
3	陶器1	45.5	中世
4	/	34.5	/
5	土師器1・陶器1	43	中世
6	染付1	38	中世
7	土師器1	37	中世
8	白磁1	38	中世
I-12			
土壌1	白1・土8・石鍋2	1.85	中世
倒木痕	石鏃1	20	縄文

I-12 (第7図, 表6)

倒木痕より石鏃が出土し, 土壌1号から土師器・白磁・石鍋・黒曜石剥片・土錘が出土している。



第15図 I-9区遺構図

I-13 (第7図)

倒木痕を4箇所検出するが、遺物の確認はできなかった。ただし、3層から白磁IV類の玉縁口縁を有する椀が出土している。2層からは、16世紀前半の青磁の出土があった。

黒丸遺跡 I

II-1区 (第7図)

柱穴及び溝状遺構を検出しているが、柱穴からの出土遺物は確認できなかった。溝状遺構からは、土師器の皿や弥生時代の甕形土器の出土がある。その外は、3層より弥生時代中期の土器、4世紀代の土師器が出土している。2層は、須恵器の杯身、土師器（ヘラ切り離）、石鏃等が出土している。

II-2区 (第7図)

浅い溝が4層上面に認められた。遺物は、4a層に滑石混入の縄文時代中期の阿高系土器、リボン状の突起を付けた縄文晩期の深鉢形土器等の出土がある。3層は、須恵器、黒色土器Aが出土している。2層（黄色砂層）からは、土錘の出土がある。2層は、弥生時代中期の土器、須恵器、白磁の皿及び椀類、石鍋、糸切り底の土師器、明代の染付皿等の出土がある。

II-3区 (第7図)

この地区も、浅い溝がほぼ4層全面に認められ川の流路と考えられる。遺物の出土は、全く確認できなかった。4a層からは、粗製の深鉢形土器、磨製石斧、打製石斧、石鏃等が出土している。3b層は、弥生時代中期、古墳時代後期の土器の出土がある。2層からは、土師器、白磁椀類等が出土している。

II-4区 (第7図)

礫の集中箇所が4層上面の西側に、東西7m、南北6m程に認められたが遺物の出土は、認められなかった。遺物は4a層に縄文時代中期の阿高系土器、晩期の土器、石鏃、スクレイパー、凹石の出土がある。3層に弥生時代中期の土器、古墳時代前期の土師器が出土する。

II-5区 (第7図)

礫の集中箇所が4層上面の西側に3箇所認められた。その外に倒木痕が東側と北側に認められる。遺物は、倒木痕の周辺に集中して出土し、弥生時代中期の土器が主体を占める。石器は、石鏃、磨製石斧、スリ石の出土があった。3a層は、古墳時代前期の土師器の出土があり、3層は古墳時代末期の須恵器が出土した。

II-6区 (第7図)

4層上面に浅く倒木痕が残る。4a層はII-6区からII-9区かけては消失し、3b層に弥生時代中期の土器が出土する。3a～3層は、古代の遺物が出土する。

II-7区 (第7図)

4層上面の東西に倒木痕が残る。3b層に弥生時代中期の土器が出土する。遺物の量が極端に少なくなる。

II-8区 (第7図)

4層上面の北東隅に円礫の集中箇所がみつめられ、弥生時代中期の遺物が20点程出土。また、倒木痕にも弥生時代の土器、陶磁器が混入していた。

II-9区 (図7図)

倒木痕が残り、3層に弥生時代中期の土器、叩き石が出土する。

4 遺物 (第16~31図, 表7~26)

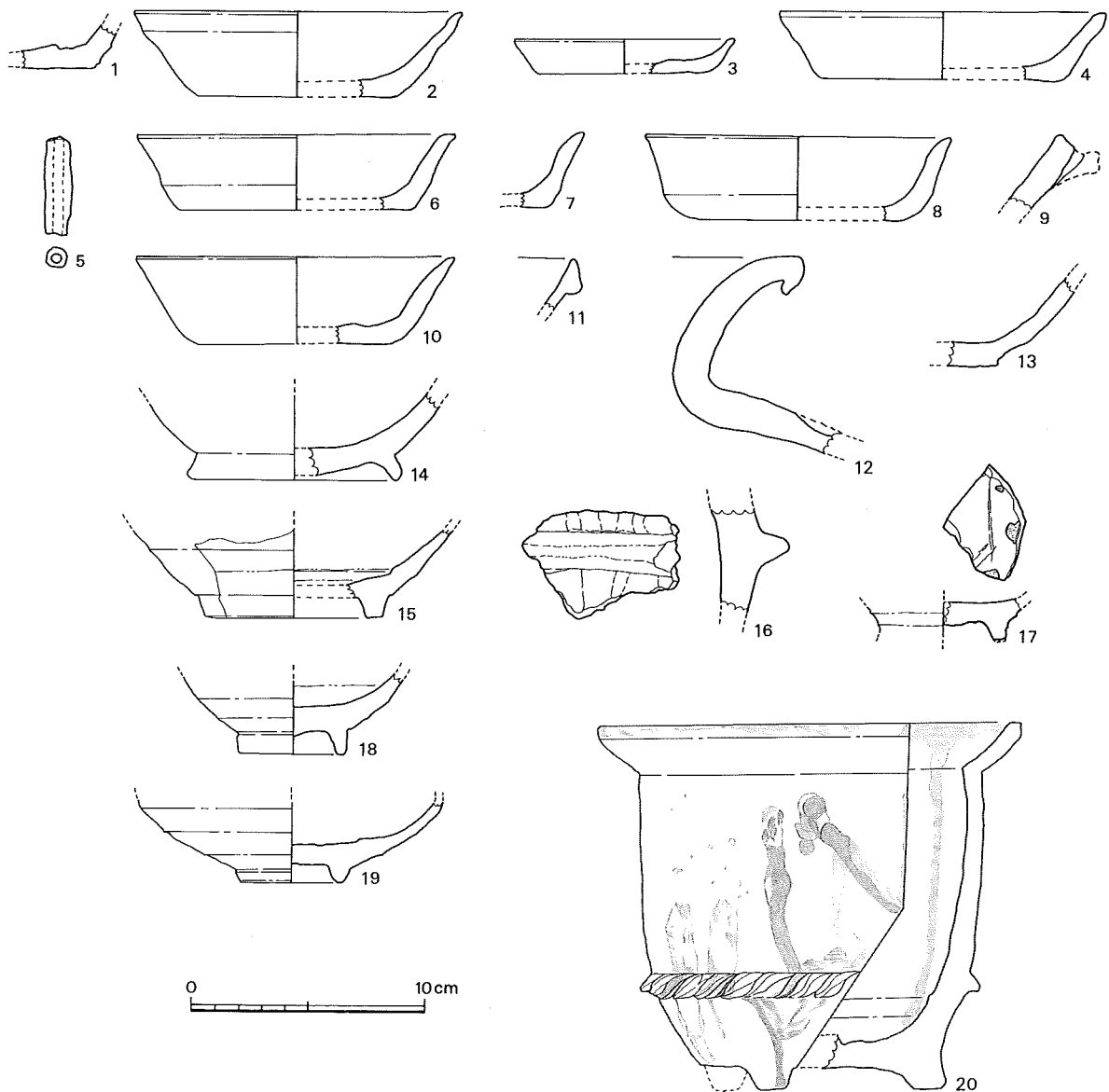
I区は、遺構からの出土遺物を主にII区は、土層ごとの出土遺物をまとめて掲載している。

I-1~I-5区は、相対的に11世紀~13世紀代の遺物が主体を占め、I-6~I-10区は15世紀~16世紀後半の遺物が主体となる。

II区は、縄文時代中期~11世紀代の遺物が4a層~3層の間に出土している。

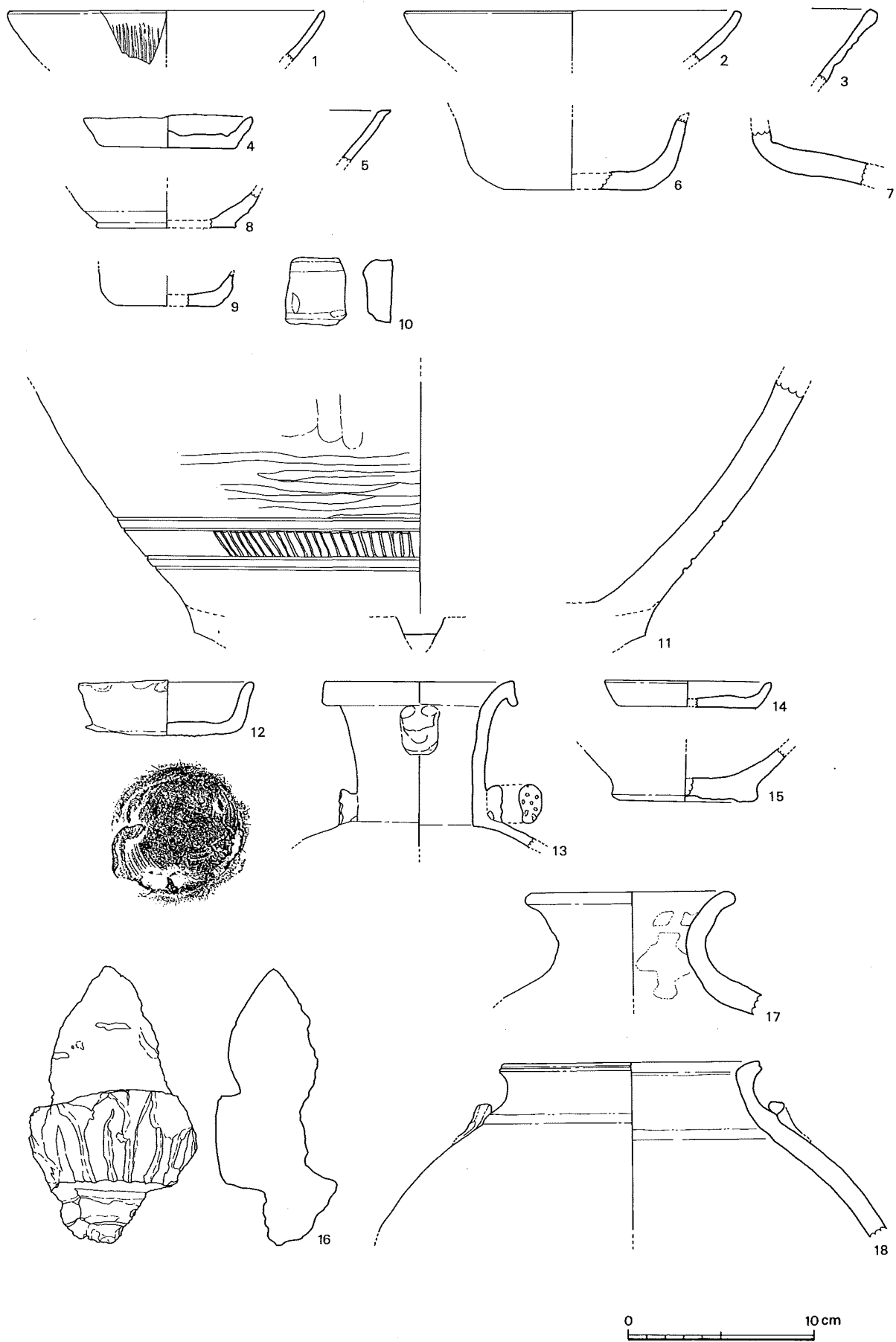
I-1区で、時期の求められる遺物は、糸切り底の土師器^{註10}が2・3・4・6・7・8・10で13世紀代がある。それ以前の資料として、11の白磁椀^{註11}類(11世紀中葉~12世紀初頭)の玉縁口縁, 14の黒色土器Bがある。さらに7世紀前半代の須恵器^{註12}がこの地区でもっとも古い遺物である。

I-2区は、柱穴内の遺物の上限は7の須恵器が8世紀代にあり、5の白磁椀VIII類や6の土師器の杯でヘラ切りの板目が底部についた12世紀代を中心に13世紀代までの遺物と考えられる。11の火鉢が



第16図 I-1区遺構出土

黒丸遺跡 I



第17図 I-2区遺構出土

15世紀代とある。

I—3区は、11世紀中葉から12世紀初頭を中心とする白磁と13世紀から14世紀代の糸切り底の土師器と同安・竜泉窯の青磁が出土している。

I—4区は、12世紀から13世紀代の遺物と14世紀から15世紀代の石鍋類^{註13}とがそれぞれ柱穴の時期を示している。

I—5区は、柱穴が極端に減少し、3層の出土遺物と溝3号の遺物が主体となる。3層の出土遺物は、白磁、石鍋、竜泉窯系青磁の出土があり、石鍋の形式から15世紀前半が下限と考えられる。また溝3号は、石鍋C—1類13世紀後半から14世紀初頭の出土があり、溝3号の機能した時期が13世紀代から15世紀前半であったろうと考えられる。

I—6区は、溝4号から土師器甕の口縁部片が出土している外は、柱穴からの出土がない。

I—7区は、朝鮮系陶磁器類^{註14}が柱穴から出土している。外に、明代の染付碗類^{註15}の16世紀中葉の出土がある。

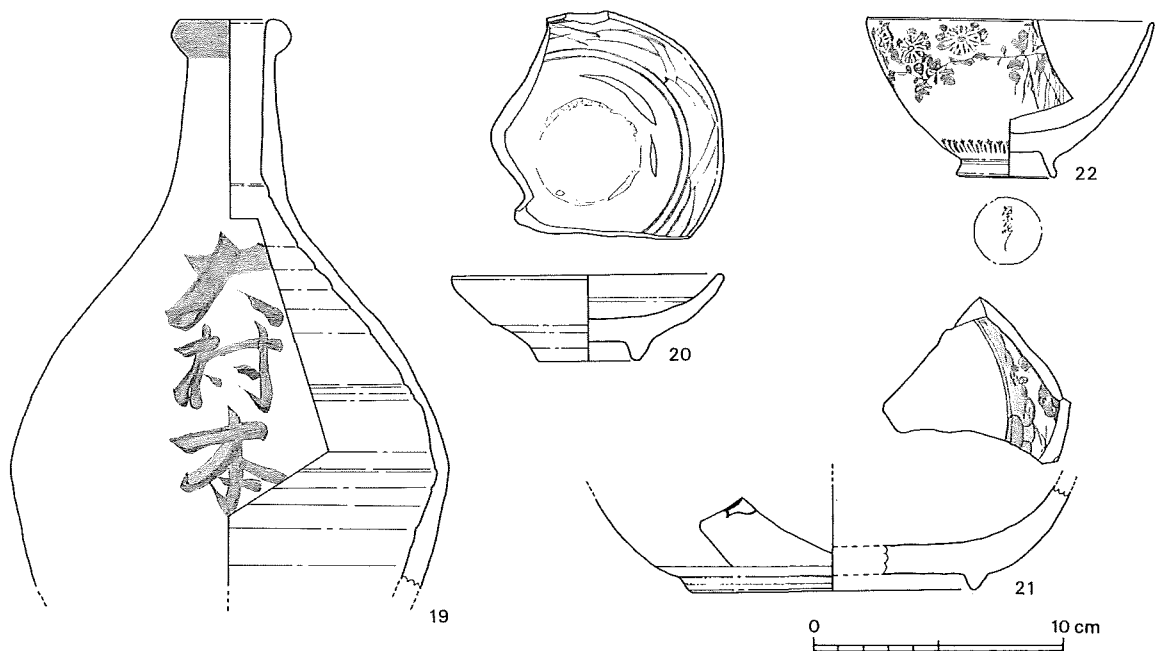
I—8区は、10の朝鮮系青磁、土師器の皿等が15世紀代の遺物としてある。

I—9区は、明代の染付皿2・3の15世紀後半から16世紀にかけての遺物が出土した外に土錘が出土している。

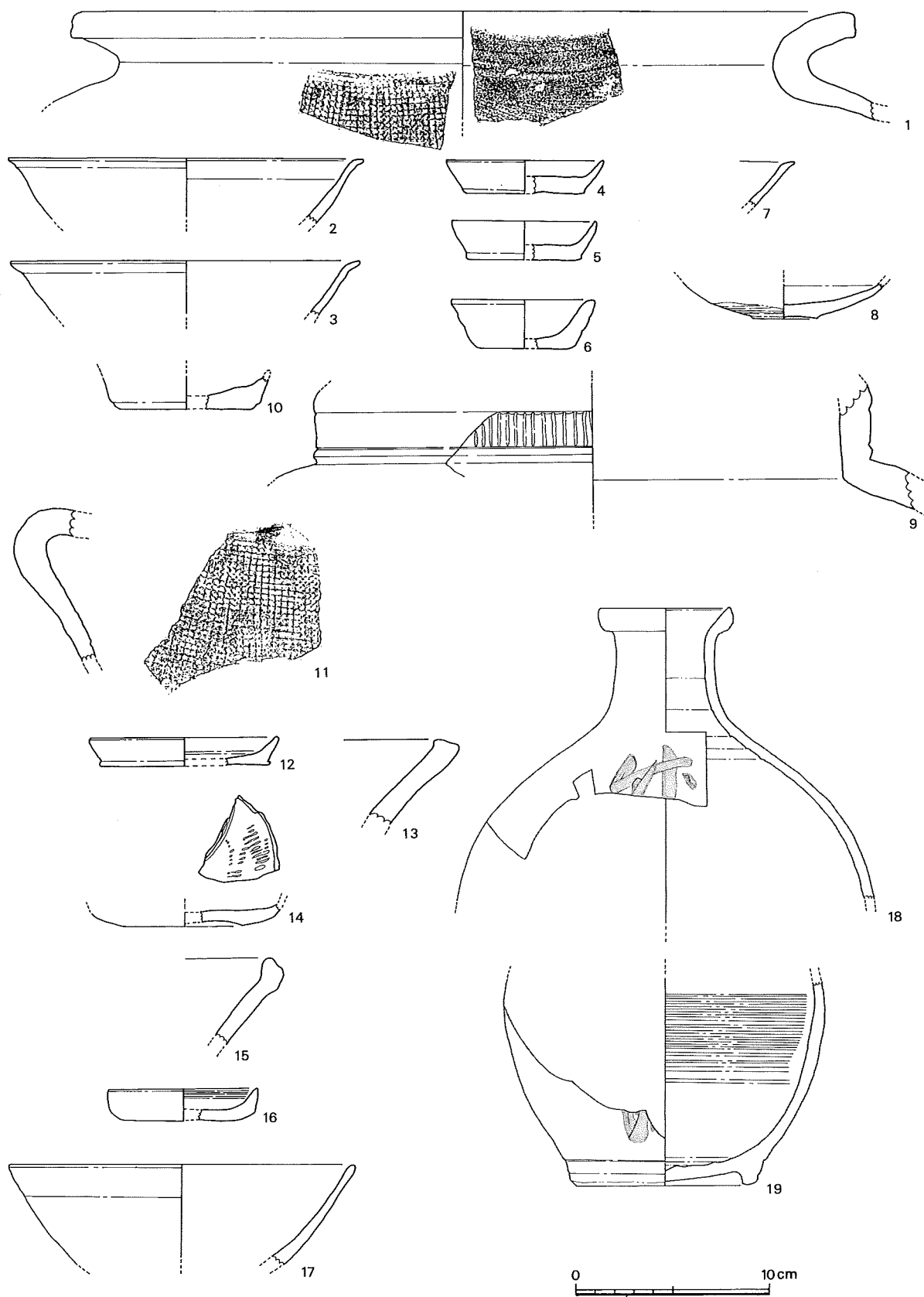
I—10区は、2・5の明代の染付碗C群V類、皿B1群VII—3類（15世紀後半から16世紀）の外は4の瓦質の土器、3の陶器が出土。

I—11区は、6の瓦質土器、7の茶釜、8の滑石製石錘、9～13の土錘の出土がある。

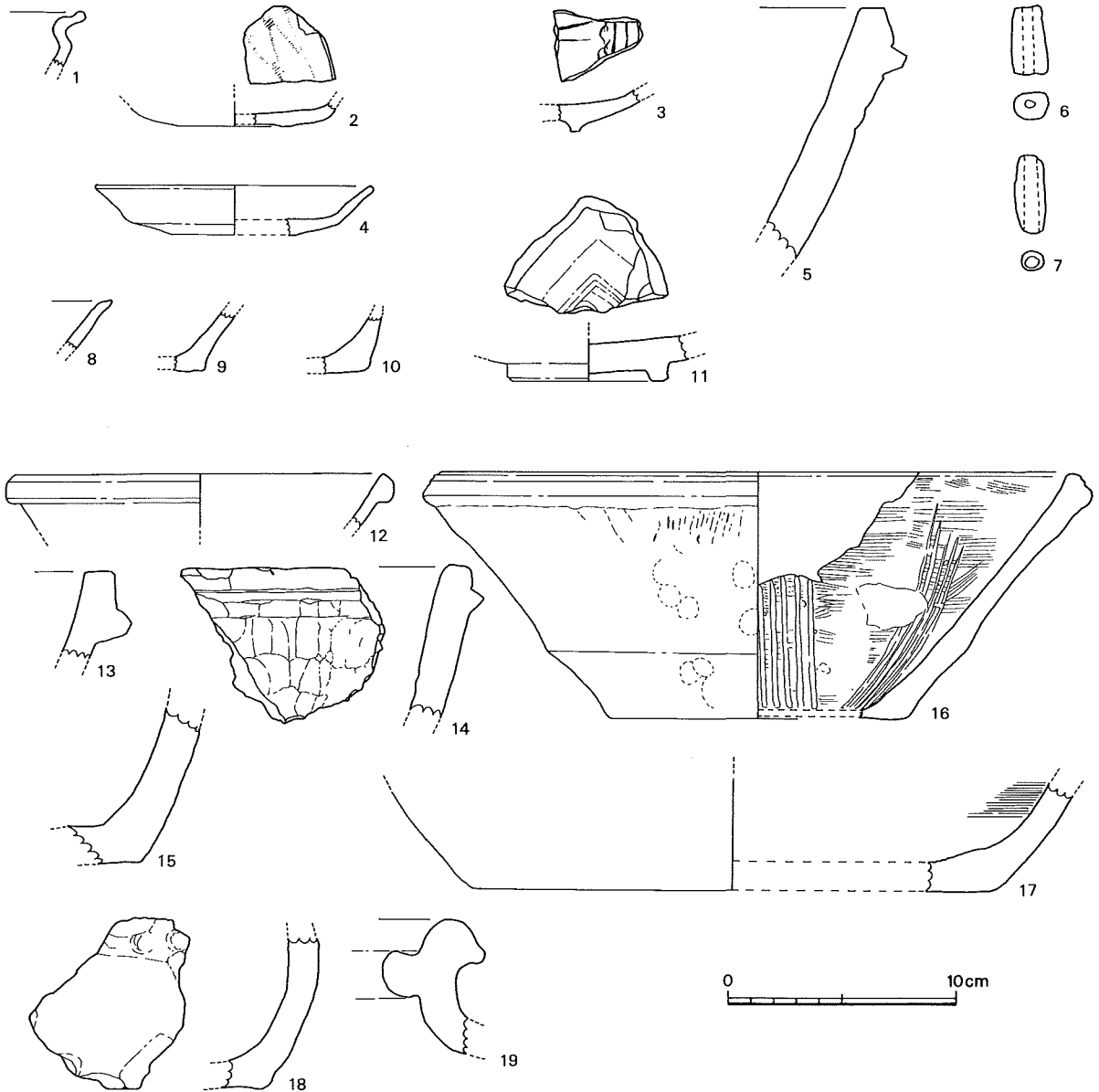
I—12区は、14の石鏃がある外に、土師器、白磁、石鍋片等があるが小片のため図化していない。



第18図 I—2区遺構出土②



第19図 I—3区遺構出土



第20図 I-4区遺構出土

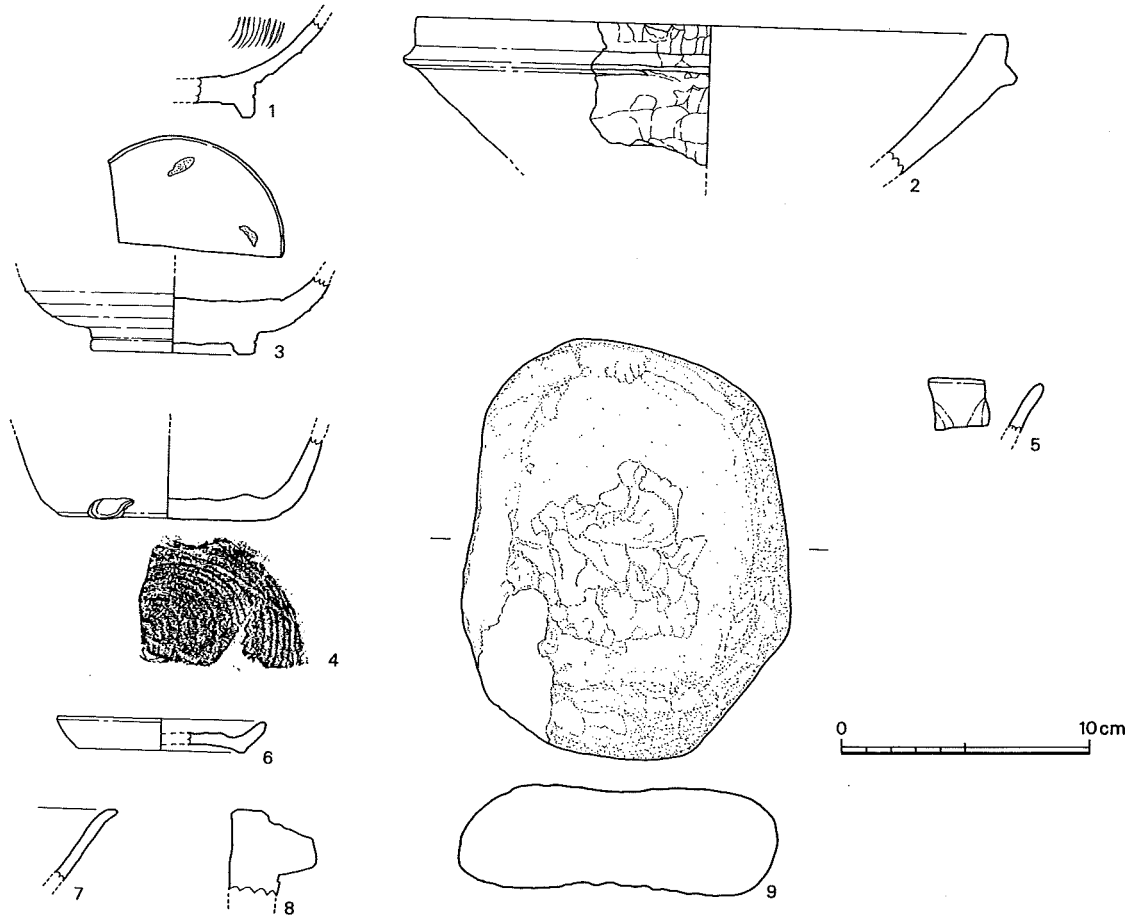
表7 挿図遺物の特色一覧①

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
16-1	KI-1Pit 1	ヘラ切り底の土師器。内外面ともに暗赤色を呈する内底の見込に段を有する。	12世紀
16-2	Pit 4	糸切り底の土師器杯。内外面をミズビキにより滑らかに整形する。色調は暗赤褐色。	13世紀中葉
16-3	Pit 4	糸切り底の土師器皿。左回りのロクロビキによる整形。糸切りの後底部ナデ消しあり。	13世紀中葉
16-4	Pit 7	糸切り底の土師器杯。ロクロミズビキによる整形。色調は内外面ともに淡赤色。	13世紀後葉 ~14世紀
16-5	Pit 8	土錘。長さ4cm、内径5mmの孔。焼成良好で灰赤色を呈する。	
16-6	Pit17	糸切り底の土師器杯。底部からの立ち上がり丸味を持ち、胴部で外反し口縁部へ延びる。色調は淡黄赤色。	13世紀後葉 ~14世紀

表8 挿図遺物の特色一覧②

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
16-7	KI-1Pit15	糸切り底の土師器杯。16-6と色調、整形ともに似る。	13世紀後半 ~14世紀
16-8	Pit17	糸切り底の土師器杯。器面が風化し整形痕不明。口縁部屈曲させる。色調は淡黄赤色。	13世紀後半 ~14世紀
16-9	Pit18	東播系鉢。色調は暗灰色を呈する。外面に櫛描の跡が残る。	12世紀後半 ~末
16-10	Pit24	糸切り底の土師器。暗赤褐色を内外面ともに呈する保存状態良好。口縁部は外反する。	13世紀後半 ~14世紀
16-11	Pit23	白磁碗IV類。釉薬はやや飴色がかった透明釉が掛かる。口縁部を玉縁としている。	11世紀中葉 ~12世紀
16-12	溝1号	須恵器。器形は頸部から大きく外反し、口縁端に厚みを持たせ丸味を持って下方へ延びる。胎土良好で内面に同心円の叩き整形。外面は自然釉が掛かり灰黄色を呈する。胎土は小豆色を呈する。輸入品と考えられる。	7世紀後半

黒丸遺跡 I



第21図 I-5区遺構出土

表9 挿図遺物の特色一覧③

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
16-13	KI-1 溝1号	東播系鉢の底部。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。	
16-14	溝1号	緻密な粘土を用いて内外面を燻焼にして炭素を吸着させ黒色とする。高台を有する黒色土器B。	11世紀後半 ~12世紀
16-15	土壇8号	白磁碗Ⅷ類。内底見込みの釉を輪状にカキ取ったもの比較的高い高台を有し、高台及び体部1/3程度は釉がかかっていない。	11世紀~ 12世紀初頭
16-16	土壇8号	滑石製石鍋。小片のため器形全体については推定でしかないが、鋳付きのタイプで鋳の部分より上方に向かって内湾させている。	11世紀後半 ~13世紀
16-17	集石1号	象嵌青磁Ⅳ期。灰青色の釉が掛かり目跡が内底見込みに3箇所認められる。白土で象嵌しているが文様については不明。	14世紀代
16-18	集石1号	陶磁器碗。高台置付けの釉が一部掛かっていないが内外面ともに白色の釉を掛け貫入が入る。	
16-19	集石1号	陶磁器皿。蛇目割りの内底見込みを有し、高台置付け及び内部は無釉としている。波佐見焼の特色	18世紀中葉
16-20	土壇4	三足の脚を有し、赤褐色の胎土にワラ灰釉を掛けた植木鉢（花盆）である。	現代
17-1	KI-2 II層	同安窯系青磁。釉は黄色味のある釉が掛かり、体部の外面に櫛状の施文具で片彫り風の沈線を入れる。	13世紀中葉 ~14世紀

表10 挿図遺物の特色一覧④

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
17-2	KI-2 pit 3	土師器。器面風化のため整形状況不明瞭。口縁部端を平坦にす。	
17-3	pit 4	瓦質の鉢。口縁部部に厚みを持つ。内外面は明灰色を呈する。	
17-4	pit 5	ヘラナデ整形の底部を有する土師器皿。底部から口縁部へやや内湾ぎみに移行。器壁に厚みを持つ。	12世紀
17-5	pit 6	白磁碗Ⅷ類。灰白色に呈する色調。釉は薄く掛けられている。口縁部端を平坦に整形する。	11世紀中葉 ~12世紀初頭
17-6	pit12	土師器杯。糸切り底で板目整形を行なう。色調は明黄赤色。	12世紀中葉
17-7	pit14	須恵器。胎土は精製された粘土を使用。外面にヘラ様のものにて記号が入る。壺形の器形をなし、頸部から肩部にかけてのものである。	8世紀後半
17-8	pit 5	糸切り底の土師器皿。胎土は精製した粘土を用いる底部から体部に一端段をなし丸味を持って立ち上がる。淡黄赤色を呈する。	13世紀後半 ~14世紀
17-9	pit14	ヘラ切りで板目が底につく。土師器皿。色調は内外黒色を呈する。	
17-10	pit15	石鍋片。方形の耳を有するタイプの石鍋を切り取り加工を施している。よって11世紀以降の転用。	10世紀 ~11世紀

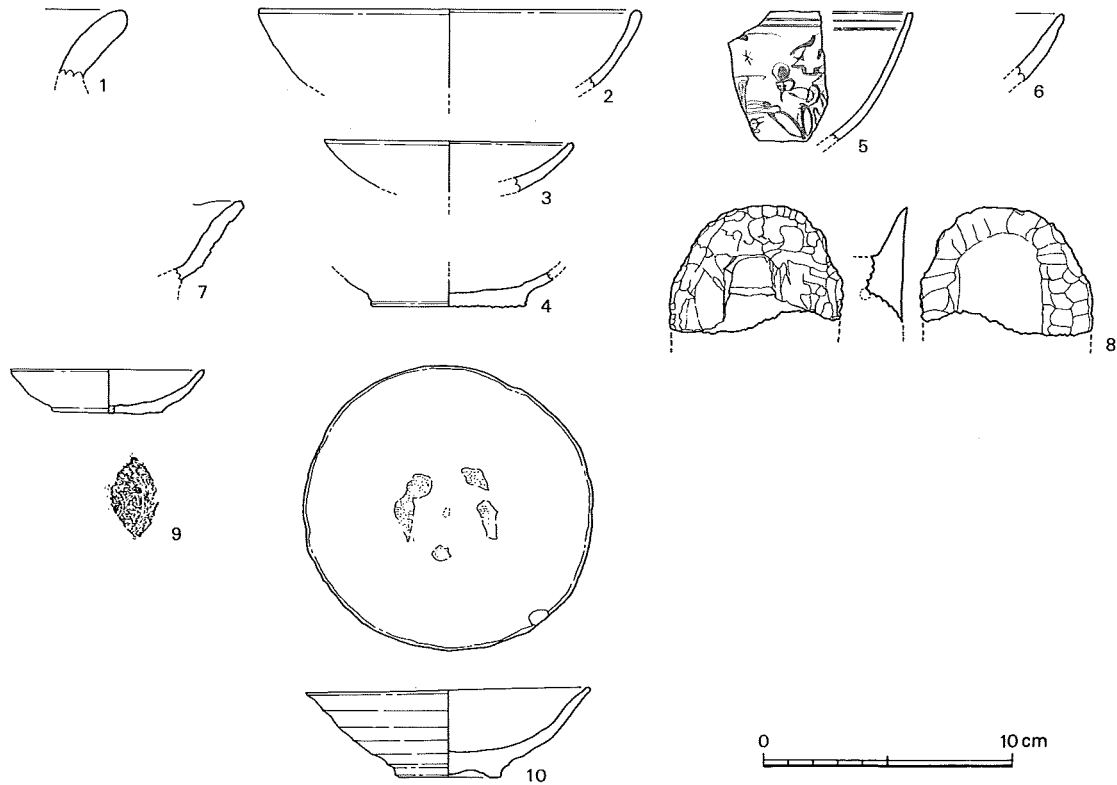
表11 挿図遺物の特色一覧⑤

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
17-11	K I - 2 pit14	器面は滑らかな整形ミガキをかけ脚が付く。体部下方に棒状工具で縦位に沈線を1.8cm、幅が0.5cm間隔で区画し上下に横位の沈線を引く。色調は暗赤色を呈する。火鉢。	15世紀代
17-12	pit22	糸切り底の土師器。底部から体部で丸味を持って立ち上がり口縁部でやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。色調は赤味を帯びる。	13世紀前半～
17-13	pit25	水注。灰青色を呈し取手が付く。口縁部を折り返し2箇所に飾りを付す。釉は全面に掛かる。	12世紀中葉
17-14	pit26	糸切り底の土師器。淡赤色を呈する。口縁端部に丸味を持つ。	13世紀中葉～後半
17-15	pit33	白磁椀類。灰白色を呈し高台を低く作る。	11世紀中葉～12世紀初頭
17-16	土壇1号	五輪塔。青温石製で風輪部分は連弁を彫り込む。空・風一体形のタイプ。	
17-17	土壇1号	陶器。茶褐色の釉が掛かる。昭和17年の一銭が出土しており、防空壕に非常用として持ち込まれた壺である。	昭和
17-18	土壇1号	陶器。茶褐色の釉が薄く掛かった甕で17-17と同時代の資料である。	昭和
18-19	土壇1号	陶磁器。白地に青呉須で酒屋の屋号「大村本口」と記載されている。	昭和
18-20	井戸1号	陶磁器。見込みを蛇目剥ぎし重ね焼きした畳付けの砂目が残る。また高台畳付けにも砂目跡が残る。	17世紀
18-21	井戸1号	陶磁器。高台畳付けに砂目跡がある。	17世紀
18-22	井戸1号	花の文様を入れた磁器椀。高台内に銘があるが判読不明。	明治以降
19-1	K I - 3 II層	須恵器。頸部から口縁部へ外反し、端部四角形の断面となる。外面は格子の叩きで整形。灰色を呈する。	8世紀中葉
19-2	pit 1	白磁椀Ⅷ類。薄く釉葉が全面に掛かり、にぶい灰白色を呈する。	11世紀中葉～12世紀初頭
19-3	pit41	白磁椀類。口縁部で屈曲する。色調は黄灰色を呈し南方系の磁器と思われる。	11世紀中葉～12世紀初頭
19-4	石列1号	糸切り底の土師器Ⅲ。底部の端に稜をなし湾曲し立ち上がる。口縁端部は尖りぎみとなる。	13世紀
19-5	石列1号	糸切り底の土師器Ⅲ。底部の端に稜を有し湾曲して立ち上がる。19-4と同時代の資料である。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。	13世紀
19-6	石列1号	糸切り底の土師器Ⅲ。底部の端から丸味をもって立ち上がり口縁部へ延びる。器壁に厚味をもつ。	13世紀
19-7	石列1号	白磁椀。口縁端部を平坦に作出する。色調は灰白色を呈する。	11世紀中葉～12世紀初頭
19-8	石列1号	白磁Ⅲ。内面見込みに黄色味を帯びた釉がかかる。低い平高台を有し、底部から体部中位にかけては無釉としている。	11世紀中葉～12世紀初頭
19-9	石列1号	17-11と同質の資料。火鉢。	
19-10	pit14	糸切り底の土師器Ⅲ。底部から丸味をもち厚みがある。淡い赤味を帯びる。	13世紀
19-11	pit16	須恵器の甕。19-1と接合。	

表12 挿図遺物の特色一覧⑥

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
19-12	K I - 3 pit16	糸切り底の土師器Ⅲ。底部の端に稜を有し、湾曲して立ち上がる。色調は暗赤褐色を呈する。	13世紀
19-13	pit16	摺鉢。内面に従位の沈線を有する。胎土は精製された粘土を使用し、色調は灰黄色を呈する。	
19-14	pit16	同安窯系青磁Ⅰ類。底部が凹み無釉としている。釉葉は胎色状を呈した黄色味となる。	13世紀～14世紀
19-15	pit25	東播磨系の鉢。灰白色を呈した胎土の質が悪い資料である。口縁部は湾曲する。	
19-16	pit32	糸切り底の土師器Ⅲ。底部から丸味をもって直立ぎみに立ち上がる。口縁端部が尖りぎみである。	13世紀
19-17	pit37	龍泉窯系青磁小椀Ⅰ類。灰青色を呈する。	12世紀葉～13世紀初頭
19-18	集石2号	近世陶磁器。波佐見焼	
19-19	集石2号	近世陶磁器。高台は無釉としている。	
20-1	K I - 4 4層	精製研磨土器。色調は明茶黄色。	縄文晩期
20-2	2層	同安窯系青磁Ⅰ類。	12世紀中葉～13世紀初頭
20-3	2層	輸入陶磁器。粗い胎土を持ち内面に青呉須で文様を付し、外面の高台は無釉とするがそれ以外はライトグリーンを呈する。	
20-4	2層	胎色の釉葉が掛かり、体部で屈曲する。同安窯系青磁Ⅲ。	12世紀中葉～13世紀初頭
20-5	2層	石鍋。質の悪い滑石を利用している。罫は、断面台形状ではあるが幅が狭い。	14世紀後半～15世紀前半
20-6	4層	土鉢。内径3mmの孔。赤褐色を呈する。	
20-7	2層	土鉢。内径4mm。赤褐色を呈する。	
20-8	土壇4号	白磁椀Ⅷ類。	11世紀中葉～12世紀初頭
20-9	土壇4号	糸切り底の土師器Ⅲ。底部の端に稜を持って立ち上がる。色調は暗赤褐色を呈する。	
20-10	土壇4号	糸切り底の土師器Ⅲ。底部と体部の境にヘラ状工具による切り込みが入る。	
20-11	土壇2号	龍泉窯系Ⅰ類。断面四角形の高台を作り、畳付け及び高台内は無釉内面見込みにスタンプの文様を有する。色調は黄色味の強い緑色を呈する。	12世紀中葉～14世紀中葉
20-12	溝4号	玉縁を有する白磁Ⅳ類。Ⅱ・Ⅲ類に比較して玉縁が大きい。灰白色を呈する。	11世紀中葉～12世紀初頭
20-13	溝3号	石鍋C-2類。	14世紀後半～15世紀前半
20-14	溝3号	石鍋C-2類。罫は断面三角形を呈する。	14世紀後半～15世紀前半
20-15	溝3号	石鍋C-2類の底部片。	14世紀後半～15世紀前半
4-16 20-16	溝3号	瓦質の摺鉢。櫛状工具で内面を整形し内底から口縁部へ5本を単位の摺目を立てる。色調は内面灰色で外面は淡赤褐色を呈する。	
20-17	溝3号	瓦質の鉢。内面クロロ引きの跡が残る、外底面は櫛状工具で整形を行なう。	
20-18	溝3号	瓦質の火鉢。外面に連珠文が付く。外面は淡桃色、内面は灰色を呈する。	

黒丸遺跡 I



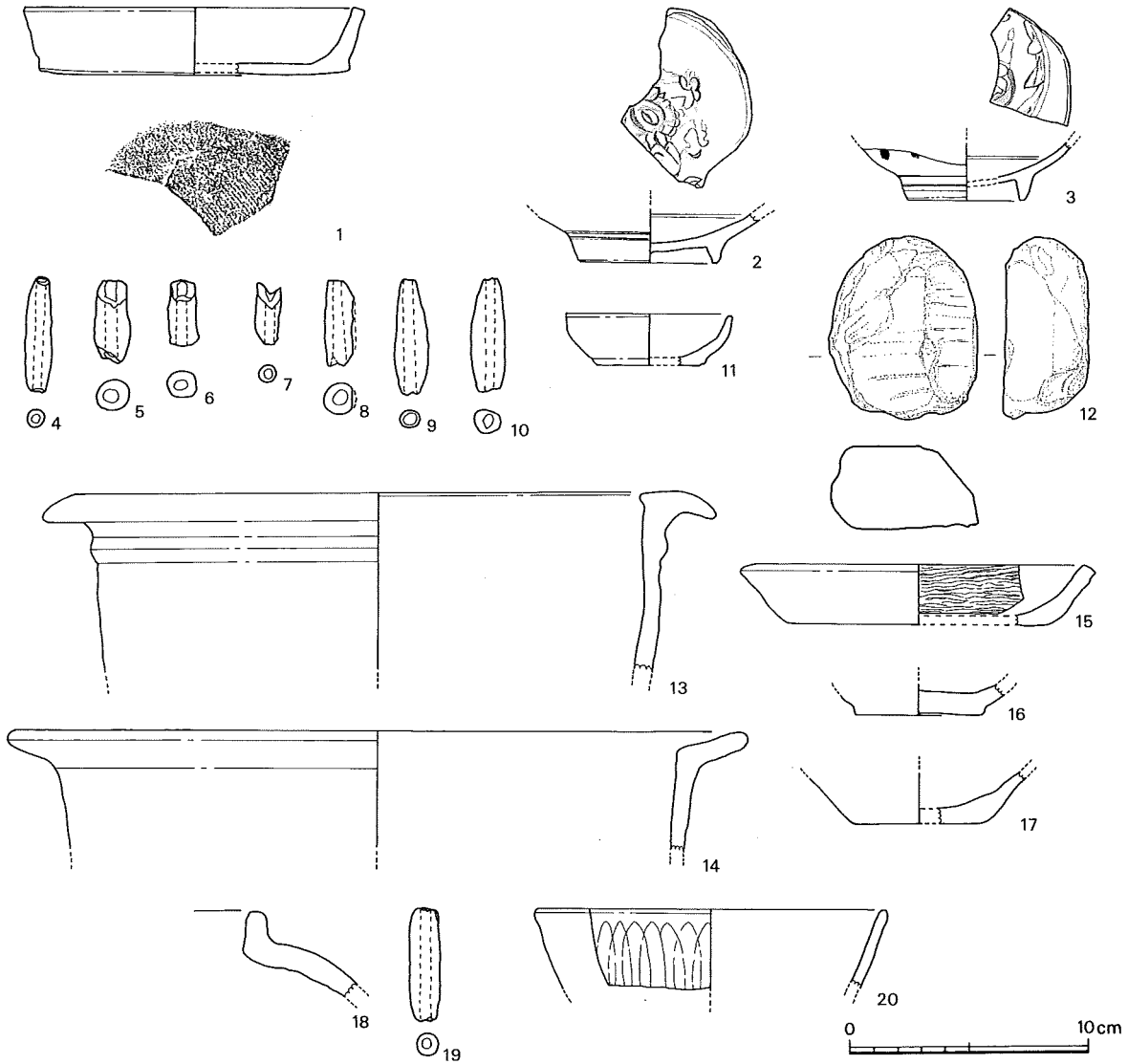
第22図 I-6・7・8区遺構出土

表13 挿図遺物の特色一覧⑦

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
20-19	K I-4 溝3号	褐釉陶器の甕で輸入品。灰緑色の釉薬がかかる。口縁部がY字に作られている。	13世紀後半 ~14世紀前半
21-1	K I-5 3 b層	白磁椀類。櫛目文あり。高台無釉で内外面灰白色。	11世紀中葉 ~12世紀初頭
21-1	3 b層	石鍋C-2類	14世紀後半 ~15世紀前半
21-3	3 c層	龍泉窯系青磁。低い高台で断面を四角形に作りだす軸は緑灰色を呈する。高台及び置付けは無釉。	
21-4	3層	糸切り底の土師器杯。底部から体部の境に段がつき丸味を持って立ち上がる。	
21-5	土壌2号	龍泉窯系青磁片I類。竊連弁の一端が残る。	13世紀中葉
21-6	溝3号	糸切り底の土師器の皿。底部の端に稜がつき口縁部に丸味を持つ。	
21-7	溝3号	白磁椀類。口縁部で屈曲する。	
21-8	溝3号	石鍋C-1類。比較的厚みのある断面を有しているが、上部に加工痕が認められ転用途中の資料とみられる。	13世紀後半 ~14世紀初頭
21-9	溝3号	凹石。表裏面に敲打の跡が残る。	
22-1	K I-6 溝4号	土師器の甕の口縁部片。胎土粗く長石が混入している。端部は丸くおさめる。	7世紀代
22-2	K I-7・pit10	青磁椀。口縁端部を丸くおさめる。	15世紀代
22-3	pit11	陶磁器皿。白色の化粧土を掛ける。	
22-4	土壌3号	糸切り底の土師器。底部の端に稜をなす。	
22-5	pit12	染付椀E群VIII類。人物風景を胴部に描く。	16世紀中葉

表14 挿図遺物の特色一覧⑧

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
22-6	K I-7 pit14	朝鮮系青磁。胎土は暗灰色を呈し釉の色調は緑灰色。	
22-7	pit 9	朝鮮系青磁皿。淡緑灰色を呈し胎土は、粗い灰色を呈する。	
22-8	土壌5号	滑石製品。つまみを有し楕円形状を呈すると思われる。表裏ともに細かい削り込みで加工を施す。	
22-9	3 b層	糸切り底の皿。灯明皿に使用したものか口縁部の端部に煤附着。底部の端に稜を有する。	
22-10	K I-8 pit 1	朝鮮系陶磁器。内底見込み及び高台に胎土目を付す色調は灰緑色に黒斑が入る。見込みが緩やかに盛り上がる。	
23-1	K I-9 2層	瓦質の杯底部を平坦にし刷目整形をなしている。底部から丸味を持って体部で屈曲し外方向へ立ち上がる。口縁端部は平坦とする。	14世紀中葉 ~15世紀中葉
23-2	2層	明代染付椀C群V類。見込みに花卉文を描く。内底見込みが高台に凹む。	15世紀後半 ~16世紀後半
23-3	2層	明代染付椀C群V類。見込みに染付文様を有する。	
23-4	2層	土鍾。内径4mmの孔、長さが4.5cm	
23-5	2層	土鍾。内径5mmの孔、欠損	
23-6	2層	土鍾。内径4mmの孔、欠損	
23-7	2層	土鍾。内径3mmの孔、欠損	
23-8	2層	土鍾。内径3mmの孔、欠損	
23-9	2層	土鍾。内径4mmの孔、長さ4.5cm	



第23図 I-9区遺構出土

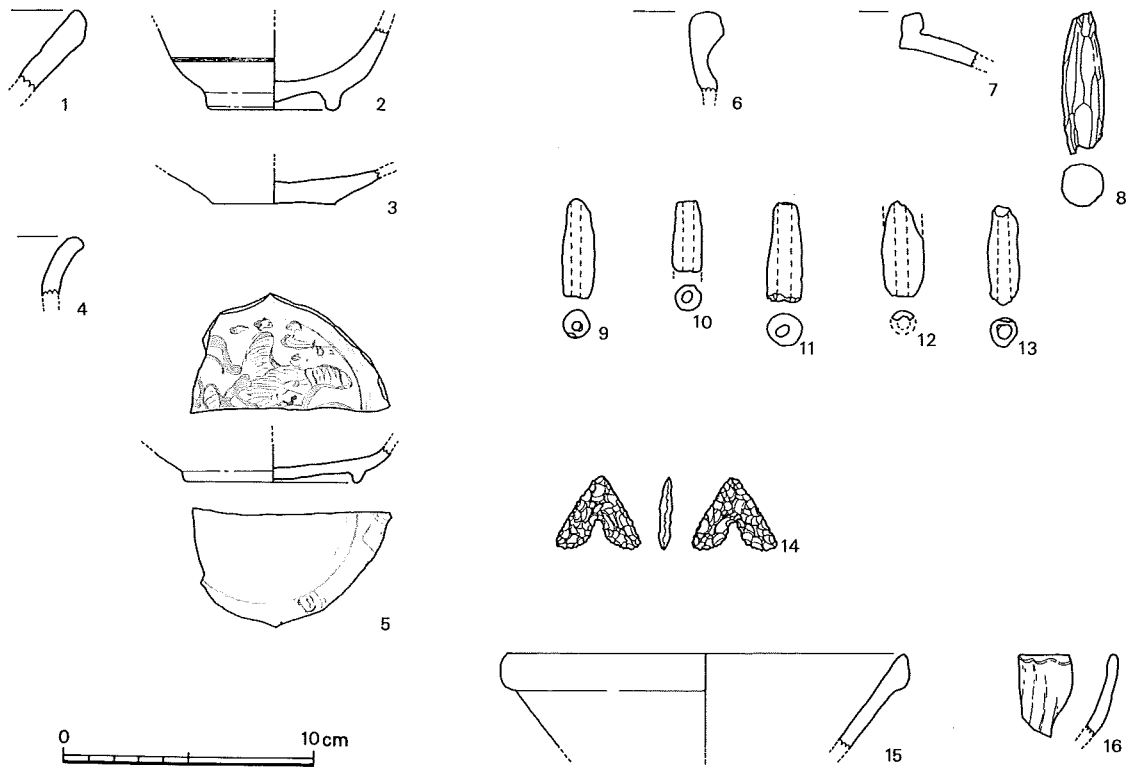
表15 挿図遺物の特色一覧⑨

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
23-10	KI-9・2層	土錘。内径4mmの孔、長さ4.4cm	
23-11	pit 2	糸切り底の土師器皿。底部の端に稜を有し内湾しつつ立ち上がる。	
23-12	II層	砥石。砂岩を3面使用する。	
23-13	溝2号	甕形土器口縁部がやや垂下し、凸帯が一条入る。胴部下は刷毛目整形。	弥生中期後半
23-14	溝2号	甕形土器。口縁部が上方へ延び口縁中央部がやや凹む。胴部はほぼ直に移行する。	弥生後期前半
23-15	溝2号	瓦質土器。杯V類。口縁部平坦に製作し、内面を暗灰色。外面は灰赤褐色を呈する。	14世紀中葉 ~15世紀中葉
23-16	溝2号	土師器皿。糸切り底の底端部に稜を有する。	
23-17	溝2号	土師器皿。風化のため底部の糸切り不明。	
23-18	溝2号	瓦質の茶釜。外面暗灰色、内面は黄灰色を呈する。口縁部に櫛描の細い沈線入る。	

表16 挿図遺物の特色一覧⑩

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
23-19	KI-9溝2号	土錘。内径4mmの孔、長さ4.3cm	
23-20	溝1号	龍泉窯系青磁。灰青色を呈し、連弁の幅の小さい切り込みを入れる。	15世紀後半
24-1	KI-10 3層	東播系の鉢。灰色を呈し、堅牢である。	
24-2	2層	明代染付椀C群V類。淡青色で体部に圈線を描く。	15世紀後半 ~16世紀後半
24-3	pit 3	陶器皿。内面見込みに灰黄色の釉が掛かる。底部は平底である。外面の体部下及び底部ともに無釉。	
24-4	pit 5	瓦質土器。口縁部が外反する。口縁端部は、丸くおさめる。色調は暗灰色。	
24-5	pit 6	明代染付皿。B1群IV-3。高台は斜めに面取りし砂敷き焼成。見込みは玉取獅子を描く。	15世紀後半 ~16世紀後半
24-6	KI-11 2層	軟質の瓦質土器。口縁部に厚みを有し、口縁から屈曲する。	

黒丸遺跡 I



第24図 I-10・11・12・13区遺構出土 (14は1/2)

表17 挿図遺物の特色一覧①

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
24-7	K I-11 2層	瓦質土器の茶釜。頸部から直に立ち上がる。 口縁端部が平坦となる。	
24-8	2層	滑石製石錘。両端部を欠くが、加工は削り込 んで中央部が膨らむ形状を作出している。	
24-9	2層	土錘。内径4mmの孔、長さ3.7cm。	
24-10	2層	土錘。内径4mmの孔、欠損。	
24-11	2層	土錘。内径4mmの孔、欠損。	

表18 挿図遺物の特色一覧②

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
24-12	K I-11 2層	土錘。半欠損。	
24-13	2層	土錘。内径4mmの孔、欠損。	
24-14	K I-12 倒木痕	石鏃。ハリ質安山岩。表裏面ともに側縁から 細かなリタッチ調整を施す。長さ2cm、幅 2.2cm。	縄文
24-15	K I-13 3層	玉縁の口縁をなす。白磁IV類。	11世紀中葉 ~12世紀初頭
24-16	2層	青磁B類-IV [*] 剣頭が蓮弁としての単位を意 識しないで施される。	16世紀前半

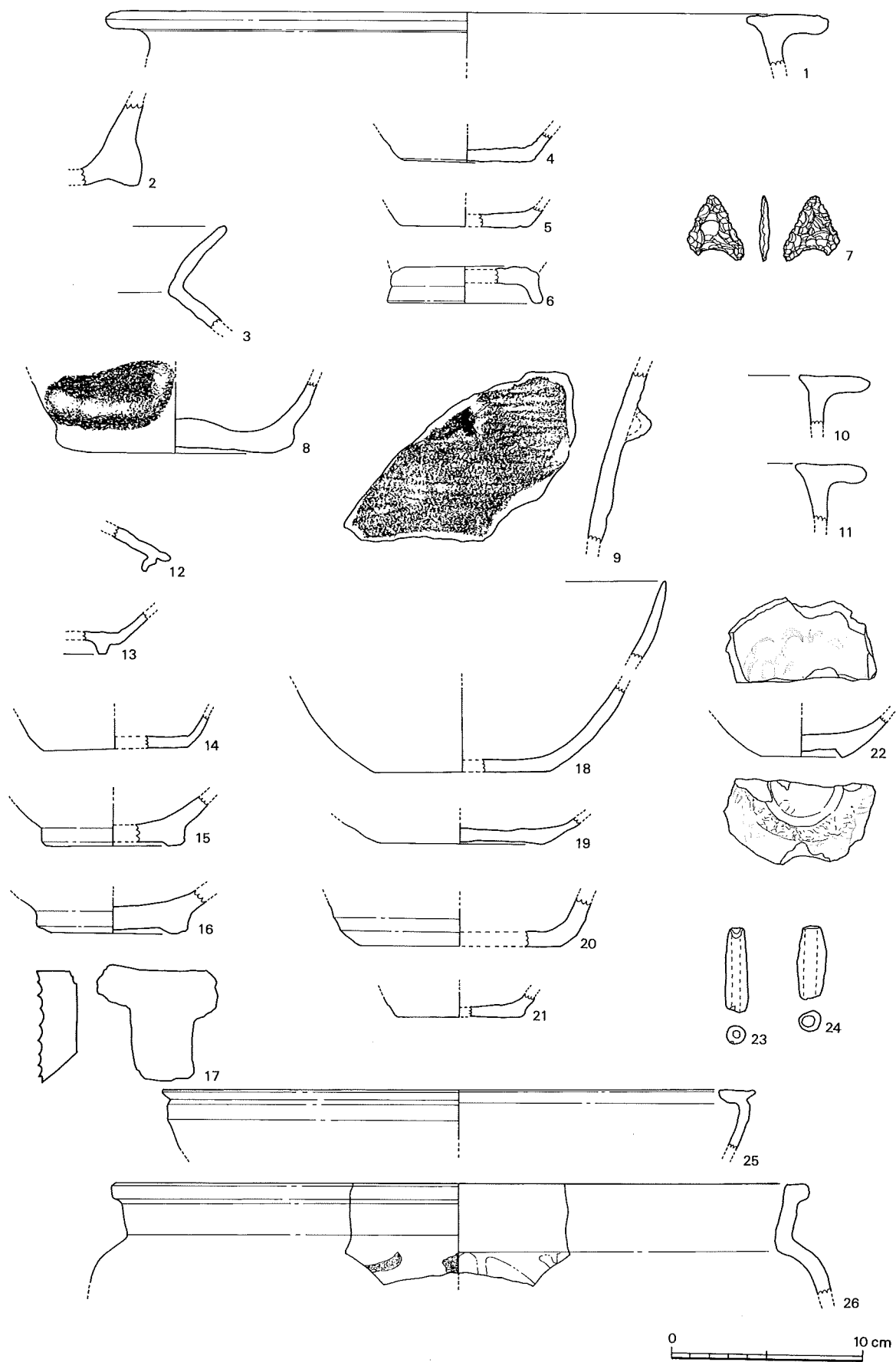
I-13区は、15の玉縁口縁の白磁、16の青磁碗類が出土している。

II区の遺物は、縄文時代から近世の遺物について取り上げている。

II-1区の1・2は、弥生時代の甕形土器^{註17}の口縁部、底部や7の石鏃がある。3は土師器の甕形土器で4世紀代の遺物である。4・5・6は奈良時代から平安時代にかけての遺物である。

II-2区の8・9は、縄文時代中期と縄文時代晩期の土器である。10・11は弥生時代中期の甕形土器。12・13は須恵器。14は白磁。15・16は白磁碗類。17は石鍋の耳の部分。18は黒色土器A類の9世紀代。19はヘラ切の杯。20・21は糸切り底の土師器杯と皿類。22は明代の染付皿C群-1類で15世紀後半の遺物である。23・24は土錘、25は褐釉陶器。26は唐津系陶器である。

II-3区は、1~3の縄文時代晩期の土器の外に4~7の石器類がある。8は弥生時代中期の壺形



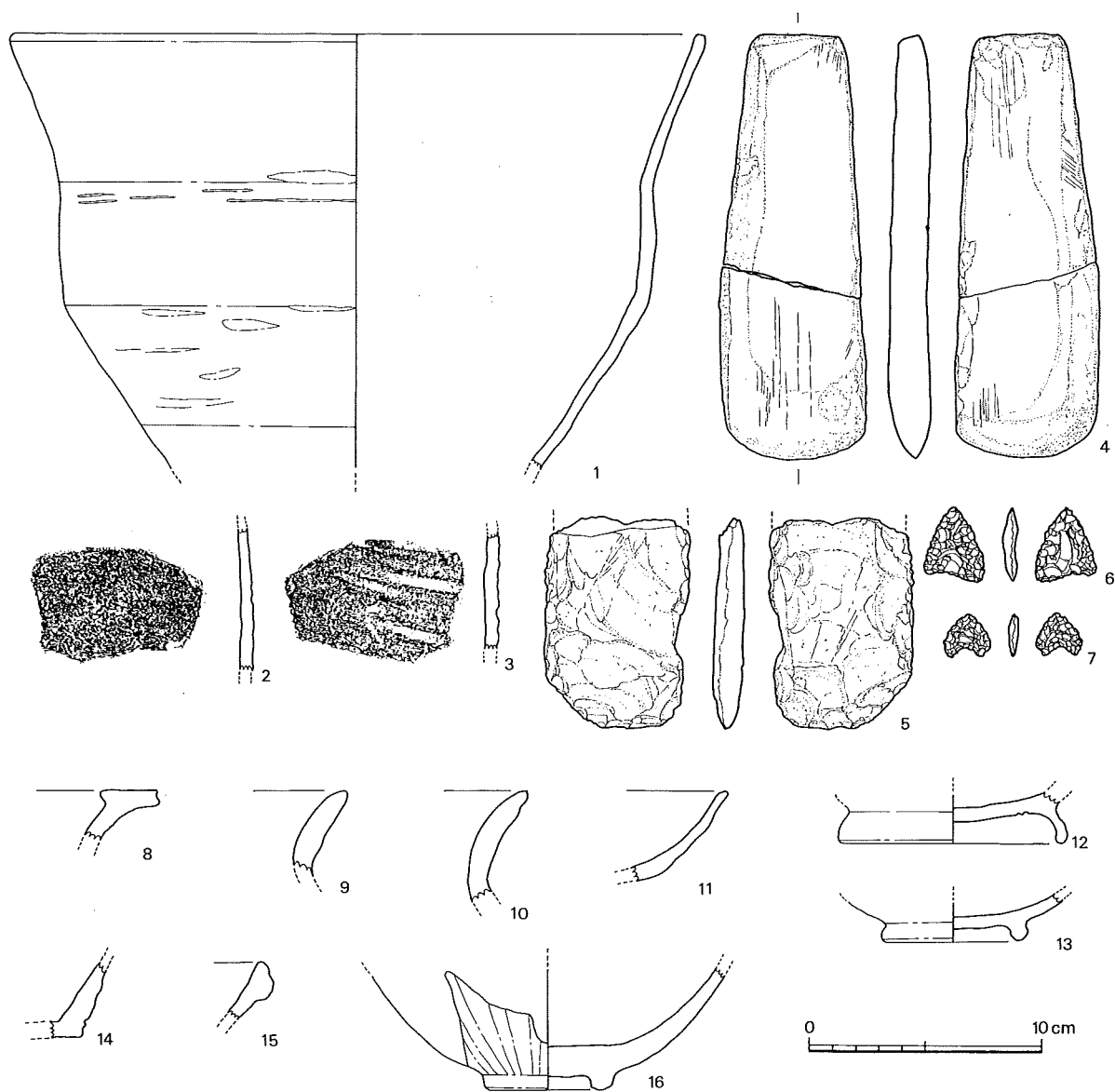
第25図 II-1・2区出土 (7は1/2)

黒丸遺跡 I

土器。9・10は古墳時代の遺物。11は土師器の杯。12・13は高台のある土師器碗C類。14は土師器杯。15は玉縁口縁の白磁。16は鎚連弁のある青磁。

II-4区は、縄文時代から古墳時代初頭の遺物がある。1は阿高系土器。2は円盤貼付の底部。3～6は縄文時代の石鏃，スクレイパー，凹石類である。7・8は弥生時代中期の土器。9・10は古墳時代初頭の遺物にあたり，11・12は弥生時代後期の壺形土器である。

II-5は，弥生時代中期の遺物を主体に掲載している。1～13はいずれも弥生時代中期中葉から後葉にかけての遺物である。14～28は弥生中期の甕形土器の底部で，27・28は黒髪系土器であろう。29は壺形土器の底部である。30～37は石器類で30は石鏃，31は磨製石斧。32～37は円礫を利用した叩石，石皿類である。38～47は古墳時代の遺物である。38～42は4世紀中葉から後半に所属する甕形土器の土師器。43～45は高杯で，5世紀前半と思われる。46は甕形土器の土師器。47は須恵器の甕類で7世



第26図 II-3区出土 (6・7は1/2)

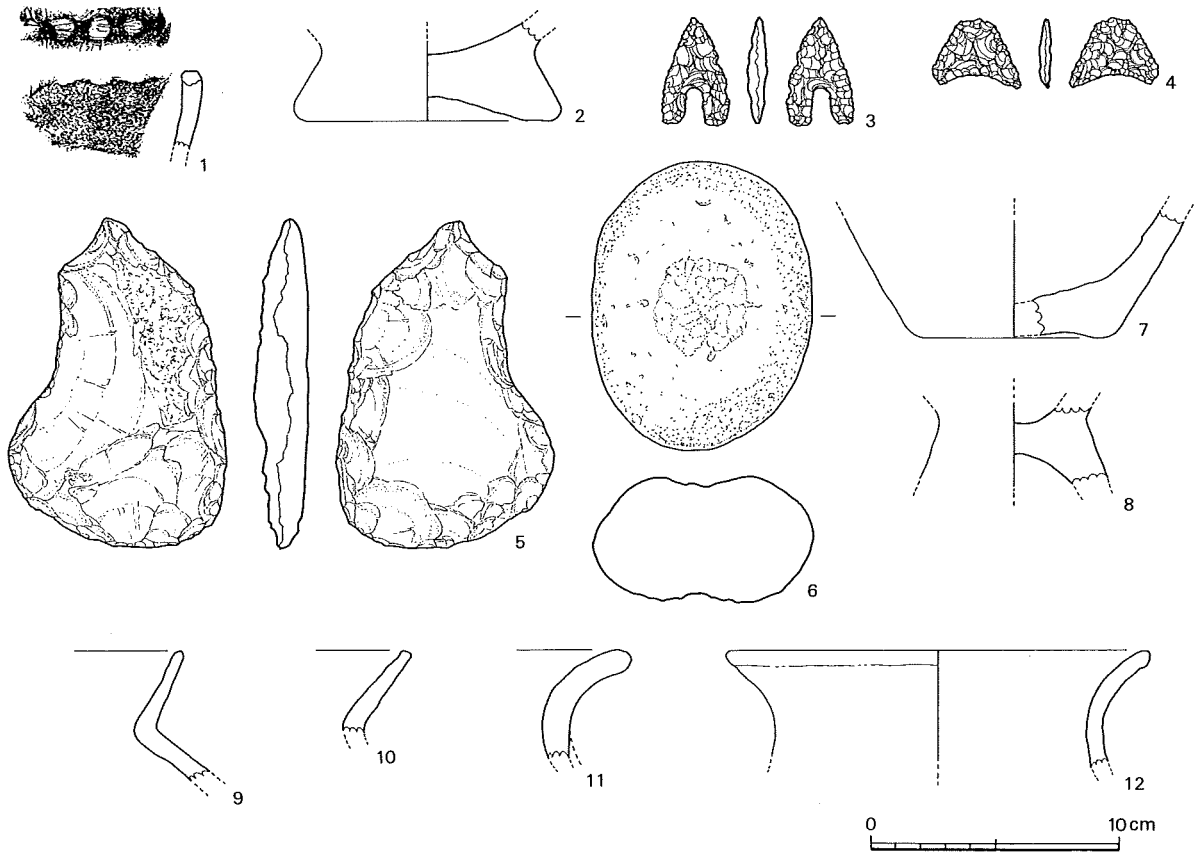
紀後半が考えられる。48・49は土師器の椀類で高台付である。

II-6 は、弥生時代の遺物に1～6があり、7は土師器の杯片である。8は土師器の椀で貼付高台を有し、11世紀中葉にあたる。

II-7 は、9・10・11いずれも弥生時代の遺物である。

II-8 は、弥生時代の土器に12・13・14・15・16・17があり、18は倒木の攪乱を受け埋没した近世陶磁器である。

II-9 は、19・20・21がある。19は円形のすり石。20は弥生中期の壺形土器。21は甕形土器である。



第27図 II-4区出土（3・4は1/2）

表19 挿図遺物の特色一覧⑬

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
25-1	K II-1区 3層	口縁部平坦で、端部がやや垂れぎみ。	弥生中期
25-2	3層	甕形土器底部片。上げ底ぎみである。	弥生
25-3	3層上面	土師器の甕形土器。口縁端部をつまみあげたよう作出する。外面ナデ整形。	4世紀代
25-4	2層	須恵器杯身。高台のない形態で、底部からの立ち上がりから開きぎみに伸びる。	8世紀後半 ～9世紀
25-5	2層	土師器の杯。ヘラ切り離しを行なっている。	
25-6	2層	土師器皿。底部の整形は風化のため不明。	

表20 挿図遺物の特色一覧⑭

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
25-7	2層	石鉄。表裏面ともに細かなリタッチ調整を施す。	縄文
25-8	K II-2区 4層a	滑石混入の阿高系土器。太形の凹線が底部から胴部の立ち上がりに認められる。	縄文中期
25-9	4層a	リボン状突起を付す。外面赤褐色内面は灰色を呈す。	縄文晩期II式
25-10	2層	口縁部を平坦になす甕形土器。	弥生中期
25-11	2層	口縁部がやや波をうつ形状の甕形土器。	弥生中期
25-12	2層	須恵器蓋。返りは、蓋の口縁端部よりも下方に伸びる。	7世紀後半

黒丸遺跡 I

表21 挿図遺物の特色一覧⑬

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
25-13	KII-2区 3層	須恵器杯身。高台のある杯。高台が直立に近く、接地面はほぼ平らである。	8世紀前半
25-14	2層	白磁皿Ⅸ類。濁った白色を呈する。	13世紀後半
25-15	2層	白磁碗Ⅳ類。高台は幅広く、削りだしが浅く底部の器肉が厚い。	11世紀中葉 ～12世紀初頭
25-16	2層	25-15と同様の資料。	
25-17	2層	石鍋A-2類。方形の耳を有する形態と思われる。	11世紀代
25-18	3層	黒色土器A。内面を黒色に磨きあげる。外面は茶黄色と黒色の斑となる。底部外面磨きをかけて平坦な底部をなす。	9世紀末
25-19	2層	へら切り皿の土師器。内外面ともに淡赤白色。	
25-20	2層	糸切り土師器。内外面ともにレンガ色を呈する。底部の立ち上がり丸みを持つ。	13世紀
25-21	2層	糸切り土師器。底部の端に稜をなす。	
25-22	2層	基筒底の明代の染付皿C群。外面が波濤文帯、見込みにねじ花を描く。	15世紀後半
25-23	2層	土錘。内径4mm、赤褐色を呈する。欠損。	
25-24	2層	土錘。内径5mm、長さ3.4cm。	
25-25	2層	褐釉陶器。口縁部に目跡が残る。オリーブ色を呈する。口縁部を外に折り返している。	13世紀後半
25-26	2層	唐津系甕。陶器	近世
26-1	KII-3区 4層a	深鉢形土器。胴部中位で屈曲し、さらに頸部で屈曲し口縁部が外方へ延びる。胎土に黒雲母、安山岩の粗い粒子が混入する。色調は灰黄色を呈する。	縄文晩期Ⅱ式
26-2	4層a	土器の外面に粗い条痕が残る。器壁は薄く4mm程。	縄文晩期
26-3	4層a	粗い条痕が残る胎土は結晶片岩を混入している。	縄文晩期
26-4	4層a	短冊形の磨製石斧。刃部と凸面のある表裏を研ぎだし正面右側部は、磨きかける左側縁は敲打で終えている。	
26-5	4層a	正面は剝落し、裏面に下部からの階段状剝離を行っている。	
26-6	4層a	石鏝。正面は細かいリタッチを施すが裏面は主要剝離を残している。	
26-7	2層	石鏝。小形の石鏝であるが細部にわたってリタッチを施す。	
26-8	3層b	壺形土器。口縁部片。	弥生中期
26-9	3層	土師器の甕形土器。口縁部が外反し口縁端部尖りぎみ。	6世紀 ～7世紀
26-10	3層	26-9と同一個体と思われる。	6世紀 ～7世紀
26-11	2層	土師器の杯。表面が風化し整形痕不明。	
26-12	2層	土師器の高台部位。脚部を内側に湾曲させ端部は丸くおさめる。	
26-13	2層	貼付高台の土師器。高台を低く作る。	
26-14	2層	糸切りをへらナデした底部の土師器。底部の端に稜を有する。	12世紀中葉

表22 挿図遺物の特色一覧⑭

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
26-15	KII-3区 2層	白磁碗Ⅳ類。玉縁の口縁部となす。	11世紀中葉 ～12世紀初頭
26-16	排土表採	青磁碗Ⅰ類。高台が断面四角形で高台部置付け及び内部は露胎である。青味を帯びた緑色を呈し、底部の器肉が厚い。	13世紀中葉
27-1	KII-4区 3層	中期阿高系土器。口唇部が凹凸をなす。	縄文中期
27-2	2層	円盤貼付の底部。底部が上げ底ぎみである。	縄文晩期
27-3	3層	脚の長い石鏝。表裏面ともに側縁から細かなリタッチ調整を施す。	縄文
27-4	3層a	石鏝。肉薄な剝片を利用して挟りが浅く、横に三日月形に拡がる脚をなしている。側縁部に細かいリタッチを加える。	
27-5	4層a	スクレイパー。表面は自然面残し、全周にわたって調整剝離を施す。裏面も同様の剝離を行う。主要剝離面は大きく残す。上端部に突き出した刃部を作出。	
27-6	3層	凹石。表裏面に凹部を有する。	
27-7	3層b	壺形土器。底部がやや上底ぎみである。色調は、淡黄赤色を呈し胎土が粗く石英粒2～3mmが多量に混入している。	弥生中期前半
27-8	3層b	甕形土器底部。小さな脚台付の底部。	弥生中期
27-9	3層	土師器甕形土器。口縁部が内湾ぎみに外方へ延び、端部平坦になる。	4世紀代
27-10	3層	土師器甕形土器。口縁部が内湾ぎみで端部を浅い凹みが巡る。	4世紀代
27-11	3層	口縁部が大きく外反する。壺形土器。	弥生後期
27-12	3層	口縁部が大きく外反する。壺形土器。	弥生後期
28-1	KII-5区 3層	甕形土器。水平な口縁部を有する。口縁内側の端部に稜をなす。外面刷毛目整形、内面ナデ整形。	弥生中期中葉
28-2	3層	甕形土器。28-1と同様の形態をなす。	弥生中期中葉
28-3	3層	甕形土器。28-1と同様の資料。	弥生中期中葉
28-4	3層	甕形土器。平坦で厚みのある口縁部をなす。	弥生中期中葉
28-5	3層	甕形土器。28-4と同様の形態である。	弥生中期中葉
28-6	3層	甕形土器。28-4程口縁部に厚みがないが、形態的には同様である。	弥生中期中葉
28-7	3層	甕形土器。28-4と同様の資料。	弥生中期中葉
28-8	3層	甕形土器。口縁端部がやや垂れぎみとなる。	弥生中期中葉
28-9	3層	甕形土器の口縁部がやや垂れる。口縁部の内側端部の稜に厚みをもつ。	
28-10	3層	甕形土器。口縁部がやや波をうち、口縁部の内側端部の稜が消滅する。刷毛目を外面に付す。	
28-11	3層	甕形土器。口縁端部が肥厚し、内側の端部が極端に突き出て稜をなす。	
29-12	3層	甕形土器。口縁部の中央が凹み内側に稜を有する。	
29-13	3層	甕形土器。29-12と同様の形態。口縁部がやや厚い。	
29-14	3層	甕形土器底部。底部を平坦になし、中央部がやや凹み厚みのある形態である。	

註6 久田松和則1980「文献にみる中世の郡川周辺」『黒丸遺跡』黒丸遺跡調査会

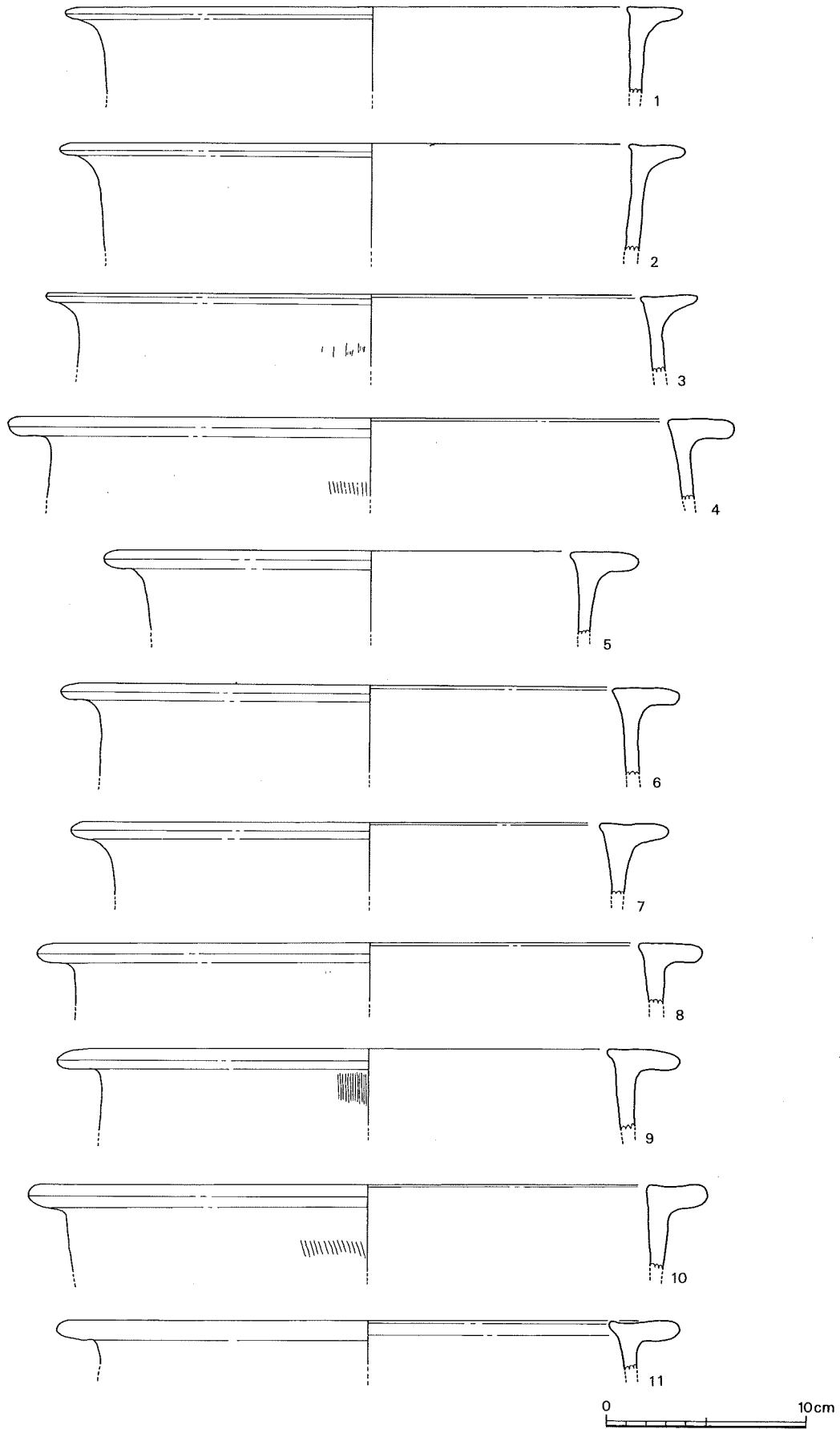
註7 大石一久「大村地方における中世期石造美術について(その一)」『大村史談』第22号、大村史談会

註8 黒丸遺跡調査会1980「黒丸遺跡」

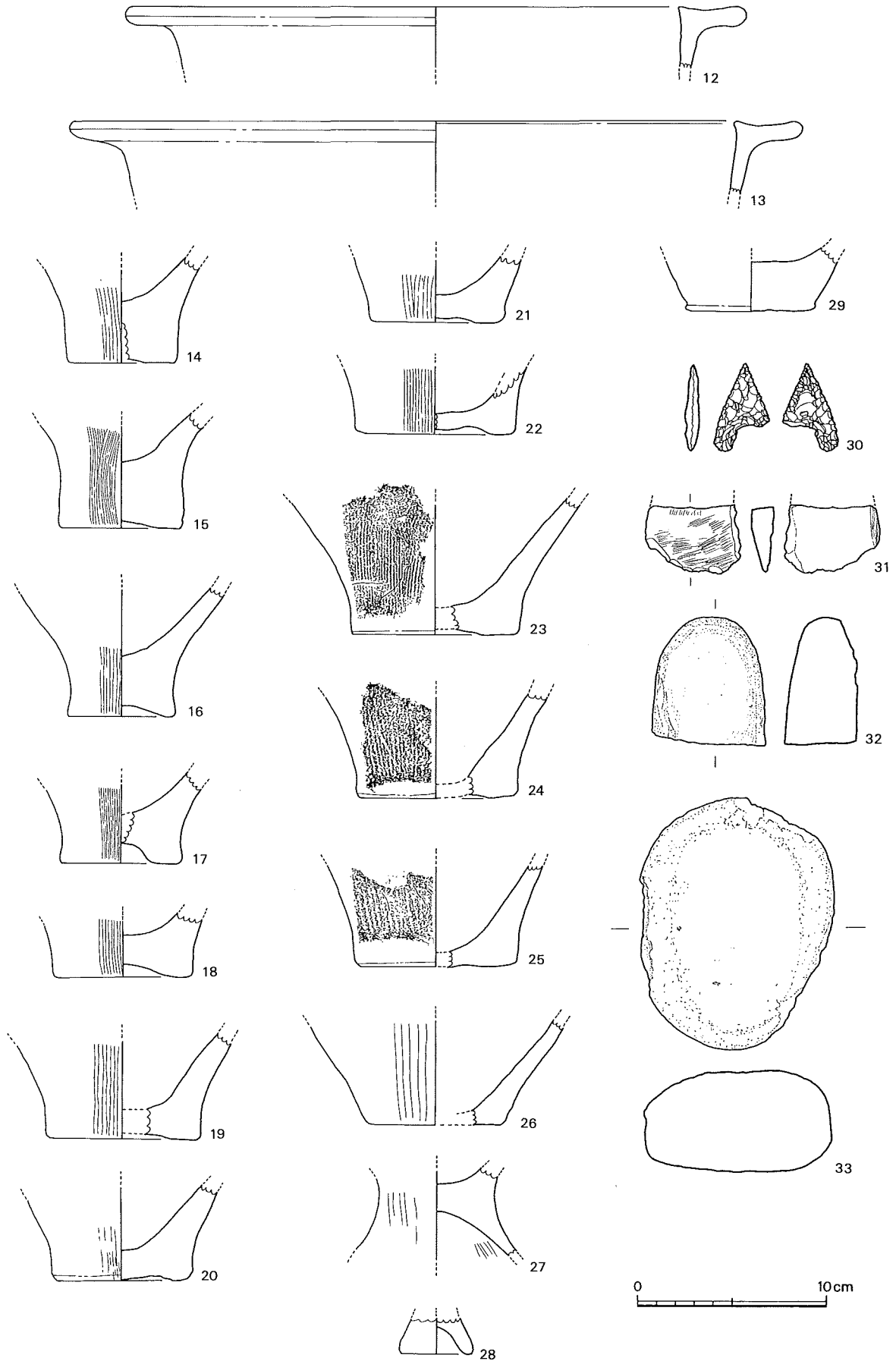
註9 橋本久和1992「中世土器研究序論」真陽社

註10 福岡県教育委員会1970「浦城跡」福岡県文化財調査報告書第45集

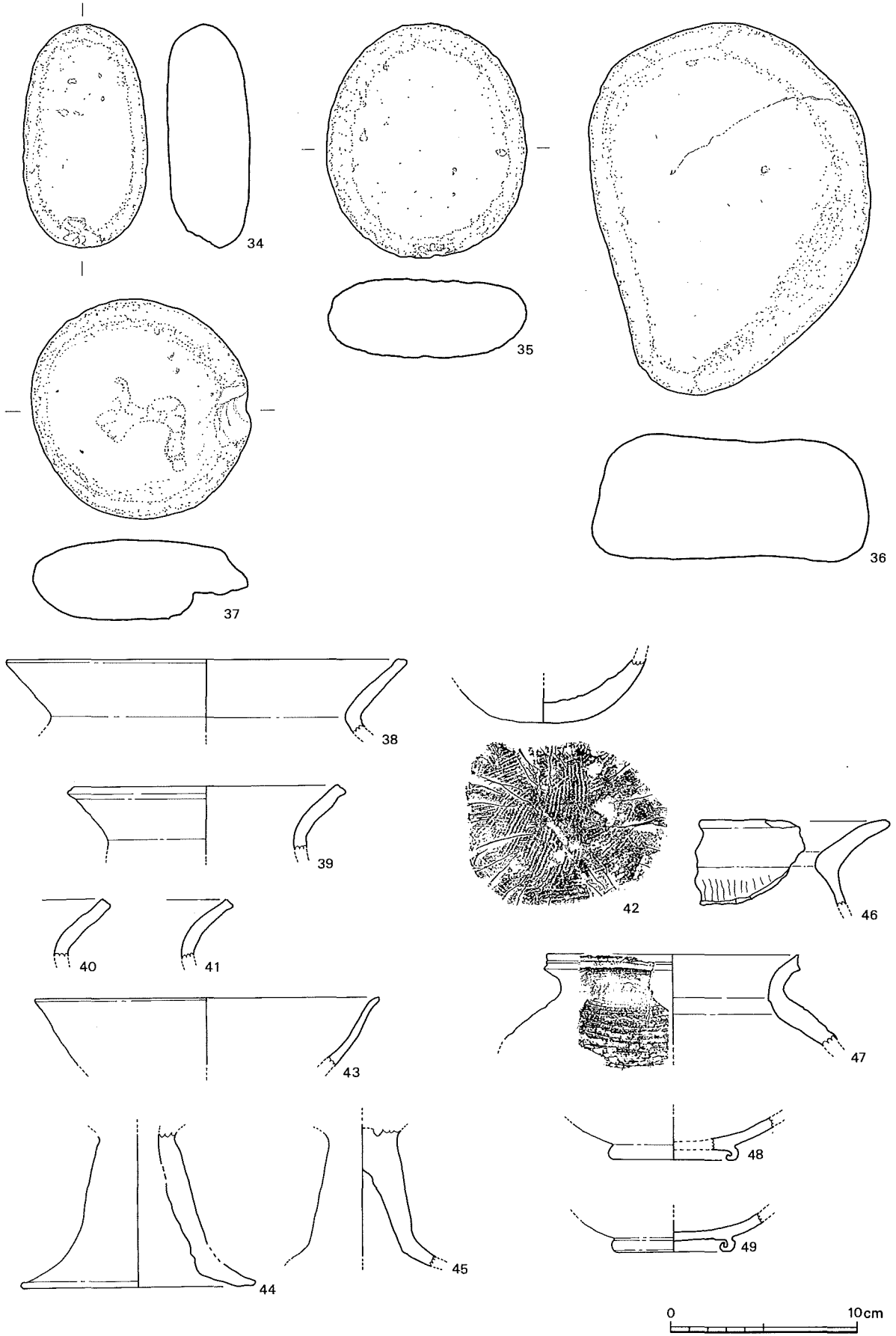
註11 横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集4』九州歴史資料館



第28図 II-5区出土①

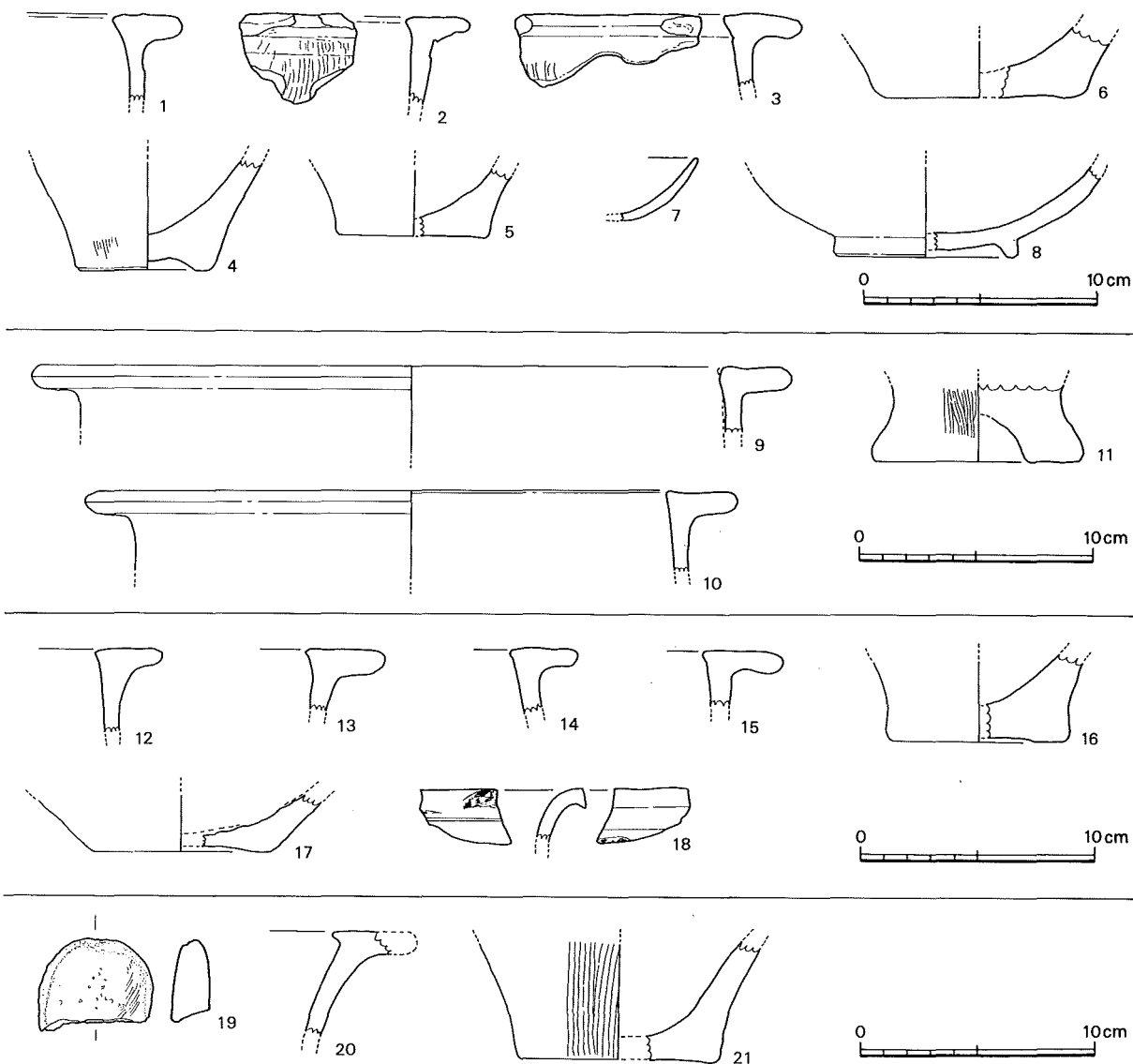


第29図 II-5区出土② (30は1/2)



第30図 II-5区出土③

黒丸遺跡 I



第31図 II-6・7・8・9区出土

表23 挿図遺物の特色一覧⑰

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
29-15	3層	29-14と同じ形態の土器。甕形土器。	
29-16	3層	甕形土器。底部の厚み減り凹みが深くなる。	
29-17	3層	甕形土器。底部に明瞭な凹みをつける。	
29-18	3層	甕形土器。29-17同様に底部に明瞭な凹みをつける。外面の刷毛目整形残る。	
29-19	3層	甕形土器。29-17と同様の形態で刷毛目が残る。	
29-20	3層	甕形土器。29-17と同様の形態。	
29-21	3層	甕形土器。29-17と同様の形態。	
29-22	3層	甕形土器。29-17と同様の形態をなすが、底部の厚みが半減する。	
29-23	3層	甕形土器。29-17と同様の形態。	

表24 挿図遺物の特色一覧⑱

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時期
29-24	KII-5 3層	甕形土器。29-17と同様の形態。	
29-25	3層	甕形土器。底部中央部が剥落のため凹の形態明瞭でない。底部の厚みは、29-14に比較して薄い。	
29-26	3層	甕形土器。底部を平坦となし、厚みも29-14~29-25の土器に比較して薄い。刷毛目が薄く残る。	
29-27	3層	甕形土器。脚台付の底部。刷毛目が残る。	黒髪系
29-28	3層	甕形土器ミニチュア。脚台付の底部片。	黒髪系
29-29	3層	壺形土器。底部を平坦に作り外面ナデ整形。	
29-30	3層	石鏝。比較的長めの脚で正面右側の脚は欠損する。石器の整形は中央部に向かって剝離を繰り返し、その後、細部に細かなリタッチを施す。	

表25 挿図遺物の特色一覧①

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時代
29-31	K II-5区 3層	磨製石斧。蛇文岩を石材とする。小片として残り、全形を知りえないが正面の左側縁に磨きの稜線が残る。	
29-32	3層	スリ石。硬質砂岩を利用し、上面と右側面に使用痕を認める。	
29-33	3層	四石。正面の中央部に浅い凹み残る。	
30-34	3層	叩き石。下部に敲打の痕跡を認める。	
30-35	3層	スリ石。輝安山岩を石材とし、正面の全面を浅く平坦に使用する。	
30-36	3層	石皿。周辺部から中央へ凹が深くなる。	
30-37	3層	スリ石。裏面の中央部に浅く平坦となる使用痕を認める。	
30-38	3層	土師器の甕。口縁部が湾曲し、口唇部が浅く凹んで巡る。	4世紀中葉
30-39	3層	土師器の甕。口縁部がやや屈曲し、口唇部が浅く凹んで巡る。	4世紀中葉
30-40	3層	土師器の甕。口縁部がやや屈曲し、口唇部が浅く凹んで巡る。	4世紀中葉
30-41	3層	土師器の甕。口唇部が浅く凹んで巡る。	4世紀中葉
30-42	3層	土師器の甕。底部が丸底になり刷毛目整形を行っている。内面は、指によるナデの痕跡を残す。	4世紀中葉 ～後半
30-43	3層	土師器の高杯。杯の体部は、丸みを持って立ち上がり、口縁部で屈曲する。	5世紀前半
30-44	3層	土師器の高杯。脚部にあたり、短い裾部の境から屈曲して体部へ立ち上がり、中央部がやや膨らむ。	5世紀前半
30-45	3層	土師器の高杯。比較的短い脚で、裾部の端を欠損している。裾部の境から屈曲して立ち上がり体部中央部からやや膨らむ。	5世紀前半
30-46	3層	土師器の甕。口縁部が大きく外反し、端部は尖りぎみである。頸部以下に櫛目で縦位方向に調整を行っている。	7世紀代
30-47	3層	須恵器の甕。格子目のタタキが外面に認められる。内面は水引きの後を指撫でし、口縁部端摘み上げ。	7世紀後半
30-48	3層	土師器の椀。淡黄灰色を呈し、高台を内側へ折り込む。	

表26 挿図遺物の特色一覧②

図番号	遺構名称 番号と層位	遺物の特色	時代
30-49	3層	土師器の椀。淡黄灰色を呈し、高台を内側へ折り込む。	
31-1	K II-6区 3層	甕形土器。口縁部を平坦とし、断面に厚みがある。	弥生中期
31-2	K II-6区 3層	甕形土器。口縁部を平坦にする。口縁内側の端部に稜がややできる。外面に刷毛目が付く。	弥生
31-3	3層	甕形土器。口縁部が垂下する。	弥生中期 後半
31-4	3層	甕形土器。底部に明瞭な凹みをつける。	弥生
31-5	3層	甕形土器。底部を平坦にする。	弥生
31-6	3層	壺形土器。底部から中央に向かって緩やかに凹む。	
31-7	3層	土師器の杯。体部から内湾しながら口縁部へ立ちあがる。色調は、黄赤色を呈する。	10世紀代
31-8	2~3層	土師器の椀。貼付けの高台を有し、高台内の中央部が盛り上がる。	11世紀中葉
31-9	K II-7区 3層	口縁の中央部がやや凹むが平坦な口縁部である。口縁部の内側の稜が明瞭でない。	弥生中期
31-10	3層	口縁部の中央がやや凹む。口縁部の内側に稜がつく。	弥生中期
31-11	3層	甕形土器。底部に明瞭な凹みをつける。刷毛目が残る。	弥生中期
31-12	K II-8区 倒木痕	甕形土器。平坦な口縁部をなし、口縁部の内側はやや厚みのある稜をなす。	弥生
31-13	倒木痕	甕形土器。平坦な口縁部をなし。口縁部の内側は稜をなす。	弥生
31-14	3層	甕形土器。平坦な口縁部をなし。口縁部の稜は見られない。	弥生
31-15	倒木痕	口縁上部は平坦となし、下部は厚みを持って垂下している。	弥生
31-16	倒木痕	甕形土器。底部がやや凹むが、ほぼ平坦である。	弥生
31-17	倒木痕	壺形土器。底部は、端部から中央部へ緩やかに凹む。	弥生
31-18	倒木痕	磁器。白土の化粧土を掛け、淡い青で絵付けをする。	近世
31-19	K II-9区 2~3層	スリ石。蛇文岩製で上部の端に使用部分がある。	
31-20	3層	壺形土器。平坦な口縁部から長い頸部へ移行する。	弥生中期
31-21	3層	甕形土器。平坦な底部をなす。	弥生中期

5 小 結

I-1~13区は古代から中世の遺構と遺物から生活の状況が捉えられ、II-1~9区は、2層・3層の遺物の逆転状況が認められ層位での比較検討については困難と言わざるをえないが、時期については弥生中期から古墳時代初頭を主体とした遺物とその前後に縄文時代と中世の遺物の出土を確認している。

以下にI区の主な遺構・遺物についての概略をまとめとして報告する。

I-1区は、柱穴60基以上を検出し、19基から遺物の共伴があった。そのうち pit 1 がヘラ切り底の土師器、pit 4, 7, 17, 15, 24からは糸切り底の土師器が出土している。また、pit 23からは玉縁の口縁部を有する白磁椀が出土している。生産用具として土錘が pit 8 から出土している。土壇は、8基検

黒丸遺跡 I

出し、中世の時期は、1号と8号があり1号からは青磁、石鍋、明代の染付が認められ8号は11世紀中葉から12世紀初頭の白磁碗Ⅷ類や滑石製石鍋が出土している。

I—2区は、124基以上の柱穴を検出し、32基から遺物等が共伴している。柱穴内の遺物は pit11の黒曜石剥片、pit 9・14の須恵器片、pit 2～6・10・12・15～17・19～22・25～36に中世の遺物を伴っている。

I—3区は、柱穴104基以上を検出し、36基から遺物の出土がある。pit17の近世陶磁器を除いた外は中世の遺物が共伴している。遺物は、白磁碗の11世紀中葉から12世紀初頭が pit 1・4 にあたり、pit16・37に同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁小碗が出土している。その外の遺構では、石列1号から13世紀代の糸切り底の土師器が出土している。

I—4区は、柱穴84基以上を確認し、pit 5・6に縄文から弥生時代の遺物が出土している。中世は、pit 3・4・8・10に白磁、青磁、土師器、石鍋が出土遺物として上げられる。土壌は11基を数え、中世に所属する資料は、1～5号・8号がある。溝は、4基を確認し、溝3号の遺物は、玉縁口縁を有する白磁Ⅳ類、石鍋、瓦質の摺鉢、Y字口縁の陶器類が出土している。遺物から3号の使用は、13世紀代から15世紀前半までと考えている。

I—5区は、柱穴が検出されず、土壌2基と井戸1基、溝2基を検出している。土壌2号は13世紀中葉の龍泉窯系青磁片と土師器片が出土。溝3号からは、13世紀前半から14世紀初頭にかけての遺物として、糸切り底の土師器、石鍋等が出土している。

I—6区は、溝4号を検出した外は倒木痕が残るのみである。

I—7区は、柱穴81基以上を検出。遺物を出土した柱穴が11基ある。時期は15世紀代に求めることのできる資料が多くなる。

I—8区は、柱穴が43基以上あり、6基から共伴遺物の出土がある。時期は、pit 3の黒曜石剥片、pit 1・2・6が中世の遺物を伴っている。このうち pit 1からは、朝鮮系陶器が出土している。

I—9区は、柱穴91基以上を検出し、柱穴2基から白磁、土師器、弥生時代の土器があった。

I—10区は、柱穴39基を検出し、7基から遺物の出土があった。pit 6から明代の染付碗が出土、pit 3は陶器の皿、pit 5は、瓦質土器の出土がある。

I—11区から13区にかけては、柱穴や土壌等の遺構が極端に減少してくる。層からの出土遺物として滑石製石錘、白磁、土師器、石鍋の出土があげられる。

II区については、前文で説明を行った状況であり、遺物については表19～26を参照されたい。

以上でI・II区の概略の調査結果についての報告を終えたい。

註12 大阪府教育委員会1977「陶邑II」大阪府文化財調査報告書

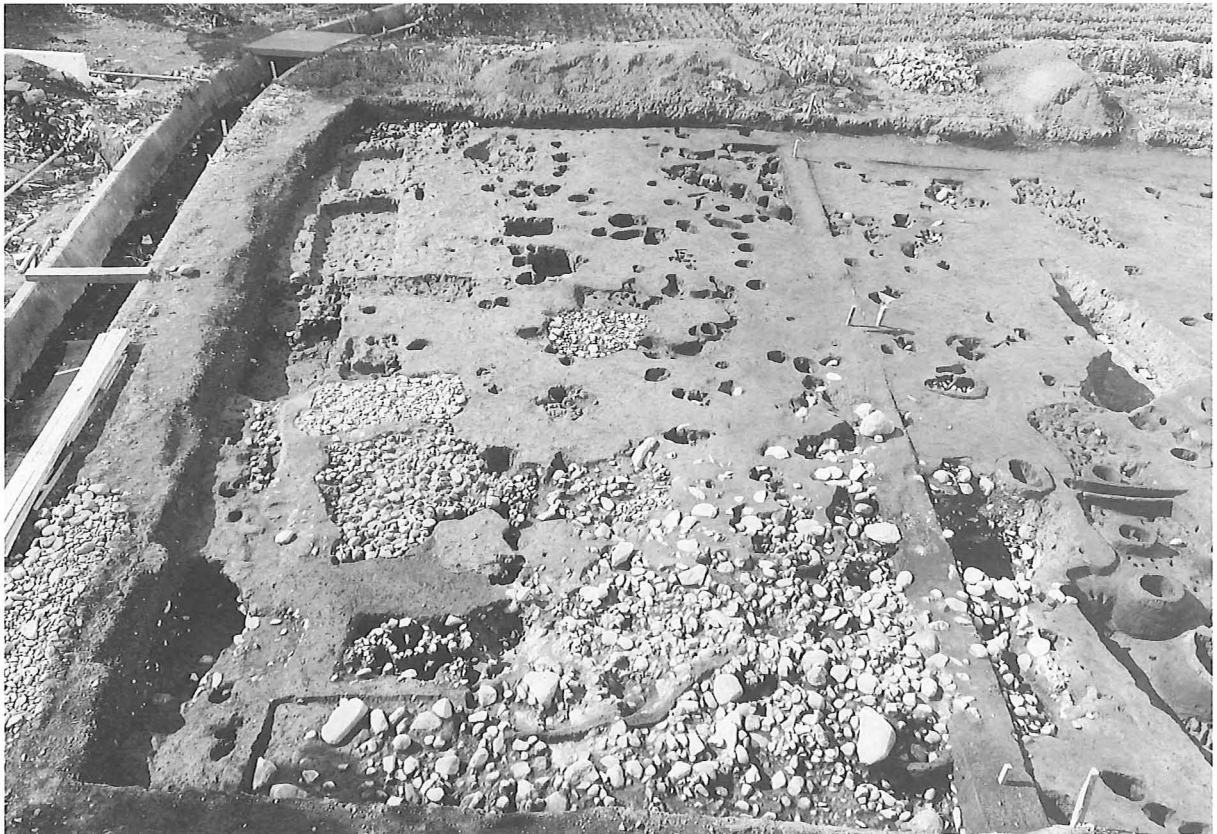
註13 森田勉1983「滑石製容器」『佛教芸術』148号

註14 茶道資料館1990「黒丸出土の朝鮮王朝陶磁」

註15 小野正敏1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』

註16 註9に同じ

註17 金関怒・佐原真編1987「第4巻弥生土器II」『弥生文化の研究』



I-1 区遺構 (東より)



I-2 区遺構 (東より)

図版 2



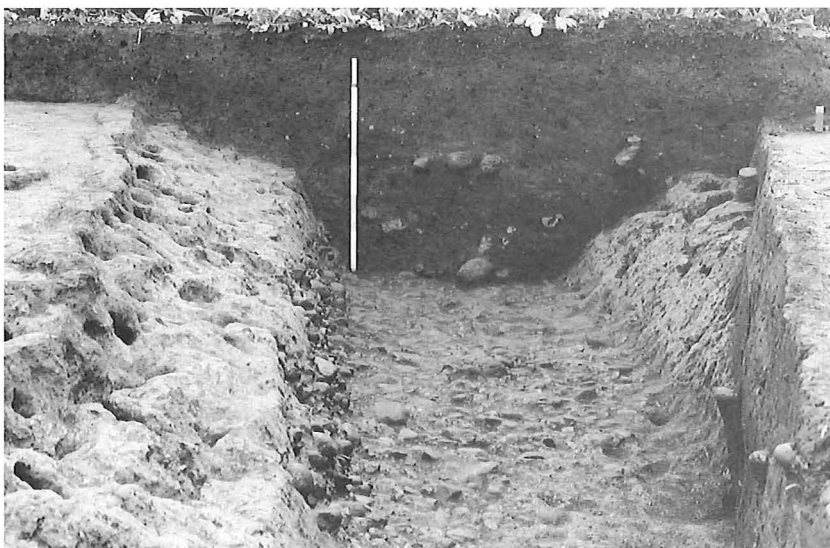
I-3区遺構（東より）



I-4・5区遺構（西より）



I—5区3·4号沟



I—5区3号沟东壁



I—5区4号沟北壁



I-5区遺構（西より）



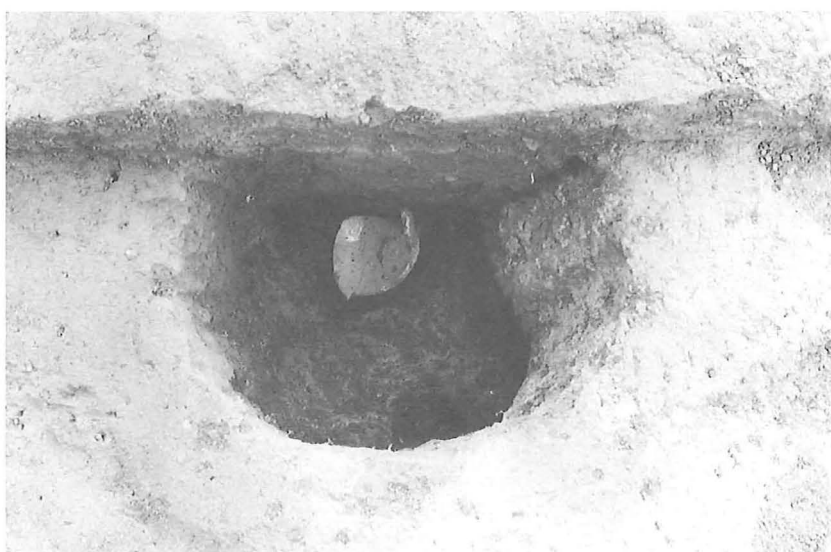
I-7・8区遺構（西より）



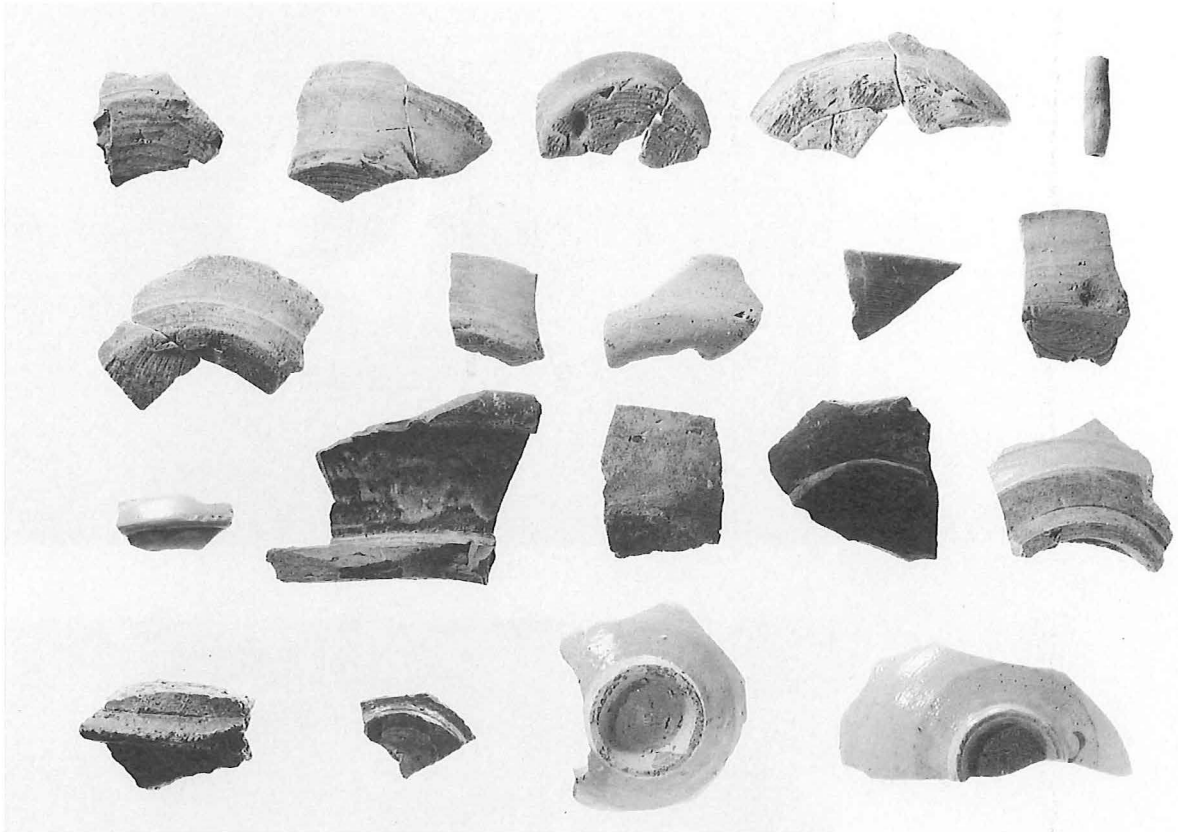
I—2区柱穴25



I—2区柱穴22



I—8区柱穴1



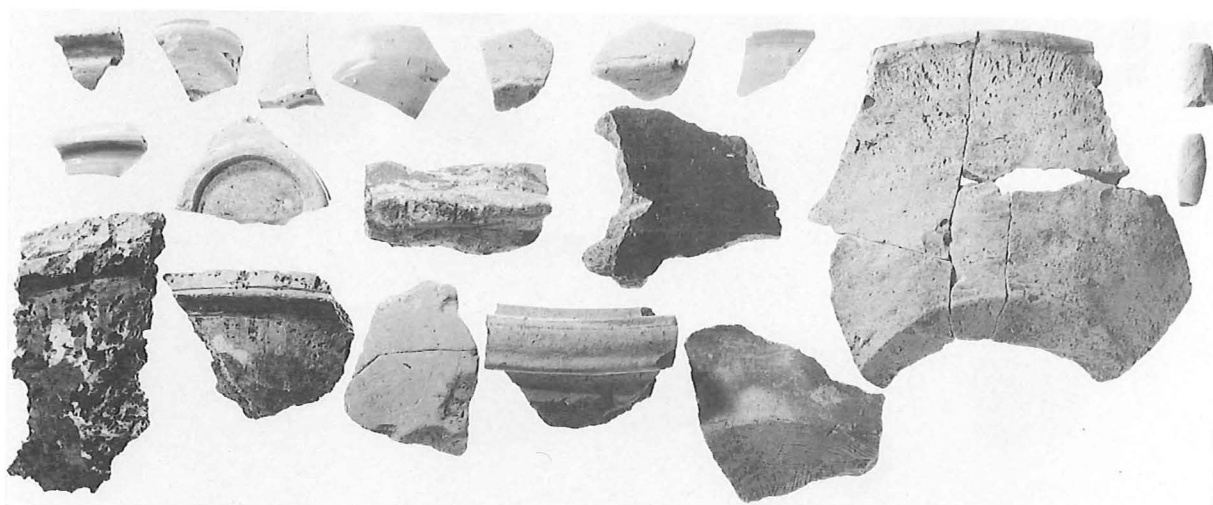
I-1 区遺構出土



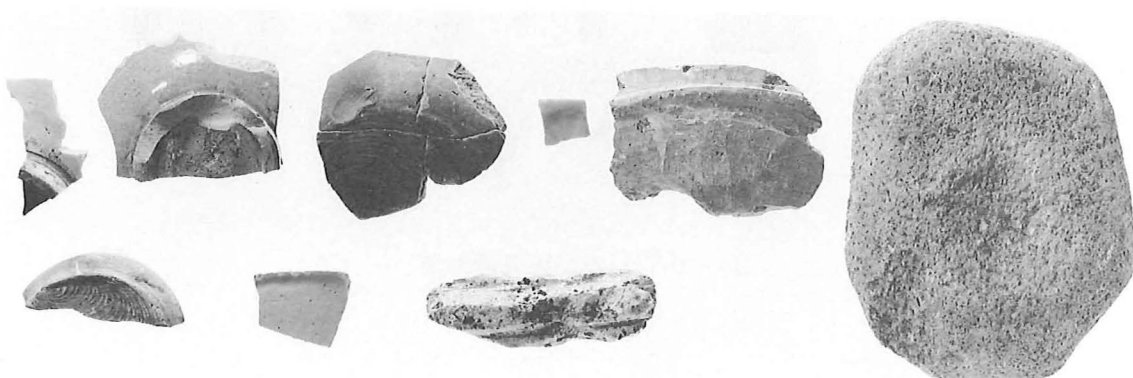
I-2 区遺構出土



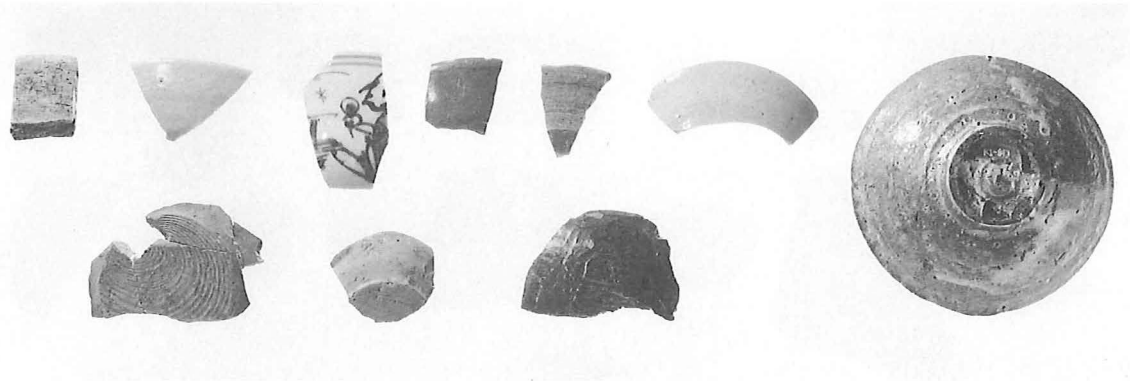
I-3 区遺構出土



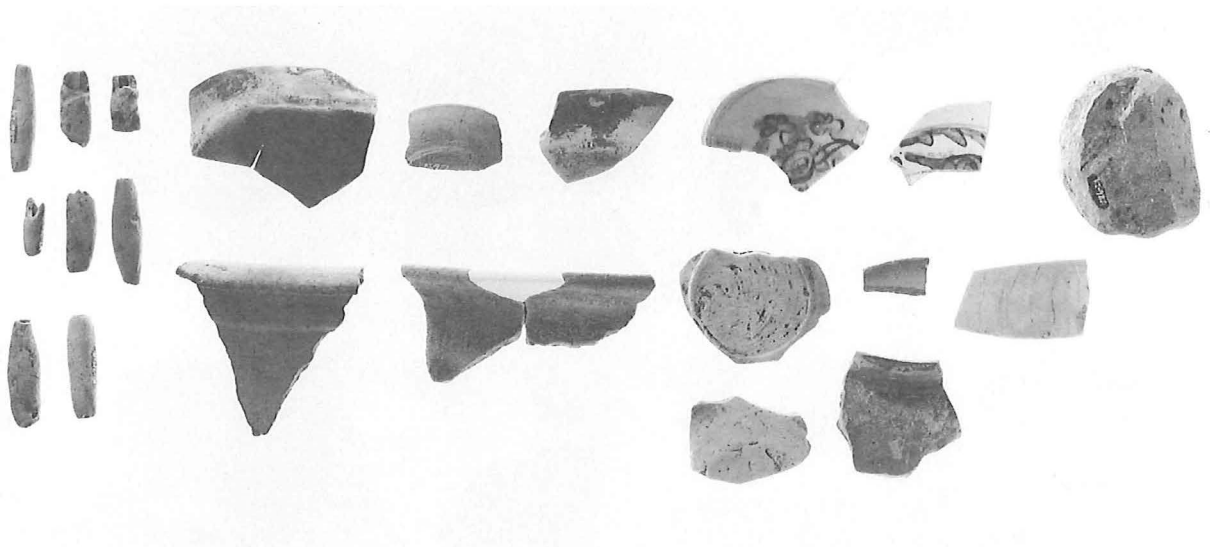
I-4 区遺構出土



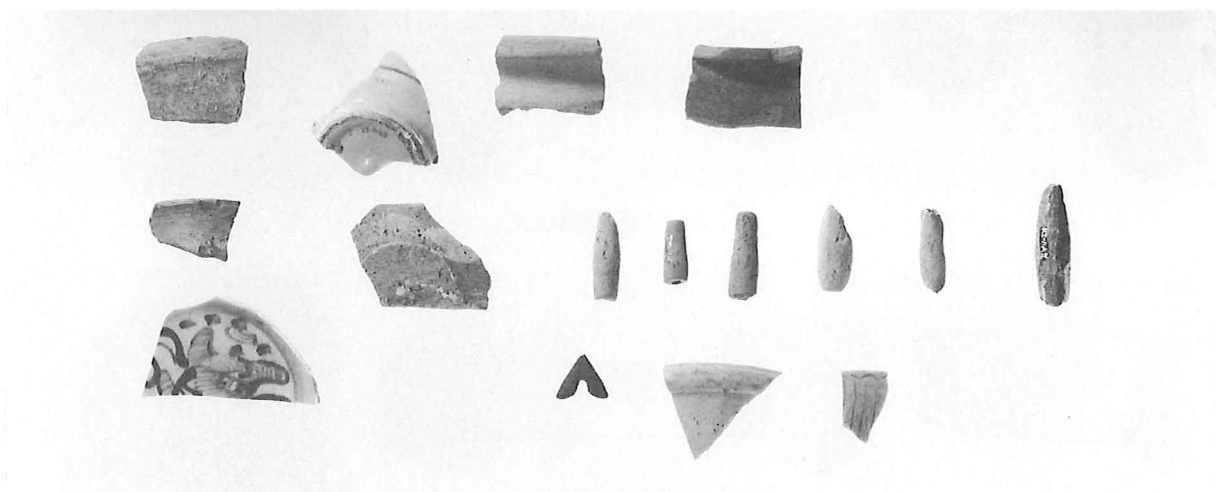
I-5 区遺構出土



I-6·7·8区遺構出土



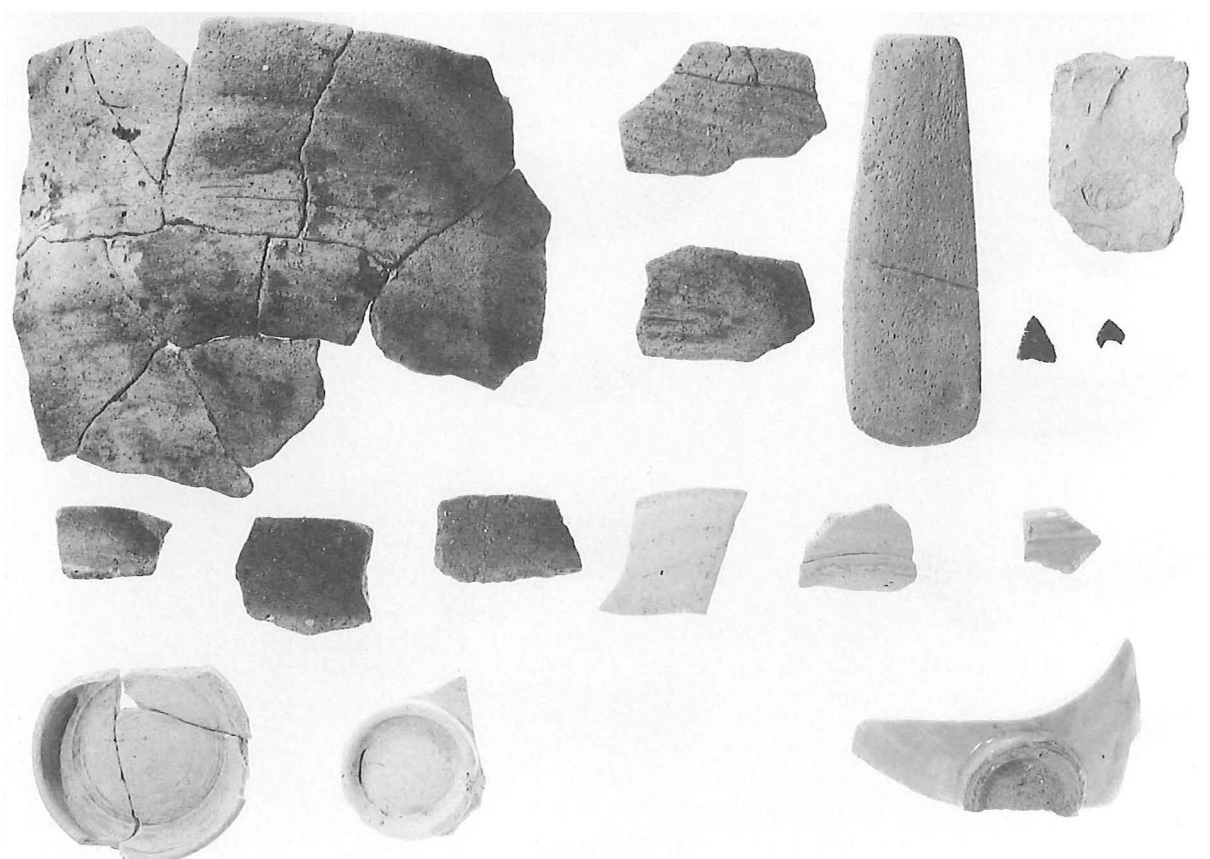
I-9区遺構出土



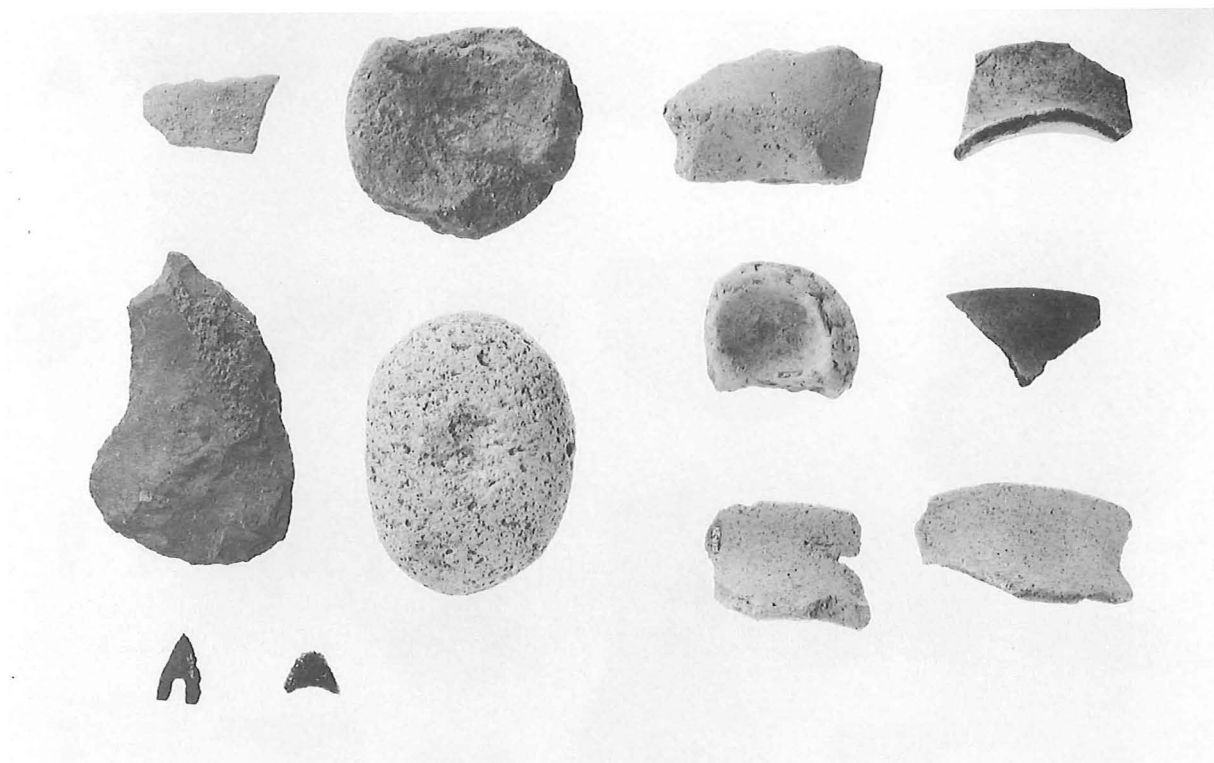
I-10·11·12·13区遺構出土



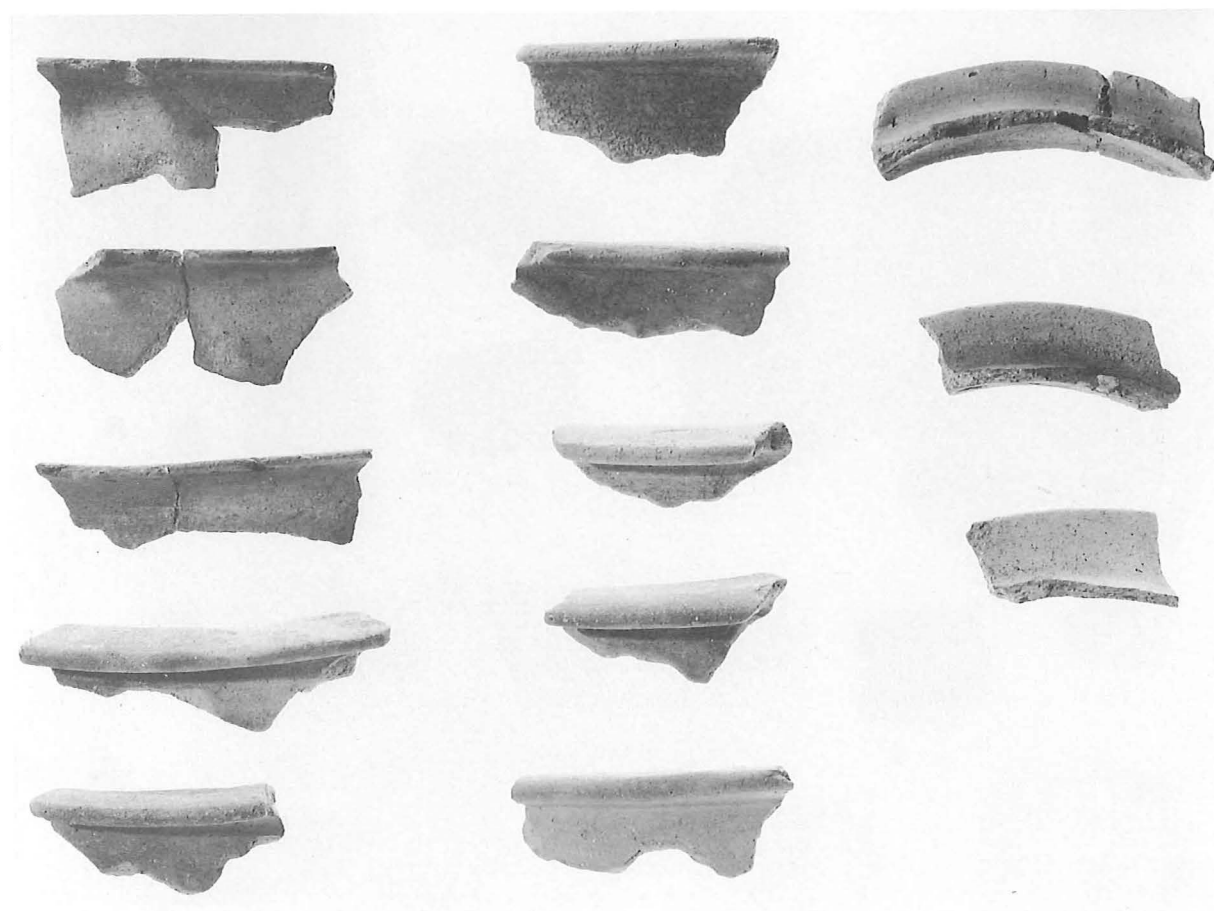
II-1.2区出土



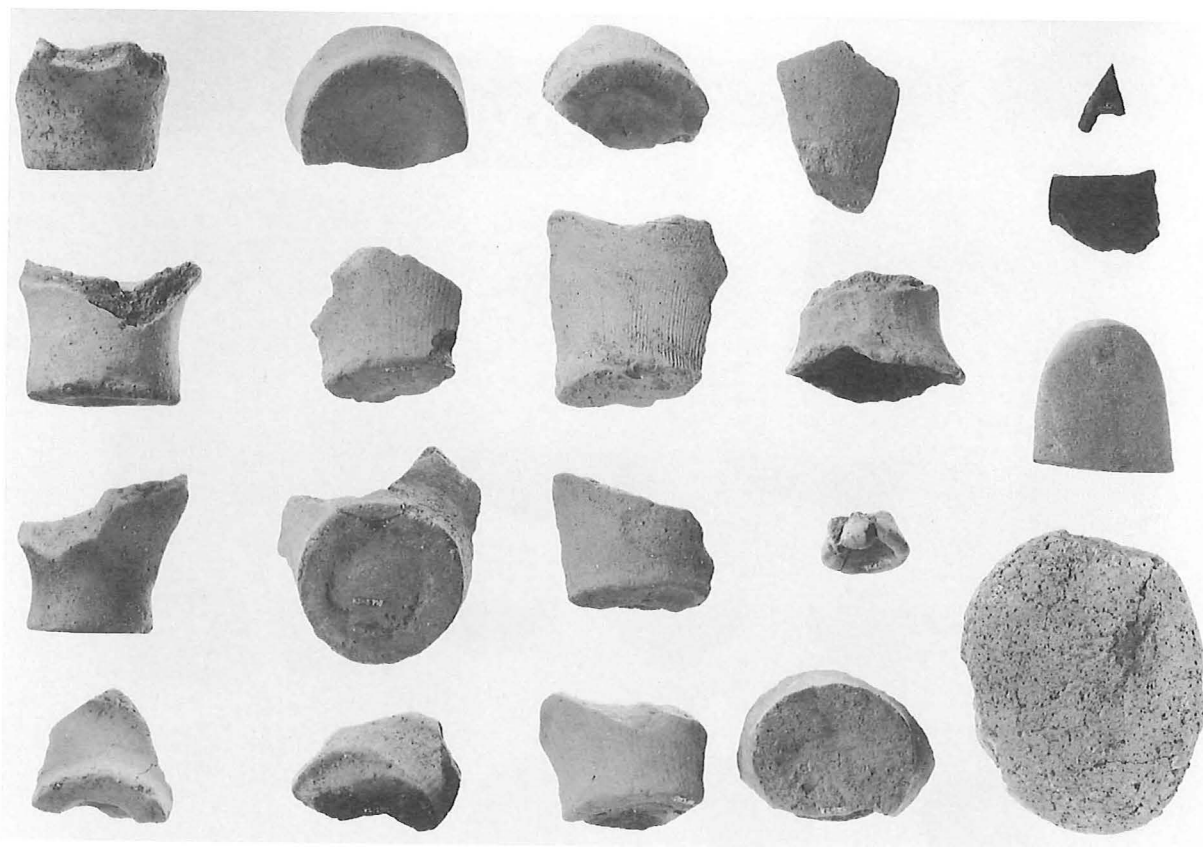
II-3区出土



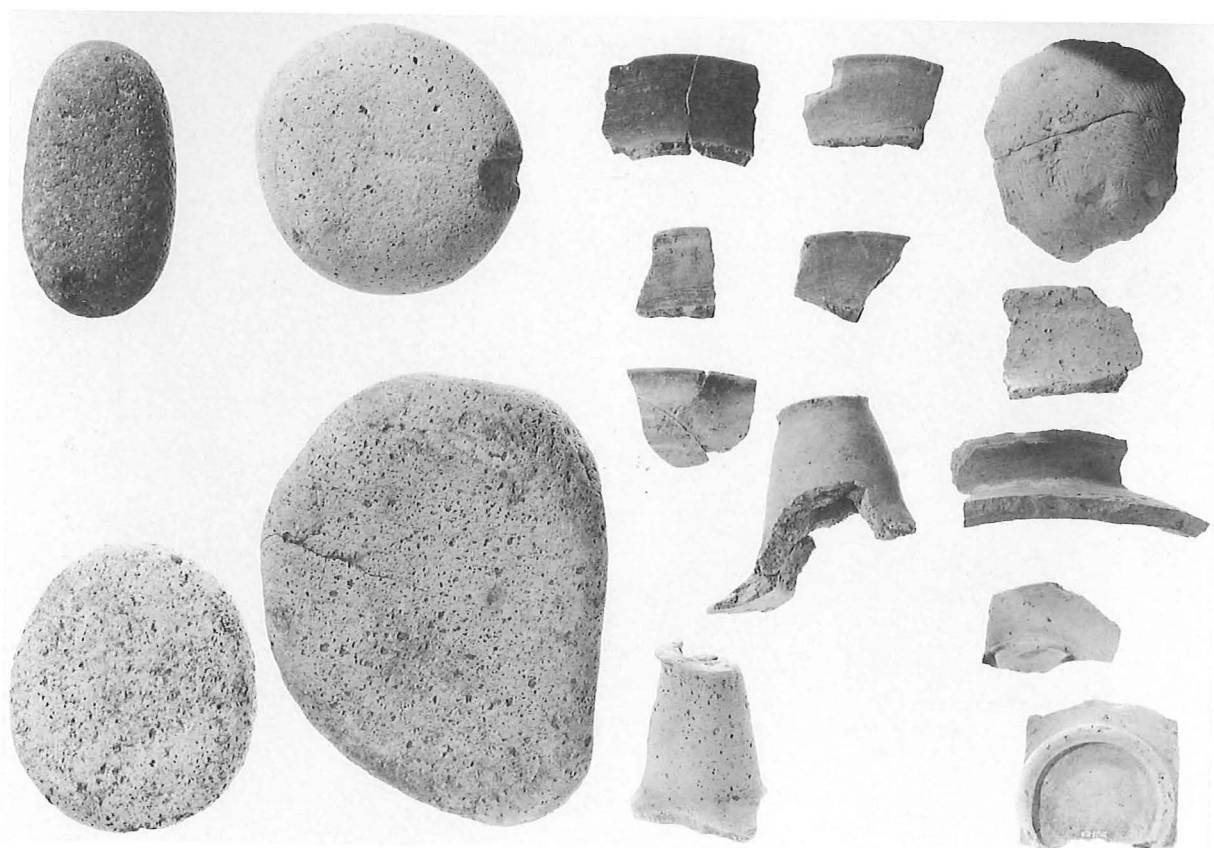
II-4区出土



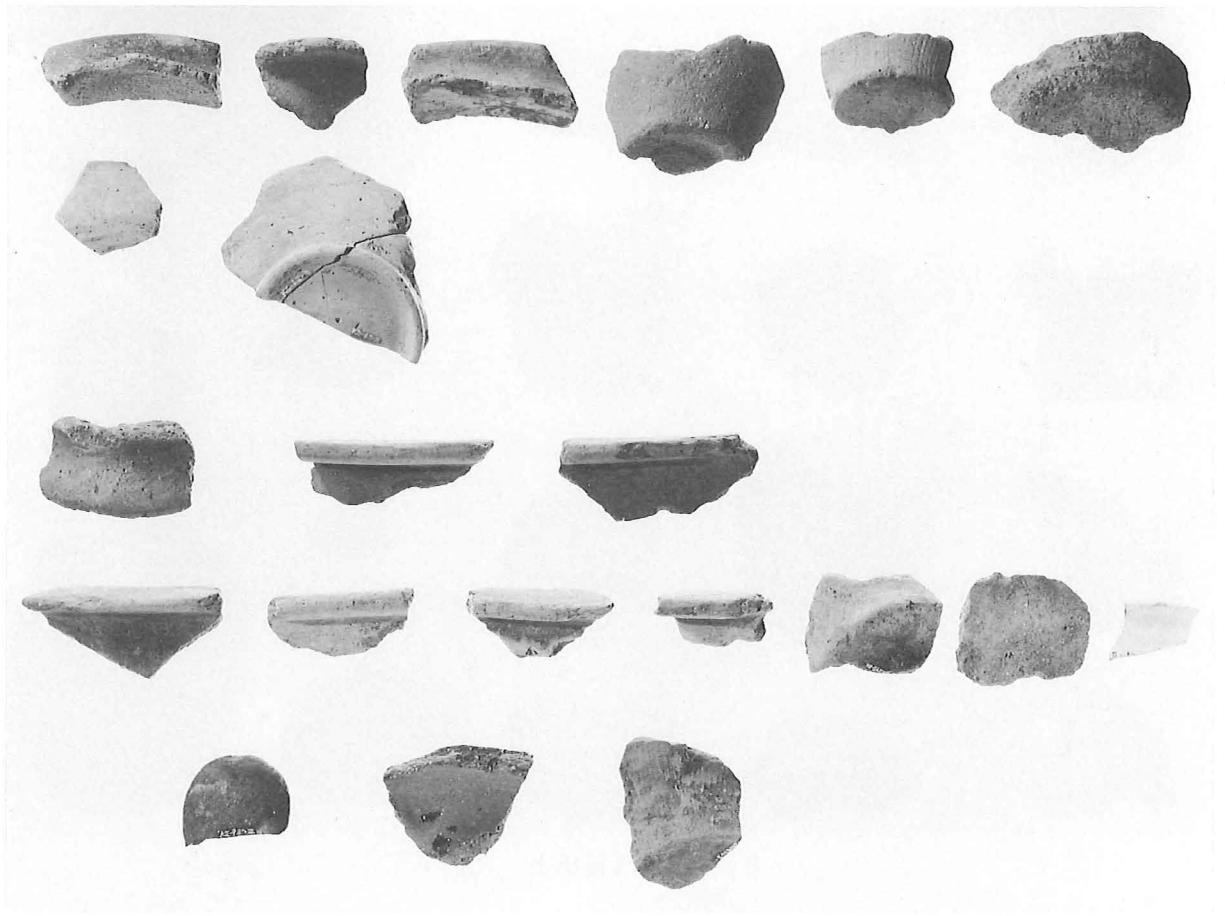
II-5区出土



II-5区出土



II-5区出土



II-6·7·8·9区出土

第 2 部
平成 6 年度調査

I 二次調査

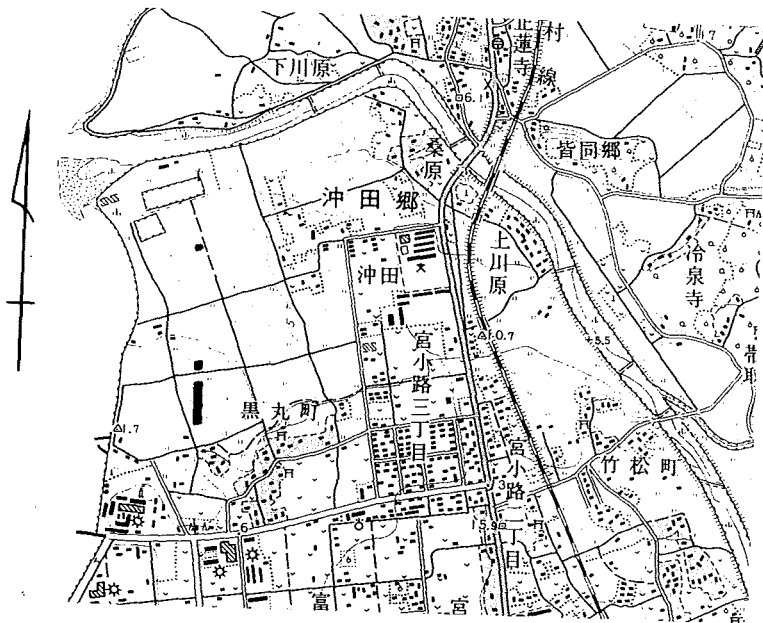
1 調査の概要

平成6年11月15日から平成7年2月3日に行った二次調査は、一次調査と同様、都市計画道路建設にあたっての緊急発掘調査であった。一次調査を行った地点では既に道路工事が進行しており、工事を横目に調査を実施した。

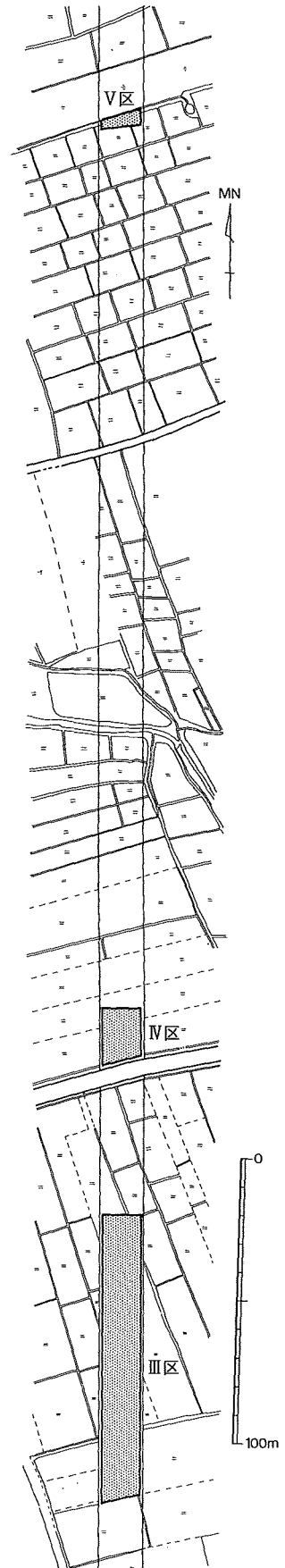
一次調査の北隣に位置する地点からⅢ区、Ⅲ区始点より150m程北上した地点からⅣ区、さらにⅣ区より180m程北上した地点をⅤ区、全面で1,767㎡調査した。Ⅲ区を南北110m、Ⅳ区を20m、Ⅴ区を4mとし、各幅16mと設定した。Ⅲ区は東西13m、南北10mのブロック1～11に区切り、調査面積は1,450㎡である。Ⅳ区は東西13m、南北約20mとし、調査面積は250㎡である。Ⅴ区は、東西13m、南北5mの67㎡である。

全面の表土をバックホーで深さ50m程除去し、Ⅳ、Ⅴ区から精査に入った。Ⅴ区は道路工事のため早急な調査を迫られたが、旧河川の近くで固く締まった礫のため、作業は一向に進展しなかった。Ⅳ区は表土下が湿った粘土層で、土層の変化は確認しづらかった。Ⅲ区はバックホーで表土を剥いだ時点で既に遺物が顔をのぞかせており、Ⅳ区に比べるとかなり浅い面から包含層が見られた。

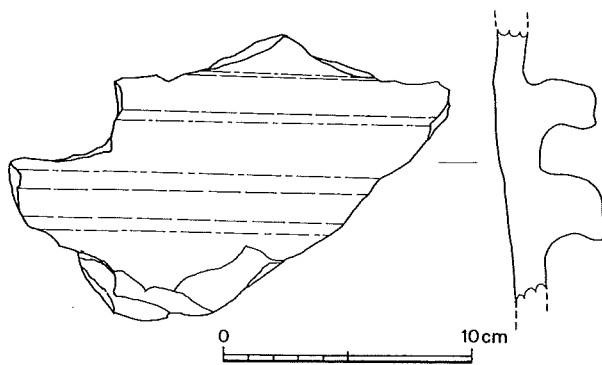
調査方法については1次調査と同様、各ブロックを層位ごとに精査し、できるだけ広い面で包含層を見ていくことにした。またブロック間の畦



第1図 調査区周辺



第2図 調査区



第3図 ビニールハウス内出土の甕胴部片

の北側とブロック東壁では土層を確認した。天候は前年に比べると穏やかで、調査予定期間内に調査を終了することができた。今回も近隣に在住の方に作業を手伝っていただいたが、文化財に対する関心は高く、隣接地の地主等からもビニールハウス設置の際に出土した大型の甕胴部片等を提示していただいた。

(第3図)

2 土 層

平成2年度の範囲確認調査の際、基本的な層位を確認し、今回の調査でもほぼ同様の層位を認めることができた。大別すると、次の5層である。

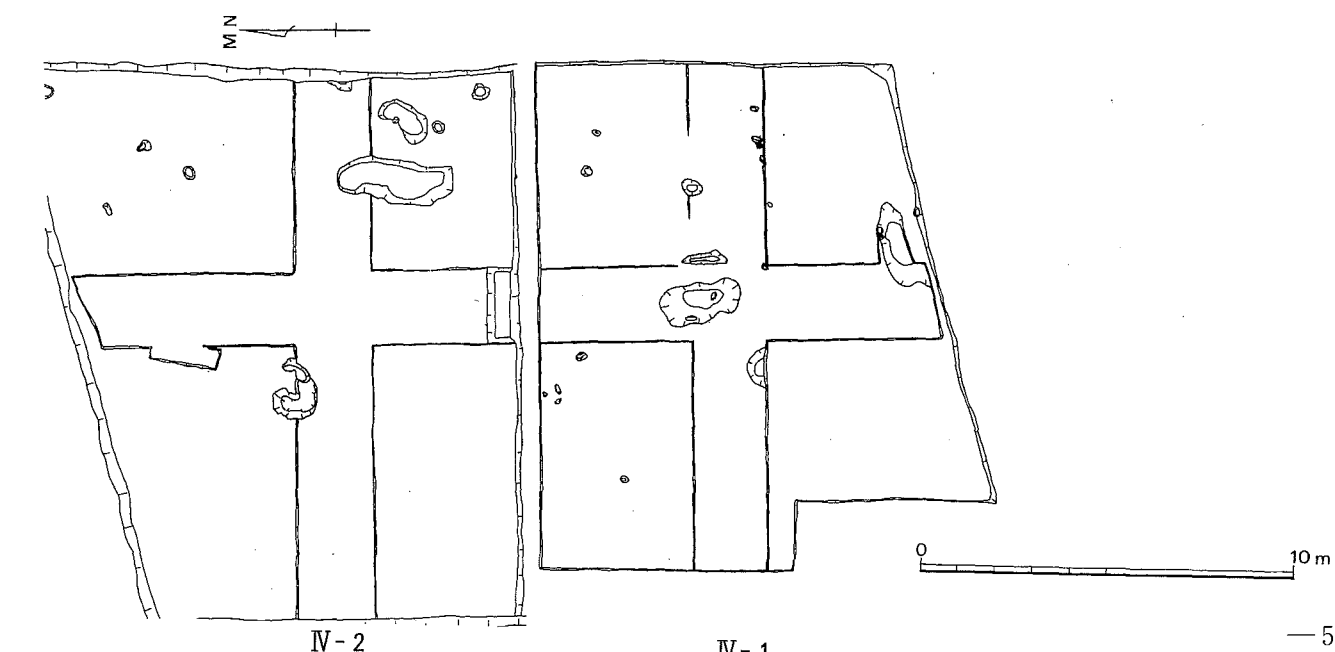
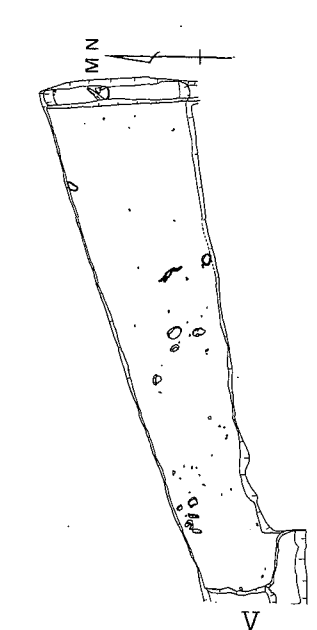
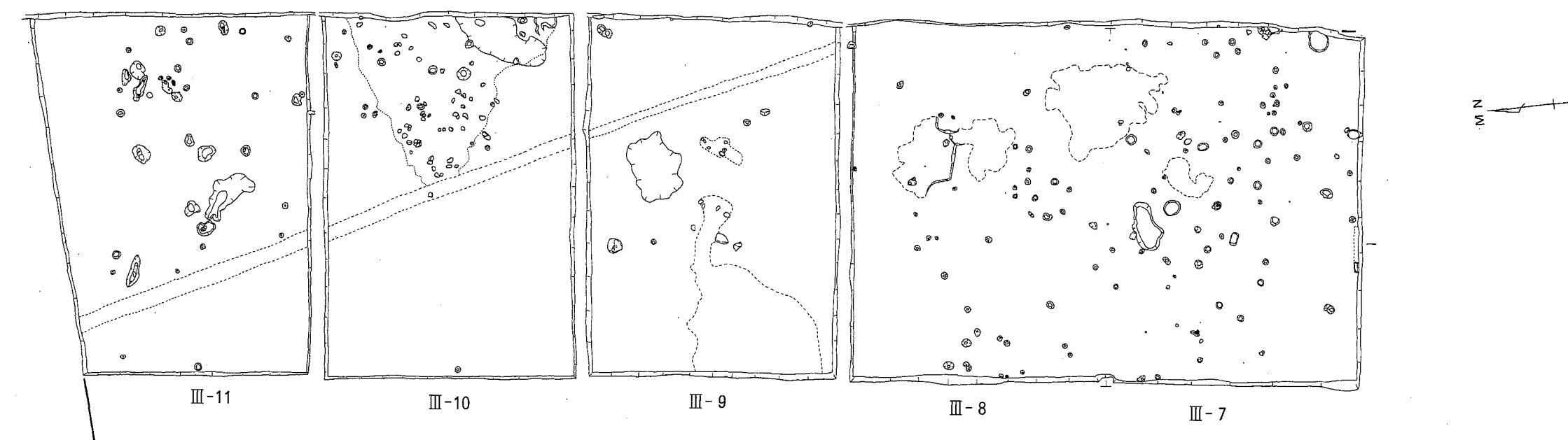
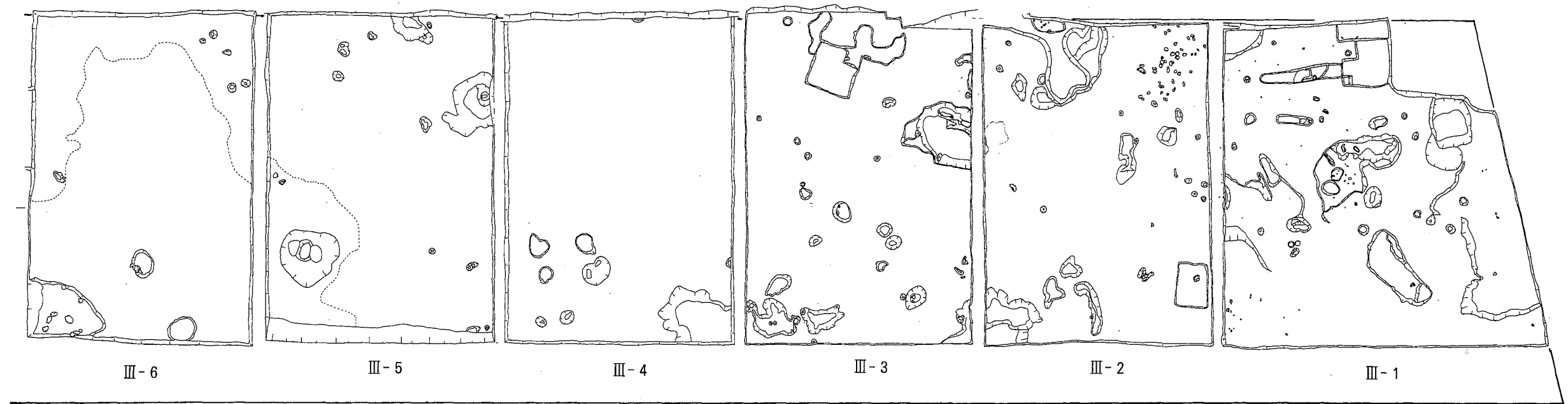
1層は耕作土層で、20cm前後の灰褐色粘質土となっている。さらに、3層との漸位層及び、攪乱層として暗灰褐色の粘質土層があり、2層とした。これら上位は、耕作による攪乱で層位は不明瞭であるが、遺物に弥生時代の石器や土器片、土師器や須恵器、青磁等をわずかではあるが出土した。

3層は黒色粘質土層で、この地区の中心的層位とみられる。縄文時代晩期から弥生時代中期の遺物を包含しており、特に弥生時代中期の遺物を多く検出した。この黒色土は、多良山系の火山活動による火山灰を起源とするものようである。3層以下は、暗灰褐色がかかった粘質土層と、黄色土塊を含む褐色がかかった層がみられ、各々3'、3''層とした。3''層の黄色土塊は、倒木等の根に付着した地山層の土と思われる。各々の層位で時代区分できるような特徴的な遺物は見いだせなかつたが、3層と同様、縄文晩期から弥生中期にかけての遺物を検出した。

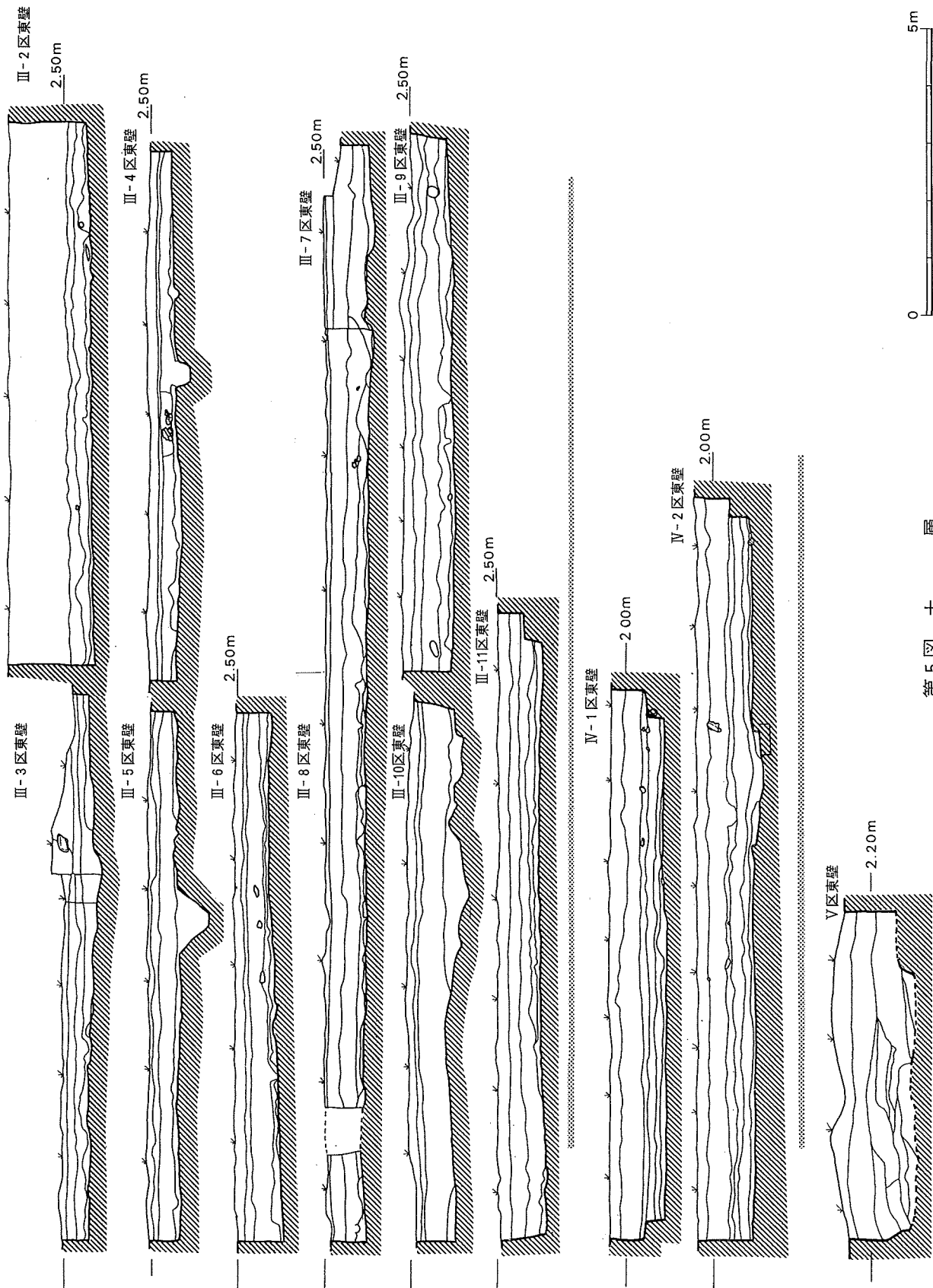
4層は淡灰褐色土層で、粘性は低く、遺構や遺物はほとんど検出されなかつた。最下層を5層としたが、黄色土層で遺物は検出できず、IV区では人頭大の礫を含んでいた。

III・IV区については以上のような層位であったが、V区では様相が異なり、旧河川の氾濫原であったためか、全体に礫が堆積していた。一部砂層や炭化物、木片等も検出されたが、明確な層位は確認できなかつた。

調査区域は大村扇状地の北西端で、扇の弧に平行に道路は伸びており、山側(東)から大村湾側(西)にわずかに傾斜している。また、3層の遺物出土状況からも東部から流れ込みがあったとみられるが、層位に特別な影響は見られない。



第4图 III·IV区遺構図



第5図 土層

3 遺構と遺物

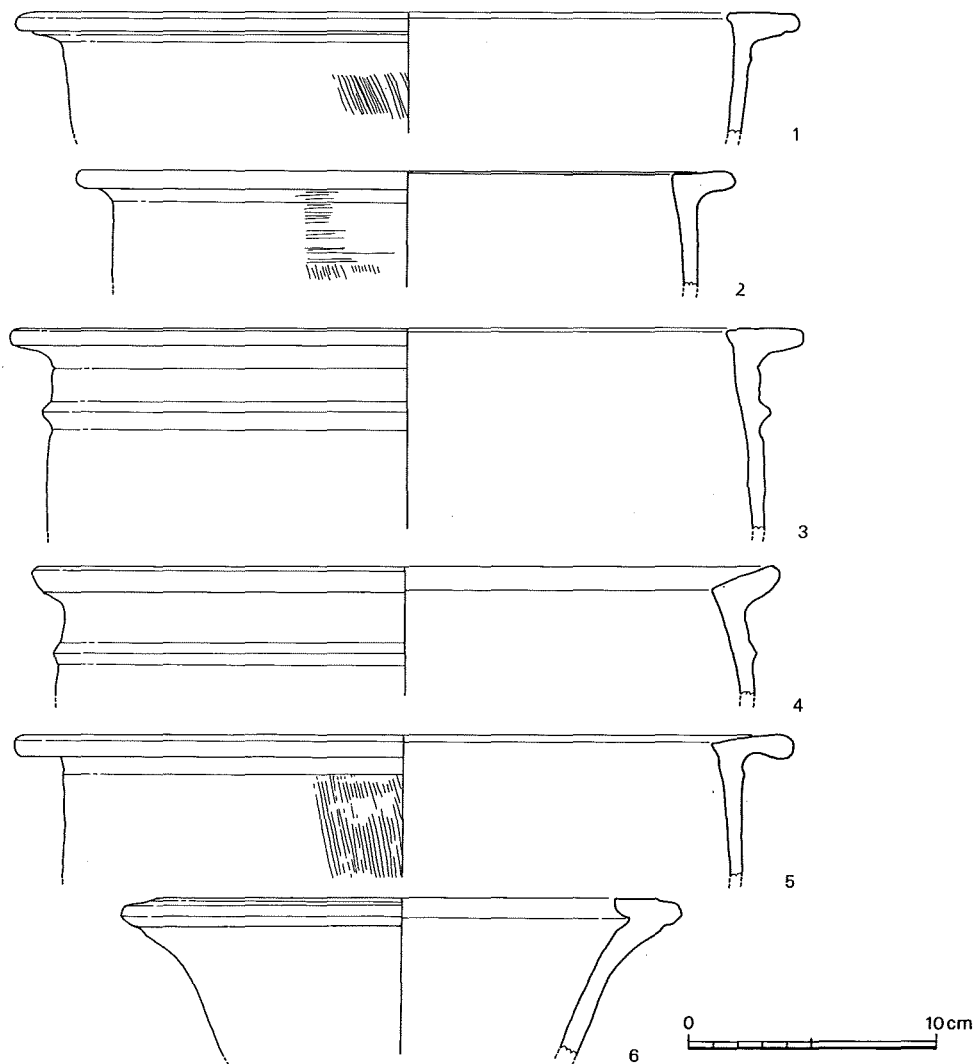
遺物は総計13,000点以上を出土したが、そのほとんどが3層からであった。しかし、III区からV区において遺構と思われるものは、III-7区3層中位とIII-9区3層中位で確認したのみで、遺物も完形のものも少なかった。遺物はIII区からの出土が最も多く、IV区・V区については氾濫原であるため、比較的少量であった。

ここでは、遺構と遺物を対応させるため、各ブロックごとに説明をしたい。

III-1区

弥生土器 (第6図)

1～5は、甕の口縁部である。1・2・5はしっかりした焼成で、口縁部から胴部にかけて縦方向に印毛目のはしるが、特に5は良好に残っている。3・4の突帯は断面が正三角形状で、やや丸みがある。1の口唇外面にわずかな段差がついているが、これは胎土を付け足したもので、きれいに口唇部を一周巡っていたようだ。5は、口唇部が膨らみを帯びているため、1～4よりやや新しい段階の

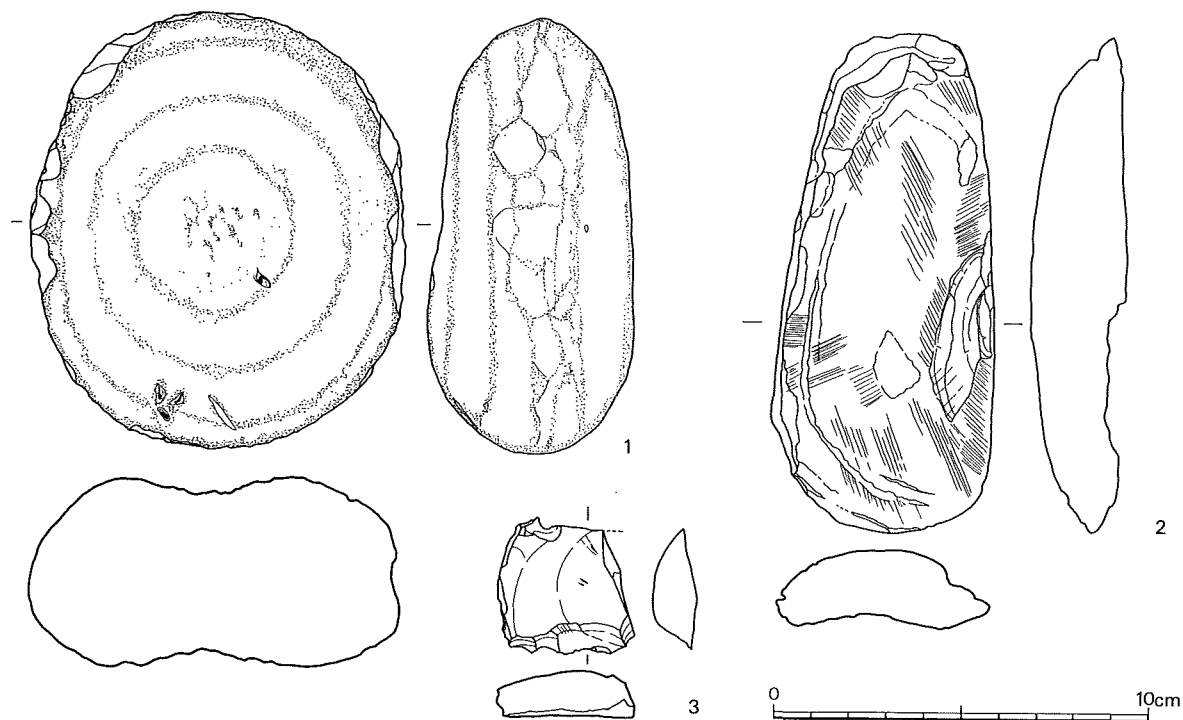


第6図 III-1区の土器

ものであろう。6は壺の口縁部で、堅緻なつくりである。横刷毛後、丁寧なナデが施してある。胎土は全てに白雲母が多量に含まれ、長石が微量、1を除いて石英がわずかに混在する。

石器 (第7図・表1)

1は、角閃石の斑晶を多量に含む白色の安山岩で、両面中央に浅い窪みを有する。周囲に敲打痕があり、敲石としても利用されたことを示している。2は、全面が研磨された磨製石斧である。裏面中央が大きく剝落しているが、縦・横とも断面は低蒲鉾形を呈する。堆積岩と思われる。3は、削器である。



第7図 III-1区の石器

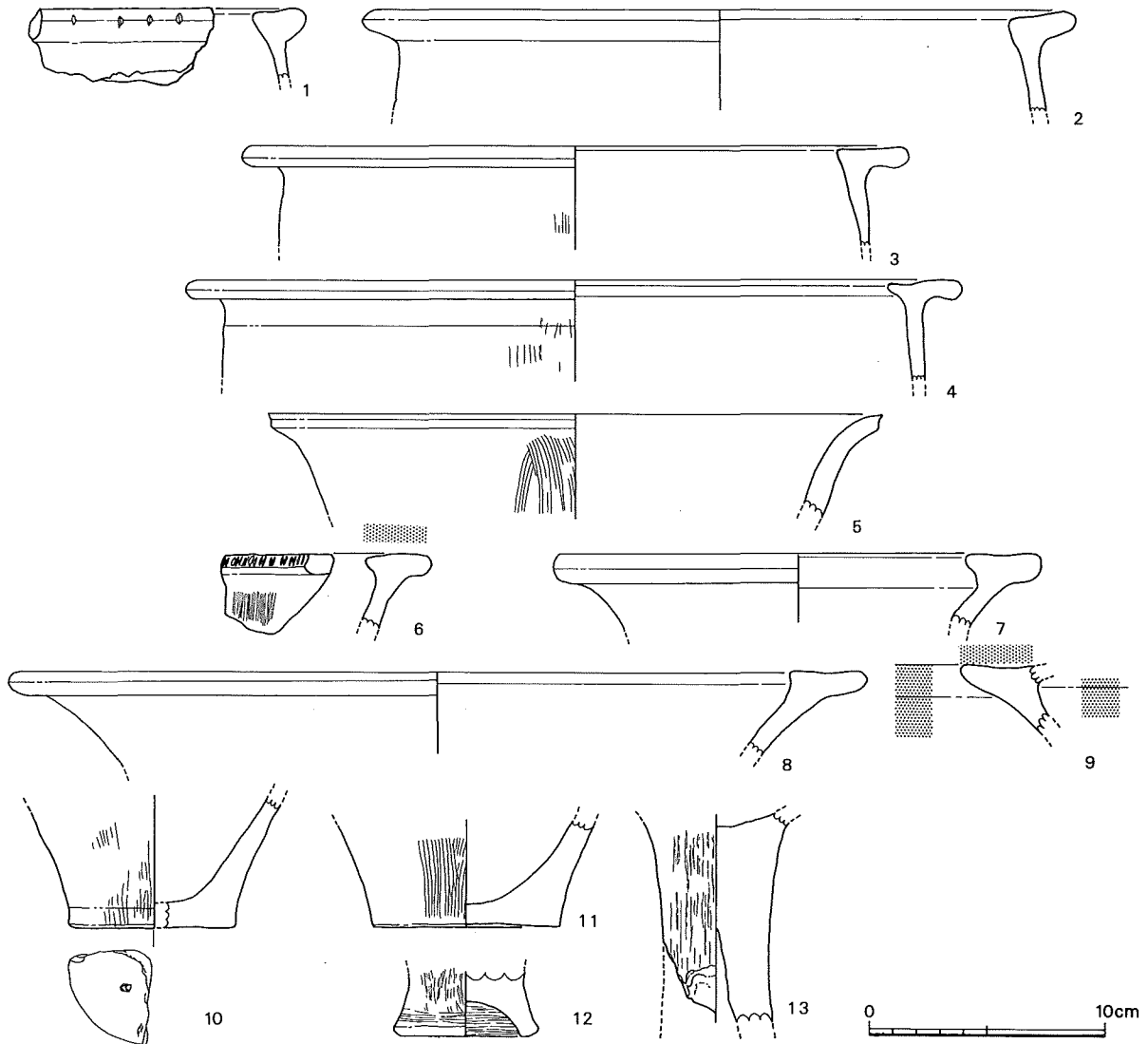
表1 III-1区石器組成表 (長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第7図1	凹石	安山岩	116	99	55	750	
2	磨製石斧	砂岩か	145	59	21	258	
3	削器	木蛋白石	36	36	11	16	

III-2区

弥生土器 (第8図)

全てに白雲母が混入している。1~4と9は、甕である。1は、亀ノ甲式と思われる口縁部である。口唇に浅い刻み目が不等間隔で巡っていて、断面三角形になっている。2は石英を含み、口唇はやや内傾している。色調は黄灰色で、金雲母をかなり含む。4は鋤形を呈し、口唇外面がやや下がる。5~8は壺の口縁部である。5は、金雲母を含む。外面には縦方向に刷毛目がはしり、ナデ消しはなされていない。6~8は鋤形口縁を呈する。6は、口唇部が丹塗りされ、側面に細かい刻み目がはいる。



第8図 III—2区の土器

角閃石が混入されている。7は堅緻なつくりになっている。9はさらに口唇が伸びる甕で、全面丹塗りされている。10~12は甕底部である。いずれも刷毛目が明確に残り、10の底にはモミ圧痕が残っている。13は高坏の脚部で、摩耗しているが、刷毛目がわずかに残存する。

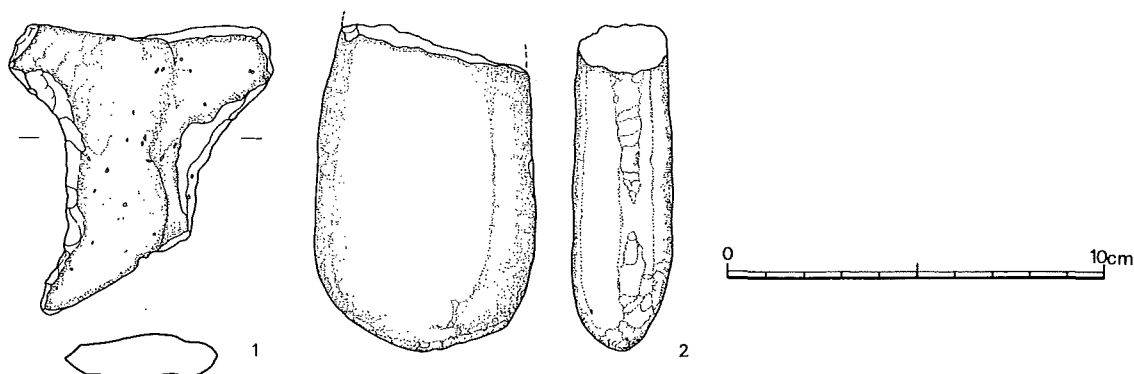
石器 (第9図・表2)

1は、いわゆる分銅形といわれる打製石斧の基部と思われるものである。板状節理片を素材として胴部両側に大きな抉り込みを施しており、刃部欠損のため形状は明確でない。2は、扁平な円礫を素材とした敲石である。下端部・側面のみ利用している。

III—3区

弥生土器 (第10図 1~9)

全て甕の破片と思われるものである。1は、ややシャープな断面三角形の突帯が口縁下を巡っている。金雲母を微量含んでいる。2は角閃石・白雲母を混入し、かなり堅緻なつくりをしている。外面に幅広の刷毛目を残し、内面にモミ圧痕を有する。3・4は内傾し、外面にやや幅広の刷毛目が残る。



第9図 III-2区の石器

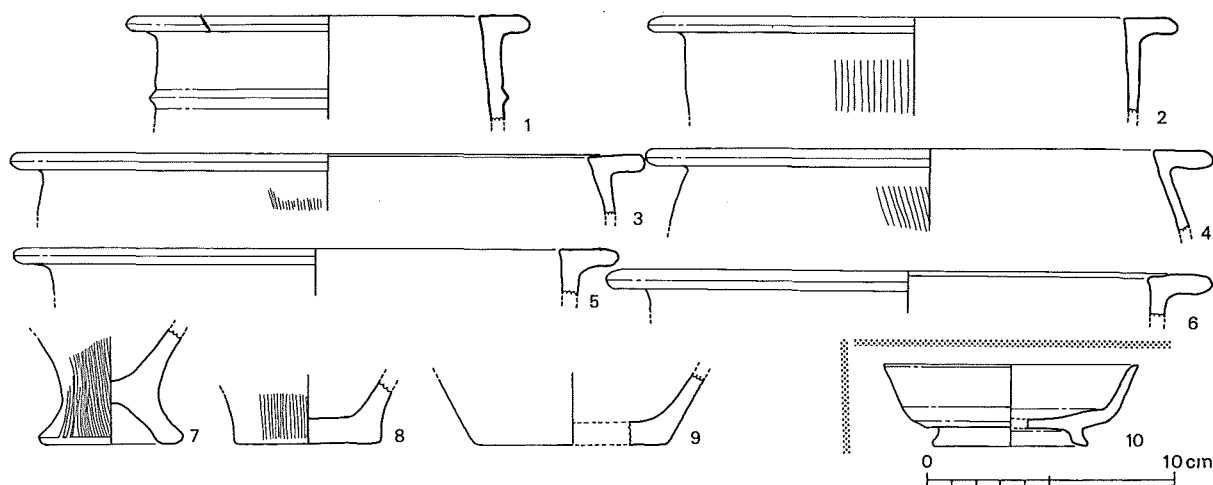
表2 III-2区石器組成表 (長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第9図1	打製石斧	安山岩	77	70	41	61	刃部形状が不明
2	敲石	安山岩	86	59	26	211	下端部・側面に使用痕

3は摩耗しているが, 双方とも堅緻なつくりである。4には金雲母が混入されている。5・6は口唇内面を粘土でやや肥大させている。6の胎土には角閃石が混入している。7～9は甕底部と思われるものである。7は台付甕の底部で, 刷毛目が明確に残る。胎土に角閃石を含む。8・9は比較的底が薄く, 胎土に長石を含む。

須恵器 (第10図 10)

杯身が出土している。色調は内壁が淡赤橙色, 外壁が明赤灰色を呈し, 内部に粗い刷毛目が残る。高台の畳付きは平坦になっていて, 小田編年の第VII B期に相当するものと考えられる。7世紀末から8世紀初頭であろう。

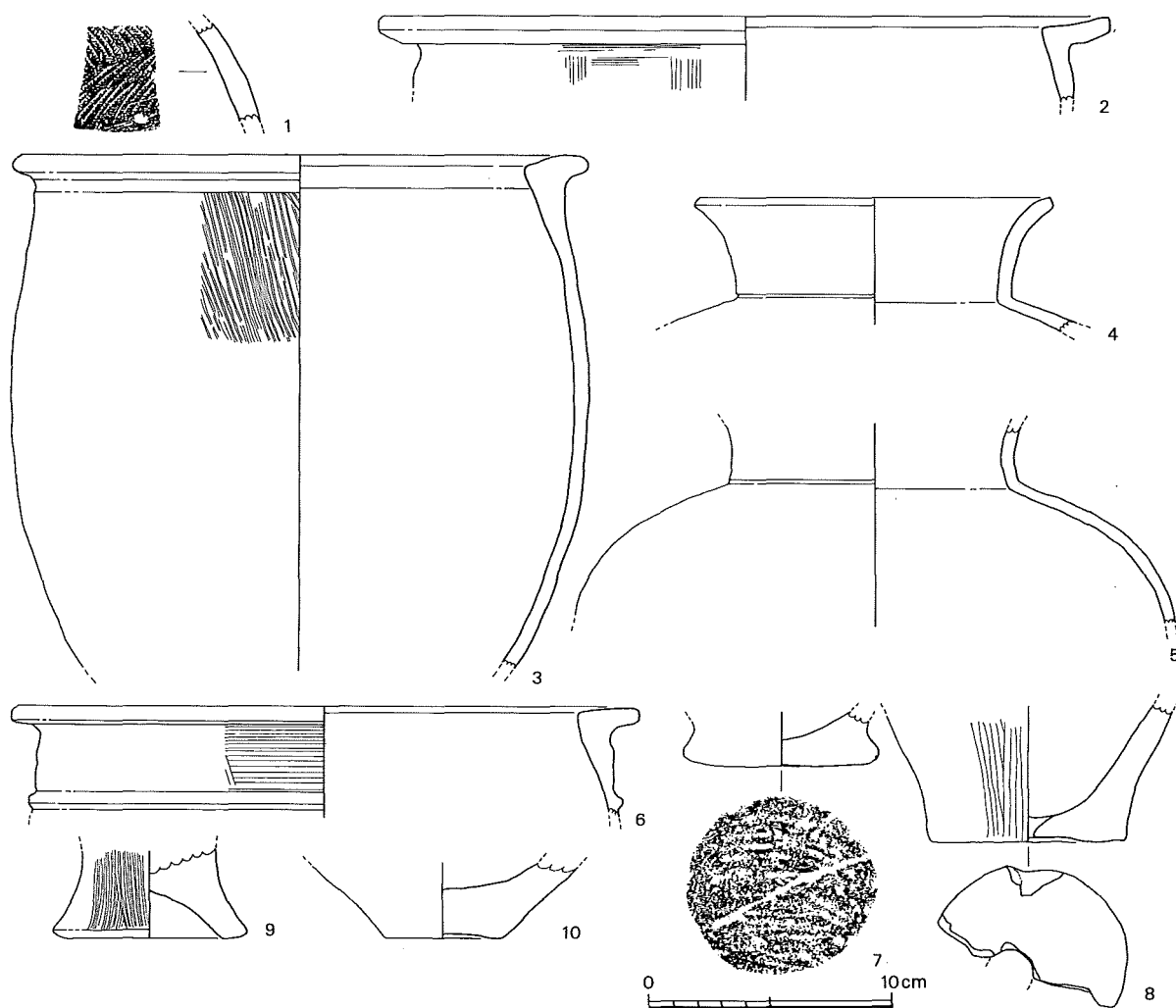


第10図 III-3区の土器

III-4区

弥生土器 (第11図)

1は、貝殻施文の上に丹塗りした壺と思われる土器で、板付II式に含まれる前期のものである。裏面も塗っていたと考えられるが、器面が剝離しており、特定できない。胎土には、金雲母が少しと石英が多く混入している。2・3および6は、甕の口縁部から胴部にかけてである。2は、口唇内壁に鋭い稜を形成し、やや反っている。胎土には金雲母・白雲母を多く含む。3は胴部に明確に刷毛目を残し、器壁が薄い。金雲母・角閃石を含み、口唇は若干垂れる。6は口唇内壁が内傾し、口縁は平坦である。口縁下に断面半円形の突帯を持っている。胎土に金雲母と砂を多量に含み、あまり堅緻ではない。4・5は丁寧に研磨された壺の口縁から胴部分である。口縁部には横方向に刷毛目が施され、頸部つけねにヘラによる沈線が巡る。双方とも胎土に金雲母を含み、堅緻なつくりである。4は外面の色調は赤色だが、胎土と外面の色調が異なり、丹塗りか胎土によるものか肉眼で判別できない。5は胎土が赤色であるため、丹塗りとは思われない。7~9は甕と思われる底部である。7は平底で、底面に編物痕が、内面にモミ圧痕が残る。弥生前期と思われる。8は胎土に長石・白雲母を混入し、



第11図 III-4区の土器

底に穿孔する。9は、台付甕の底部である。丁寧な器面調整を施す。胎土に白雲母・石英を含み、色調は黄灰褐色である。10は壺の底部で、外面に粗雑なミガキを施す。

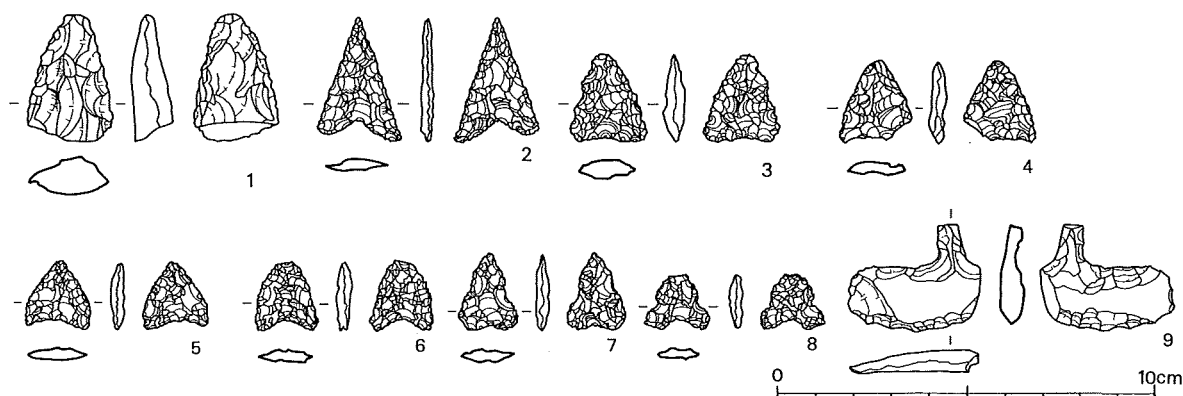
石器 (第12図, 表3)

1～8は狩猟具系列の石器である。1は尖頭器で、全体を丁寧に加工している。2～8は石鏃である。8は基部抉入が浅く、胴部両側に抉り込みを施しているため、脚部が突出状を呈している。9は、刃部形成時につまみを作出した石匙である。小形ではあるが、両面加工を施す。正面右側は欠損している。

III-5区

弥生土器 (第13図 1～7)

1～6は甕の一部である。1は断面三角形の亀の甲型の口縁である。口唇にかけてやや外反し、口縁下に薄く幅広の刷毛目を残す。胎土に砂をほとんど含まず、堅緻である。2・3は口唇が平坦で、やや内部に張り出す。胎土に金雲母・白雲母を混入し、色調は赤色である。4は口唇内壁に張り出しをもつ鋤形口縁である。口唇調整のために、やや凹んでいる。胎土に金雲母・石英を含む。5・6は底部で、やや上げ底を呈し、刷毛目を残さないほどナデを施す。胎土は類似しており、角閃石・雲母・石英を混入する。7は土師質の土錘で、胴部中心がやや膨らみを帯びているため、b類である。



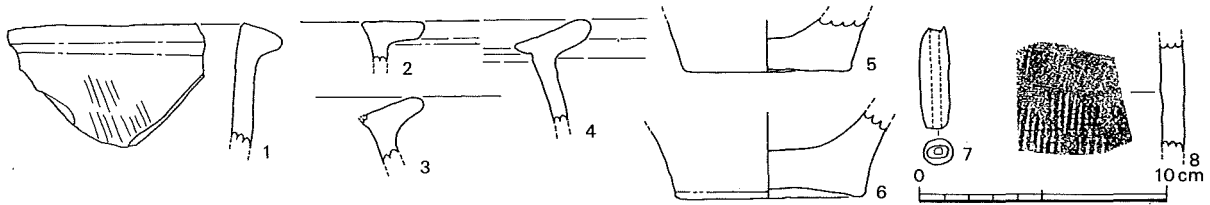
第12図 III-4区の石器

表3 III-4区石器組成表 (長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第12図1	尖頭器	サヌカイト	31	23	4	6.8	丁寧な両面加工
2	石鏃	暗灰色黒曜石	28	22	3	1.1	入念な二次加工
3	石鏃	黒曜石	23	22	5	1.9	
4	石鏃	黒曜石	22	19	4	1.3	
5	石鏃	黒曜石	18	22	3	0.8	
6	石鏃	黒曜石	18	17	4	0.9	
7	石鏃	黒曜石	21	15	3	0.8	
8	石鏃	黒曜石	15	17	3	0.5	
9	石匙	不明	28	35	6	4.7	横長剥片を二次加工

須恵質土器 (第13図 8)

8はかなり摩耗した須恵質土器である。刷毛目調整の後、格子目タタキを施しナデ消しているが、裏面にはタタキ目を確認できない。しかし、凹みが各所に認められ、無文当て具を使用したものと考えられる。軟質で、8世紀以降の製作であろう。



第13図 III—5区の土器

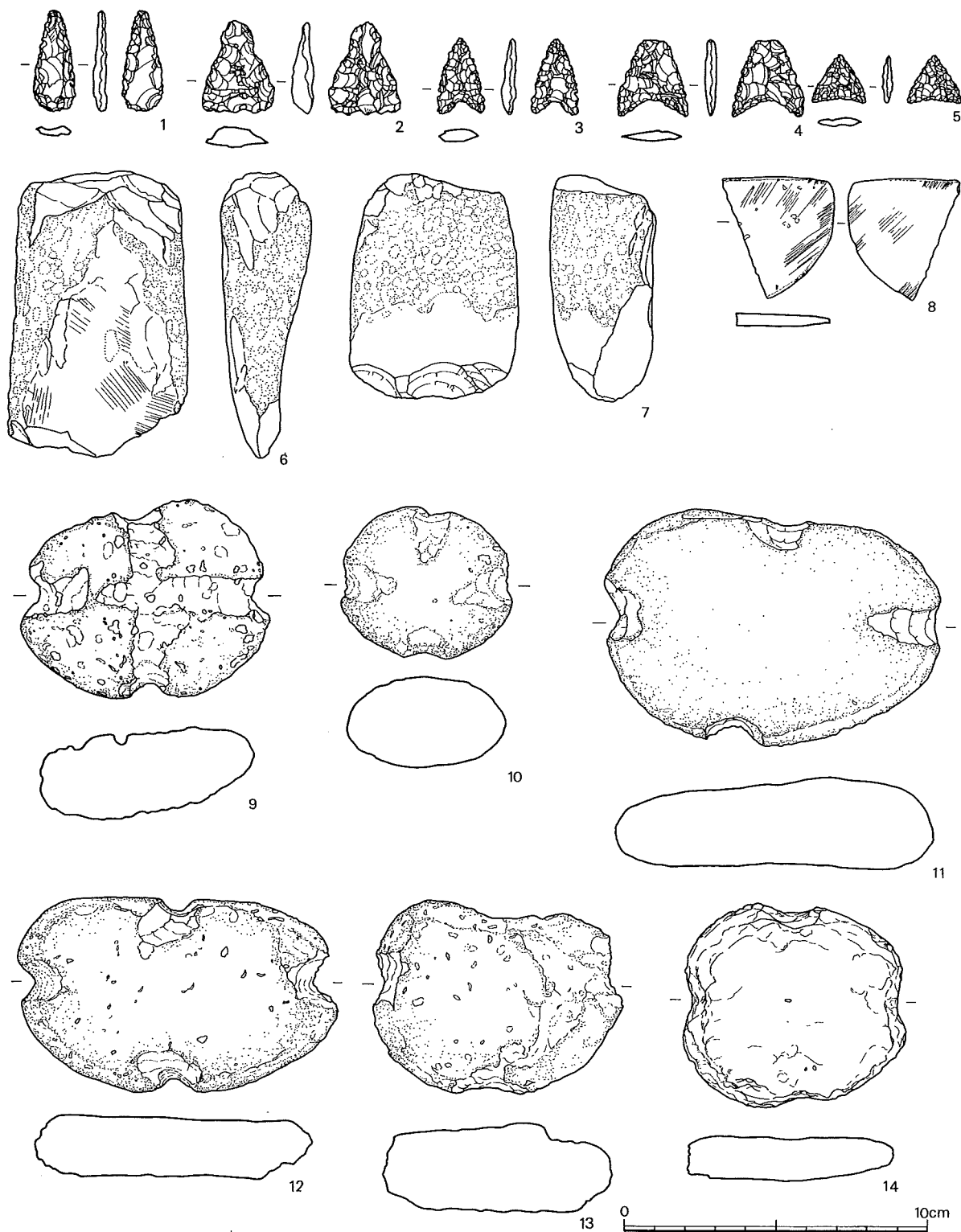
石器 (表4・第14図)

1を除いて、2～5は黒曜石製である。1は、縦長剥片の両側両面に二次加工を施している。2は、やや厚手の剥片を素材とし、頭部両側にゆるい抉入加工を施す。3は両面とも入念に加工している。4は尖頭部が欠損しているが、極めて薄く仕上げられている。5も4と同様なつくりで、先端・脚部は鋭利に調整されている。6・7は太形蛤刃石斧と思われる磨製石斧である。6は胴部に敲打整形を施した後、丁寧に研磨して刃部を作出している。基部は両面から剥離調整されており、背面は使用中の欠損と思われる刃部側からの大きな剥離面がある。7は、円礫を敲打整形した後研磨したものである。刃部に大きな剥離面がみられ、使用中の欠損か再加工のため形成されたものかは確認できない。

表4 III—5区石器組成表 (長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第14図1	石鏃	不明	33	13	3	1.6	縦長剥片を利用
2	石鏃	黒曜石	30	16	6	3.9	尖頭部は作出されず
3	石鏃	黒曜石	25	16	4	1.2	部分的に鋸歯状に加工
4	石鏃	灰色黒曜石	25	24	3	1.5	丁寧な平坦剥離
5	石鏃	暗灰色黒曜石	16	18	3	0.5	4と同様の丁寧なつくり
6	磨製石斧	頁岩	95	59	30	250	太形蛤刃石斧
7	磨製石斧	玄武岩	74	56	34	220	太形蛤刃石斧
8	石庖丁	不明	40	37	4	7.3	全面に丁寧な研磨。刃部は片刃
9	石錘	安山岩	83	65	28	150	両面に十字形の溝
10	石錘	安山岩	3	50	30	91	
11	石錘	安山岩	101	78	30	330	
12	石錘	安山岩	105	64	25	190	
13	石錘	安山岩	83	64	29	190	
14	石錘	結晶片岩	72	67	14	112	

8は安山岩質と思われる石庖丁で、全面を丁寧に研磨されている。9・10は有溝石錘、11～14は切目石錘である。9～13は円礫を利用している。9は長軸・短軸双方に十字形に敲打整形を、10は切り込み部分から長軸短軸方向で敲打整形を施している。11～14にも切り込み部分から敲打整形が施されている。



第14図 III-5区の石器

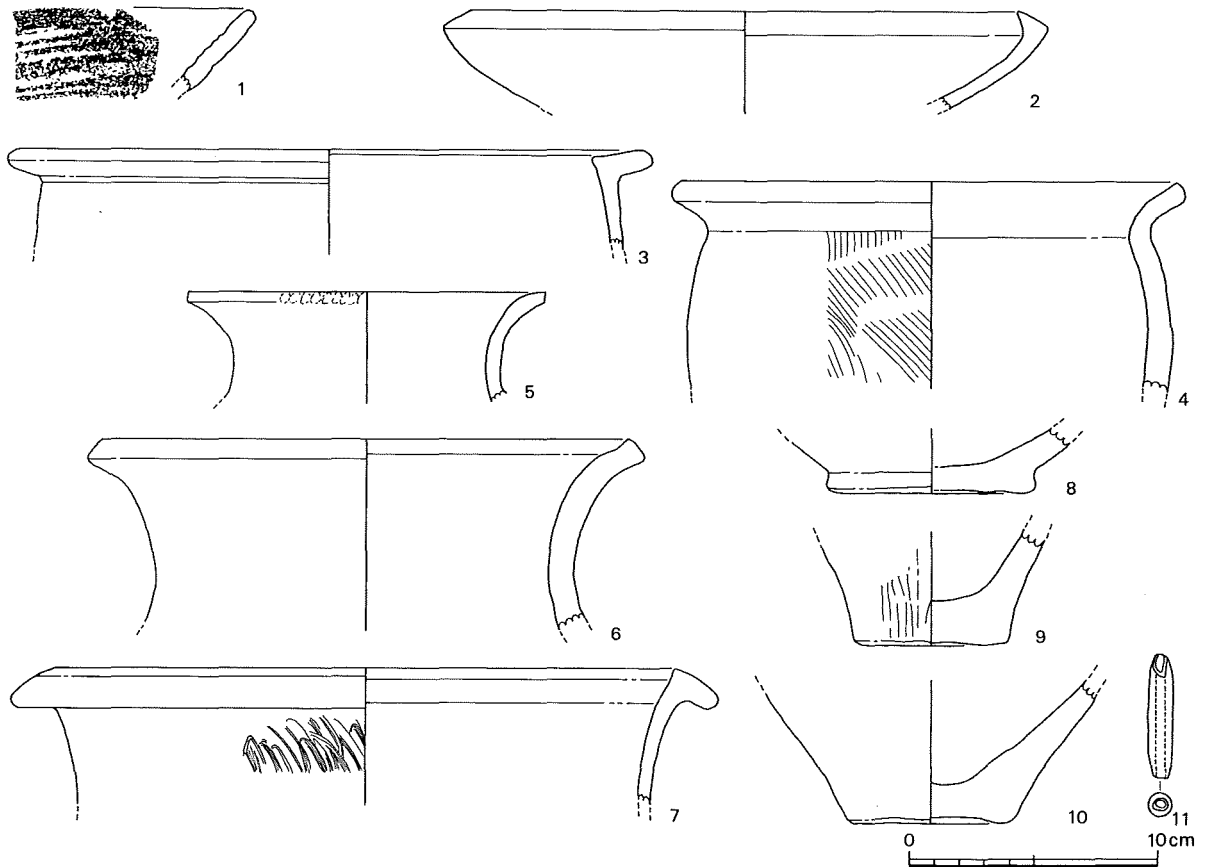
III-6区

縄文土器 (第15図 1・2)

双方とも縄文晩期の土器である。1は、胎土に結晶片岩・白雲母を多量に混入する粗製土器の口縁部分である。両面に条痕がみられるが、外面はナデ消している。口唇先端はヘラ等でナデて平らにしている。2は、丁寧に磨かれた精製浅鉢である。胎土に白雲母を混入する。

弥生土器 (第15図 3~11)

3・4・7は甕の口縁部である。3は堅緻なつくりで、口縁下にヘラ書きと思われる細く浅い沈線が巡る。口唇は若干凹み、口唇内側にはわずかに粘土が張り出している。4は幅広の刷毛目を施し、ナデ消している。口唇内側はヘラでナデている。胎土に長石を含む。7はかなり外反した口縁で、亀の甲型が下方にやや伸びた状態の口縁と思われる。外面はナデ後、ヘラ具を使用している。胎土には、砂を多く混入している。5・6は同時期と思われる壺の口縁部である。5はかなり磨滅しているが、口唇に型押ししたような跡が残っている。角閃石が多く混入している。6は焼成が良好で、重厚なつくりになっている。調整は横方向の刷毛目を施しているが、内壁下半分に指跡がみえる。8は胴部が扁球形に近い壺の底部である。9・10は若干上げ底の甕の底部である。9には縦方向の刷毛目がみられるが、10の刷毛目調整はナデ消してあるようだ。11は細い扁平楕円の土錘で、b類と考えられる。



第15図 III-6区の土器

石器 (第16図・表5)

1～25は石鏃である。1・2はかなり肉厚なもので、加工が粗い。3・4は1・2ほど厚さはないものの、共通点が多い。5は円基鏃で、先端部より基部を重点的に加工している。8は、左右ほぼ同位置に抉り込みを施した鋸歯鏃である。10～15は平面概形を正三角形とするもので、基部に弧状の抉りを施す。16～24においても同様なつくりである。25は剝離調整された後、研磨されており、正面左側に槌状剝離が走っている。26は石庖丁で、かなり破損しているが所々に研磨痕が残る。27は先端部が欠損しており、全長は不明である。28は、図裏面に刃部形成の剝離を施した後、各所に研磨を施した磨製石斧と思われるが、刃部調整が不完全であったため、基端の敲打痕から敲石に転用したものと考えられる。29は、円礫の長軸・短軸に抉り込みを施した石錘である。30は碧玉製の管玉で、北九州型のⅣ式と思われる。31は抉状耳飾と思われる破片には、修正孔が貫通している。30・31については、1, 2点とわずかなため、考察は困難である。

Ⅲ-7区

弥生土器 (第17図 1～14)

1～3は前期の壺胴部と甕口縁部の破片である。1は外面を丁寧にナデ調整した後、ヘラ書き沈線を施したもので、やや粗雑なつくりになっている。2は如意形口縁で、口縁の下端にヘラで断面V字の刻み目を入れており、四反田遺跡ではA aに分類されている。3・5・7は亀の甲型の口縁部である。3は断面三角形の口縁部で、細く鋭い刻み目が巡っている。胎土には砂が多量に混入し、かなり粗雑なつくりになっている。5・7は刻み目がない口縁で、7は鋭い口縁と突帯をもつ。色調は3・5が赤褐色だが、7は淡灰褐色を呈する。1・2は前期後半、3は下っても中期初頭と思われる。8・9は口縁下に突帯をもつ甕の口縁部で、8の突帯の方が比較的鋭利である。8の口唇はかなり内傾しており、胴部上位が張るようだ。9は粗雑なつくりで、器壁がかなり薄い。胴部最大径は8より下部である。口縁下端が若干肥大する傾向にある。4・6は中期前半と思われる壺である。4の外面には横方向の刷毛調整後、縦方向のミガキが施され、堅緻なつくりとなっている。6は比較的粗雑に形成されている。口縁下端に浅い刻み目を巡らしている。10～14は甕あるいは壺の底部である。10は外面の刷毛調整後、縦方向にヘラ撫でを施す。12は焼成後、道具を使用して底部に穴を穿ったようなタタキ跡がみられる。

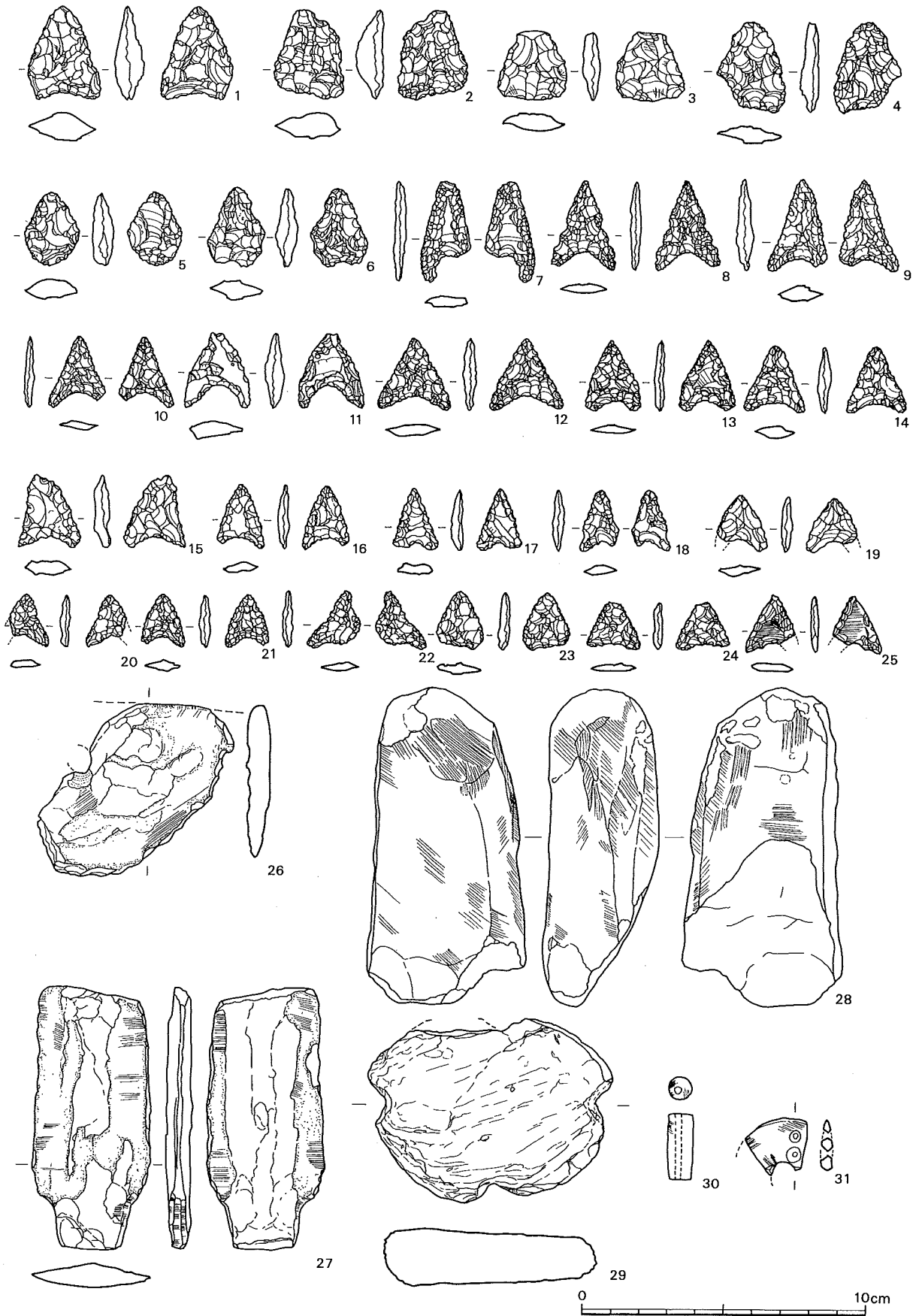
その他の土器 (第17図 15～17)

16は、口唇外面に丹がわずかに残る布留式系統の甕口縁部である。胎土には白雲母・長石を多量に混入し、弥生土器のような粗雑な仕上がりである。胎土の様子から、在地でつくられた土器であろう。17は底部にヘラで削った跡があり、やや丸みを帯びているため、在地系の土師杯と思われる。口縁はわずかに外反しており、また、胴部中央から底部にかけて肥大しているため、4世紀末から5世紀前半のものと考えられる。15は揚子江型土錘とみられるが、用途不明の土製品である。

石器 (第18・19図 表6)

剥片石器において、この調査区では、同一層から三稜尖頭器が出土している。自然面打面から剝出

黒丸遺跡 I



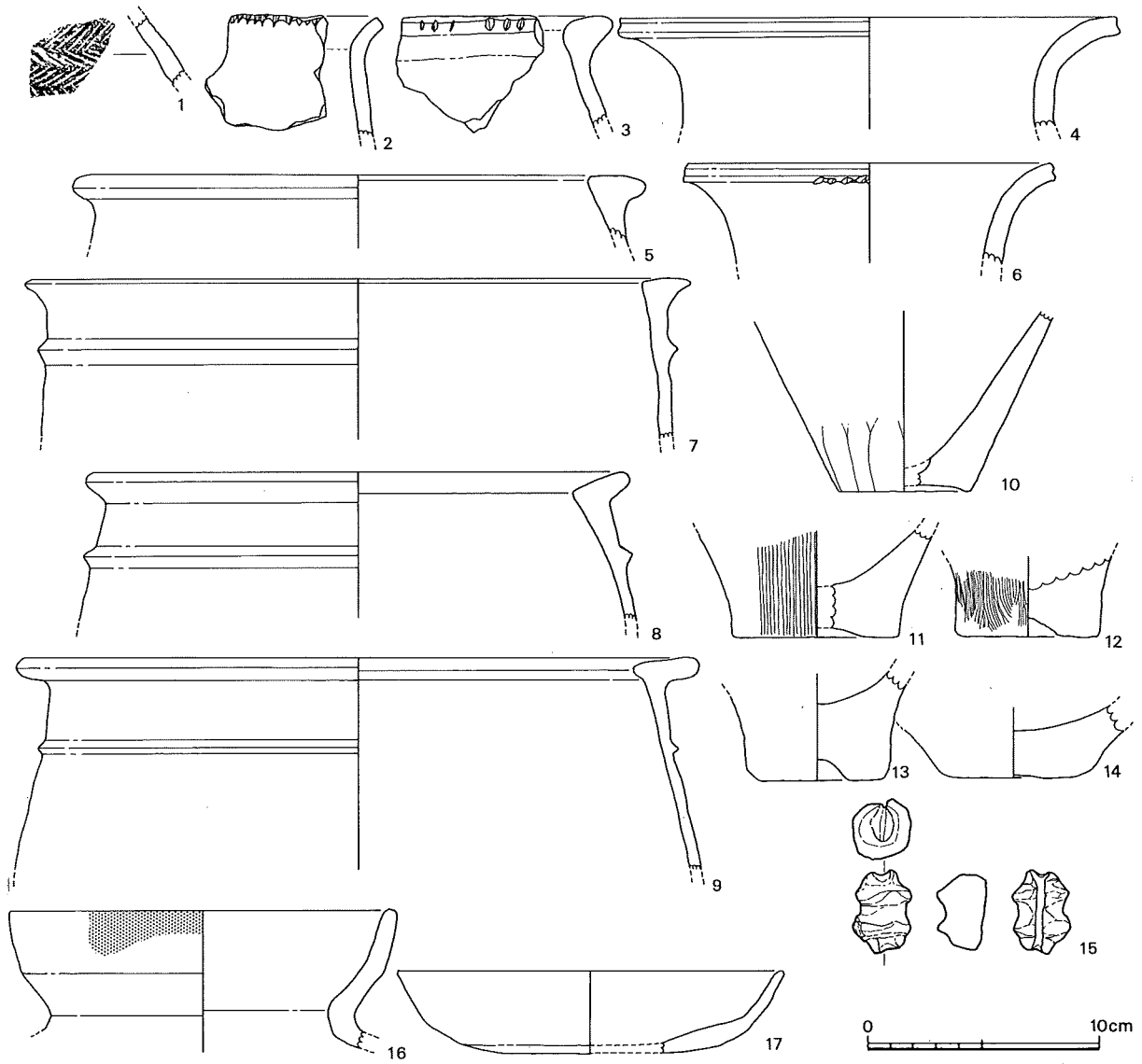
第16図 III-6区の石器

表5 III-6区石器組成 (長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

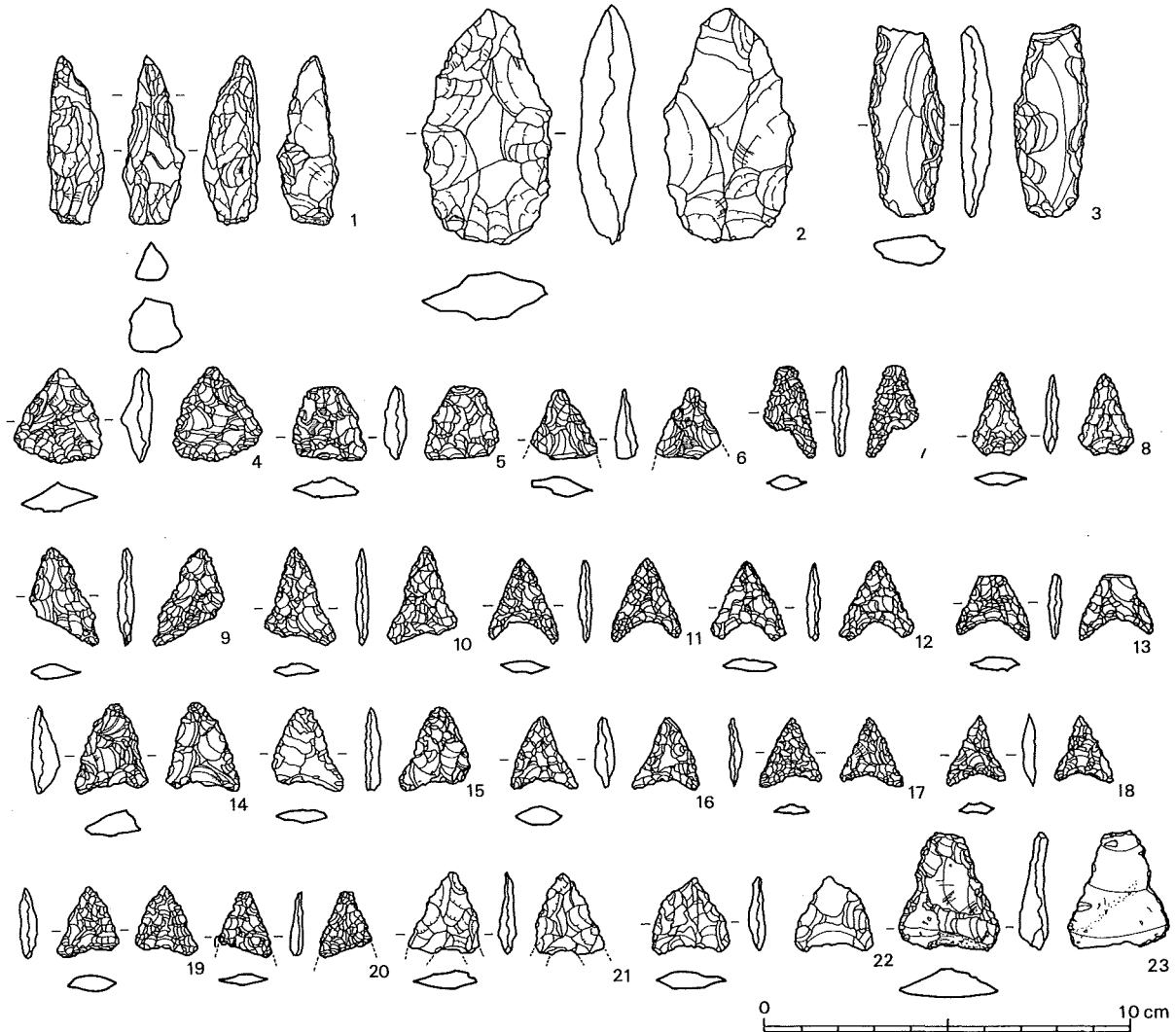
番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第16図1	石鏃	暗灰色黒曜石	33	26	10	5.5	大形で加工が粗い
2	石鏃	黒曜石	32	24	9	6.0	大形で尖頭部は作出されず
3	石鏃	サヌカイト	24	22	6	3.3	大形で加工が粗い。先端部欠損
4	石鏃	黒曜石	32	23	6	3.3	大形で加工が粗い
5	石鏃	黒曜石	26	19	7	2.9	
6	石鏃	黒曜石	28	20	7	2.4	両脚部欠損
7	石鏃	黒曜石	36	17	4	2.0	鋤形鏃に近似。脚部欠損
8	石鏃	黒曜石	32	23	3	1.4	丁寧な両面加工
9	石鏃	サヌカイト	33	21	6	2.3	脚部欠損
10	石鏃	暗灰色黒曜石	25	20	3	0.7	基部に弧状の抉り込み。脚部欠損
11	石鏃	暗灰色黒曜石	26	23	6	2.1	基部に弧状の抉り込み
12	石鏃	暗灰色黒曜石	25	26	4	1.5	平面概形が三角形状
13	石鏃	黒曜石	30	20	3	1.0	脚部欠損
14	石鏃	黒曜石	23	21	5	1.2	
15	石鏃	灰色黒曜石	26	22	5	2.4	
16	石鏃	サヌカイト	23	16	4	0.9	
17	石鏃	暗灰色黒曜石	22	16	4	1.0	
18	石鏃	黒曜石	22	14	3	0.7	脚部欠損
19	石鏃	安山岩	19	27	4	0.9	
20	石鏃	黒曜石	18	14	3	0.5	
21	石鏃	灰色黒曜石	19	16	4	0.7	脚部欠損
22	石鏃	黒曜石	20	13	3	0.6	
23	石鏃	黒曜石	20	16	4	0.9	脚部欠損
24	石鏃	黒曜石	16	19	3	0.7	
25	石鏃	灰色黒曜石	20	17	3	0.8	局部磨製で樋状剝離あり
26	石庖丁	泥岩	69	46	8	37	研磨痕あり。刃部は両面からの剝離加工
27	磨製石剣	泥岩	92	41	9	43	一部明確な稜線あり
28	磨製石斧	蛇紋岩	112	56	41	354	各所に研磨痕・頭部に敲打痕あり。未製品
29	石錘	結晶片岩	96	65	20	139	
30	管玉	深緑色碧玉	24	9	8	2.9	
31	抉状耳飾	不明	19	22	6	2.2	

した縦長剥片に、主に主要剥離面側からのブランディングを施したものである。加工は上半部に集中し、基部付近はバルブを除去したような剥離面を残す。先端部に摩耗痕が認められることから、後に石錐に転用したものと思われる。2・3は木葉形尖頭器である。肉厚であるため尖頭部に鋭利さがない。3は翼状の横長剥片の両側に両面加工を施す。石槍あるいは石鏃を意図しているものと思われる。4～23は石鏃である。円基鏃4や基部が直線的なもの5があるが、ほとんどが弧状の挟り込みをしている。16の研磨痕は中央部の厚さを薄くするための処置と考えられる。23は、剥片の両側面に主要剥離面からのみ二次加工を施したもので、未製品と思われる。

大陸系石器・礫石器については、第19図であるが、1は鏃を有しない全面磨製石鏃で、断面は極めて薄く扁平に作られている。2は磨製石庖丁で、刃部は両面から研磨されている。両側辺は素材の断面を残しているため破損品のように見えるが、断面と平坦面が交差する稜部には摩耗痕が認められ、この状態で使用されたものといえる。3は片刃磨製石斧で、刃部には微細な刃こぼれ状の剥離痕を残



第17図 III-7区の土器



第18図 III-7区の石器①

す。基部と刃部は胴部と比較して光沢が強く、着柄および切削作業によって生じたものと思われる。

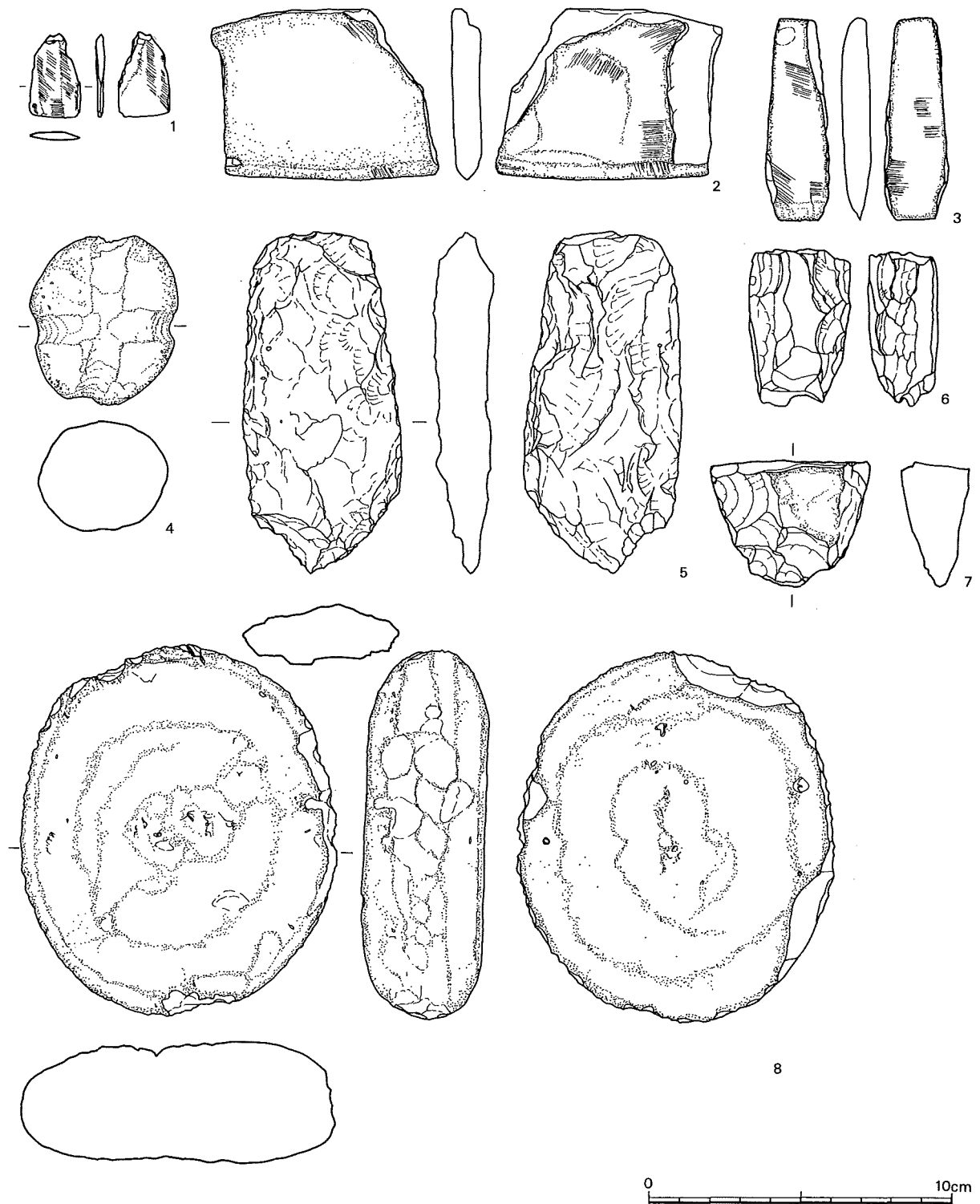
5の打製石斧は正面左側が欠損しているが、刃部を尖頭状に作出していたものと思われる。8の台石は周囲にも部分的に敲打痕が認められ、敲石としても兼用されていたことがうかがえる。

遺構 (第20図)

この調査区ではIII層中位から用途不明の土壌を検出し、その中から遺物を得ることができた。そのため、ここでは土壌とその遺物内容について検討してみる。

① 土壌1

この土壌では、石器製品やその製作過程に生じる黒曜石片が多数出土した。なかでも剥片や破片が最も多く、ここではその一部を提示した (第20図・表7)。1~4は石鏃で、欠損してはいるがいずれも円基鏃である。5~10はスクレイパーで、5は縦長剥片の両側を剥離加工しており、一部主要剥離面に加工痕を施した部分がある。6は主要剥離面側から、7は背面側からの加工によって、各々刃部を形成している。9は、半径が2cm未満ではあるが周囲に急斜な剥離を施す。11は石核であるが、打面・石核面の調整が認められない。13~39は剥片・破片では、使用痕があるものも出土した。製品よ



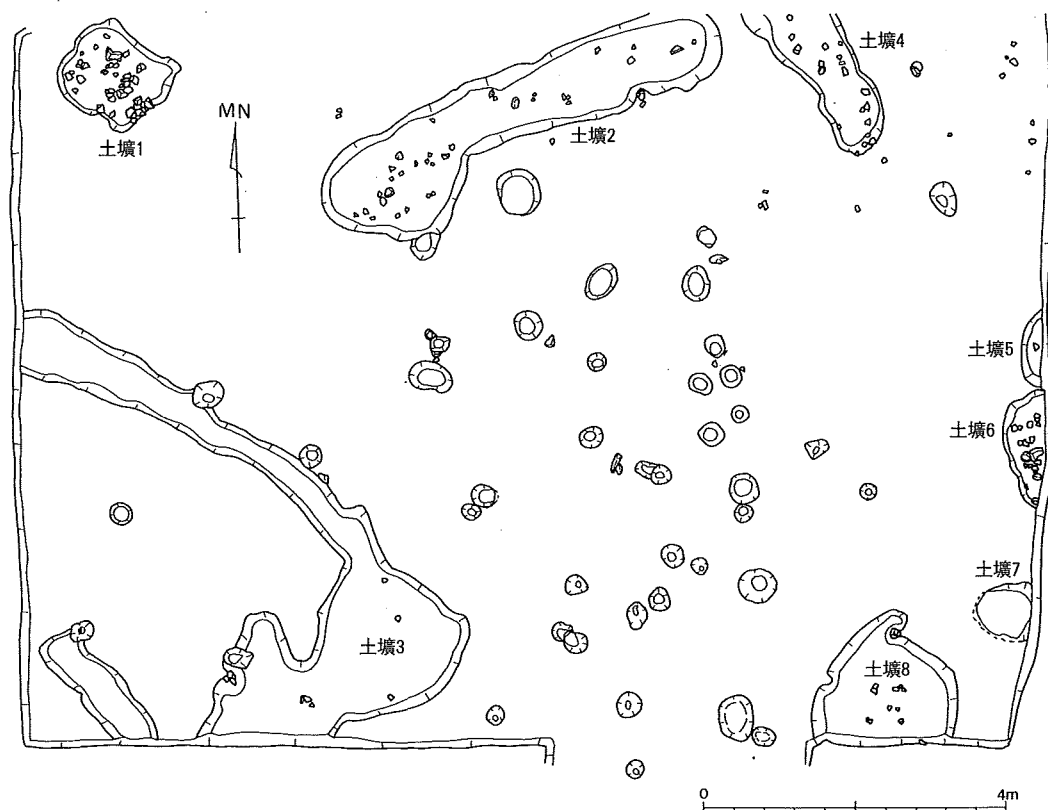
第19図 III-7区の石器②

りこのような破片が多く出土しているため、土壌は1は、主に石器製作の場であったと考えられる。

土器については、接合できるものを数点確認した(第21図)。1・2は口縁下に丸みを帯びた突帯を巡らした甕口縁部である。口縁で断面三角形を呈する亀ノ甲型で、器形はほぼ同じものと思われる。

表6 III-7区石器組成(長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第18図1	三稜尖頭器	サヌカイト	46	16	15	11	先端部に摩耗痕
2	尖頭器	サヌカイト	74	39	13	30	二次加工が粗雑
3	尖頭器	不明	52	20	8	9.0	先端部が欠損
4	石鏃	黒曜石	26	25	8	2.9	基部がや突出
5	石鏃	黒曜石	20	20	6	1.8	
6	石鏃	灰色黒曜石	19	18	6	1.3	
7	石鏃	黒曜石	25	14	4	0.7	刃部は鋸歯状。先端・左脚欠損
8	石鏃	黒曜石	12	15	4	0.7	両脚欠損
9	石鏃	黒曜石	27	19	4	1.2	左脚欠損
10	石鏃	暗灰色黒曜石	27	19	3	0.9	両脚欠損
11	石鏃	黒曜石	13	19	3	0.6	
12	石鏃	暗灰色黒曜石	22	20	4	0.7	両脚先端欠損
13	石鏃	暗灰色黒曜石	17	20	4	0.6	先端欠損
14	石鏃	黒曜石	24	20	7	2.2	肉厚で粗雑
15	石鏃	黒曜石	23	19	4	1.4	左脚欠損
16	石鏃	黒曜石	19	19	5	0.9	中央部を研磨
17	石鏃	黒曜石	19	17	3	0.3	
18	石鏃	黒曜石	19	16	3	0.4	
19	石鏃	黒曜石	19	16	5	0.8	
20	石鏃	黒曜石	17	14	3	0.4	
21	石鏃	サヌカイト	22	20	5	1.4	脚部欠損
22	石鏃	サヌカイト	21	22	5	1.4	
23	石鏃	黒曜石	32	28	8	4.6	頭部と基部に自然面。未製品
第19図1	磨製石鏃	灰黒色粘板岩	28	28	3	1.5	先端部・基部欠損
2	石庖丁	細粒砂岩	56	75	9	58	刃部は両面から研磨
3	小形磨製石斧	泥岩	67	21	9	21	石ノミ状で全面研磨
4	有溝石錘	輝石安山岩	56	52	36	121	敲打技法による溝
5	打製石斧	安山岩	113	52	20	157	全面加工
6	磨製石斧	炭質頁岩	52	32	22	57	剝離加工を施し、左側面に研磨痕。未製品
7	打製石斧	安山岩	41	53	52	51	刃部片。かなり摩耗
8	台石	安山岩	123	105	40	670	周囲に敲打痕



第20図 III—7区3層土壙配置図

3は頸部と胴部の境界に貼付突帯を巡らす壺で、扁球形を呈する。胴部上半は明確でないが下半部にミガキを施す。頸部は肩部から急傾斜で立ち上がる。肩部の張りや頸部の立ち上がりから、中期前半の城ノ越式土器(橋口K II b式、宮崎中II期)であり、共伴する1・2については同時期のものと考えられる。

② 土壙2・4～6

いずれの土壙からも、土器・石器がわずかに出土している。

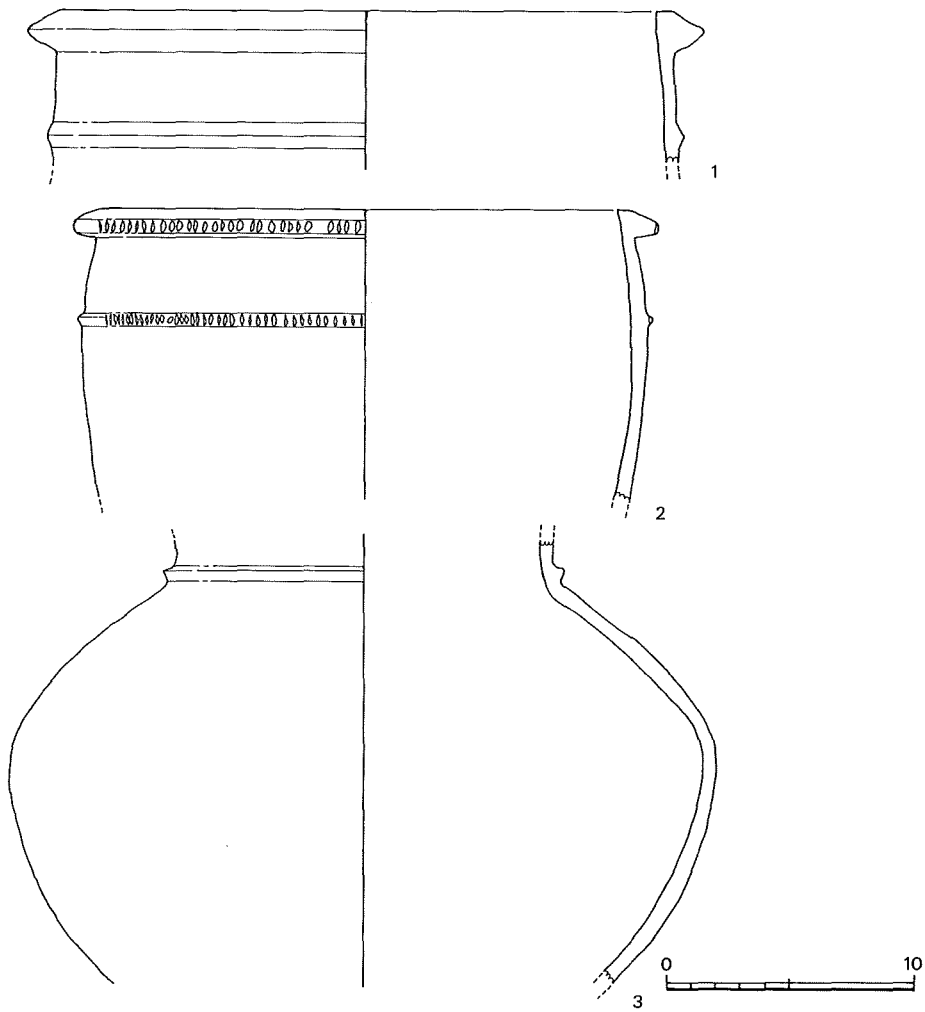
土壙2出土の土器は、断面三角形を呈する口縁の甕や、口縁が肥厚した壺の破片が出土した(第23図)。1の口縁下の突帯は比較的シャープに形成され、口縁は亀ノ甲型の特徴を有する。2は口縁上端は平坦ではないが、内外面に段を有し、宮崎の中I期と考えられる。石器は、第24図のとおりであるが、石鏃が多く出土している。1は形態的には石鏃と変わりはないが、特に大形であるため尖頭器とする。背面中央に自然面を残し、比較的粗い加工を施す。12は円形に近い楕円で、その中央に両面から穿孔している。石材は片岩質と思われる。本遺跡の周辺では牛込B遺跡、富の原遺跡、伊木力遺跡等からの出土例があるが、用途・機能については明らかではない。

土壙4～6については、土器は、如意形口縁の甕(第25図4)や、口縁に断面三角形の刻目突帯をもつ亀ノ甲型口縁(同図6)、頸部はやや直線的に立ち上がり、口縁部が外半する中期初頭の様相を呈する壺の口縁部が出土している(同図5・8)。石器はほとんどが石錘で、挟入部分は研磨によるものである(第26・27図)。

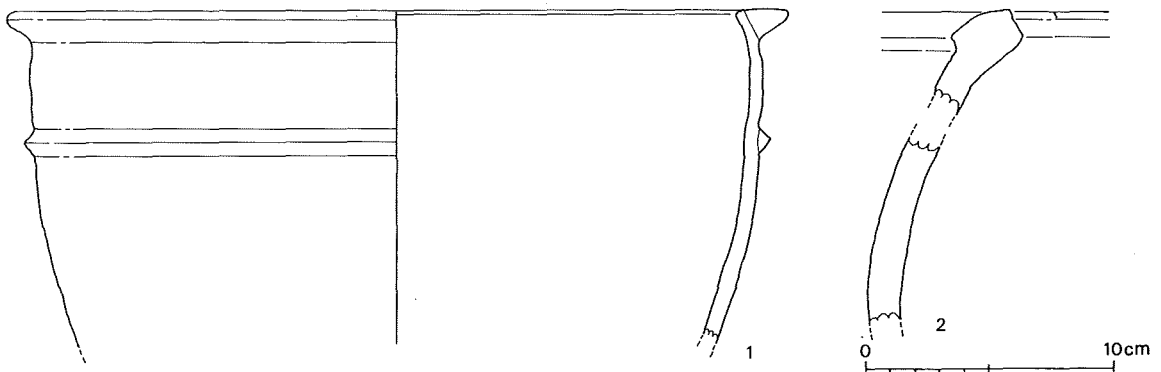


0 10cm

第21図 土壙Iの石器



第22図 土壇1の土器

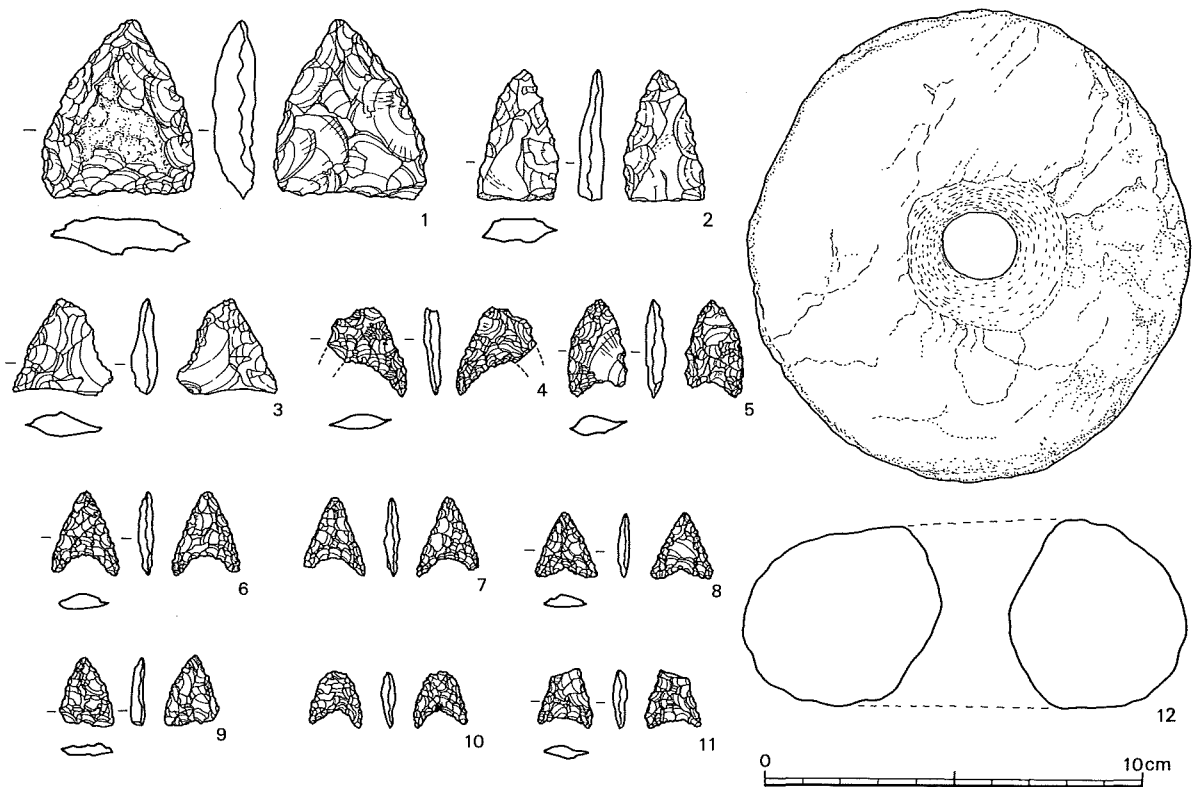


第23図 土壇2の土器

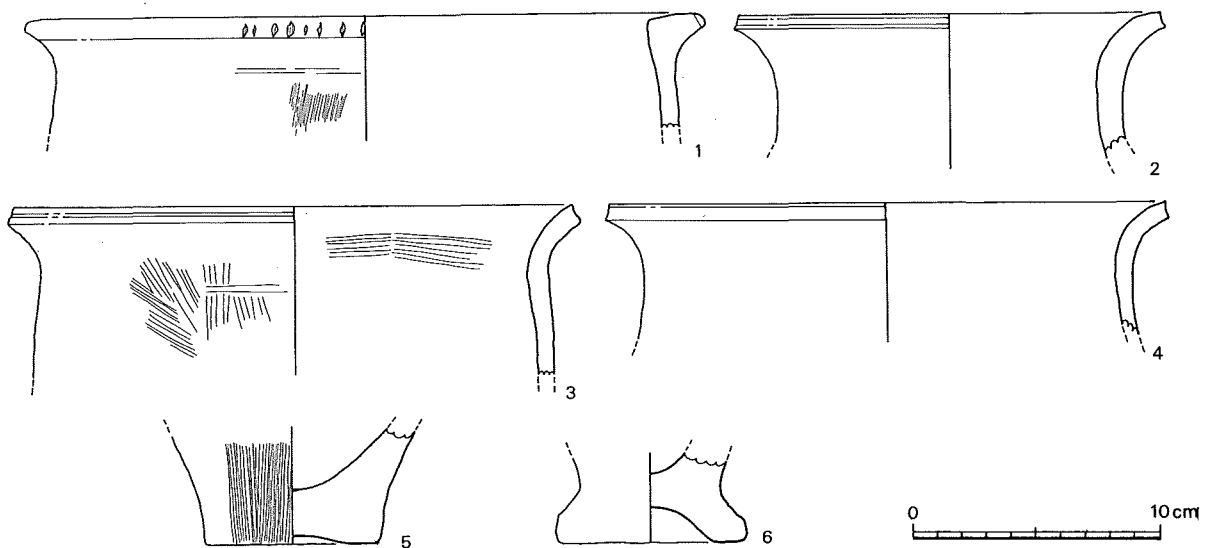
III-8区

弥生土器 (第28図)

板付II式の頸部の段が明確で、肩部に円弧文を描いた壺片2点1・2、亀ノ甲型の断面三角形の甕口縁部2点3・4、短い平坦口縁をもつ甕5、横に一条と縦に暗文を施した壺の口縁6等が出土して



第24図 土壌 2 の石器

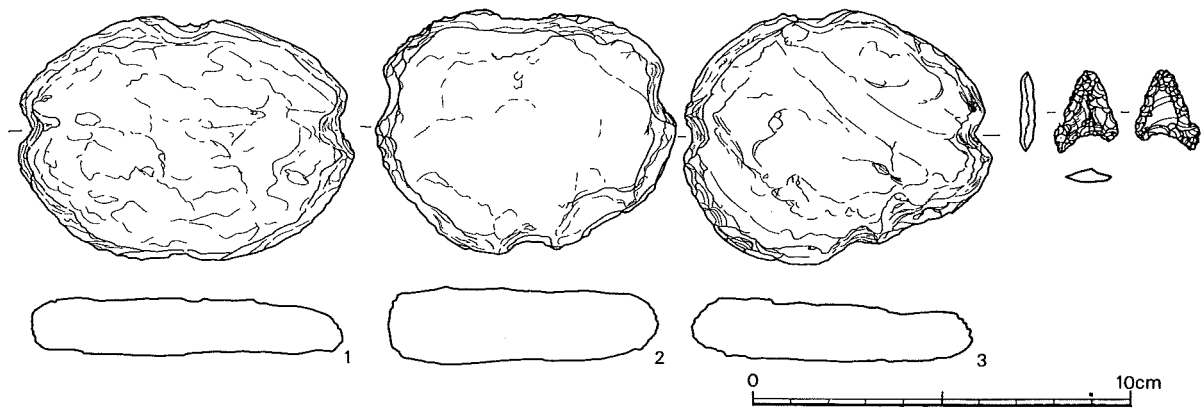


第25図 土壌 4～6 の土器

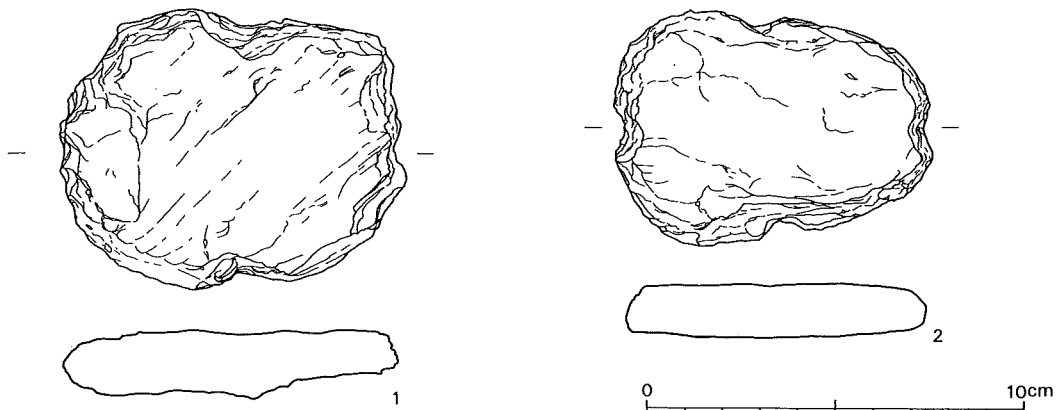
いる。底部はかなり分厚く作られており、前期後半から中期前半のものである。13は土錘で、b類に属する。

石器 (第29・30図, 表9)

第29図は石鏃, 第30図の1～6は石錘, 7～9は石斧である。1は大形・厚手で機能的には石銛に近いものであろう。9の剝離面はパティナが古く, 光沢を失っている。23は頭部の欠損状態から, 正面右上方向に伸びるようであるが, 本来の形状は推測しがたい。第30図の2・6については有溝石錘である。



第26図 土壌4の石器



第27図 土壌6の石器

2は、正面右側の袂りからのみ敲打形成による溝が中央まで達しているが、残り3カ所の袂入加工についても溝を形成しようとした様子がみられる。3の袂入加工は、側面からの見通しで「×」形になる。7の石斧は、左側面が擦切り技法によって作出されている。8は図上端部に敲打痕があり、敲石としても使用されたとと思われる。

Ⅲ-9区

弥生土器 (第31図)

1～3は板付Ⅱ式とみられる壺肩部片で、いずれも彩色されていないが、2・3は研磨されている。2は薄手で、肩部はかなり張る。4は、断面三角形の口縁部である。磨滅しており、金雲母・砂が多く混入する。5は口縁外面に粘土貼付時の段がなくなり、上端が平坦に形成され、宮崎の前Ⅳ～中Ⅰ期相当に位置付けられる。6は壺底部で、器壁はかなり薄く、焼成は良好である。7はおそらく小形の壺と思われるが、手づくねではない。8は土錘で、b類に属する。

石器 (第32図, 表10)

1～19は石鏃、20・21は打製石斧、22は石錘である。1の素材は剥片ではないが、基部・尖頭部が意識的に作出されている。2は風化のため、加工痕を観察しがたい。7・8は、側辺が内湾気味の穏やかなカーブを有し、尖頭部付近でわずかに屈曲する、同一形態の石鏃である。16・19は尖端が意識

表7 土壌1の石器組成①(長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第21図1	石鏃	黒曜石	26	20	4	1.0	極めて精巧。左脚端部欠損
2	石鏃	暗灰色黒曜石	21	22	5	1.8	尖頭部・右脚部欠損
3	石鏃	暗灰色黒曜石	18	16	4	0.8	脚部欠損
4	石鏃	暗灰色黒曜石	17	12	2	0.3	脚部片
5	削器	黒曜石	35	16	6	2.4	縦長剥片の両端縁に二次加工
6	搔器	黒曜石	11	31	9	3.9	刃部は急斜
7	搔器	黒曜石	28	28	7	5.3	背面側から加工
8	削器	黒曜石	23	32	11	4.5	
9	搔器	黒曜石	19	17	5	4.5	ラウンドスクレイパーか
10	搔器	黒曜石	28	24	7	1.7	一部調整あり
11	石核	黒曜石	18	27	9	4.0	横長剥片を作出
12	石核	黒曜石	27	42	18	18.8	不定形剥片を作出
13	剥片	黒曜石	41	22	9	3.8	
14	剥片	黒曜石	34	11	8	3.0	
15	剥片	黒曜石	16	16	6	1.6	使用痕あり
16	剥片	黒曜石	28	18	9	2.3	使用痕あり
17	剥片	黒曜石	20	22	8	3.0	
18	剥片	灰色黒曜石	44	26	8	5.0	
19	剥片	灰色黒曜石	27	16	4	1.7	
20	剥片	黒曜石	30	22	8	4.7	かなり摩耗
21	剥片	黒曜石	22	34	12	5.5	使用痕あり
22	剥片	黒曜石	27	36	8	4.7	
23	剥片	黒曜石	22	39	10	5.3	
24	剥片	玉髄質石材	34	29	12	8.8	使用痕あり
25	剥片	黒曜石	36	30	13	11.1	かなり摩耗
26	剥片	暗灰色黒曜石	30	33	10	5.3	
27	剥片	黒曜石	21	25	9	3.2	
28	剥片	黒曜石	21	20	8	3.1	
29	剥片	黒曜石	23	33	8	3.3	
30	剥片	黒曜石	28	20	9	3.7	
31	剥片	黒曜石	22	18	8	2.5	

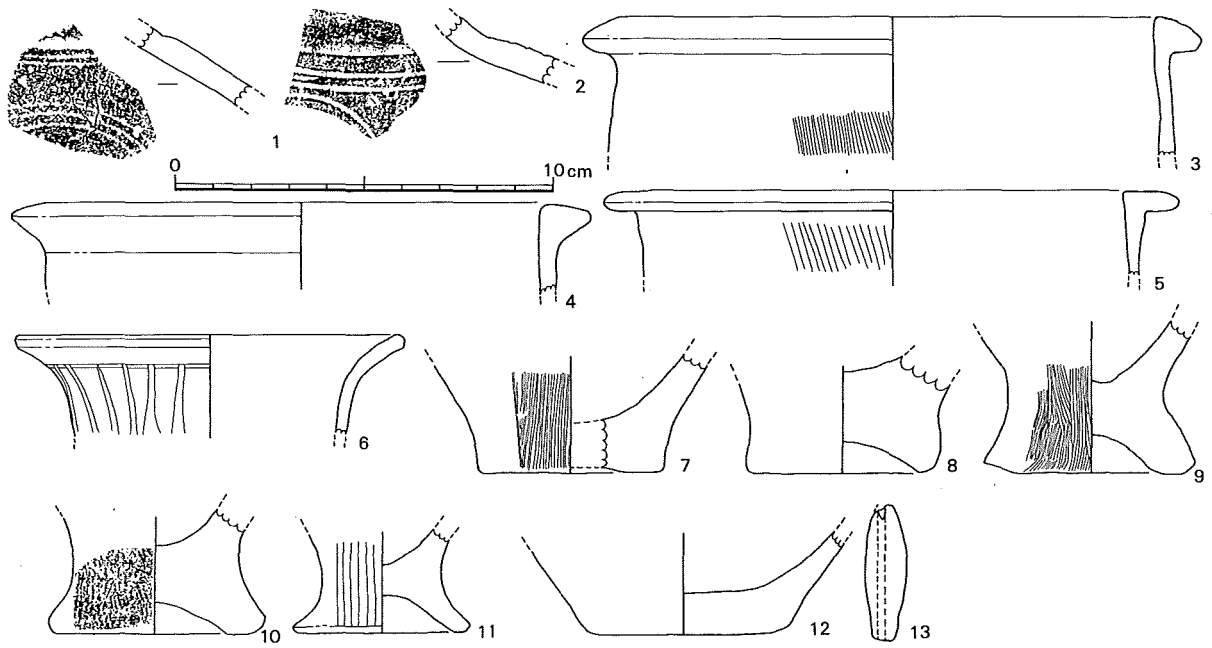
表 8 土壌 1・2 の石器組成② (長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第21図32	剝片	灰色黒曜石	22	23	10	4.3	
33	碎片	黒曜石	28	19	7	1.7	
34	碎片	黒曜石	19	21	10	2.0	
35	碎片	黒曜石	20	19	5	1.0	
36	碎片	黒曜石	19	15	5	1.0	
37	碎片	暗灰色黒曜石	19	18	4	1.4	
38	碎片	黒曜石	19	22	4	0.6	
39	碎片	黒曜石	17	16	4	1.0	
第24図1	尖頭器	サヌカイト	48	40	10	18.6	両面に粗い加工
2	石鏃	サヌカイト	34	21	6	4.7	平基式
3	石鏃	暗灰色黒曜石	15	26	6	3.0	脚部欠損
4	石鏃	暗灰色黒曜石	23	20	4	1.2	尖頭部・右脚部欠損
5	石鏃	黒曜石	26	15	5	1.5	
6	石鏃	黒曜石	22	18	4	0.9	
7	石鏃	暗灰色黒曜石	21	16	4	0.6	左脚部端欠損
8	石鏃	暗灰色黒曜石	17	16	3	0.5	
9	石鏃	黒曜石	18	14	3	0.6	脚部欠損
10	石鏃	黒曜石	15	14	2	0.4	尖頭部丸みを帯びる
11	石鏃	黒曜石	16	14	3	0.5	尖頭部欠損
12	有孔石製品	不明	125	118	50	1006	両面から穿孔
第26図1	石錘	結晶片岩	89	65	15	139	研磨による加工
2	石錘	結晶片岩	79	64	10	146	研磨による加工
3	石錘	結晶片岩	81	74	18	125	結晶による加工
4	石鏃	黒曜石	21	16	4	0.9	尖頭部丸みを帯びる
第27図1	石錘	結晶片岩	74	72	18	178	短軸の加工は結晶による
2	石錘	結晶片岩	62	62	15	115	研磨による加工

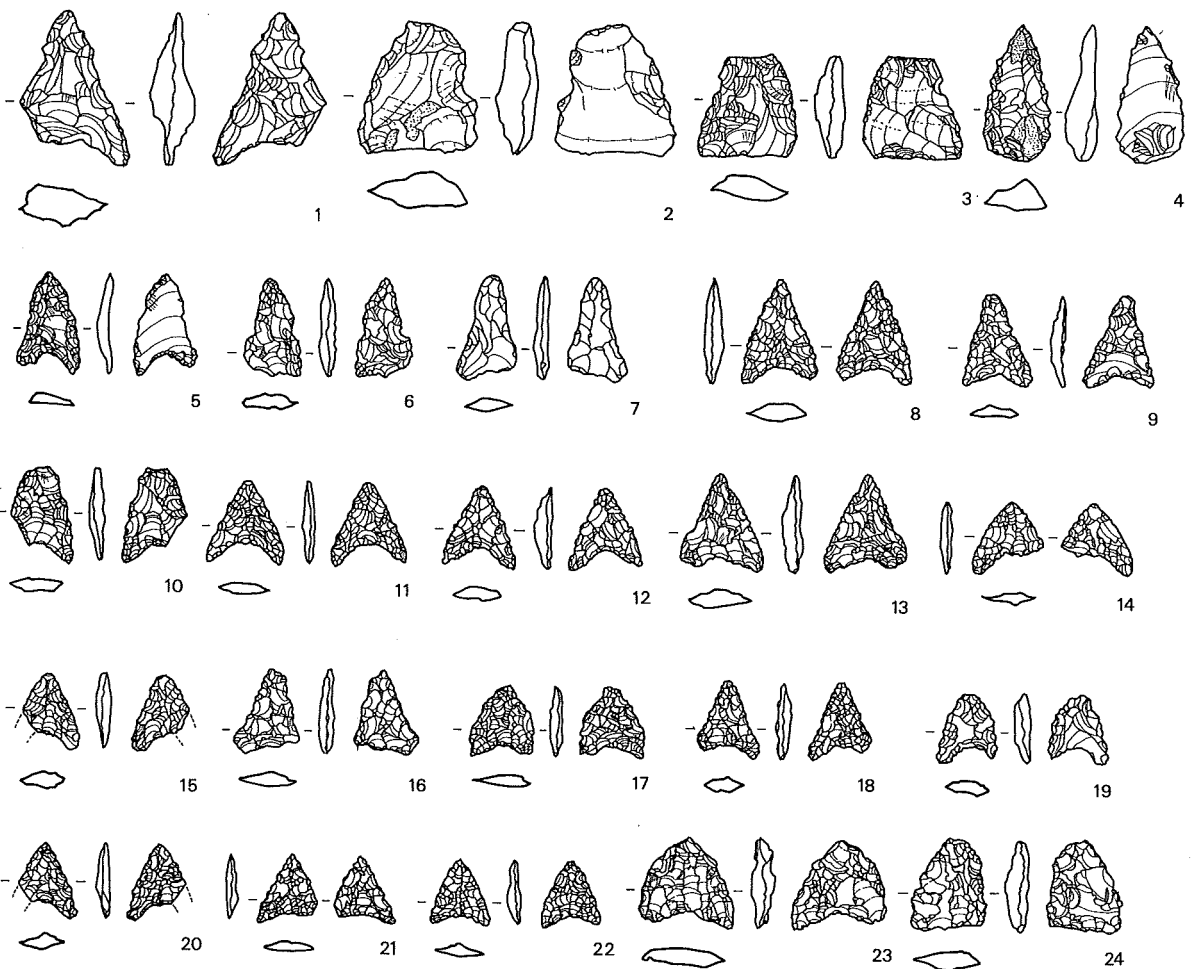
的に丸みを帯びた状態に整形されているようである。20は平面が「しゃもじ」状を呈する扁平打製石斧である。丁寧に加工された刃部は摩耗しており、かなり使い込まれた石斧と思われる。

遺構 (第33図)

この調査区では、東側にのみⅢ層中位から壺棺群を検出した。壺棺9基と土壌のみのものが1基の計10基である(第33図)。副葬されたものは少なく、青銅器等の金属器類は一点も出土しなかった。副葬品は壺棺の外部において確認されたが、手づくねのものやミガキがかけられたものであり、しかも



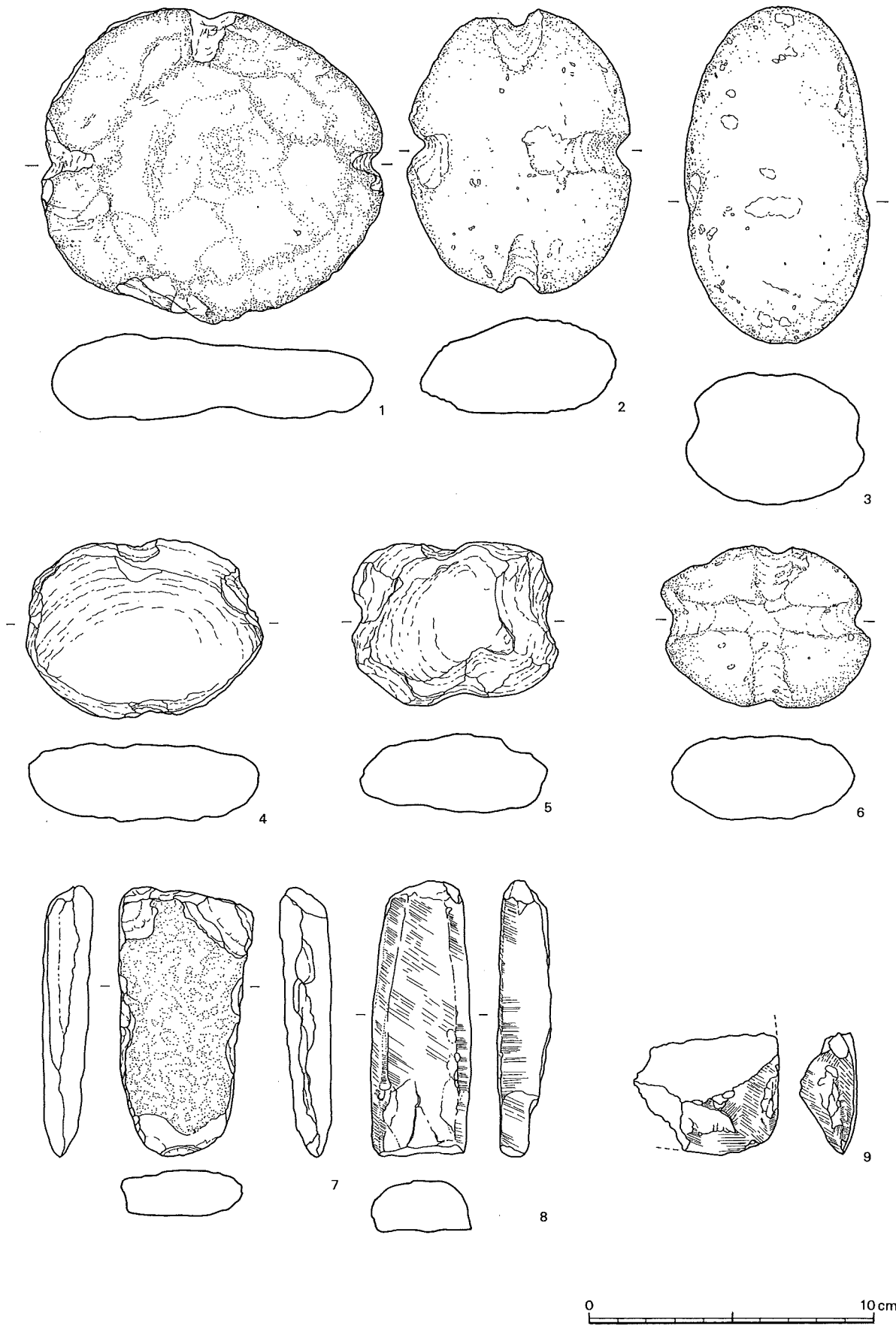
第28図 III-8区の土器外



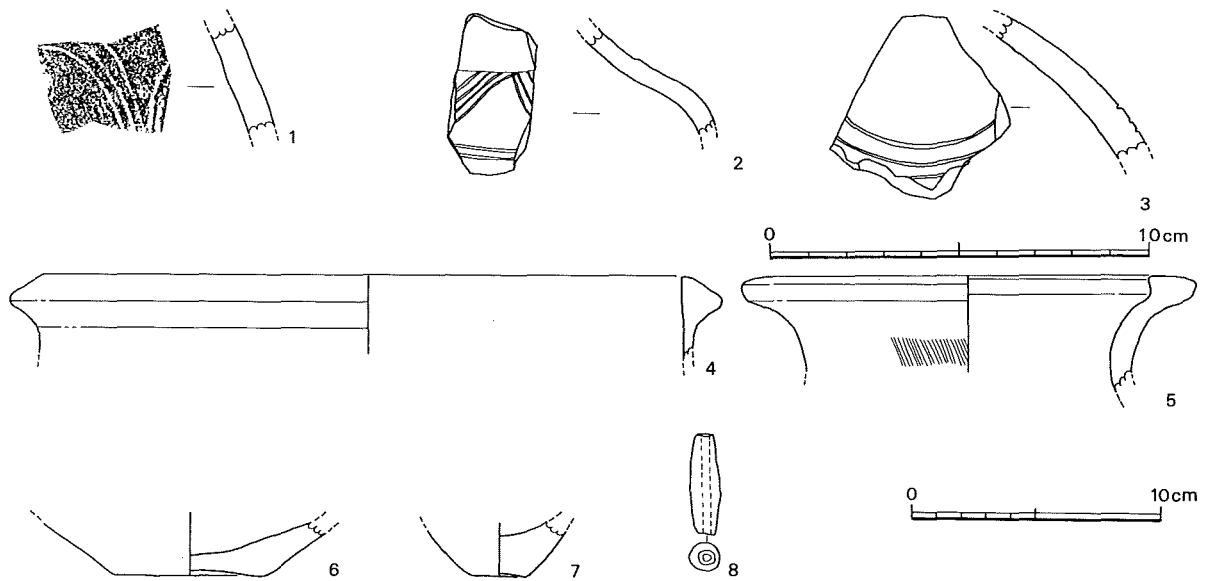
第29図 III-8区の石器①

表9 III-8区石器組成(長さ、幅、厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第29図1	石鏃	ハリ質安山岩	41	29	11	6.6	二次加工は素材の剝離面を留めない。左脚欠損
2	石鏃	サヌカイト	35	31	9	11.0	頭部は素材の打面。未製品か
3	石鏃	黒曜石	27	27	7	4.1	形態・製作技法は2に近い。尖頭部欠損
4	石鏃	黒曜石	36	18	8	3.7	背面のみ二次加工。基部に素材の打面残す
5	石鏃	黒曜石	27	16	3	0.8	二次加工が背面に集中し局所的な加工。剥片鏃
6	石鏃	黒曜石	26	16	4	1.2	抉入加工。粗雑
7	石鏃	サヌカイト	27	20	4	1.3	著しい摩耗
8	石鏃	黒曜石	28	20	5	1.6	丁寧な二次加工。両脚先端欠損
9	石鏃	黒曜石	24	18	3	0.9	丁寧な二次加工で裏面に主要剝離面が一部残存
10	石鏃	黒曜石	25	17	4	1.2	片脚欠損
11	石鏃	黒曜石	22	20	3	0.7	頭部・脚部を鋭く作出
12	石鏃	黒曜石	22	19	4	0.9	
13	石鏃	ハリ質黒曜石	26	21	5	1.9	
14	石鏃	黒曜石	19	18	3	0.5	右脚欠損
15	石鏃	暗灰色黒曜石	20	15	4	0.8	左脚欠損
16	石鏃	黒曜石	22	16	4	0.9	尖頭部・両脚欠損
17	石鏃	黒曜石	18	16	3	0.6	
18	石鏃	黒曜石	20	16	4	0.6	左脚欠損
19	石鏃	ハリ質黒曜石	18	16	4	0.9	尖頭部は丸みを帯びる
20	石鏃	黒曜石	20	16	4	0.6	左脚欠損
21	石鏃	黒曜石	18	16	3	0.3	右脚欠損
22	石鏃	黒曜石	27	16	3	0.4	小形で丁寧なつくり
23	石鏃	黒曜石	24	25	5	2.2	左右非対称。尖頭部欠損
24	石鏃	黒曜石	22	20	5	2.4	左右非対称。右脚欠損
第30図1	石錘	不明	121	110	30	630	左右と上部に研磨による抉り込み
2	有溝石錘	安山岩	100	80	34	315	敲打による抉り込み
3	石錘	安山岩	119	65	46	349	側面に長軸に対し約45度で抉入加工
4	石錘	結晶片岩	84	64	23	199	研磨による抉り込み
5	石錘	結晶片岩	73	58	25	147	上下と左側が研磨による加工
6	有溝石錘	安山岩	73	35	19	147	敲打による加工
7	打製石斧	不明	95	49	16	110	石質はホルンフェルスか。全周に剝離加工
8	磨製石斧	泥岩	97	35	18	102	方柱状に整形し、全体研磨。裏面欠損
9	磨製石斧	蛇紋岩	43	49	20	43	刃部のみ。丁寧な研磨。刃こぼれが認められる



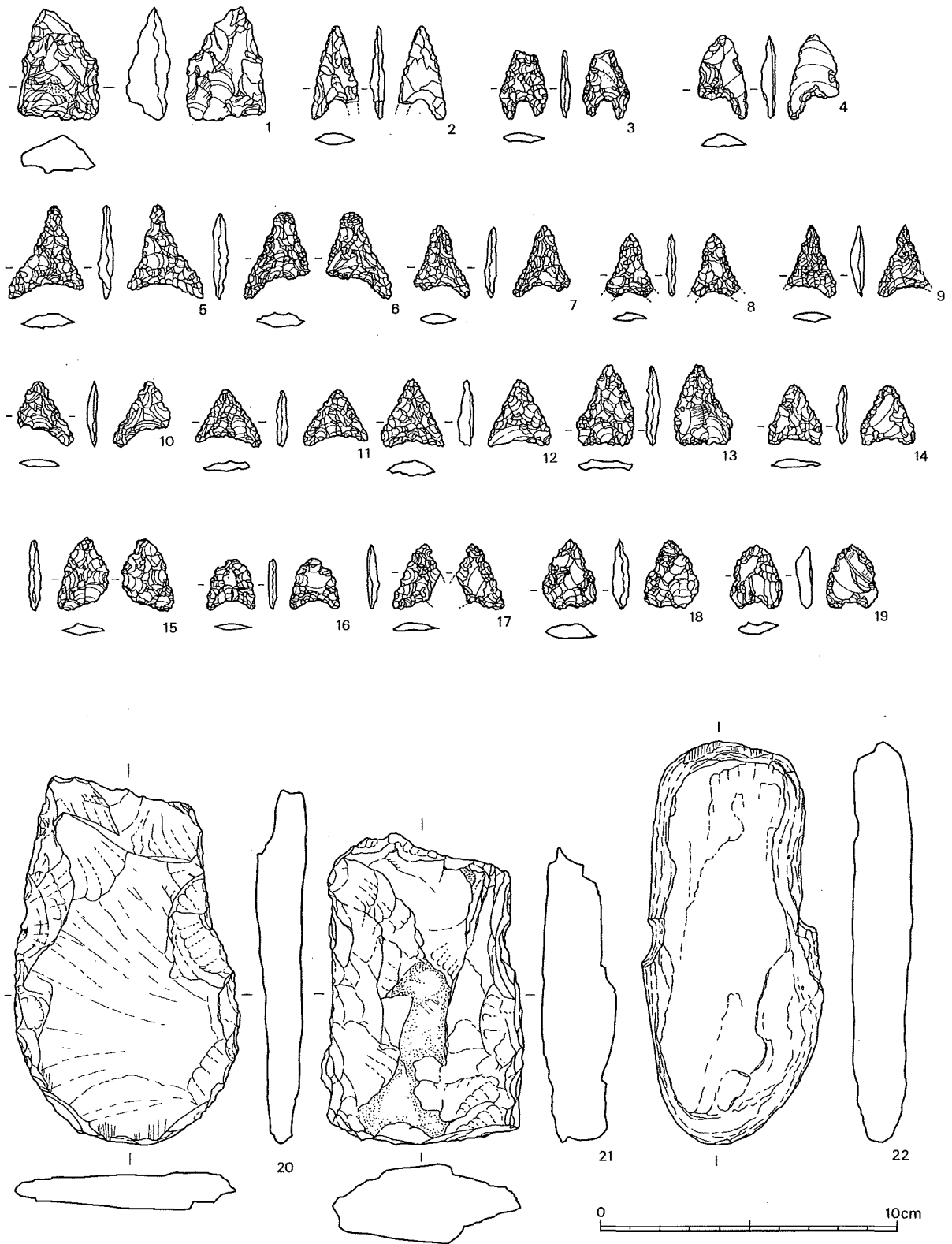
第30図 III-8区の石器②



第31図 III-9区の土器

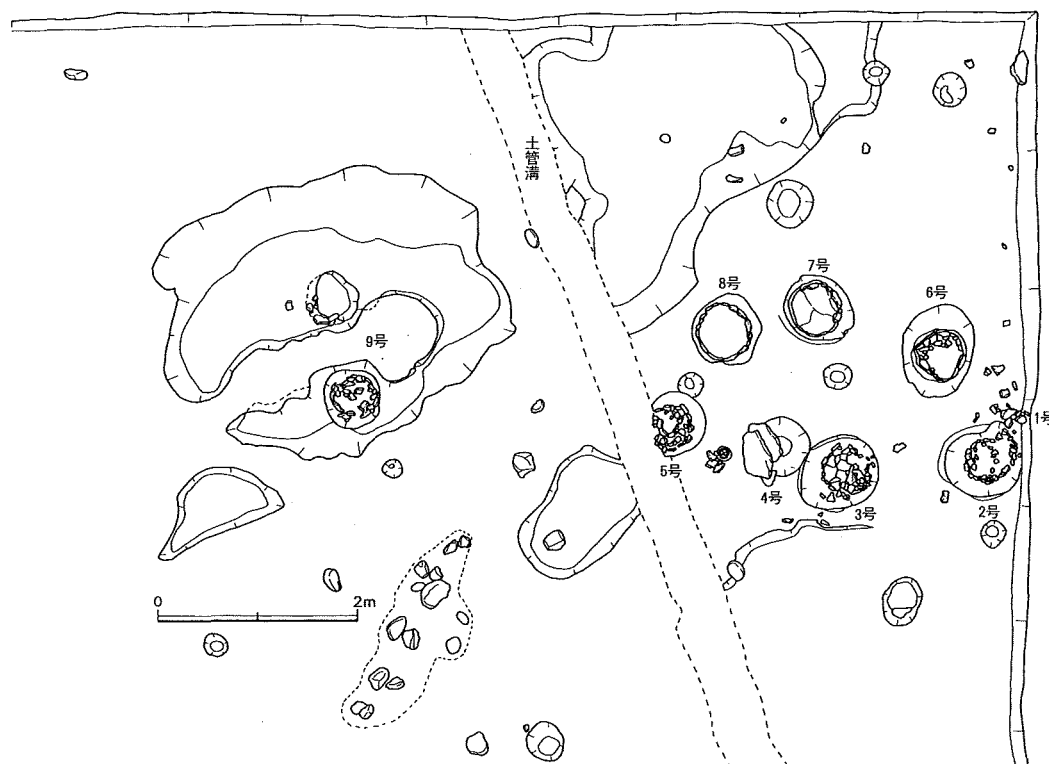
表10 III-9区石器組成 (長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第32図1	石鏃	暗灰色黒曜石	38	27	12	9.5	二次加工が粗雑。原石あるいは石核の転用か
2	石鏃	サヌカイト	31	15	5	1.1	丁寧な二次加工。かなり風化。右脚欠損
3	石鏃	黒曜石	23	16	3	0.8	入念な二次加工。尖頭部欠損
4	石鏃	黒曜石	28	17	5	1.3	剥片鏃。二次加工は正面左側に集中。左脚欠損
5	石鏃	黒曜石	31	25	5	1.8	丁寧な二次加工。左右非対称
6	石鏃	黒曜石	29	22	5	1.7	尖頭部が丸みを帯びる。右脚欠損
7	石鏃	サヌカイト	24	19	4	0.9	入念な二次加工。左脚欠損
8	石鏃	黒曜石	21	17	3	0.5	入念な二次加工。7と同様なつくり。両脚端欠損
9	石鏃	黒曜石	24	17	3	0.9	裏面に主要剝離面を残す。鋭い尖頭部
10	石鏃	ハリ質安山岩	22	19	3	0.8	左脚欠損
11	石鏃	暗灰色黒曜石	19	22	4	0.9	やや幅広で左右非対称
12	石鏃	黒曜石	22	21	5	1.6	先端部は丸みを帯びる
13	石鏃	黒曜石	27	19	3	1.6	裏面は尖頭部・基部に加工集中
14	石鏃	黒曜石	20	18	3	0.8	先端部は丸みを帯びる。裏面はわずかな加工
15	石鏃	黒曜石	24	17	4	1.2	丁寧な平坦剝離。左右非対称
16	石	黒曜石	17	16	2	0.7	周辺は丁寧な二次加工。尖端部欠損
17	石鏃	黒曜石	22	16	3	0.6	側辺が粗鋸歯状
18	石鏃	黒曜石	23	18	5	1.8	おおざっぱな加工。両脚欠損
19	石鏃	黒曜石	21	18	5	1.2	周辺に微細な加工。尖頭部は丸みを帯びる
20	打製石斧	安山岩	124	76	12	187	丁寧な二次加工。撥形に形成。刃部摩耗
21	打製石斧	安山岩	114	65	27	227	両面に加撃し、短冊状に整形
22	石錘	結晶片岩	135	59	21	253	研磨による挟り込み
第31図5	石鏃	黒曜石	20	18	4	0.6	左右非対称



第32図 III—9 区の石器

ほぼ完全な形で残っている。壺棺はほとんどが頸部を人為的に打ち欠きしており、小児用に使用されたかあるいは二次埋葬されたものと考えられる。



第33図 III-9区の壺棺群

壺棺1号(第34図1, 第35図1・2) 調査区の東壁から出土したもので, 2個体確認したが, 合わせ口等の配置関係については不明である。1は所々にヘラミガキ痕が残る。胎土には他の土器と同様, 金雲母が混入する。ともに頸部・肩部を打ち欠く。

壺棺2号(第34図2, 第35図3) 頸部の打ち欠きは不明である。胴部にヘラによるミガキが施され, 赤褐色を呈する。胴部は球形により近く, 頸部に突帯が一条残る。胎土に金雲母を混入する。

壺棺3号(第34図3, 第35図4) 2号と同様, 打ち欠きは不明である。胴部上部に断面M字形の突帯が巡る。胴部最大径は突帯下に位置し, 全体からみてかなり張るものと思われる。ヘラミガキが施され, 色調は赤褐色を呈する。

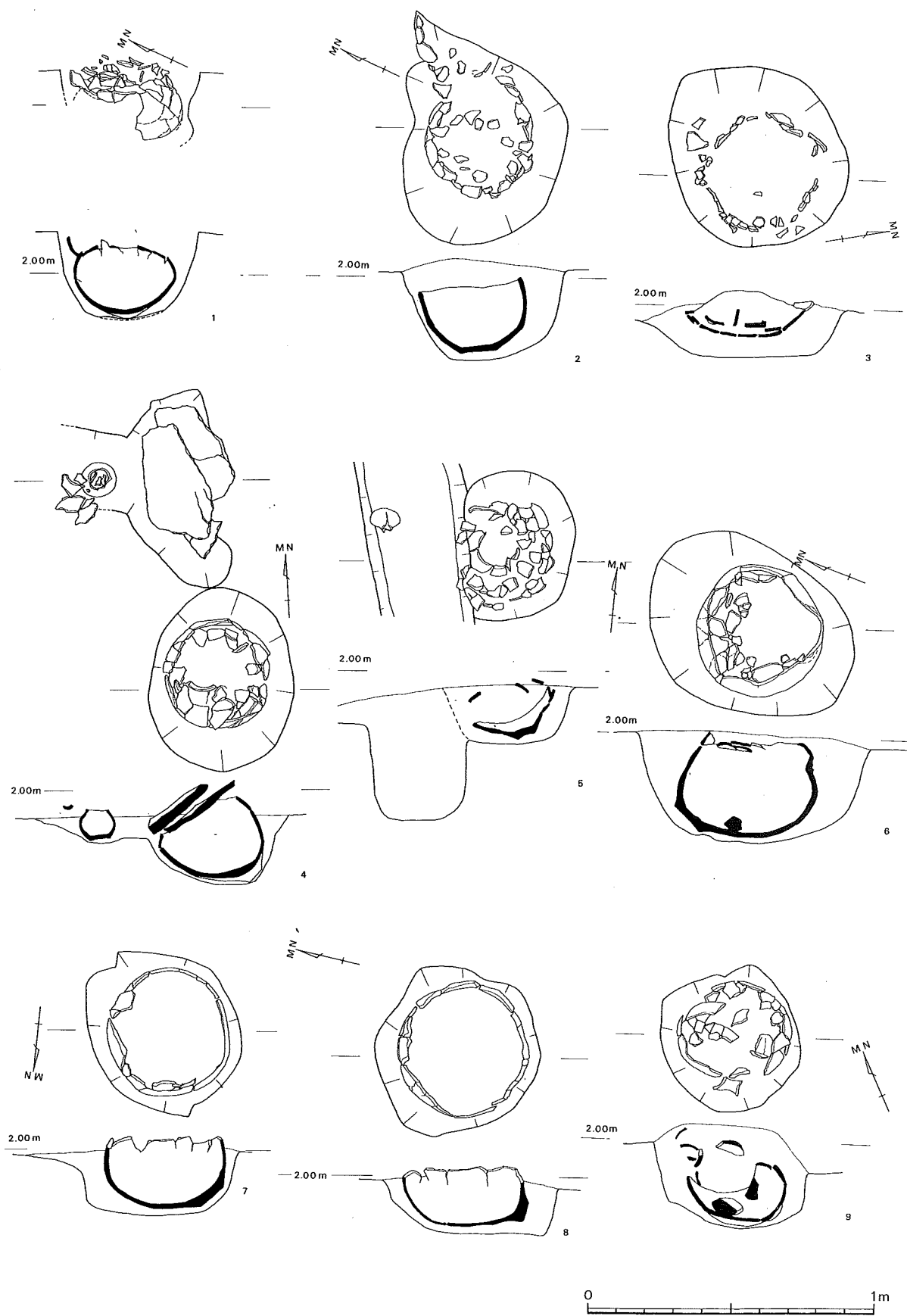
壺棺4号(第34図4, 第35図5) 頸部を打ち欠いている。3号と同様な位置に胴部最大径があり, 頸部・胴部に一条ずつ突帯が巡る。突帯断面は頸部は鋭く, 胴部はカマボコ状を呈する。ヘラミガキが胴部に一部確認できる。この棺には石蓋が伴う。

壺棺5号(第34図5, 第35図6) 頸部を打ち欠く。胴部に2カ所穿孔し, 胴部は急激に張り出す。刷毛目調整後, ヘラミガキを施したようだ。色調は褐色を呈する。

壺棺6号(第34図6, 第35図7) 頸部を打ち欠いている。頸部の二状の突帯断面は, 鋭い。器壁は比較的厚手で, ヘラミガキを施す。胴部下部に穿孔する。

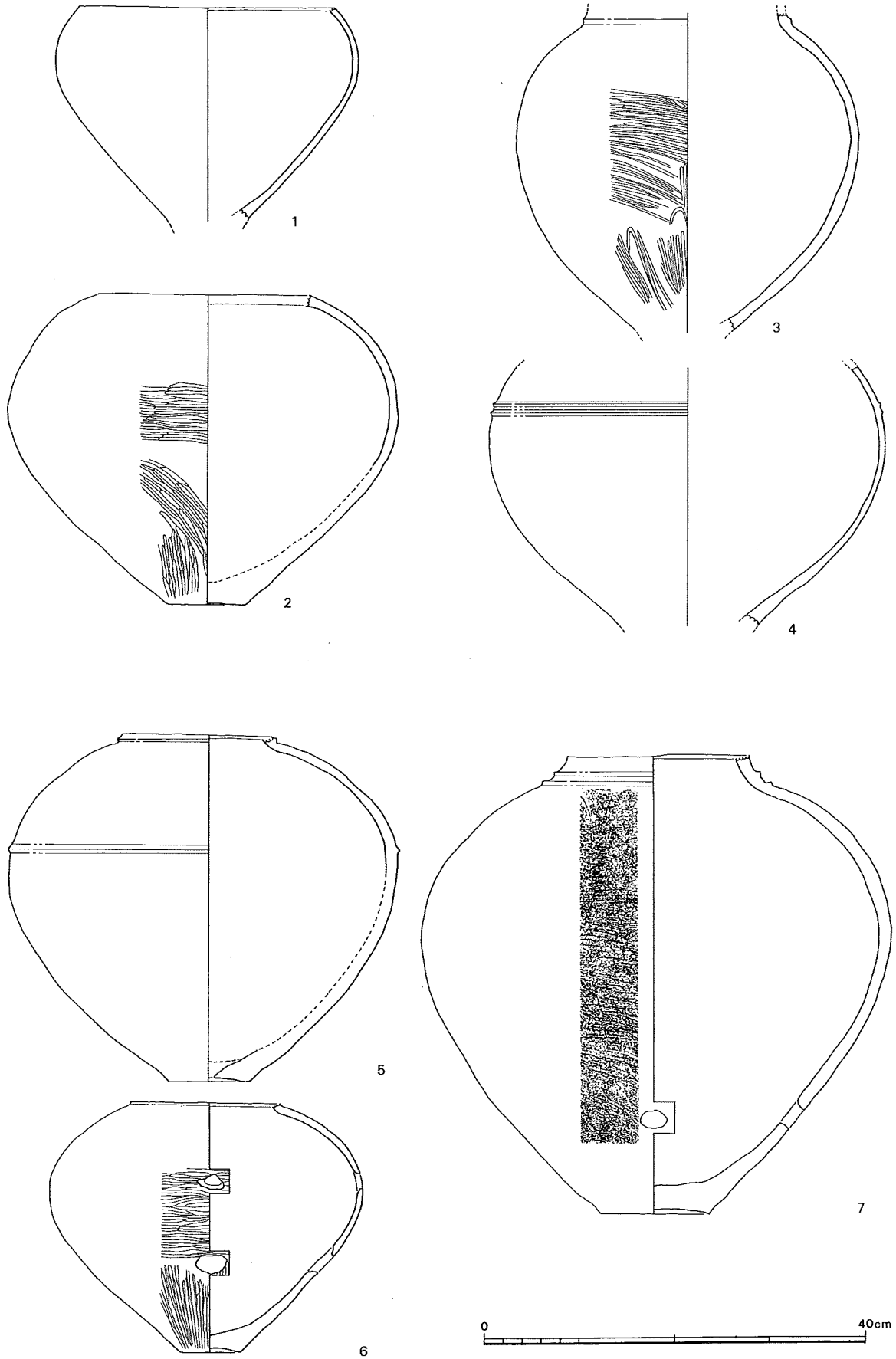
壺棺7号(第34図7, 第36図1) 本遺跡中最大級の大きさの壺棺で, 胴部最大径が胴部上部に位置する。色調は淡灰褐色で, 胎土に金雲母を混入する。

壺棺8号(第34図8, 第36図2) 胴部のみであるため, 全体の形を推測することが難しい。胎

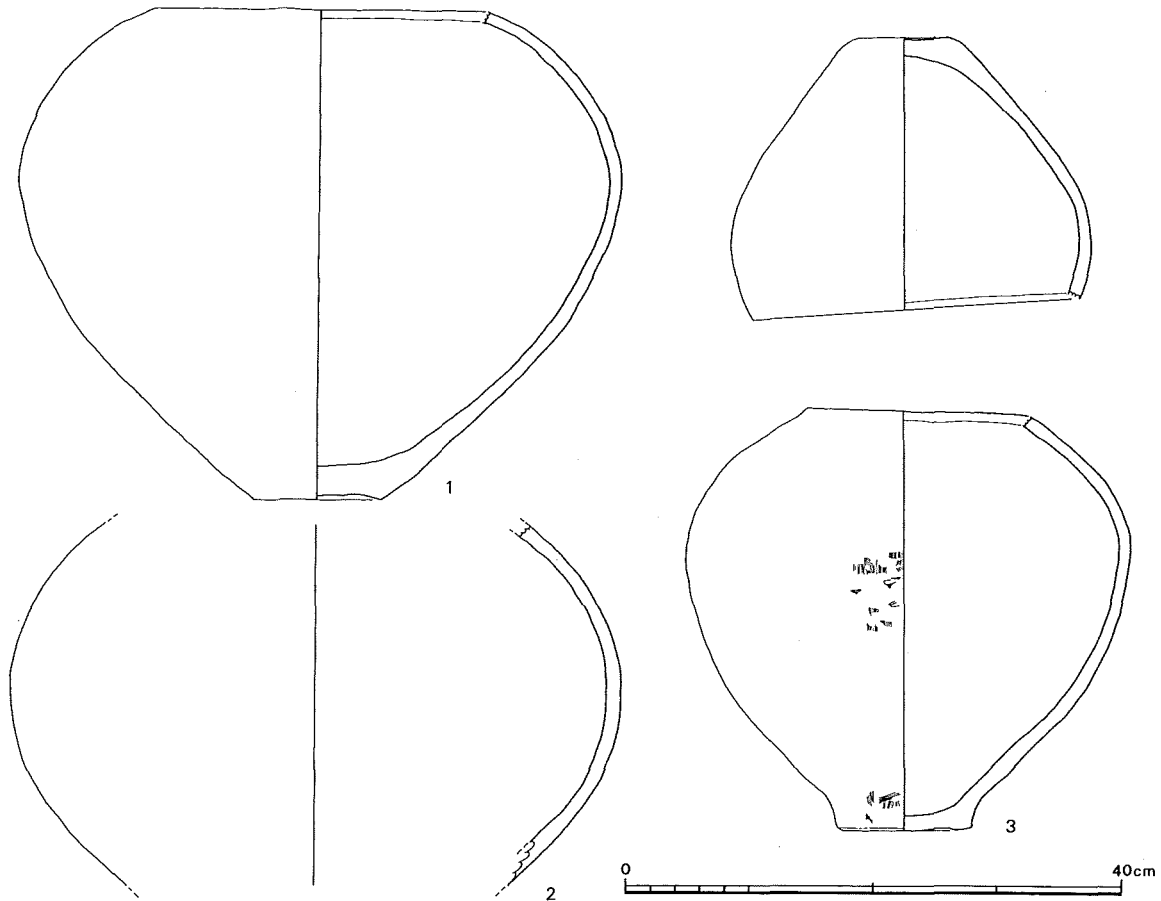


第34図 壺棺 1 ~ 9 号検出実測図

黒丸遺跡 I



第35図 壺棺実測図①



第36図 壺棺実測図②

土には長石・白雲母を混入し、色調は褐色を呈する。

壺棺 9号 土壌のみ残存するため、棺は出土しなかった。

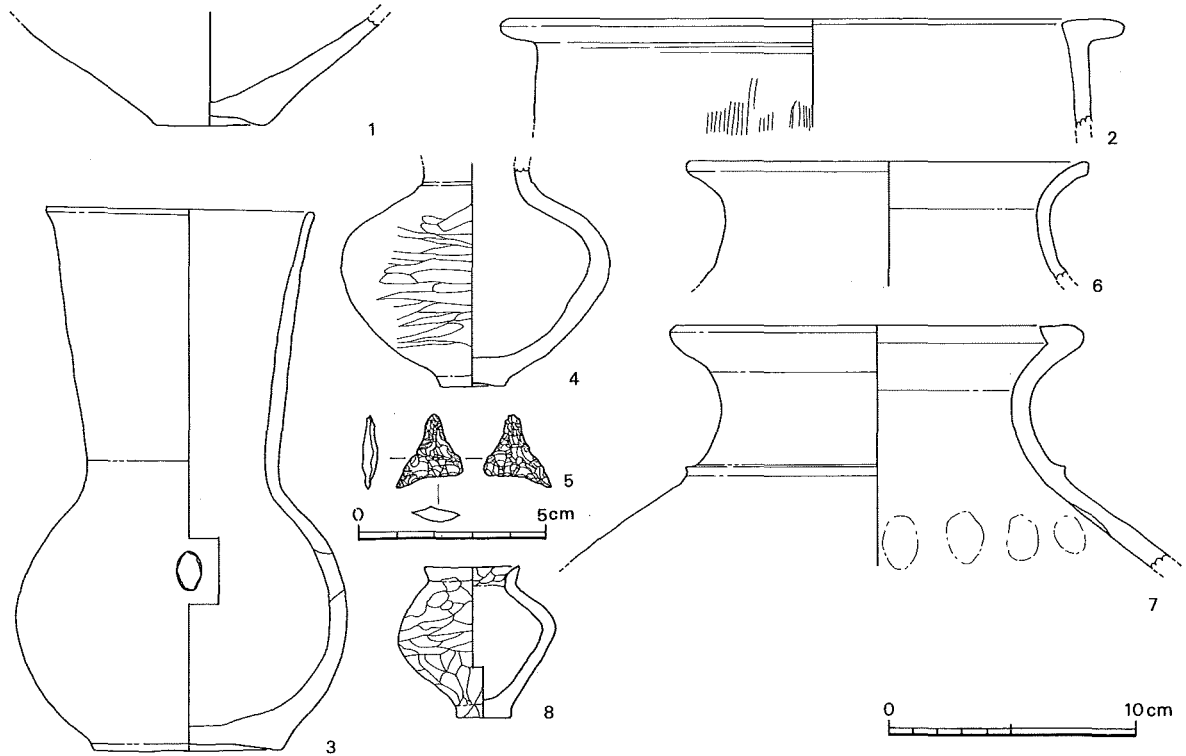
壺棺10号 (第34図 9, 第36図 3) 合わせ口壺棺で、2個体とも頸部あるいは肩部を打ち欠いている。両個体ともヘラミガキが施され、下壺は図には示していないが、胴部下端に穿孔されている。底部は上げ底ではないが、しっかりした作りである。胴部下端のヘラミガキは粗雑で、刷毛目調整を残している。

副葬品 (第37図)

手づくねや一部ヘラミガキ痕が残るもの等、特徴ある遺物が出土した(第37図)。1は胴部がかなり張ると思われる壺の底部である。壺棺 2号から検出した。2は壺棺 4号から発見され、胎土には白雲母を混入する。3は、丁寧に研磨された長頸壺で、壺棺 4号付近でかなり完全な形で発見された。朝鮮系無文土器かと思われたが、色調が暗褐色であること、頸部の屈曲がなだらかであること、研磨が半島のものほど綿密におこなっていないことから、影響は受けてはいるが在地のものと考えられる。4は胴部が大きく張った小壺で、壺棺 5号のそばで発見された。頸部には打ち欠きが施されているものとみられ、その下にはヘラによる沈線が巡っている。胴部はヘラミガキが施されており、底部はやや上げ底である。5の石鏃は壺棺 6号で検出された。6・7は壺棺10号で出土し、それぞれ中期初頭のものと思われる。7の胴部内壁には指跡が残り、胎土には金雲母を混入する。8は全面にヘ

黒丸遺跡 I

ラミガキを施した手づくね土器で、胴下半部にやや光沢がある。この土器は壺棺群からやや離れた所からの発見であったが、完形であること、手づくねであることから関係のある副葬品として扱った。



第37図 III-9区壺棺群の副葬品

III-10区

この調査区は二次堆積によるものとみられる。

縄文土器 (第38図 1~3)

赤褐色の胎土に結晶片岩を多量に混入した土器片である。施文具はヘラとみられ、阿高系の新しいものと思われる。2・3は口縁部と胴部にヘラによる刻目突帯を巡らした縄文時代晩期末の鉢口縁部である。共伴する遺物のほとんどが弥生中期のものであるため、時期は不確定だが、夜臼II式と考えられる。

弥生土器 (第38図 4~8・10)

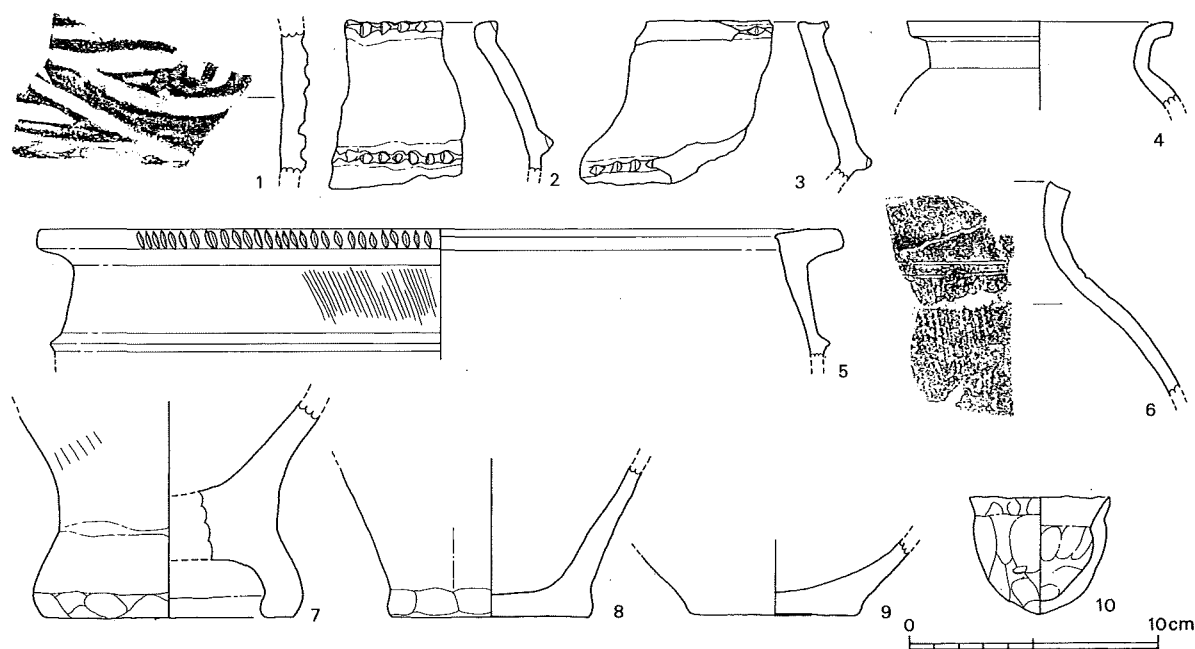
4・6は壺の口縁部であるが、4の口縁は上端が平坦に近づいているため、中期中頃と思われる。6は口縁部下に沈線を二条巡らす。5は口唇に刻目を施し、口縁下に断面三角形の鋭い突帯をつける。7・8は甕底部で、7は上げ底の強固なつくりをし、8は底が比較的薄く仕上がっている。8には胴部調整時の指跡がのこる。8は7より時期は下ると考えられる。10は手づくね土器で、粗雑につくられている。III-9区からの流れ込みとも思われる。

土師器 (第38図 9)

堅緻なつくりで、ミガキが施されている。色調は淡灰褐色を呈する。底部が安定していることから、古墳時代初期と位置付けられよう。

石器 (第39図、表11)

1～8は石鏃である。3は丁寧な刃部加工を施したもので、鋸歯状に作出されている。9は小形の石匙で、平坦剥離が丁寧になされている。10～12は石錘で、打ち欠きあるいは研磨によって抉入加工が施されている。13は打製石斧であるが、正面左側縁の摩耗が著しいため、この部分を作業刃部とする切削器である可能性はある。



第38図 III-10区の土器

III-11区

III-10区と同様、縄文時代から古墳初頭と思われる遺物が出土している。

縄文土器 (第40図1・3)

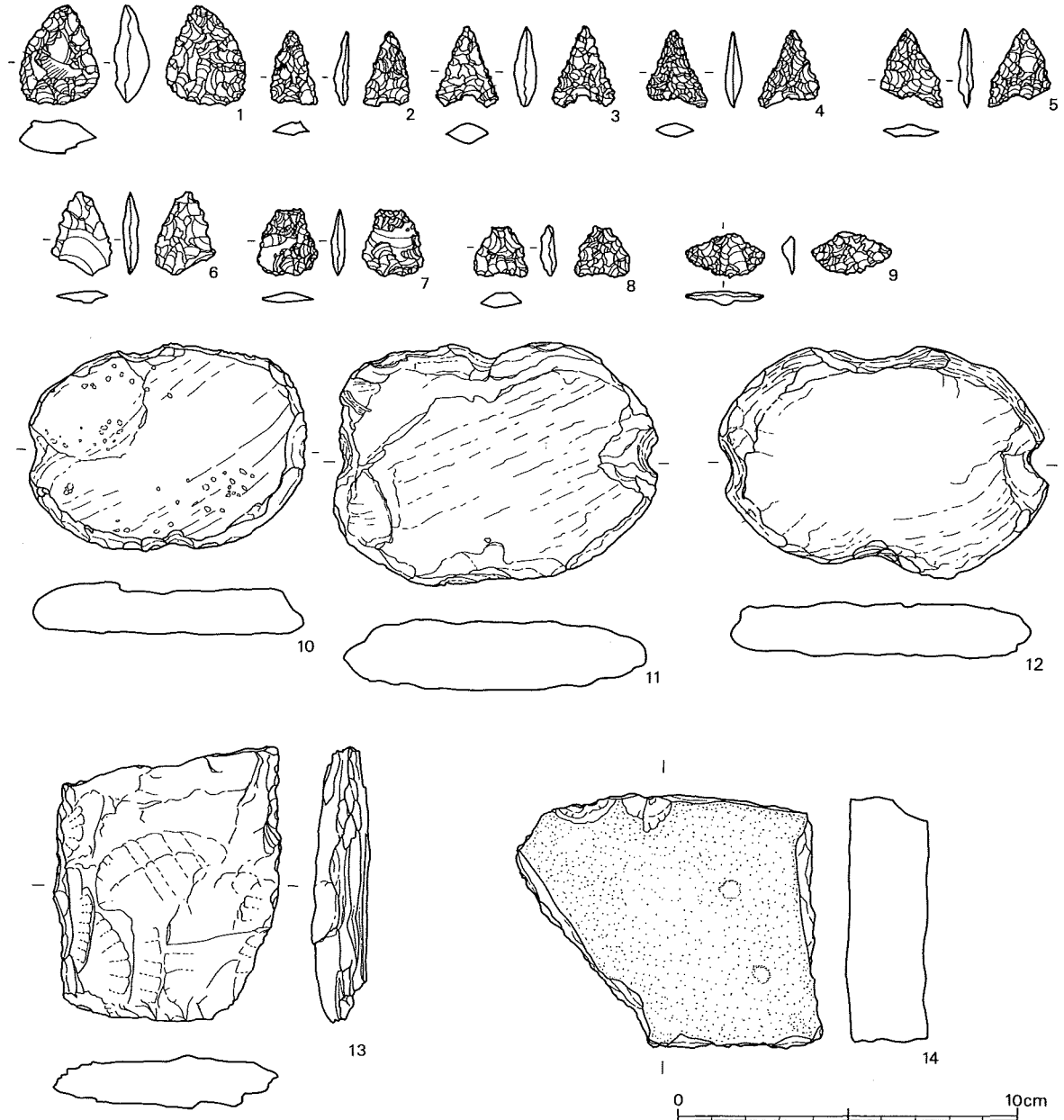
1は貝殻条痕で器壁調整された深鉢の口縁部である。口唇は丸く調整され、焼成もしっかりしている。口縁外面に少量の炭化物が付着している。3は丁寧に研磨された浅鉢の口縁部である。堅緻なつくりでしっかりしている。

弥生土器 (第40図2・4～8)

2は口縁部に刻目をつけた甕片である。断面コの字形の口縁に不規則に刻目を巡らせている。前期末から中期初頭と考えられる。5は亀ノ甲型口縁をもつ甕で、刷毛目調整がわずかに残っている。堅緻ではなく、たいへんもろい。4はかなり外反した口縁をもつ壺である。口縁下端のみ刻目を施す。中期中葉と思われる。6は口縁部に不規則な刻目をもつ甕片である。口縁下には浅い沈線が巡る。7はかなり分厚い甕底部である。粗雑なつくりで、白雲母を含む。8は口縁部に二列の刻目を巡らし、口縁下に二条の沈線をもつ大形の壺である。内面には刷毛目調整痕が明確に残り、口縁には内外とも段を有する。口縁上端は平坦ではないため、前期後半に位置づけられよう。

土師器 (第40図9・10)

黒丸遺跡 I



第39図 III-10区の石器

表11 III-10区石器組成 (長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第39図1	石鏃	黒曜石	29	23	10	5.0	円基鏃
2	石鏃	黒曜石	22	14	4	0.8	
3	石鏃	暗灰色黒曜石	23	18	6	1.3	鋸歯状鏃
4	石鏃	黒曜石	22	18	4	0.8	
5	石鏃	黒曜石	23	18	4	1.1	左脚欠損
6	石鏃	サヌカイト	24	17	4	1.1	脚部欠損
7	石鏃	黒曜石	19	18	3	0.7	先端部欠損
8	石鏃	黒曜石	14	16	4	0.5	先端部欠損
9	石匙	暗灰色黒曜石	24	13	4	0.6	両面に丁寧な平坦剝離。つまみ部欠損
10	石錘	結晶片岩	82	61	15	123	研磨による抉り込み
11	石錘	結晶片岩	95	71	28	189	打ち欠きによる抉り込み
12	石錘	結晶片岩	97	67	15	163	打ち欠きによる抉り込み
13	打製石斧	安山岩	81	67	16	108	全体に鋭く, 使用痕は確認できない
14	砥石	細粒砂岩	92	74	24	260	作業面はほぼ扁平

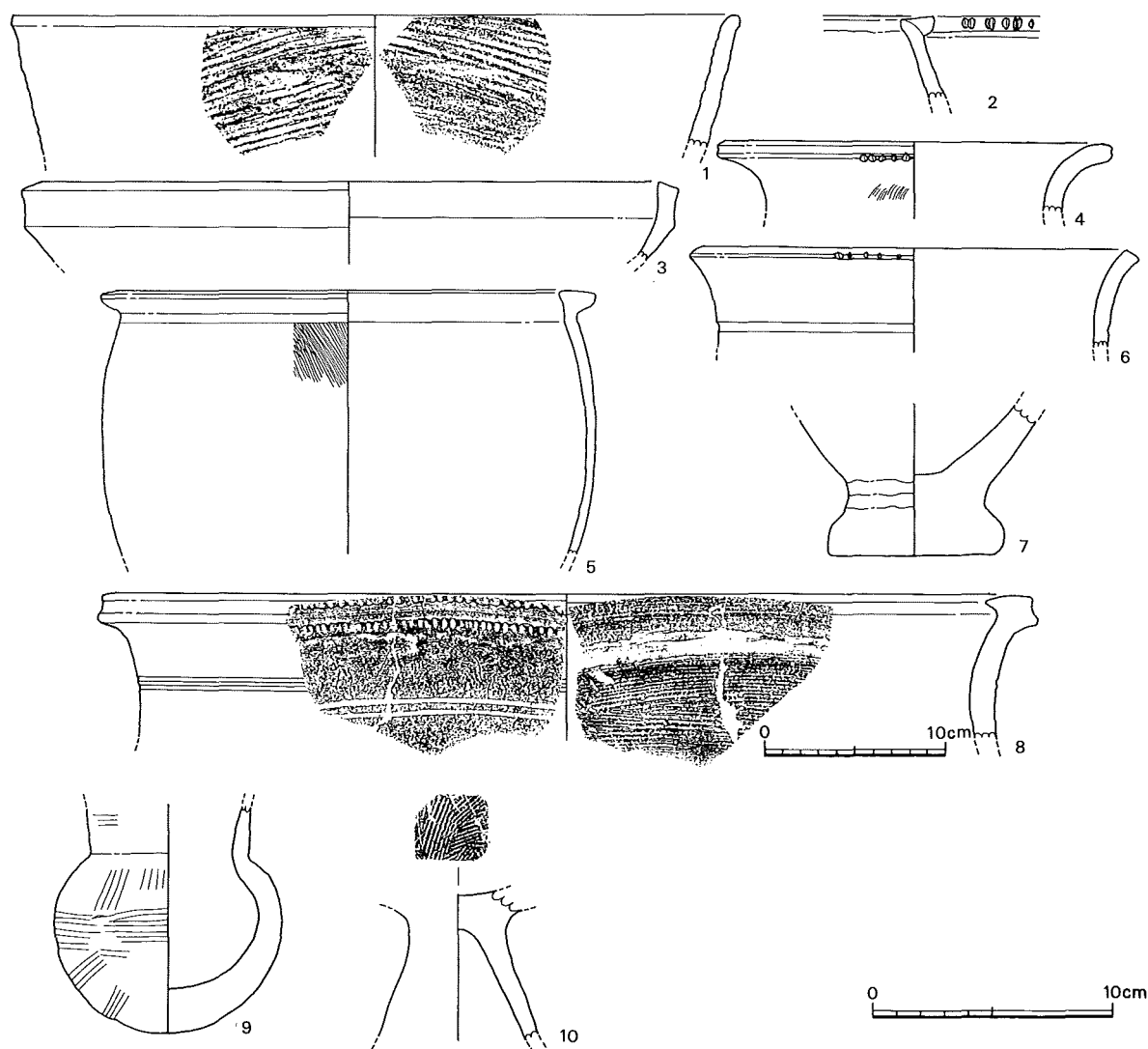
9は小形丸底埴である。底部がかなり厚く、外壁に刷毛目調整、内壁に指跡を残す。口縁部と胴部の境界は明確ではない。口縁はさほど上方に伸びず、すぐに口唇に到達するものと思われる。10は内側に刷毛目をもつ高坏の脚である。やや摩耗しているが、堅緻である。脚部はやや開き気味で下方へ続く。

石器 (第41図, 表12)

1~12は石鏃, 13は両面加工石器, 14・15は石錘, 16・17は打製石斧である。13は厚手の剝片に両面から二次加工を施している。14は, 細長い礫の両側に打ち欠きによる抉入加工をしており, 使用痕と思われる摩耗がみられる。15は円礫の四方に敲打加工したもので, 浅い抉り込みとなっている。16は基部破片で, 着柄によるとみられる摩耗痕が残る。

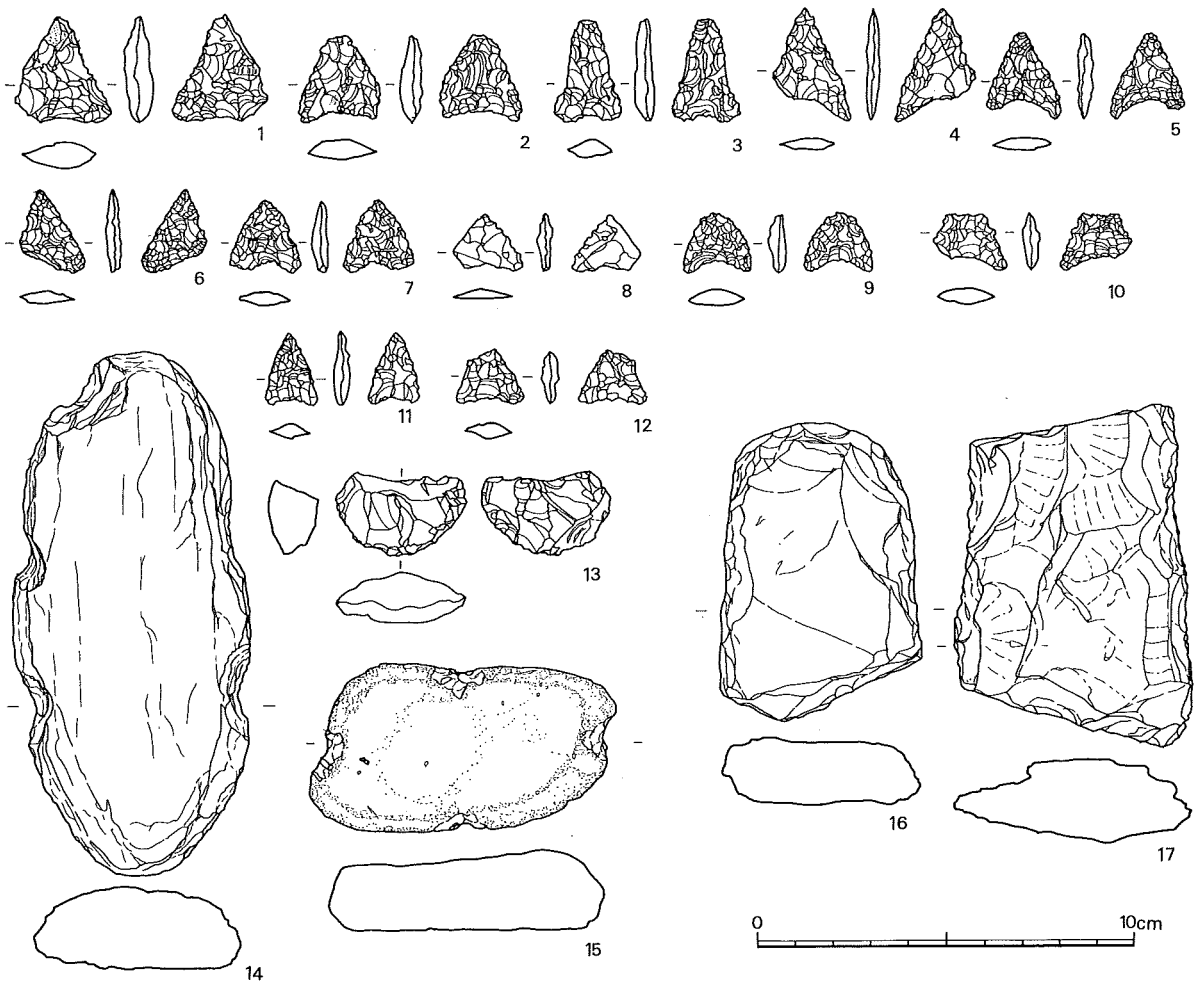
IV-1・2区

この調査区は南辺に水路があり, それに伴う氾濫原と思われる礫群が検出された。遺物も摩耗したものが多く, 二次的な堆積物である可能性は大きい。



第40図 III-11区の土器 (8は1/4)

黒丸遺跡 I



第41図 III-11区の石器

表12 III-11区石器組成 (長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

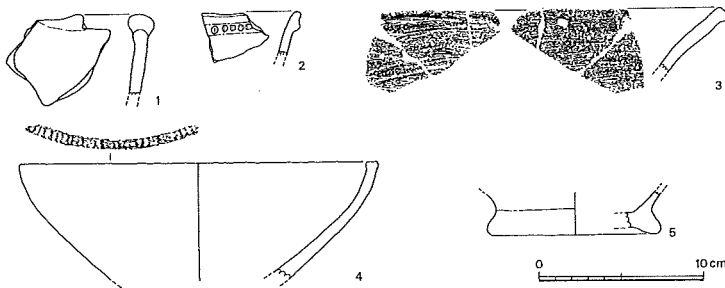
番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第41図1	石鏃	ハリ質安山岩	28	25	8	3.7	左脚欠損
2	石鏃	黒曜石	23	21	5	1.9	先端部欠損
3	石鏃	ハリ質安山岩	27	18	5	1.7	脚部欠損
4	石鏃	ハリ質安山岩	30	21	3	1.0	入念な二次加工
5	石鏃	黒曜石	23	19	4	1.0	脚部はほぼ半円形状
6	石鏃	黒曜石	21	17	4	0.9	左脚部欠損
7	石鏃	暗灰色黒曜石	19	19	4	1.0	左脚部先端欠損
8	石鏃	サヌカイト	15	18	3	0.6	やや摩耗
9	石鏃	黒曜石	15	18	4	0.8	尖頭部は丸みを帯びる
10	石鏃	黒曜石	15	19	4	0.7	尖頭部・左脚部欠損
11	石鏃	暗灰色黒曜石	19	13	4	0.6	丁寧な加工
12	石鏃	ハリ質安山岩	14	17	5	0.6	尖頭部欠損
13	両面加工石器	鉄石英	34	22	13	8.7	色調は暗赤色
14	石錘	結晶片岩	139	63	21	258	打ち欠きによる挟り込み
15	石錘	閃緑岩	81	44	21	123	敲打による挟り込み
16	打製石斧	安山岩	80	54	17	109	側片に着柄によるとみられる摩耗痕
17	打製石斧	安山岩	91	63	22	160	両面に加工

縄文土器 (第42図)

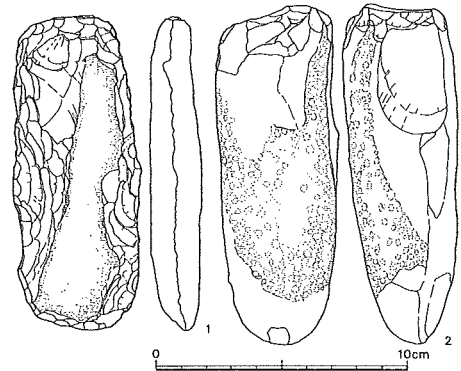
1～3はⅣ-1区出土の鉢口縁部片、4・5はⅣ-2区出土の鉢の破片である。1はⅢ層から出土した。口縁に炭化物が付着しており、胎土には白雲母・金雲母が混入している。口縁にリボン状の突起を伴う晩期中葉の黒川式である。2はⅢb層から出土し、胎土に白雲母・金雲母を多量に混入するかなり摩耗したものである。刻目突帯の位置から、縄文時代晩期末の夜臼式と考えられる。3は粗製土器で、Ⅳb層から出土した。口唇が膨らみ、器壁には内外面とも条痕を残す。内壁にはモミ圧痕を留める。胎土には金雲母を混入しており、全体の形状としてはかなり口縁部が外反する鉢が推測できる。4はⅢaから出土した。口唇にほぼ一定間隔で刻目が巡る。浅鉢である。色調は黄灰褐色であるが、胎土に結晶片岩が多量に混入されているため、土器自体が光っている。無文の並木式と思われる。5はⅢb層から検出した。色調は淡赤褐色を呈し、4は同様結晶片岩が多量に混入する。上げ底をなし、後期の様相を呈する。

石器 (第43図, 表13)

1は打製石斧で、胴部の稜線は鋭利につくられているが、刃部は使用痕と思われる摩耗がみられる。2は正面から右側面にかけて敲打整形後、入念な研磨を施す。しかし、刃部が作出されていないため、磨製石斧の未製品と考えられる。各所に加撃痕がみられる。



第42図 Ⅳ-1・2区の石器



第43図 Ⅳ-1・2区の石器

表13 Ⅳ-12区石器組成 (長さ, 幅, 厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第43図1	打製石斧	安山岩	125	48	20	160	刃部周辺に摩耗痕
2	磨製石斧	頁岩	135	48	45	460	正面～右側面に研磨

4 V区出土の遺物

1 弥生土器 (第44図)

① 壺形土器 (1)

1は広口壺の口縁部である。外反する口縁に若干肥厚しながら平坦におさめた口唇部がつく。内外面は茶褐色で、胎土には細かい石英を含み、焼成はやや軟質である。内面はハケで調整し、口唇部下の外面はヨコナデをおこなっているが、そのほかの面は磨滅し、調整痕が判然としない。

② 甕形土器 (2~7)

甕形土器はA類からC類の3形式に分類できる。甕B類・甕C類は断面三角形の突帯を口縁部に貼り付けたいわゆる亀の甲タイプの甕形土器である。

甕A類 (2)

刻目は突帯をナデたのちに斜めからの刺突により施されており、施文後のナデはみられない。外面は黒褐色で煤が付着し、内面は灰褐色である。胎土には若干の石英を含み、焼成はやや軟質である。

甕B類 (3・4)

口縁部の貼付突帯が甕A類より大きいもので、突帯が口縁端から口唇部まで水平に張り出すように貼付けられたものである。3の刻目は磨滅部分が多く、判然としないが、斜めからの刺突によるものと観察できる。内外面が黄橙色で、胎土に石英を多く含む。焼成は良好である。4の刻目も斜めからの刺突により施文されている。内外面灰褐色で、若干の石英を含む。焼成はやや軟質である。

甕C類 (5・6)

甕B類に比べると、突帯が口縁端より口唇部にかけて垂下するように貼り付けられたものである。5・6ともに刻目の磨滅が著しく、技法は不明である。突帯下のヨコナデが観察される程度で、そのほかの成形技法は判然としない。5・6ともに内外面黒褐色で胎土は緻密で焼成も良好である。

甕胴部 (7)

刻目を施した貼付突帯をもつ胴部破片である。刻目は刺突により、施文後ナデによって整えられている。内外面は暗茶褐色で、胎土には角閃石・長石・雲母をふくみ、緻密である。焼成も堅緻である。

2 縄文土器底部 (8)

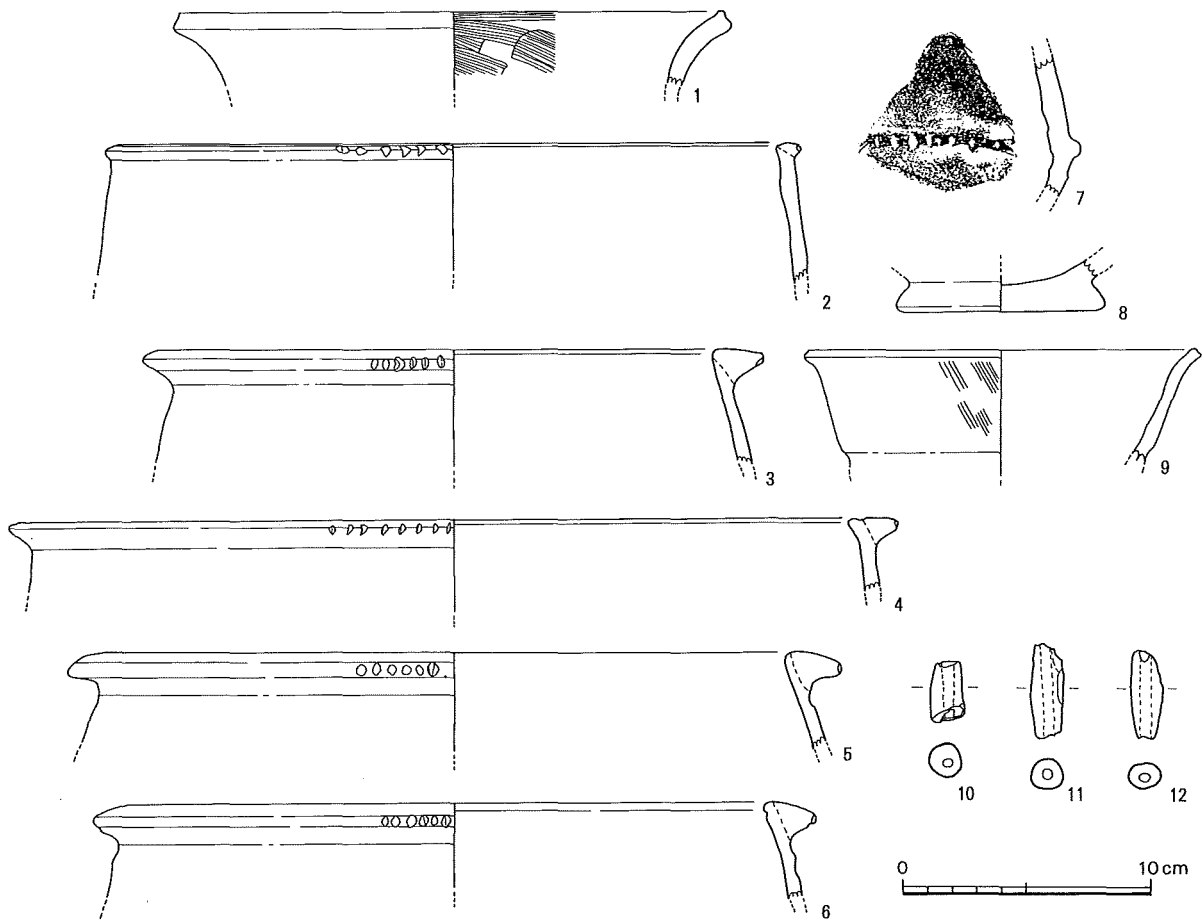
磨滅が著しく、調整痕などは不明である。外面は赤褐色、内面は黒褐色で、胎土には石英・雲母を含む。焼成は良好である。縄文晩期土器か。

3 土師器坏形土器 (9)

坏などの口縁部片と思われる。内外面は暗黄褐色で、表面にはナデの後、ハケ調整を部分的に施している。胎土には若干の石英が含まれているが、焼成は良好である。

4 管状土錘 (10~12)

3点を図示した。10は表面の磨滅が著しいが黄褐色をなし、胎土は精選されている。11・12は赤褐色をしており、胎土はよい。いずれも焼成良好である。



第44図 V区の土器実測図 (S = 1/3)

5 弥生土器小結

5区では、いわゆる亀の甲タイプの甕形土器の出土を報告することができた。いずれも胴部を欠失しているため、詳細は不明であるが、貼付突帯の形状などから3つに分類した。先行する研究成果にてらすと、甕A→甕B・甕Cという変遷が考えられる。時期的には甕B・Cが前期末から中期初頭、甕Aはそれより先行する時期が考えられる。1の壺形土器の口縁部片も甕B・Cと同時期と考えられる。

【引用・参考文献】

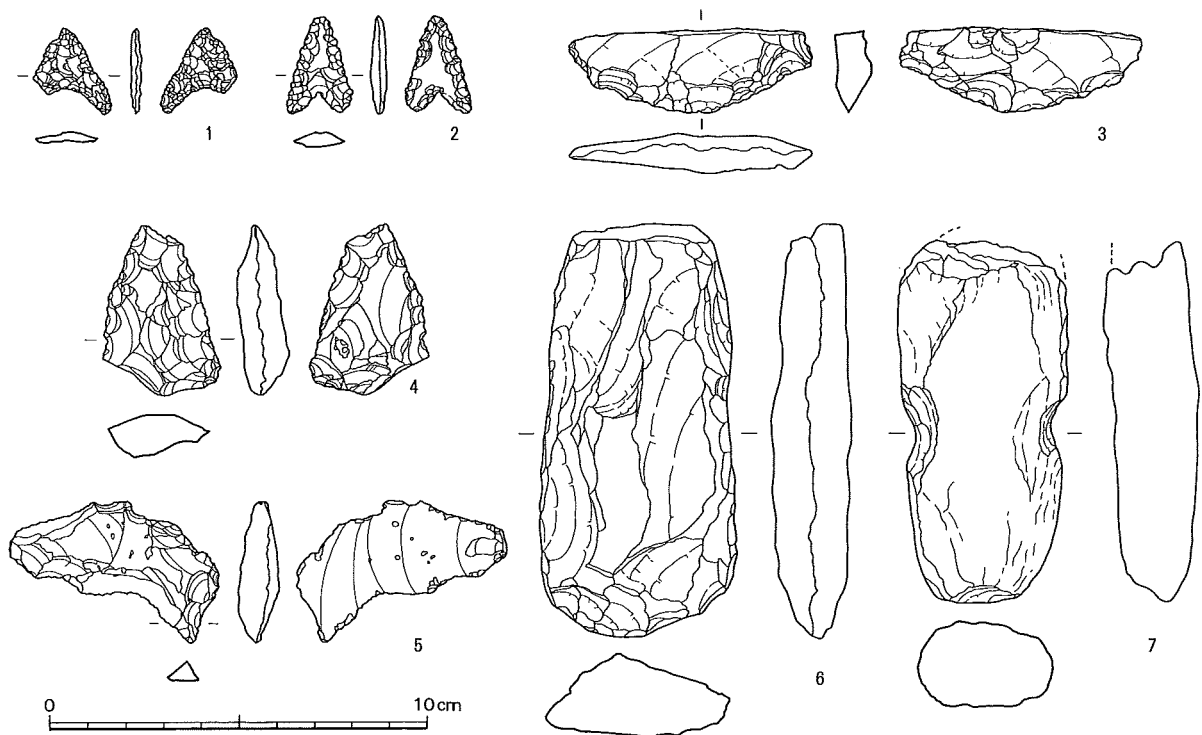
1. 久村貞男1994「第5章 遺物」『四反田遺跡発掘調査報告書』佐世保市教育委員会
2. 藤尾慎一郎1990「西部九州の刻目突帯文土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』26国立民俗博物館

6 石器 (第45図)

① 石鏃 (1・2)

1は両面に入念な平坦剝離を施した打製石鏃である。基部は大きく半円形に抉り込まれており、長い脚部が作出されている。黒色黒曜石製である。2は局部磨製石鏃である。丁寧な調整剝離を施した後、両面を研磨している。両側辺は微鋸歯状を呈する。暗灰色黒曜石製である。

② 二次加工を有する剝片(3)



第45図 V区の石器実測図 (S = 1 / 2)

サヌカイト質安山岩製の剥片を素材とし、両面から二次加工を施して弧状の刃部を作出したものである。スクレイピング・ツールの機能を有するものと思われる。

③ 尖頭器(4)

サヌカイト質安山岩の剥片に、粗雑な二次加工を施したものである。尖頭部が左右非対称のため全体にアンバランスな形状を呈している。基部は左側を欠損しているが、ほぼ平基になるものと思われる。

④ 石錐(5)

「ノ」字状を呈する剥片の末端部に二次加工を施し、尖頭部を作出したもので石錐と思われる。作業部は断面三角形をなし、わずかな摩耗が認められる。サヌカイト質安山岩製である。

⑤ 打製石斧(6)

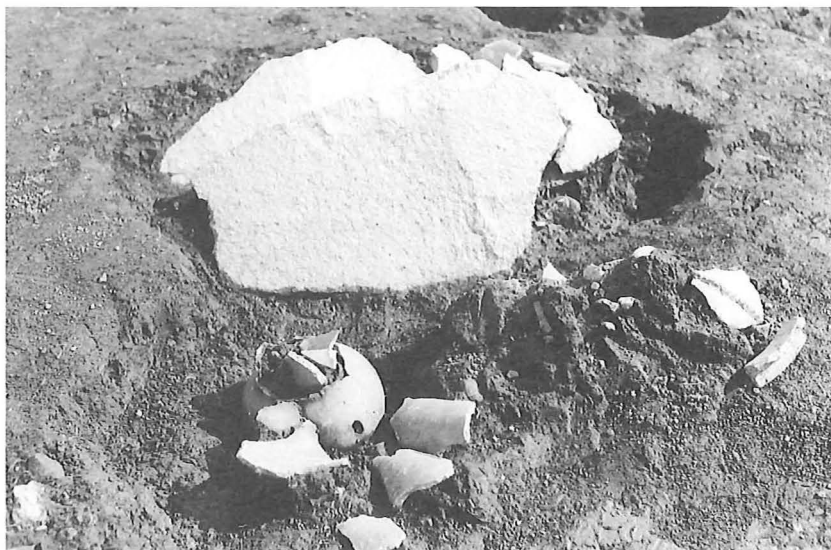
短冊形の打製石斧で、幅に比べてやや厚みがある。刃部にはわずかに摩耗痕が認められる。石質は灰色の安山岩と思われるが、酸化鉄による着色が著しい。

⑥ 石錘(7)

棒状礫の両側ほぼ中央に、敲打あるいは研磨によると思われる抉り込みを施すもので、結晶片岩製である。



III区の調査



III区の遺構

第 3 部

自然科学分析

長崎県，黒丸遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 黒丸遺跡の植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり，植物が枯れた後も微化石 (プラント・オパール) として土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。また，イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

ここでは，植物珪酸体分析を用いて，稲作をはじめとする農耕史の検討および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

2. 試料

試料は，II-4 区東壁の II a 層から IV b 層までの層準から採取された 6 点である。分析結果の柱状図に試料採取箇所を示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに，次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 ($105^\circ\text{C} \cdot 24$ 時間)
- 2) 試料約 1 g を秤量，ガラスビーズ添加 (直径約 $40\mu\text{m}$ ，約 0.02g)
※電子分析天秤により 1 万分の 1 g の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 ($300\text{W} \cdot 42\text{kHz} \cdot 10$ 分間)
- 5) 沈底法による微粒子 ($20\mu\text{m}$ 以下) 除去，乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散，プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は，イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし，400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試量 1 g あたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位： 10^{-5} g）をかけて，単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は，イネは赤米，キビ族はヒエ，ヨシ属はヨシ，ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は2.94(種実重は1.03)，8.40，6.31，1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48，クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来：イネ，ヨシ属，ウシクサ属（ススキ属やチガヤ属など），キビ族型，ウシクサ族型，ウシクサ族型（大型），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），クマザサ属型（おもにクマザサ属），メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），茎部起源，未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属），マンサク科（イスノキ属），クスノキ科（バリバリノキ？），その他

5. 考察

(1) イネ科栽培植物の検討

II a層からIV b層までの各層について植物珪酸体分析を行った。その結果，II a層からIII b層までの各層からイネの植物珪酸体が検出された。このうち，II a層（試料2）では密度が12,800個/g，III層（中世，試料3）では18,500個/g，III a層（弥生時代～古代，試料4）では24,200個/gといずれも非常に高い値であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを大きく上回っている。したがって，これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。III b層（縄文時代～弥生時代，試料5）では，密度が500個/gと微量であることから，上層からの混入の危険性が考えられる。

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）やキビ族（ヒエやアワ，キビなどが含まれる），ジュズダマ族（ハトムギが含まれる），オヒシバ属（シコクビエが含まれる），モロコシ属，トウモロコシ属などがあるが，これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため，未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお，植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため，根菜類などの島作物は分析の対外となっている。

(2) 植物珪酸体分析から見た植生・環境

IV b 層（試料10）では、ウシクサ族型や棒状珪酸体が多量に検出され、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属など）なども検出された。IV b 層（試料7）でもほぼ同様の結果であるが、ネザサ節型やブナ科（シイ属）も少量検出された。III b 層（試料5）ではウシクサ族（ススキ属など）やウシクサ族型が減少し、かわってネザサ節型が増加している。III a 層（試料4）より上層では、前述のようにイネが多量に検出されたが、ウシクサ族型やネザサ節型、ヨシ属なども比較的多く検出された。また、III b 層より上位では、ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）、クスノキ科（バリバリノキ？）などの樹木も継続的に検出された。

おもな分類群の推定生産量（図1右側）によると、III b 層より下層ではヨシ属が圧倒的に卓越しているが、III a 層より上位ではおおむねイネが卓越しており、ヨシ属も比較的多くなっていることが分かる。

以上の結果から、黒丸遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

最下位のIV b 層からIV b'層（縄文時代）までの堆積当時は、ヨシ属が多く生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはススキ属やネザサ節などの生育する草原的なところも見られたものと推定される。

III b 層（縄文時代～弥生時代）でもほぼ同様の状況であったと考えられるが、III a 層（弥生時代～古代）の時期にはヨシ属の生育する湿地を利用して水田稲作が開始されたものと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属比較的多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことも想定される。当時の遺跡周辺はネザサ節を主体としてススキ属なども見られるイネ科植生であり、ブナ科（シイ属）やマンサク科（イスノキ属）、クスノキ科（バリバリノキ？）などの照葉樹もある程度生育していたものと推定される。

6. ま と め

本遺跡では、III a 層（弥生時代～古代）の時期にヨシ属などの生育する湿地を利用して水田稲作が開始されたものと考えられ、III層（中世）やII a 層でも継続的に稲作が行われていたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点, 植生史研究, 第2号:p.27-37
 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体, 富士竹類植物園報告, 第31号:p.70-83
 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培 植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9:p.15-29
 藤原宏志 (1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定-, 考古学と自然科学, 12:p.29-41
 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-, 考古学と自然科学, 17:p.73-85

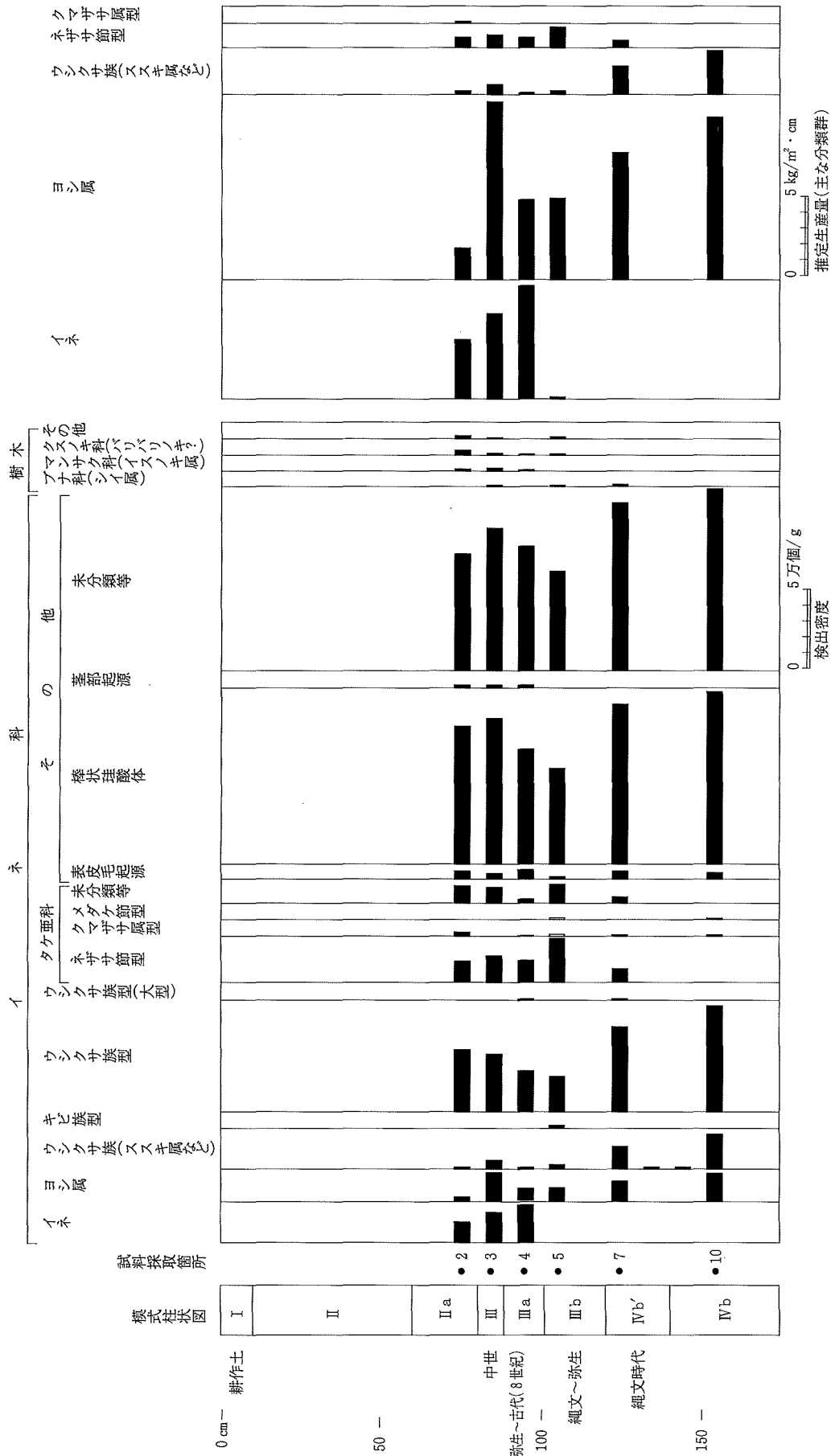
表1 長崎県, 黒丸遺跡II-4 東壁の植物珪酸体分析結果
 検出密度(単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	2	3	4	5	7	10
イネ科						
イネ	128	185	242	5		
ヨシ属	34	177	81	81	124	159
ウシクサ族(ススキ属など)	17	62	16	27	148	215
キビ族型		8	8	16		
ウシクサ族型	400	369	267	222	521	685
ウシクサ族型(大型)			8		8	
タケ亜科						
ネザサ節型	145	185	145	287	93	
クマザサ属型	26			11	8	8
メダケ節型				11		8
未分類等	119	100	32	125	39	
その他のイネ科						
表皮毛起源	51	38	65	16	23	48
棒状珪酸体	869	907	719	597	995	1059
茎部起源	17	23	24		8	8
未分類等	741	900	784	624	1042	1139
樹木起源						
ブナ科(シイ属)		8		5	16	
マンサク科(イスノキ属)	17	23	8			
スクノキ科(バリバリノキ?)	34	15	8	5		
その他	26	8		16		
植物珪酸体総数	2624	3006	2408	2050	3024	3329

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	3.76	5.43	7.13	0.16		
ヨシ属	2.15	11.16	5.10	5.13	7.85	10.05
ウシクサ族(ススキ属など)	0.21	0.76	0.20	0.34	1.83	2.67
ネザサ節型	0.70	0.89	0.70	1.38	0.45	
クマザサ属型	0.19			0.08	0.06	0.06

※仮比重を1.0と仮定して算出。



第1図 黒丸遺跡II-4区東壁の植物珪酸体分析結果

II. 黒丸遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、従来湖沼や湿原の堆積物を対象として広域な森林変遷を主とする時間軸の長い植生や環境の変遷を復原する手法として用いられてきた。考古遺跡では、埋没土壌や遺構内堆積物など堆積域や時間軸の限定された堆積物を対象とすることによって、狭い範囲や短い時間における農耕を含む植生や環境の変遷を復原することも可能である。本遺跡ではこれらのことも考慮に入れて植生・環境・農耕の復原推定を行った。

2. 試料

試料は、II-4区東壁のII a層からIV b層までの各層から採取された8点である。分析結果の柱状図に試料採取箇所を示す。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて、砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃、硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm・2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)を基本とし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974, 1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類したが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

分析の結果、樹木花粉21、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉19、シダ植物孢子2形態の

計41分類群が同定された。結果を花粉遺体一覧表にまとめ、花粉総数が200個以上の試料は花粉総数を基数とする百分率を算定して花粉組成図に示した。以下に同定された分類群を示す。なお、樹種同定の結果（第III章）ではクスノキ科が同定されているが、クスノキ科は花粉壁が完形では保存されないことから、花粉分析の結果には反映されない。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、ツリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、キハダ属、サンショウ属、トチノキ、ニワトコ属－ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、セリ科、ナス科、シソ科、オミナエシ科、タンポポ科、キク科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

IV b 層（試料10）では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より多く、コナラ属コナラ亜属が優占する。樹木花粉では他にコナラ属アカガシ亜属・クリーシイ属などが出現する。草本花粉ではイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属などが出現する。IV b'層（試料7・8）では、花粉がほとんど含まれていないことから、傾向がわからない。

III b 層（試料5・6）になると、草本花粉の占める割合が高くなる。草本花粉ではイネ科・ヨモギ属、カヤツリグサ科が優占し、ヨモギ属が上位に向かって増加する。樹木花粉の中ではコナラ属コナラ亜属・クリーシイ属が優占する。III a 層（試料4）では、草本花粉の占める割合が高く、イネ属型を含むイネ科の高率に出現する。ヨモギ属がやや減少するほかは、III b 層と同様である。III層（試料3）ではイネ属型が減少し、II a 層（試料2）ではアブラナ科がやや多く出現する。

5. 花粉分析から見た植生・環境

以上の結果から、植生と農耕の変遷を推定すると次のようである。

最下位のIV b 層の堆積当時は、周囲は樹木の多い環境であり、コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・クリーシイ属の森林が分布していたと推定される。このうち、コナラ属コナラ亜属は、ナラガシワやウバメガシなどの暖地に分布する種であった可能性が高い。イネ科やカヤツリグサ科の繁茂する湿地も存在していたと考えられるが、あまり広くはなかったと推定される。

IV b'層（縄文時代）では、花粉がほとんど含まれていないことから、当時の植生は詳細にはわからないが、下位のIV b層と同様であったと推定される。なお、花粉が少ない原因としては、堆積速度が速かったことや土壌生成作用によって花粉が分解されたこと、分別作用によって淘汰されたことなどが考えられる。

III b層（縄文時代～弥生時代）では、イネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科の草本が繁茂する開地が増加したと推定される。ヨモギ属は乾燥を好むため、乾燥した草地も見られたものと考えられる。イネ属型の花粉が出現しているが、低率であることから上位層からの混入と考えられる。コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属の森林の減少と草本の増加が対応しているため、人為干渉により森林が減少した可能性が高い。

III a層（弥生時代～古代）では、湿地や草地を拓いて水稻耕作が開始されたものと推定される。コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・クリーシイ属は周辺地域の基本的な森林要素であったとみなされ、周辺の台地や丘陵地などに分布していたと推定される。III層（中世）でもほぼ同様の状況であったと推定されるが、イネ属型の花粉が減少していることから、水稻耕作以外の農耕も行われていた可能性が考えられる。II a層では、アブラナ科などの畑作も行われていたと推定される。

参考文献

中村純（1973）花粉分析，古今書院

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原，新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店。

日本第四紀学会編（1993）第四紀試料分析法，東京大学出版会。

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態，大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。

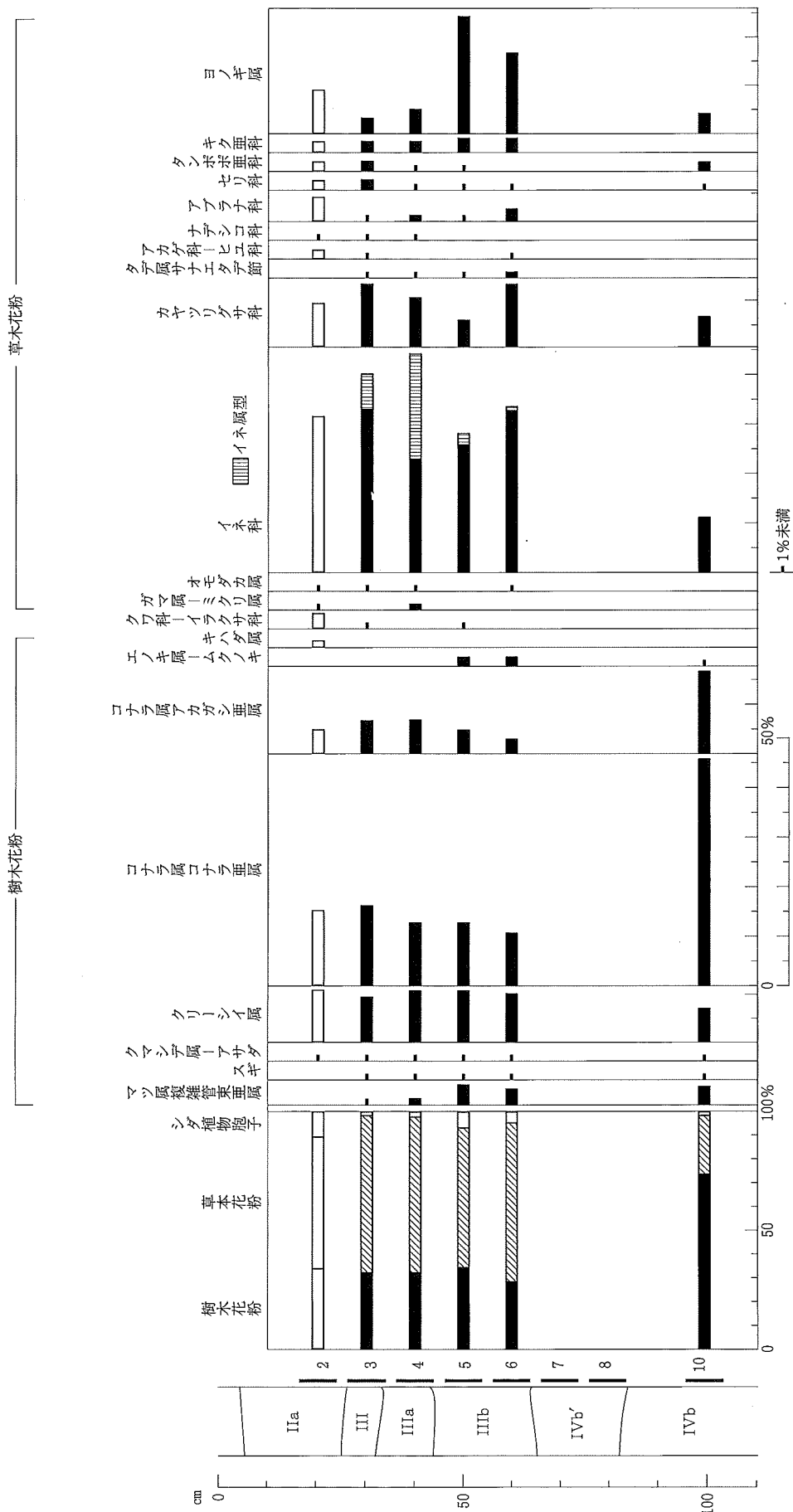
中村純（1980）日本産花粉の標徴，大阪自然史博物館収蔵目録第13集。

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として，第四紀研究13。

中村純（1977）稲作とイネ花粉，考古学と自然科学 第10号。

表2 黒丸遺跡における花粉分析結果

学名	分類群 和名	II-4区東壁サンプル							
		2	3	4	5	6	7	8	10
Arboreal pollen	樹木花粉								
<i>Podocarpus</i>	マキ属			2	1				
<i>Abies</i>	モミ属			1	1				
<i>Tsuga</i>	ツガ属				1				1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属		1	7	16	6			10
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1	3	1				1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科								3
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属		1	1					
<i>Juglans</i>	クルミ属					1			
<i>Alnus</i>	ハンノキ属								1
<i>Betula</i>	カバノキ属				1				1
<i>Corylus</i>	ハシバミ属								2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1	1	1	2	1	1	1	2
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	16	40	55	40	21	4	6	28
<i>Fagus</i>	ブナ属		1						
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	23	74	61	50	23	7	7	185
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	7	32	33	17	5	1	2	66
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ				7	3		1	1
<i>Pellodendron</i>	キハダ属	2							
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属				1			1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		1						
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属			1					
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	5	2		1				
Nonarboreal pollen	草本花粉								
<i>Typha-Spaganium</i>	ガマ属-ミクリ属	1		5					
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属		4	3		1			
Gramineae	イネ科	47	151	116	99	68	10	14	42
<i>Oryza type</i>	イネ属型	1	36	110	6	2		1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	13	61	47	18	26	2	8	23
<i>Monochria</i>	ミズアオイ属				2				
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		2	3	3	2			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	3	4			1			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	2	2					
Cruciferae	アブラナ科	7	4	5	1	4			
<i>Ampelopsis</i>	ノブドウ属			1	1				
Umbelliferae	セリ科	3	10	1	3	1	1		6
Solanaceae	ナス科		2		2				1
Labiatae	シソ科			1					3
Valerianaceae	オミナエシ科								1
Lactucoeidae	タンポポ科	3	11	3	2		3	3	1
Asteroideae	キク亜科	3	7	12	10	5	1	1	6
Xanthium	オナモミ属		1						
Artemisia	ヨモギ属	13	15	23	96	35	12	12	17
Fem spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子	17	6	4	27	9	2	6	8
Trilate type spore	三条溝胞子	2	3	7	7	4	2	4	6
Arboreal pollen	樹木花粉	49	152	165	138	60	13	18	301
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	5	2	0	1	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	95	310	332	243	145	29	39	100
Total pollen	花粉総数	149	464	497	382	205	42	57	401
Unknown pollen	未同定花粉	5	4	5	4	4	1	0	9
Fem spore	シダ植物胞子	19	9	11	34	13	4	10	14



第2図 黒丸遺跡における主要花粉組成図 (花粉総数が基数)

III. 黒丸遺跡出土材の樹種同定

1. 試料

試料は、ドーナツ状遺構の木の根（樹木1）と東壁の落ち込みから出土した材（樹木2）の2点である。

2. 方法

試料はカミソリを用いて新鮮な基本的3断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）をつくり、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生樹木の木材標本と対比して行った。

3. 結果

結果を次表に示し、同定の根拠等を記載する。また、各断面の顕微鏡写真を示す。

試料番号	樹種（和名／学名）	
樹木1	クスノキ	<i>Cinnamomum camphore</i> Presl
樹木2	カヤ	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.

クスノキ *Cinnamomum camphore* Presl クスノキ科 図版6

横断面：中型から大型の道管が単独あるいは2～数个放射方向に複合して散在する散孔材である。これらの道管を鞘状に囲む柔細胞の内、油細胞と呼ばれる大型のものが存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、側壁には交互壁孔が見られ、らせん肥厚が存在する。放射組織は上下の縁辺のみ直立細胞で、それ以外は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺の直立細胞は、しばしば大型の油細胞となる。幅は1～3列である。

以上の形質より、クスノキに同定される。クスノキは暖帯から亜熱帯に分布し、日本では本州（関東地方以西）・四国・九州に分布する。常緑高木で、通常高さ15～25m、径70～80cmであるが、高さ50m、径7mに達するものもある。材は堅硬で耐朽・保存性高く、芳香がある。現在では器具・建築・楽器・船舶・彫刻・ろくろ細工に用いられる。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 図版6

仮道管と放射柔組織の2種類から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部は狭い。

放射断面：分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個存在する。仮道管にはらせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示すが、腐朽のため明瞭でない試料もあった。

黒丸遺跡 I

接線断面：放射組織は単列同性で，仮道管のらせん肥厚は2本対になる傾向を示す。

以上の形質より，カヤに同定される。カヤは暖帯から温帯に分布し，日本では本州(宮城県以南)・四国・九州に分布する。直幹性の常緑高木で，高さ25m，径2mに達する。材は均質緻密で，耐朽・保存性が高く，水湿にもよく耐える。現在では器具・建築・土木・船舶・彫刻に用いられ，特に碁盤・将棋盤の最適材である。

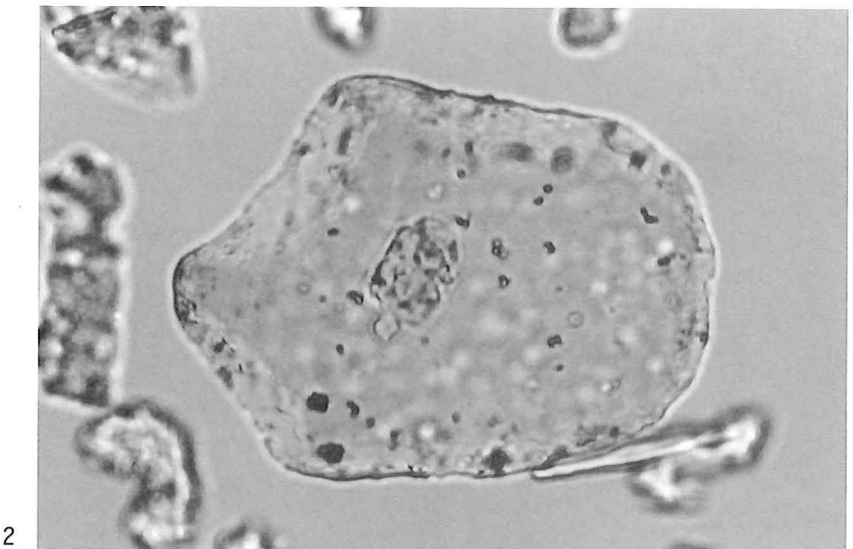
参考文献

- 島地謙・伊東隆夫(1982) 図説木材組織，地球社
島地謙ほか(1985) 木材の構造，文永同出版
日本第四紀学会編(1993) 第四紀試料分析法，東京大学出版会

植物珪酸体の顕微鏡写真 (倍率はすべて400倍)

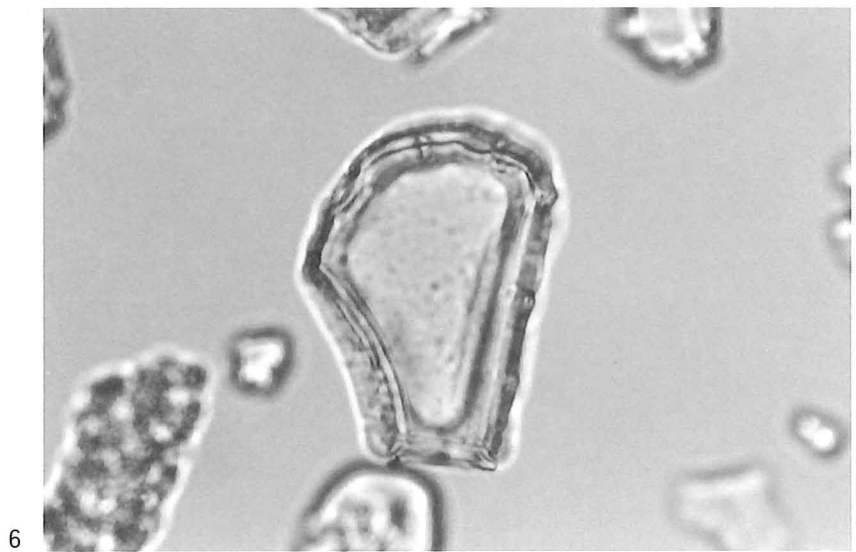
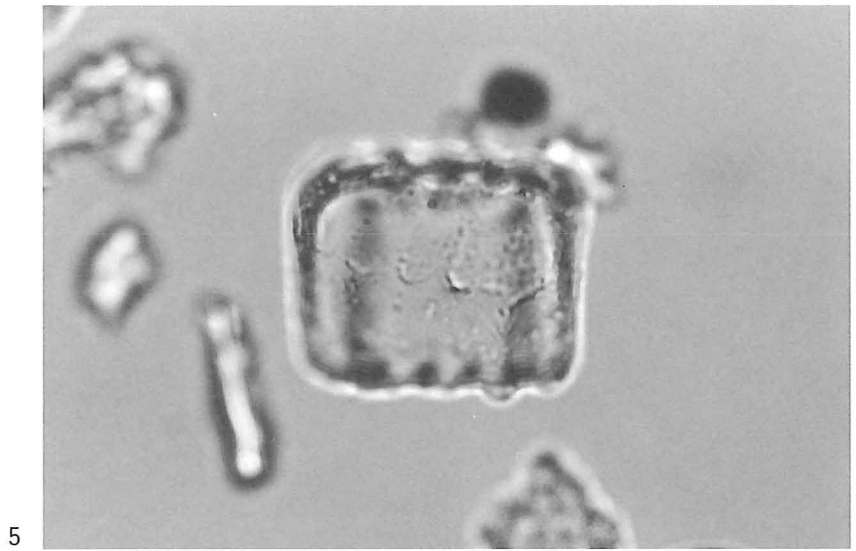
No.	分類群	試料名
1	イネ	4
2	ヨシ属	4
3	ウシクサ族(ススキ属など)	7
4	ネザサ節型	4
5	ネザサ節型	3
6	メダケ節型	5
7	棒状珪酸体	2
8	マンサク科(イスノキ属)	2
9	クスノキ科(ぱりぱりノキ?)	2

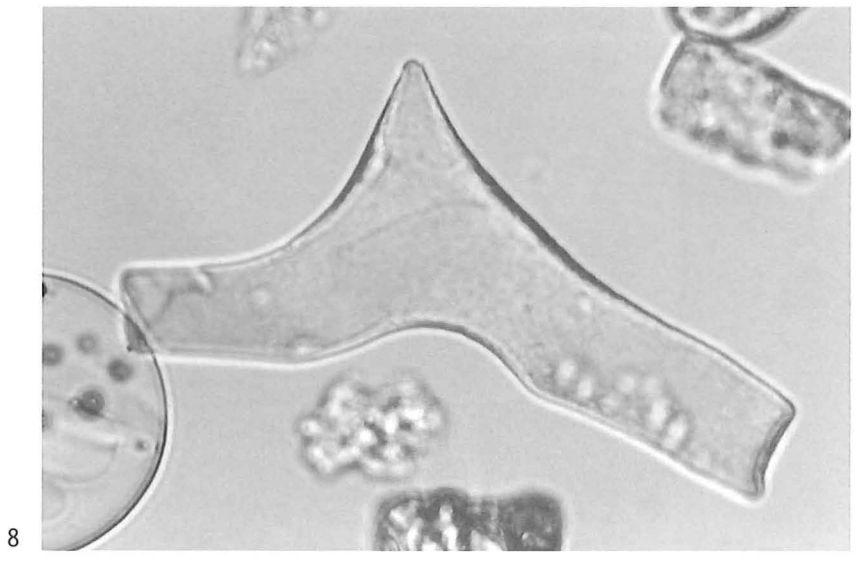
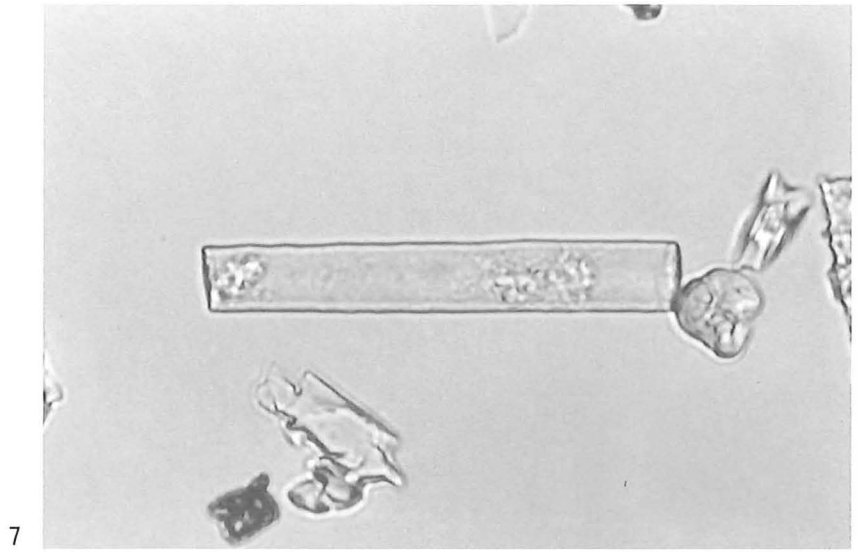
黒丸遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真 1



図版 2

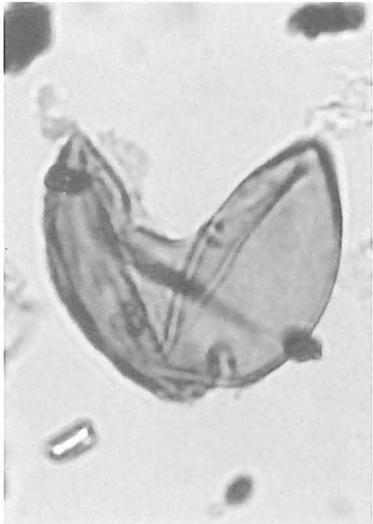
黒丸遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真 2





図版 4

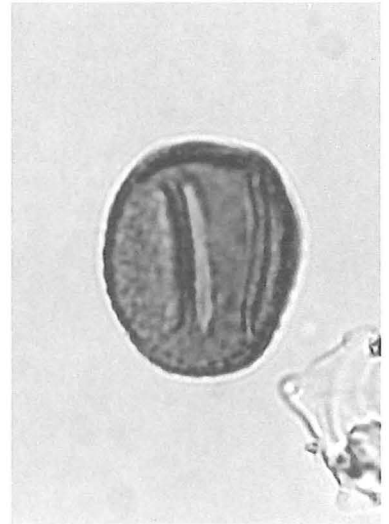
黒丸遺跡の花粉・孢子 I



1 スギ



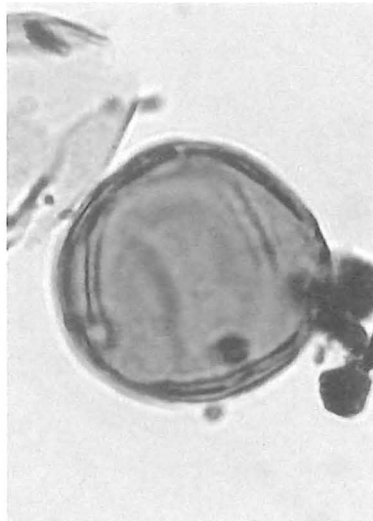
2 サワグルミ属



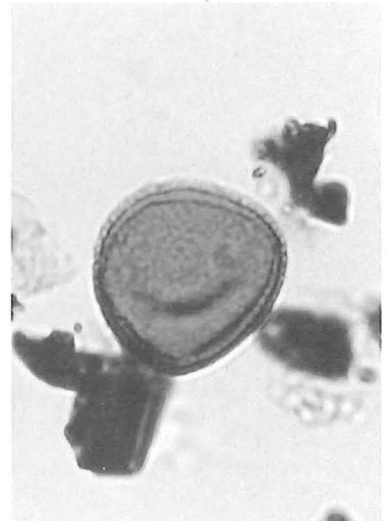
3 コナラ属コナラ亜属



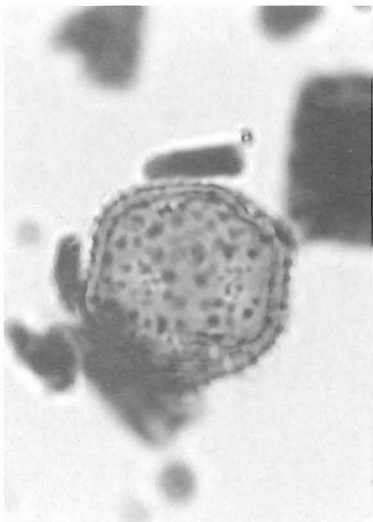
4 コナラ属アカガシ亜属



5 エノキ属—ムクノキ



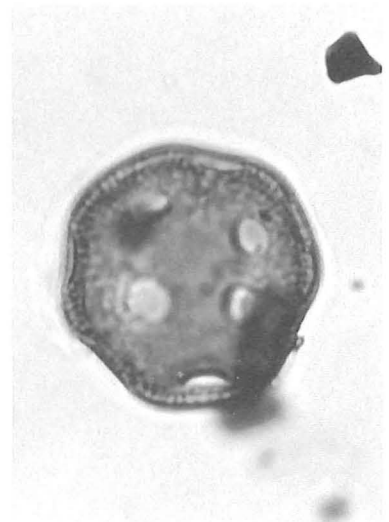
6 ガマ属ミクリ属



7 オモダカ属



8 カヤツリグサ科



9 ナadeshiko科

— 30μm

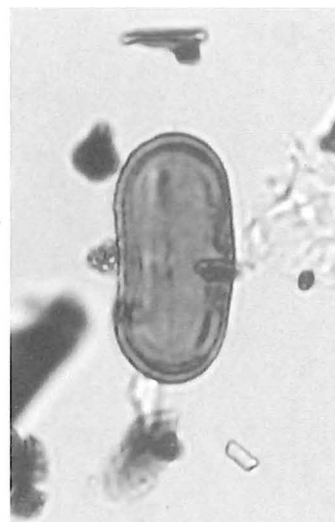
黒丸遺跡の花粉・孢子 II



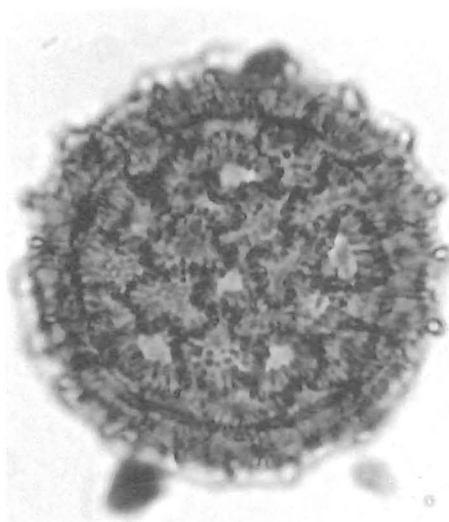
1 イネ科



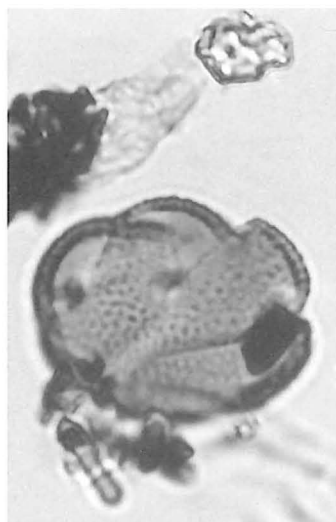
2 イネ属型



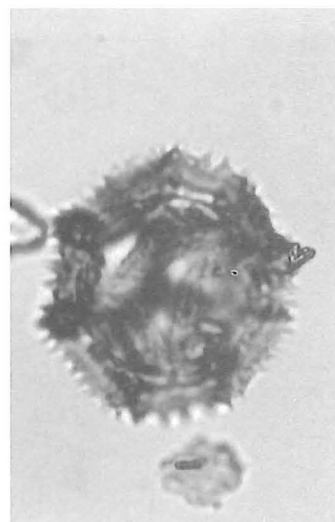
3 セリ科



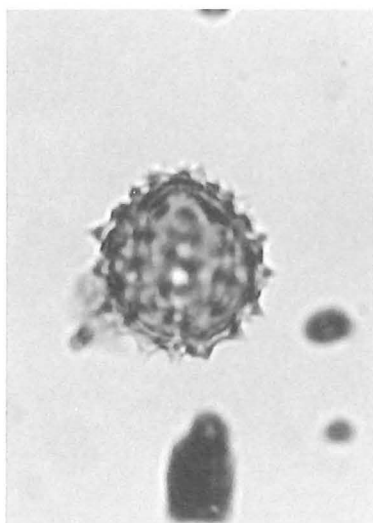
4 タデ属サナエタデ節



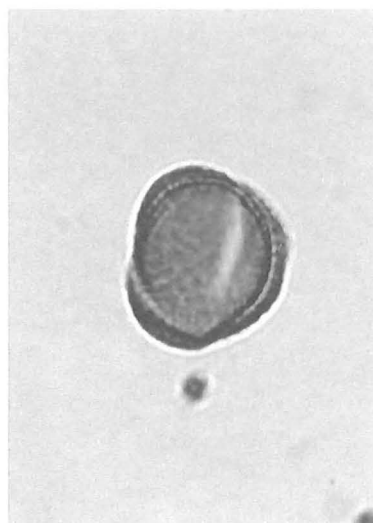
5 シソ科



6 タンポポ亜科



7 キク亜科



8 ヨモギ属

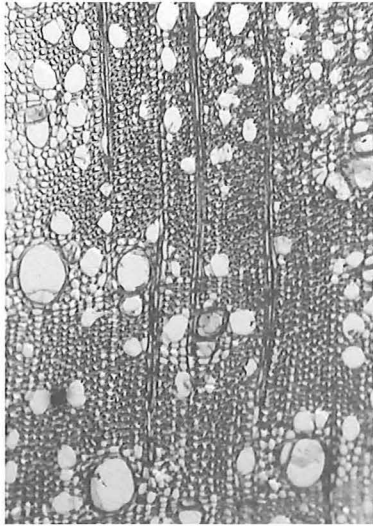


9 シダ植物三条溝孢子

— 30μm

図版 6

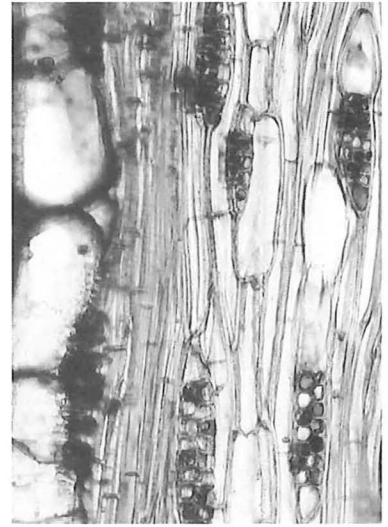
黒丸遺跡出土材の顕微鏡写真



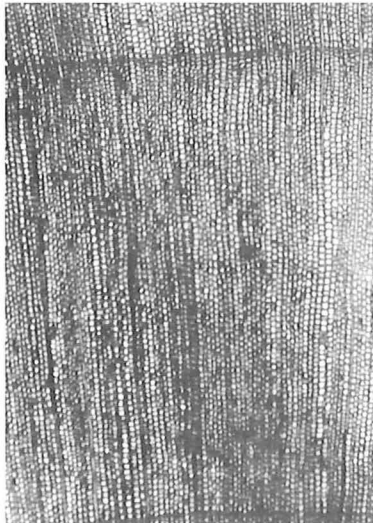
横断面 ————— : 0.5mm
1. 樹木1 クスノキ



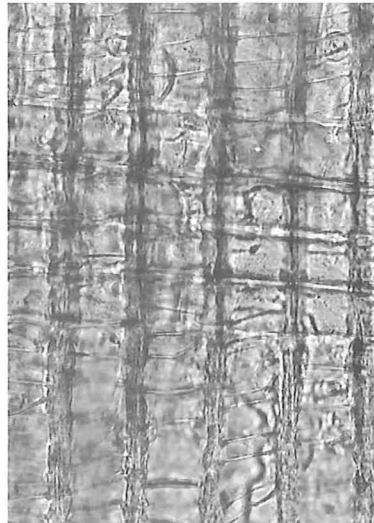
放射断面 ————— : 0.1mm



放射断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm
2. 樹木2 カヤ



放射断面 ————— : 0.05mm



接線断面 ————— : 0.1mm

報告書抄録 (記載様式)

ふりがな	くろまる い せき							
書名	黒丸遺跡 I							
副書名	都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第127集							
編著者名	町田 利幸・古門 雅高・高原 愛							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒 850 長崎県長崎市江戸町 2-13 TEL 0958-26-5010							
発行年月日	西暦 1996年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' "	東経 ° / ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
くろまる い せき 黒丸遺跡	おおむらしくろまるまち 大村市黒丸町 587番地 1-352	42205	5-86	32°57'	(29°56'2")	19901203) 19960315	6.093m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
黒丸遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	掘立柱建物跡 溝 土壇 井戸 壺棺	縄文時代の土器・石器 弥生時代の土器 土師器 白磁青磁				

長崎県文化財調査報告書第127集

黒丸遺跡 I

1996

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂印刷
長崎市栄町6-23田中屋ビル